日本応用心理学会第62回大会
発 表 論 文 集

1995 9/8-9

共立女子大学

日本応用心理学会第62回大会
発表論文集

1995 9/8-9

J.A.A.P.
KYORITSU
SINCE 1886
WOMEN'S UNIVERSITY
62nd 1995

共立女子大学

シンボルマークについて

本大会のシンボルマークは，本学園百周年を記念して制定されたものに，上にＪ．Ａ．Ａ．Ｐ．，下に本大会年次を添えたものである。

この校章は，栄光ある伝統の裏付けと，国際的に通用する日本のアイデンティティーを加味し，女性らしく優美にまとめられたものである。

目　次

大会日程
公開シンポジウム
公開講演
シンポジウム
研究発表

大　会　日　程

第1日　9月8日（金）

8:30 →	9:20　11:20	11:25 ～ 12:25	12:35 ～ 13:25	13:30　16:00	16:10 ～ 17:30	17:45
受付開始	A室（201C）一般・原理 B室（205）検査・測定1 C室（206）社会・文化1 D室（301）看護1 E室（302）発達・教育1 F室（305）臨床・相談1 G室（306）産業・職業1	運営委員会 一階会議室	会員総会 J室（311）	公開シンポジウム「阪神大震災の教訓と課題」H室（310） シンポジウム「心理学と家政学の関連性を求めて－家政学が心理学になにを期待するか－」I室（204）	公開講演 間宮武先生「性差に関する諸問題」 （408）教室	懇親会 教育会館内『喜山』

第2日　9月9日（土）

8：30→	9：20 ～ 11：20	11：30 ～ 12：50	13：00 ～ 15：00 ～ 15：30
受付開始	A室（201C）認知・感情	昼休み	A室（201C）人　格
	B室（205）検査・測定2		B室（205）検査・測定3
	C室（206）社会・文化2		C室（206）社会・文化3
	D室（301）看護2		D室（301）看護3
	E室（302）発達・教育2		シンポジウム「死と再生の現代における意味」I室（204）
	F室（305）臨床・相談2		
	G室（306）産業・職業2		シンポジウム「留学生問題について－異文化交流の諸問題－」K室（303）

公開シンポジウム

第1日　9月8日（金）13：30〜16：00　H室（301教室）

阪神大震災の教訓と課題

	企画・司会	日本大学文理学部	村井　健祐	1
シンポジスト				
被災者メンタルケア		横浜国立大学	藤森　立雄	2
被災地の社会的混乱回避の条件		慶應義塾大学	青池　慎一	3
ボランティア活動盛り上がりの条件		全国大学生協	姫野　恭博	4
防災工学の立場から心理学に期待するもの		防災都市計画研究所	木村　拓郎	5

公開講演

第1日　9月8日（金）16：10〜17：30（408教室）

性差に関する諸問題

講演者	横浜国立大学名誉教授 田中教育研究所所長	間宮　　武	6

シンポジウム

第1日　9月8日（金）13：30〜16：00　I室（204教室）

心理学と家政学の関連性を求めて
－家政学が心理学になにを期待するか－

	企画	共立女子大学	高嶋　正士	7
	司会	共立女子大学	藤枝　悳子	
シンポジスト				
被服心理学の立場から		共立女子大学	小林　茂雄	8
食物学の立場から		共立女子大学	加藤　達雄	9
一般家政学の立場から		共立女子大学	藤枝　悳子	10
消費者心理学の立場から		亜細亜大学	馬場　房子	11

シンポジウム

第２日　９月９日（土）13：00〜15：30　Ｉ室（204教室）

死と再生の現代における意味

企画・司会	駒沢大学	中村　昭之	12
シンポジスト			
仏教学の立場から	駒沢大学	中野　東禅	13
宗教人類学の立場から	愛知学院大学	綾部　恒雄	14
禅心理学の立場から	東洋大学	恩田　　彰	15
臨床心理学の立場から	ホリスティック心理学研究会	白岩　紘子	16

シンポジウム

第２日　９月８日（金）13：00〜15：30　Ｋ室（303教室）

留学生問題について
－異文化交流の諸問題－

企画・司会	共立女子大学	松崎　　巖	17
シンポジスト			
受入れ側の立場から	共立女子大学	金子　尚一	18
留学生の立場から	東京大学大学院	谷　　峪	19
心理学の立場から	横浜国立大学	依田　　明	20

研 究 発 表

一般・原理

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　A室（201C教室）　座長　細江　達郎

1	精神的健康としてのブッダの涅槃 ——修行の目標から——	駒沢大学 〃	○加藤　博己 中村　昭之	21
2	問答法録音聴取後の人物評定	常盤大学	斉藤幸一郎	22
3	生態学的心理学の方法による犯罪発生場面の基礎的研究	岩手大学 岩手県警察本部	○細江　達郎 長澤　秀利	23
4	教育評価の研究（その35） ——生涯学習時代に於けるあり方をさぐる——	大泉四期会	岸本　英男	24
※5	福祉心理学を論考するＩ ——自己愛と他者愛の基礎——	東京経済大学	網野　武博	−
6	事例研究の方法論的基礎	岩手医科大学	田中潜次郎	25

検査・測定１

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　B室（205教室）　座長　田中富士男　藤田　勉

1	MMPI臨床尺度による10年間の学生の評定差	東邦大学 〃	○草薙　和美 稲松　信雄	26
2	バイリンガル再検査法によるMMPI新日本版の検討	中京大学	田中富士夫	27
3	dysthymic群にある看護学生の描画 （バウム像と雨中人物画）特徴	常盤大学 秋田県立衛生看護学院	藤井　博英 ○樋口日出子	28
4	注意のスタイルテスト（TAIS）日本語版	東北大学	加藤　孝義	29
5	大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅤ	長野県短期大学 日本女子大学 尚美学園短期大学	○藤田　勉 久東　光代 川島　真	30
6	大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅥ	尚美学園短期大学 日本女子大学 長野県短期大学	○川島　真 久東　光代 藤田　勉	31

社会・文化

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　C室（206教室）　座長　稲毛　教子　富家　孝

1	住環境評価の構造性	早稲田大学	畠山　彰文	32

※は発表取消し

2　日本人の生活意識(2)　国民性と交際　東海学園大学　高橋　敷　33

3　固定的役割分担意識の性別・年令別分析　東京国際大学　稲毛　教子　34

4　幼児期における国民性形成(1)：保育者と幼児の言語表現を中心　秋草学園短期大学　金村美千子　35

5　阪神・淡路大震災後のうわさについて　兵庫県警察本部　三宅　洋一　36

6　女子プロレスに対する社会的態度の研究　日本女子体育大学　富家　孝　37

看　護 1

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　D室（301教室）　座長　安藤　詳子　村本　淳子

1　看護学生の自我同一性に関する研究（第2報）
——因子構造と因子得点平均値に影響を及ぼす属性——
東京女子医科大看護短大　岡村　千鶴　38
千葉大学　○内海　滉

2　看護学生の自我同一性に関する研究（第3報）
——衛生看護高校における調査——
新潟県立看護短期大学　○松永　保子　39
千葉大学　内海　滉

3　看護職の自我同一性形成に関する研究
名古屋大医療技術短大部　○安藤　詳子　40
〃　渡邊　憲子
千葉大学　内藤　滉

4　看護教育における自己教育力
東京都立医療技術短大　○佐藤みつ子　41
〃　森　千鶴
千葉大学　内海　滉

5　看護学生のSelf−Esteemに関する研究
愛知県立看護短期大学　○山口　桂子　42
千葉大学　内海　滉

6　看護学生の性の考え方、行動に影響を及ぼす要因の分析（その5）
東京女子医科大看護短大　○村本　淳子　43
千葉大学　内海　滉

発達・教育 1

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　E室（302教室）　座長　黒田　淑子　後藤嘉余子

1　看護学生の情意的発展（その4）
——自由討議における変化——
日本赤十字武蔵野女子短大　○金井　悦子　44
〃　糸井志津乃

2　「関係学・心理劇式、集団状況・発達評価法」の基礎研究Ⅱ
児童臨床研究会　矢吹芙美子　45

3　大学教育における心理劇(5)
——課題の表演——
お茶の水女子大学　黒田　淑子　46

4　精神遅滞児の歩行に関する一考察(3)
北星学園大学　○青山真奈美　47
〃　豊村　和真

5	障害児の母子保育について ――プール遊びからの検討――	東京家政大学	後藤嘉余子	48
※6	音響伝達でろうあ者は変わるか ――生まれつきのろうあ者と会話ができるか――	聴力言語障害研究所	金田　冨美	−

臨床・相談1

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　F室（305教室）		座長	岸田　博　新田　茂	
1	読詩による詩歌療法（その3）	横浜心理カウンセリング研究所	宇佐見万喜	−
※2	カール・ロジャーズの態度三条件についての一考察	東京農業大学	岸田　博	49
3	カウンセリングにおけるクライアントの体験と非言語行動	中京大学	井上　美香	50
4	イメージ誘導法による妊婦のリラクセーション効果	杏林大学	髙橋　真理	51
5	心理書簡法による生活習慣の改善についての研究Ⅱ	坂戸市立教育センター 心理書簡法研究会	○新田　茂 吉田　秀子	52
6	心理書簡法の実際 ――課題設定の手順について――	心理書簡法研究会 坂戸市立教育センター	○吉田　秀子 新田　茂	53

産業・職業1

第1日　9月8日（金）9：20−11：20　G室（306教室）		座長	雫石　礼子　松田　浩平	
1	中小企業の組織環境に関する研究Ⅲ ――S県を例とした労働環境のクラスタリング――	東海大学短期大学部 静岡英和女学院 東海大学短期大学部 〃 〃	○小林　東 辻　昭 小森田哲哉 佐野　毅 松田　浩平	54
2	中小企業の組織環境に関する研究Ⅳ ――S県における組織風土のパターン分類――	東海大学短期大学部 〃 〃 〃 静岡英和女学院	○松田　浩平 小森田哲哉 佐野　毅 小林　東 辻　昭	55
3	翻訳・通訳者の適性に関する一考察	統計数理研究所 ㈱日精研リサーチ	○土屋　隆裕 玉井　寛	56
4	職員研修の試み	東京都生涯学習情報センター	髙橋　哲也	57
5	勤労者のメンタルヘルスと職場環境	岩手県立盛岡短期大学	○雫石　礼子	58
6	新卒看護婦の職業的同一性とキャリア観	自治医科大看護短期大学	松下由美子	59

※は発表取消し

認知・感情

第2日　9月9日（土）9：20−11：40　A室（201C教室）	座長	田之内厚三　豊村　和真	
※1　知識の使用による変容について	筑波大学	高橋　晃	−
2　癌患者のストレス対処と適応	東京大学	塚本　尚子	60
3　環境音に対する感情表出の検討	麻布大学	田之内厚三	61
4　「新文字」の感情価についての研究	産能大学	中島　彩花	62
※5　香り（嗅覚刺激）とイメージ連想	第一企画株式会社	岩村　暢子	−
6　パーソナルスペースに関する基礎研究(3)	北星学園大学	○都築　道子	63
	〃	豊村　和真	
7　パーソナルスペースに関する基礎研究(4)	北星学園大学	○豊村　和真	64
	〃	都築　道子	

検査・測定2

第2日　9月9日（土）9：20−11：20　B室（205教室）	座長	福本　純一　渡辺　昭一	
1　知覚された定性的および定量的特徴による顔の統計的識別	科学警察研究所	○足立　浩平	65
	〃	渡辺　昭一	
2　顔写真による目撃者の同定判断(3) ── 2回目の写真面割りの同定精度に及ぼす効果 ──	科学警察研究所	渡辺　昭一	66
3　顔パタンから年齢推定におけるOWN−ANCHOR効果	警視庁科学捜査研究所	越智　啓太	67
4　女性を対象とした顔の目立ち易さの要因	山口県警科学捜査研究所	○福本　純一	68
	山口大学	福田　廣	
5　気功中の血圧変動について	MOA九州生命科学研究所	○内田　誠也	69
	〃	菅野　久信	
	〃	蔵本　逸雄	
6　FIパフォーマンスにおける加齢の効果	駒沢大学	○北川　公路	70
	〃	小野　浩一	

社会・文化2

第2日　9月9日（土）9：20−11：20　C室（206教室）	座長	荻野　七重　森下　高治	
1　異文化適応とその測定	早稲田大学	○岡村　美奈	71
	〃	久米　稔	
2　P−Fスタディ母−子場面と期待水準	城西大学女子短期大学部	○藤田　主一	72
	共立女子大学	高嶋　正士	
3　社会的欲求と性格の関係(2)	白梅学園短期大学	○荻野　七重	73
	立正大学	斉藤　勇	

※は発表取消し

4	自己展開に関する研究(1)青年の自己開示と人間関係	玉川学園女子短期大学	小嶋　政敏	74
5	自己開示に関する研究(1) ――聞き手と話し手の問題――	流通科学大学	森下　高治	75
6	自己像の国際比較(2)	法政大学 大東文化大学	○中川　作一 沢宮　容子	76

看　護 2

第2日	9月9日（土）9：20－11：20　A室（301教室）	座長　草野美根子	三上　れつ	
1	エイズに対する意識構造 ――エイズ教育の看護学生におよぼす影響――	産業医科大医療技術短大 〃 佐賀医科大学 千葉大学	○中　淑子 深田　高一 草野美根子 内海　滉	77
2	乳幼児の成長発達および家族環境条件に関する研究（第2報）	佐賀医科大学 〃 産業医科大医療技術短大 千葉大学	○草野美根子 沖　寿子 中　淑子 内海　滉	78
3	集中治療室における看護作業の分析 ――患者への言葉かけに関する考察――	千葉県立衛生短期大学 労働科学研究所	○櫻井由美乃 越河　六郎	79
4	看護学生の看護婦イメージに関連する要因の分析(1) ――看護教育課程別・新入生の比較――	山形大学 信州大学医療技術短大部 〃 山形大学	○三上　れつ 有賀　千世 曽根原純子 布施　淳子	80
5	看護学生の看護婦イメージに関連する要因の分析(2) ――看護専門学校の学年別による比較――	信州大学医療技術短大部 〃 日本医科大看護専門学校 山形大学	○有賀　千世 曽根原純子 今留　忍 三上　れつ	81
6	残遺型精神分裂病者の時間認知	東京都立医療技術短大	○森　千鶴	82

発達・教育 2

第2日	9月9日（土）9：20－11：20　E室（302教室）	座長　岡本　善之	園田　雅代	
1	達成動機と適応(2)	関西大学	樋口　康彦	83
※2	精神性的発達の課題	毛呂病院	新井　順	－
3	保育園児の死亡事故について ――経年的変化を中心に――	麻布大学	岡本　善之	84

※は発表取消し

4	幼児の家庭教育と青少年非行の関連性	ホノノルル大学	菊池　藤吉	85
5	かかわり方の発展に関する研究（29） ——人と人の間が育つ情報伝達——	東京都女性情報センター 文教大学 〃	○青木　玲子 小原　伸子 佐藤　啓子	86
6	子どものためのアサーション（自己表現）トレーニング (1)；アサーションできにくい場面について	玉川大学	○園田　雅代	87

臨床・相談2

第2日	9月9日（土）9：20−11：20　F室（305教室）	座長　　東條　光彦	林　　潔	
1	糖尿病患者の自己コントロールと疾病認識	日本大学	佐野　　道	88
2	認知された健康の水準と自己援助の役割	白梅学園短期大学	林　　潔	89
3	家族療法のモデルとしての大江文学私見	田中心理学研究所	田中熊次郎	90
4	精神分裂病患者の生活環境が痴呆症状に及ぼす影響Ⅱ ——MEDE検査による一考察——	下館病院 江戸川女子短期大学	○石川　正人 福井　嗣泰	91
5	痴呆性老人を含む高齢者生活集団の構造	蕨サンクチュリア	大瀧　法子	92
6	社会的スキル形成に及ぼす「いじめられ体験」の 影響について——大学生不適応者を対象とした検討——	千葉大学	東條　光彦	93

産業・職業2

第2日	9月9日（土）9：20−11：20　G室（306教室）	座長　　大沢　光	角山　　剛	
1	コンピュータ教育に対する高校・短大・大学生の態度研究	埼玉県立狭山経済高校 亜細亜大学	○三輪　　全 小野　公一	94
2	セクシャルハラスメント行動への知覚に及ぼす 性役割態度と自尊心の影響	東京国際大学	角山　　剛	95
3	立体視を用いた視覚探索 ——奥行き方向への注意と視覚負担——	京都大学	尾入　正哲	96
4	モノの印象語に対する「色彩」の影響	富士通㈱	大沢　　光	97
5	「風景写真」の印象語の分析	富士通㈱ 〃	大沢　　光 ○王　　晋民	98
6	「絵画」の印象語の分析	富士通㈱ 〃	大沢　　光 ○水口　　有	99

人　格

第2日　9月9日（土）13：00－15：00　A室（201C教室）　座長　浮谷　秀一　長谷川孫一郎

1	パーソナリティ5因子モデルの意味づけ	梅花短期大学	森田　義宏	100
2	人間関係の変容（つづき）可能性としての人格(11)	大正大学	長谷川孫一郎	101
3	自己愛人格尺度（改訂）について	富山大学	山本　都久	102
4	「血液型性格学」は信頼できるか：第12報〔Ⅰ〕	富士短期大学	○浮谷　秀一	103
	──高校生の血液型性格判断におけるFBI効果（その1）──	日本大学	大村　政男	
5	「血液型性格学」は信頼できるか：第12報〔Ⅱ〕	日本大学	○大村　政男	104
	──高校生の血液型性格判断におけるFBI効果（その2）──	富士短期大学	浮谷　秀一	
6	精神テンポに関する基礎的研究（第75報告）	日本女子体育大学付属二階堂高校	○望月　稔	105
		早稲田大学	川島　二郎	
		玉川大学	寺沢　充夫	

検査・測定3

第2日　9月9日（土）13：00－15：00　B室（205教室）　座長　川島　大司　川村　司

1	サンプル数の諸問題(6)	東海女子大学	○川島　大司	106
	──サイコロの目の出現率の期待値と実測値──	早稲田大学	久米　稔	
2	日本語表記中の漢字の誤用の出現傾向	科学警察研究所	関　陽子	107
3	書字方向による筆者識別Ⅰ	愛知県警察本部	○菅原　博嗣	108
		名古屋大学	川村　司	
		愛知県警察本部	三井　利幸	
		〃	若原　克文	
4	書字方向による筆者識別Ⅱ	名古屋大学	○川村　司	109
		愛知県警察本部	菅原　博嗣	
		〃	三井　利幸	
		〃	若原　克文	
5	多変量解析による筆者識別（Ⅱ）	愛知県警察本部	○若原　克文	110
	──鑑定手法への導入──	〃	菅原　博嗣	
		〃	三井　利幸	
		名古屋大学	川村　司	
6	多変量解析による筆者識別	愛知県警察本部	○三井　利幸	111
	──筆跡の最適規格化法──	〃	菅原　博嗣	
		名古屋大学	川村　司	
		愛知県警察本部	若原　克文	

社会・文化3

第2日　9月9日（土）13：00－15：20　C室（206教室）　座長　大久保康彦　佐藤　怜

1	事例にみる現代離婚の深層 ――愛しすぎる女性たちの心理――	北海道大学医療技術短大部	大西由希子	112
2	地域住民の結婚観・育児観に関する考察	秋田大学	佐藤　怜	113
3	大学生における生活態度の研究 ――性差による比較――	城西大学女子短期大学部 〃	○橋本　泰子 佐藤　嘉晃	114
4	若者の伝統芸能に対する印象（その1）	国学院大学栃木短期大学 ㈱日精研リサーチ	○大久保康彦 玉井　寛	115
5	若者の伝統芸能に対する印象（その2）	㈱日精研リサーチ 国学院大学栃木短期大学	○玉井　寛 大久保康彦	116
6	妊産婦における妊婦・出産経過と不安との関係	日本大学	和田　佳子	117
8	周産期不安の臨床心理学的研究 ――母子体験及びサポートシステムとの関連の検討――	関西学院大学 〃	○鉄村　和恵 乾原　正	118

看　護3

第2日　9月9日（土）13：00－15：00　D室（301教室）　座長　闘戸　啓子　山本　勝則

1	看護婦の食に関する研究 ――食事の実態と食事に対する意識構造――	川崎医療福祉大学 千葉大学	○闘戸　啓子 内海　滉	119
2	痛み刺激の間隔による身体の影響について ――刺激間隔の操作が皮膚血流に与える影響――	北海道大医療技術短大部 千葉大学 北海道大学付属病院	宮島　直子 内海　滉 大井　睦美	120
3	母性看護学実習における学生の学び ――実習感想文を分析して――	東京女子医大看護短大 千葉大学	○大森　智美 内海　滉	121
4	精神科実習における看護学生の意識構造と健康度との関係	産業医科大医療技術短大 山口大学医療技術短大部 千葉大学	○川本利恵子 金山　正子 内海　滉	122
5	基礎看護学習における“不安”の変化	秋田大学医療技術短大部 市立秋田総合病院 千葉大学	○山本　勝則 宇佐美　覚 内海　滉	123
6	看護短大生の死に関する意識（その2）	秋田大学医療技術短大部 千葉大学	○松尾　典子 内海　滉	124

社会・文化3

第2日 9月9日（土） 13：00－15：20 C室（206教室）

座長 大久保[illegible] 佐藤 怜

1 [illegible]における現代[illegible]の[illegible] 北海道大学医療技術短期大学部 大西[illegible]
—[illegible]となる女性たちの心理—

2 地域住民の結婚観・育児観に関する考察 秋田大学 佐藤 怜

3 大学生における[illegible]の研究 城西大学女子短期大学部 ◯橋本 [illegible]
—性差による比較— 〃 佐藤 [illegible]

4 若者の伝統芸能に対する印象（その1） 国学院大学栃木短期大学 ◯大久保[illegible]
(株)日精研リサーチ 石井 寛

5 若者の伝統芸能に対する印象（その2） (株)日精研リサーチ ◯石井 寛
国学院大学栃木短期大学 大久保[illegible]

6 [illegible]における妊婦・出産体験と不安との関係 日本大学 和田 [illegible]

8 周産期不安の臨床心理学的研究 関西学院大学 ◯森村 [illegible]
—[illegible]及びサポートシステムとの関連の検討— 〃 [illegible]

看護3

第2日 9月9日（土） 13：00－15：00 D室（301教室）

座長 瀬戸 啓子 山本 勝則

1 看護[illegible]に関する研究 川崎医療福祉大学 ◯瀬戸 [illegible]子
—[illegible]の実態と負担に対する意識構造— 千葉大学 内海 滉

2 [illegible]による身体の影響について 北海道大学医療技術短期大学部 宮島 [illegible]子
—[illegible]の操作が[illegible]に与える影響— 千葉大学 内海 滉
北海道大学附属病院 大井 [illegible]美

3 [illegible]看護[illegible]における学生の学び 東京女子医科大学看護短大 ◯大森 [illegible]美
—[illegible]を分析して— 千葉大学 内海 滉

4 [illegible]科実習における看護学生の意識構造と健康度との関係 産業医科大学医療技術短期大学 ◯川本[illegible]
山口大学医療技術短期大学部 金山 [illegible]
千葉大学 内海 滉

5 [illegible]看護[illegible]における"不安"の変化 秋田大学医療技術短期大学部 ◯山本 勝則
市立秋田総合病院 [illegible]
千葉大学 内海 滉

6 看護短大生の死に関する意識（その2） 秋田大学医療技術短期大学部 ◯松尾 典子
千葉大学 内海 滉

公開シンポジウム
公開講演
シンポジウム

公開シンポジウム

阪神大震災の教訓と課題

企画・司会者　日本大学　村井健祐

地震予知の考えのなかった時代の警句であるとはいえ、「災害は忘れた頃にやってくる」とはよく言ったもので、このたびの阪神・淡路地域の震災はまさしくその典型的な例であった。「まさか神戸にやってくるとは」だれしもが思っていた今度の大地震であった。わが国全体としてみれば、たびたびの震災を教訓として防災の知識や体制は確実に前進してきているといってよいが、このたびの震災についてみると防災意識の地域差というものを考えざるをえない。「阪神」では官も民も無防備に近かったといえる。国の危機管理や地方自治体の防災計画にはじまり、住民ひとりひとりの防災行動にいたるまですべてにわたり無防備であった。災害列島といわれるわが国であるが、今後いつどこで起こるかもしれない災害に備え阪神大震災から多くのことを学ばなければならない。

震災と人間という面から「阪神」の震災を教訓として、われわれは次の四つの点について緊急に考えておく必要があろう。

(1)　災害後の社会的混乱の防止について

過去の内外の震災事例をみると、流言、略奪、暴動等の発生によって大きな二次的災害を引き起こすことがある。関東大震災（１９２３）時の流言から起こった朝鮮人大虐殺はその典型的な例であろう。今度の阪神大震災において、幸い目立った混乱が起こらなかったのはどうしてであろうか。このことの条件、状況を社会心理的に分析しておくことは今後の防災対策を考えるうえで非常にたいせつなことである。

(2)　ボランティア活動活発化の条件は何か

これまで行われた各種の世論調査の結果から、災害時のボランティアは期待出来ないというのが定説であった。しかし「阪神」の場合、みごとなボランティア活動がくり広げられた。いったいこれはどうしてなのか、一時的な特殊な現象ではなかったのか。言うまでもなく大きな災害が発生した場合、被災者への救援や地域の復興などにおいて、ボランティア活動への依存はきわめて大きなものがある。しかし、その活動はまさしくボランタリーなのであり、必要な人員と必要な種類の活動を確保できるかどうかは、そのときになってみなければ分からないという不安定さがある。「阪神」における活発さを支えた条件は何であったのか、またそれはどの地域にもあてはまるのか。東京にも多くのボランティアが来てくれるかどうか、楽観視する人もいるが悲観論もある。まさに社会心理学的な現実問題として緊急に検討しておく必要がある。

(3)　被災者の心理的ケアについて

阪神大震災は、極めて多くの被災者を生み出し、その人たちの心の問題がクローズアップされ、多くの人たちがＰＴＳＤということばを知るようになった。精神医学者とともに臨床心理学者もこの問題に取り組むことを期待され、実際にも大きな役割を果たしてきたといえよう。この経験は、わが国の臨床心理学界にとって非常に大きな出来事であった。ケアの仕方に始まって、支援のネットワークづくりにいたるまで今回蓄積された経験は非常に大きなもので、今後に役立てうるものであろう。

(4)　職業的な救援者のＣＩＳの問題

ＰＴＳＤは、このように広く知られるようになったが、ＣＩＳ（Critical Incident Stress）については、まだ多くの人に知られていない。すなわち、警察や消防の人たち、医療関係者、あるいは自衛隊員等災害時の救援にあたる人たちの心の問題がＣＩＳ（惨事ストレス）である。症状的にはＰＴＳＤと同様のものとみられるが、これらの人たちは、その仕事がら使命感やプライド、役割期待などによって弱音を吐くことや、いかに悲惨で危険をともなうものであっても救出、救助の任務を忌避できない。このことから被災者と異なる職業的な精神上の問題が発生する。現に「阪神」の場合についてなされたいくつかの調査によってＣＩＳの現象の存在が指摘されている。すでにアメリカでは、対処法まで確立しているが、早急にこれに学び取り入れていくことが望まれる。

阪神大震災以後、国や自治体の防災計画の見直しが行われ、また各種の事業所や民間団体、学校そして家庭にいたるまで防災の点検が行われている。地震も台風も単なる物理的な自然現象であるが、その影響を受けるのは人間であり、またその影響を小さくできるのも人間である。過去の災害から多くのものを学び、防災の知恵として生かさなければならない。心理学も人間を扱う学問として今後これに大きく関与していかなければならない。

公開シンポジウム

被災者のメンタルケア

藤　森　立　男
（横浜国立大学）

1．欧米の災害研究

欧米の災害研究によれば，災害は被災者から家屋や財産などを一瞬にして奪い去るという物理的被害をもたらすだけでなく，被災者の心にトラウマ（trauma）を残していくことが知られている．トラウマとは一般に心的外傷と訳され，自分や家族が生命の危機にさらされた人，災害によって愛する人を失った人などが体験する「心の傷」を意味する．Raphael(1986)，およびHodgkinsonら(1991)は災害による心理的影響が継続することを指摘しており，災害から4年経過した後でも，被災者の71％が精神的障害を示している事例があることを報告している．

2．心のケア活動

こうした欧米の災害研究を踏まえ，北海道南西沖地震（1993年7月）の直後より，藤森ら(1993)は被災地域の調査活動を開始した．この地震はほぼ同時に大規模な津波や山崩れを引き起こし，さらに大火災を発生させ，奥尻島青苗地区を廃虚と化した．藤森らは被災地域全体のストレス軽減の必要性を指摘し，被災者に対して以下のような心のケア対策が必要であることを奥尻町災害対策本部(1993年8月）および北海道南西沖地震災害対策本部(1993年9月）などに提案した．

（1）地域社会に対する情報の提供

①災害後の心理に関するパンフレットの配布　②住民向けの講演会の実施　③各種の組織・団体向けの講演会・懇談会の実施　④家庭訪問による巡回相談の実施　⑤長期にわたる相談所の開設　⑥ニュースレターの刊行　⑦相談電話(フリーダイヤル)の設置

（2）コミュニティ・ゲートキーパーの育成

メンタルヘルスの専門家の絶体数が不足しており，被災地域に専門家を常時派遣しておくことは困難である．そこで，重要になるのがコミュニティ・ゲートキーパーの育成である．コミュニティ・ゲートキーパーとは学校の先生や福祉担当職員など，地域内におり，被災者の悩みやストレスの問題に対して関心のある人々を意味する．こうしたコミュニティ・ゲートキーパーがそれぞれの地域において悩みを持つ人と常時接し，重大な問題や深刻な状態があれば専門家との間の連絡役を果たす．このような人々を育成することが，この計画を推進する上で不可欠である．

また，藤森ら(1993)は災害が子どもたちの心に与える影響について指摘し，子どもたちへの心の支援を訴えた．具体的には保護者や学校関係者が災害を体験した子どもたちの苦しみや悲しみを理解するためのパンフレット(災害を体験した子どもたち-こころの理解とケア-)を独自に作成し，1993年12月中旬に被害が深刻だった奥尻町や大成町などの教育委員会を通じて小・中学校の教職員や保護者に配布した(2000部)．

さらに藤森ら(1995)は阪神・淡路大震災で被災した児童・生徒の心のケア活動に実践的に役立てるために，北海道南西沖地震の経験を基に作成した「危機介入ハンドブック」を兵庫県教育委員会を通じて各学校の指導者用資料として配布した（1500部）．

このような心のケア活動は，わが国で初めての試みであった（柳田，1995）．

3．被災者の精神健康度

わが国でも災害が人間の心に長期的な影響を及ぼすことを実証する目的で，北海道南西沖地震の被災者がその後どのような心理的状態になっているかを検討した．分析対象は北海道南西沖地震において最も被害の大きかった奥尻島青苗地区の被災者215 人であり，デモグラフィック特性，被害程度，精神健康調査票（ＧＨＱ28）などについて回答を求めた．調査方法は住民組織を通して調査票を配布・回収する配票調査法を用い，災害から10カ月後（1994年5月）に実施した．

その結果，精神的障害のおそれがあるハイリスク者は被災者の77％にのぼった．一般成人（正常者）を対象とするＧＨＱ28の結果ではハイリスク者が14％に過ぎず，本研究で得られた被災者の77％という数値は災害による影響を示している．また，被害の大きさによってハイリスク者の比率に差があるかどうかを調べるために「死傷者」群，「家屋全壊」群，「他の被害」群を比較したところ，家族内に死傷者がおり，しかも家屋が全壊している死傷者群が91％と圧倒的に高く，次いで家屋全壊群が83％，他の被害群が59％となっていた．これらハイリスク者の出現率には有意差が認められた(χ^2=14.826, df=2, p<.001)．

4．災害後の交通事故

災害は電気や水道などのライフラインを寸断し，通信機能を麻痺させる．このため，被災地では家族の安否情報を求めたり，緊急の救援物資を運搬するために自動車による暴走行動が見られるとの指摘がなされている（安倍，1982）．このことから，災害後には交通事故の急増が予測された．そこで，北海道南西沖地震において奥尻島に次いで大きな被害を受けた日本海沿岸の市町村を管轄する北檜山警察署管内（北檜山町・大成町など）での交通事故の発生状況を調査した．

その結果，災害が発生した1993年7月12日（午後10時17分）から31日までの物損事故件数を前年の同時期と比較したところ，災害後の物損事故件数が2.5 倍に達していた．

阪神大震災の教訓と課題

青池慎一
(慶應義塾大学)

１９９５年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地震（マグニチュード７.2）が発生し、阪神淡路地域にきわめて大きな災害がもたらされたのである。 死者約5千名、家屋、ビル、道路、鉄道などの破壊、焼失はきわめて大規模なものであった。 このいわゆる阪神大震災は、我々に様々な教訓と課題を与えてくれているようである。行政、企業、防災専門家、建設土木専門家、そして様々分野の専門家が検討を行っているが、本報告においては、一生活者の視点から、いわば layman の視点に立って、我々にとっての教訓と課題のいくつかについて検討してみたい。

1)震度６概念

東京にいた私が兵庫県南部震災の発生を知ったのは午前7時30分頃、ＴＶのニュースを通してであった。 地震が震度６ということを知って、かなり大きい地震であるとは思ったが、それ程度大きな災害がもたらされるとは全く思わなかったのである。 震度６ということで思いうかべたのは、釧路や八戸における状況であったのである。 共に震度６で、それ程大きな災害は発生していなかったのである。(釧路では死者０名、八戸で２名) それ故、阪神・淡路地域に、あのような災害がもたらされるなど全く想像しなかったのである。 しかし、後に学習したことであるが、震度６は、速報性の次元においては、最高の震度で、きわめて幅のある概念であるとのことである。 すなわち、同じ震度６であっても八戸や釧路の揺れをはるかに越える大きな揺れである可能性があるということである。

しかし、私のような震度６概念の認識は、廣井脩教授によれば、私にだけにとどまらず、行政、メディアにも共有されていたようである。 このことが災害の拡大を防ぐ上で重要な初動体制の遅れをもたらしたようである。 行政、メディア、市民において震度概念についてのしっかりとした認識が必要であったのである。

2)阪神地域の安全信仰

日本は地震国であるという認識は、私にもあったが、その地震の危険性認識は東海、首都圏を中心とするものであった。 この認識は、多くの日本人に共有されているものであったようである。 このことは、マス・メディアの報道ないし送り行動の影響であったと仮説することができるのであろう。 いずれにしても阪神地域は地震に関して安全は地域であるという考えは、当該の阪神地域の人々にも持たれていたようで、このことが阪神地域の人々の防災意識の度合や防災体制の整備のあり方に影響を与えたようである。 ジャーナリズムのあり方やマス・コミュニケーションの環境監視機能のあり方に大きな問題を投げかけている。

3)メディアの報道

新聞、ラジオ、テレビなどは報道機関である。 事件、出来事を対象化し、認識し報道する機関である。しかし、阪神大震災においては、大都市地域ということもあって、阪神地域のマス・メディアシステムは被災者でもあったのである。 特にスタッフの多くが阪神地域の居住者であったので、自宅で被災しており、また交通システムの崩壊もあってスタッフの出勤が困難で、組織的で全体を把握する取材と報道体制がなかなか作ることができなかったようである。 メディアからの情報は、きわめて重要で、被災地の被害をより少なくするためにも不可欠である。メディアそれ自体の防災能力の向上がより必要とされる。

4)情報

災害時における情報の重要性は言うまでもないが、地震発生後、直ちに発生するのが安否情報要求である。兵庫県南部地震の場合は、午前５時４６分に発生したので家族が一緒にいることが相対的に多い状況であり、家族員同士の安否情報要求行動の発生は相対的に少なかったが、阪神淡路地域の人々と人間関係ネットワークを持っている人々が全国に存在し、多くの安否情報要求行動が発生したのである。 しかし、通信システムの被害もあり、通信システムの能力には限界があった。これを補うマス・コミュニケーション・システムやインターパーソナル・コミュニケーション・システムのあり方が検討される必要がある。 また、被災者への生活情報提供システムのより一層の検討が必要であろう。

5)Role Conflict

阪神大震災時のような状況においては、平常時には見られないようなRole Conflictに人々はさらされたようである。 地域社会の一員としての役割期待、家族の一員としての役割期待、企業・組織の一員としての役割期待などの間にConflictが生じたのである。いかにそれを解消していくかのシステムが必要である。

震災ボランティア活動報告

姫野恭博
全国大学生協連　常務理事

私はあの震災のあった１月下旬より、被災地で「大学生協ボランティアセンター」の責任者として活動してまいりましたので、その経験を中心にレポートさせていただきます。

今回の震災に対して、全国から「ボランティアとして被災地に行きたい！」「ボランティア活動をしたいのだけど、どうしたらいいのかわからなくて…」というたくさんの声をいただきました。これらの声の実現にむけ全国大学生協連では「大学生協ボランティアセンター」を設け、既に活動を行っていた他ボランティア団体と協力しながら、全国へボランティアの呼びかけ、その受け入れを行ってきました。３月末までに、１５７大学（３専門学校）・一般から登録者数１２００人以上（平均５日間～１週間）が被災地を訪れその復興に協力することができました。

ボランティア活動の盛り上がり条件を発表主旨としてお伺いしているのですが、私自身今回のことは、これまでに経験したことのないことばかりで、とにかく参加されるみなさんの自発性・自主性によって支えられたという思いでいっぱいです。

センターとして衣・食・住の確保、避難所等のボランティア活動先との調整、活動における最低限のルールづくり等は行ったのですが、特に「こうしなければならない」「これがボランティア活動です」というものはありませんでした。逆にそのことが功を奏した面も多くあったように思います。

ボランティアの大半は、これまでボランティア経験のないという方ばかりでした。このような中で、被災地でのボランティア活動は多岐にわたりました。避難所での活動をはじめとして、被災家屋への訪問活動、地域の調査活動、物資の仕分け作業、中には行政の事務作業までありました。このようなとき、被災地を訪れる前にイメージした活動とはかなり異なる面もあったと思います。実際そのような声もボランティアから少なからずありました。

センターでは毎晩全体でのミーティングを行いました。上記のような悩みも含め、お互いの活動内容の交流や疑問、悩みをみんなで出し合い、自分たちに何ができるのかを考え合いました。このことが大きかったように思います。ボランティアどうしで自分たちにできることを考え話し合う、その中で明日への活力を見つけていきました。泊まり掛けで行う避難所での活動の中でもこのようなミーティングが行われたようでした。また、考えたこと話し合ったことを、後から来るボランティアや全国に向けて発信してきました。

この中からボランティアの創意により、紙芝居・移動図書館・ドッチボール大会など様々な企画が生まれ子供たちに"笑顔"を贈り続けることができました。

このようなミーティングの中で、ボランティアから特に強調されていたことは、「被災者の自立」と「自分自身の成長」ということでした。とりわけ「自分自身の成長」ということに関しては、ボランティアが何かを「してあげる」存在ではないということが繰り返し言われていました。被災者とボランティアが協同すること、その中で自分自身が成長していくんだということです。このことはほとんどのボランティアの感想文からも見られました。まさに今回のボランティア活動の大きな支えになったことだと思います。またこれは、私自身の最も大きな感動の一つでもありました。

大学生協の行った「学生の消費生活に関する実態調査報告書（９４年度版）」によりますと、ボランティア活動への関心は「まあ」を含めると５１．１％と過半数になります。一方で参加経験・参加方法を見ますと、全く逆の数字があります。この関心をいかに活かすことができたのかが、今回の大きなカギになったように思います。

【ボランティアの参加関心】

	94年	文系	理系	男子	女子
大いに	9.0	10.5	6.6	6.7	13.0
まあ	43.1	44.6	40.6	36.9	53.4
あまり	34.0	32.1	37.1	37.9	27.5
ない	13.5	12.4	15.2	18.2	5.6
N・A	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5

【参加経験】

	94年	文系	理系	男子	女子
ある	19.8	22.1	16.0	15.9	26.3
現在参加	2.8	3.3	2.1	2.3	3.8
ない	77.0	74.3	81.4	81.5	69.3
N・A	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5

【参加方法について】

	94年	文系	理系	男子	女子
わからない	40.3	40.2	40.5	38.1	44.1
方法不明	21.8	22.8	20.2	18.7	27.0
申込不明	4.0	4.1	3.9	3.5	4.9
問題ない	26.0	25.4	27.0	30.4	18.7
N・A	7.8	7.5	8.4	9.3	5.3

公開シンポジウム

防災対策と心理学の関わり

木村　拓郎
(防災都市計画研究所)

はじめに

○阪神・淡路大震災→災害対策の上で心理学の果たす役割のひとつとして『心のケア』に注目
○その他にも心理学のアプローチを待つ課題は多い

1．受け取る側の心理に配慮した情報の出し方

○情報の伝達がうまく行かない
例）伊豆大島近海地震：本震で浮き足立っているところへ出された‘M6程度’の余震情報が誤解され混乱
　雲仙普賢岳噴火：土石流に衆目が集まる中で‘火砕流’の警告は重視されない
　阪神・淡路大震災：行政の発表した復興計画へ住民が反発
○受け取る人々の心理に配慮した情報発信が必要
・受け取る側の心理をどう考えるか？
・どのようにその心理を把握するか？
・それに対してどのような発信方法をとるか？

2．自立心を失わせない支援・援助方法

○被災生活で自立心や生き甲斐を亡くしていく被災者
「ここにいれば食べるにも寝るにも困らないから…」
「無料でもらうことに慣れてしまう自分が恐い…」
○被災者のやる気・生き甲斐を活かす形の援助が大切
・やる気や生き甲斐とは何か？
・それを活かす（失わせない）援助の方法は？

3．コミュニティとの心のつながり

○地域のつながりが途切れた仮設住宅
・精神的に落ち込んだ高齢者の孤独死
○コミュニティを壊さない方法の検討が必要
・人間にとってコミュニティとは何か？
・それが破壊された場合の心理的な影響は？
・コミュニティを保つにはどうすべきか？
○やむを得ずコミュニティが破壊された場合への備え
・新しいコミュニティをうまく作るには？

4．公共の安全と個人の心とのバランス

○復興のための都市再開発，区画整理
長年住み慣れた家や土地への愛着を捨てきれない
(アタマではわかっているつもりでも…)
○人の心を傷つけずに街を変えて行きたい
・人々が持つ愛着とは、一体何なのか？
・それと公共の安全をどのようにバランスさせるか？

5．社会的リスクの認知と受け入れ

○起こる災害はいつも‘思いがけない’
人々は身の回りの危険には目を向けない
建設技術者は‘安全だ’と言わざるを得ない
(‘絶対安全’は存在しないのに…)
○危険の存在を認め、それを意識しながら生活すべき
・‘危険’はどうやったら受け入れられるのか？
・どのくらいの危険なら受け入れられるのか？
・それをどのように伝えていけばいいのか？

6．防災意識の保持

○天災は忘れた頃にやってくる
大災害後の一時的な防災意識の盛り上がり
↓
時とともに急激に意識が衰退
○防災意識を保たなければ災害は繰り返す
・なぜ防災意識は定着しないか？
・どのくらいの防災意識があればいいのか？
・それを継続的に保つ方法は？

公開講演

性差に関する諸問題 ——性差と性自認

間宮　武
横浜国立大学（名誉教授）

1　Sexology からみた男と女

1）　男女の基本的違い

（1）　身体上の性差

基本的違い……性染色体構成：XX・XY
　　　　　　　性腺：　卵巣・精巣
　　　　　　　内性器：　♀型・♂型
原則的違い……外性器：　♀型・♂型

（2）　脳の性分化

視床下部にある性中枢による♀の周期性と♂の非周期性

2）　男性ホルモンによる男の外性器の形成

精巣のライディヒ細胞からテストステロンの分泌やセルトリ細胞からのミューラー管抑制因子の分泌が胎齢10週目ごろより多くなる。特に12～24週の間に男性ホルモンの働きにより生殖結節がペニスを、泌尿生殖溝の両側ヒダがペニス腹部皮を、外側生殖隆起が陰のうをそれぞれ形成する。

2　Gender Identity（性自認）

1955年にJ. MoneyがSex-Roleに代えてGender-Roleの用語を提案。1963年にR. StollerがGender-Identityの概念を公表してから「性的同一性」という語が用いられてきた。1970年代に朝山新一がこれに代えて「性自認」という用語を主張してから性教育の世界ではこの語を常用語としている。しかし医学や他の学問領域では性的同一性を用いており必らずしも統一されてはいない。

1）　Sex-Identity（性別自認）を必要とするIntersexuality（間性）の存在

1968年のメキシコ・オリンピック大会以来女子登録選手にはSex-Check（性別鑑定）をすることになっている。出生時に外性器などによって女と認定されて育ったが、実際には男である人間が存在し得るからである。このような間性とよぶべき男や女にはいくつかの種類がある。

（1）　性染色体構成異常

ア）　クラインフェルター症候群（XXY症候群）（男）　ペニス・陰のう・性毛などは正常であるが精巣（睾丸）萎縮、無精子症など呈する。時には♀型乳房、尿道下破裂、停留睾丸などがみられる。

イ）　ターナー症候群（XO型）（女）　卵巣発育不全により無月経、乳房発育不全、二次性徴欠如、性器発育不全を示すこともある。

ウ）トリプルX症候群（XXX型）（女）　女性的特徴を示すが、時には卵巣の発育不良、妊娠不能。

このほか、モザイク型症候群なども存在する。

（2）精巣性女性化症（男）　男性ホルモン分泌には異常はないが体細胞に男性ホルモンの受容体異常をもつため♀型性器や二次性徴欠如を呈する。

（3）副腎性器症候群（女）　いろいろの事情により胎児期に女児が過剰の男性ホルモンの投与をうけたために、内性器は♀型であるが、外性器は♂型となり、卵巣機能は乏しく無月経を呈する。

（4）性腺発育不全（男）（女）　女は発育不全ながら卵巣・♀型性器を呈する。男は♂型性器を示すが精巣萎縮・無精子症を示す。

2）　Gender Identity/Role（性役割自認）

自分が男（女）としての社会的期待に対してどんな役割を果たすべきか、また果たしているかの自己認知。これを支えるものは「性役割観」であり、「性役割行動（性度）」に反映している。

(1)　両親の養育態度と性役割期待の実現度（性度）。第2次大戦時アメリカにおける父親不在による子どもの性度への影響が着目され、戦後、性役割に関する数多くの研究を誘発した。

(2)　女の男性化・男の女性化傾向により性度の多様化をもたらし、異性魅力の減退による性行動体験の逆増加、女性の積極化と男性の消極化による性的倒錯や同性愛の増加などをもたらした。

(3)　性役割志向の多様化（性役割自認の動揺）

性転換を求める男、女としての性別自認をしていても意識や行動を男性志向するもの、女たることを拒否し意識的にも行動的にも男性志向をする女性、男としての性別自認をしていても意識や行動で女性志向をするもの、などいろいろな性役割自認の動揺しているものが増加している。

シンポジウム

心理学と家政学の関連性を求めて

家政学が心理学になにを期待するか

企画者　高嶋　正士　（共立女子大学）

〈主旨〉

日本応用心理学会第６２回大会を開催するにあたり、主催校としての特色を持たせるためのテーマはないものかと考え続けてきた。

本学では新制大学 発足(1949)と同時に家政学部が新設され、それ以前は専門学校として家政に関する学科を備えていた。従って本学においてはその歴史が最も古く現在に至っている。

元教授であられた玉岡忍先生，間宮武先生，筆者も家政系に所属していることもあって、今までの心理学会でも取り上げられなかった問題として、心理学と家政学との接点、関連性を追求してみようと思い立ったのである。幸い本学には家政学に関する専門の教授に不足はないので、これらの先生の協力を得て、心理学者を交えて問題提供していただければとの願いがこめられている。

家政学部のカリキュラムの中に、どこの家政学の大学にも心理学に関わるいくつかの専門科目が設置されている。たとえば、児童心理学，家族心理学，被服心理学，食物心理学，臨床心理学，等々、心理学と家政学との接点、関連性は大いに存在する。とくに、家政学の中心である衣食住の問題をつかさどる人間そのものが重要な役割を担っているのである。従来の衣食住のみに限定せず、時代に即応した幅広いものとしながらも家政学の独自性を確立させ、一般人が抱きがちな古くさいイメージを払拭し魅力ある学問でなければならない。家政学は女子教育としての学問にとどまらず広く人間生活にとって必要な学問であるとの基本認識の上にたっていることが必要である。

生活の主体である人間について心理学的，哲学的および社会，自然科学的考察を深め、生活を構成する諸領域の総合的理解を深めることが２１世紀に向けての家政学の使命ではないかと考える。

このような意味から、心理学と家政学の関連性を追求し、あわせて、家政学が心理学に、心理学が家政学に何を期待し、何を求めようとするか等の話題を中心に活発なる討論が進められることを期待する。

〈シンポジストの紹介〉

①小林茂雄氏

先生には被服心理学の立場から話していただく。先生は社会心理学会の会員でもあり、通産省繊維高分子材料研究所・性能設計研究室長を経て本学家政学部教授に就任。「被服の着装心理」「官能評価」「繊維製品の感覚的性能」などの研究に従事され、著書に「表現としての被服」（朝倉書店），「被服心理学」（繊維機械学会）などがある。先生は、応用心理学に最も近い研究をされているように思う。

②加藤達雄氏

先生には食物学の立場から話していただく。医学部卒業で医師であられる。東京厚生年金病院内科部長を経て、本学家政学部教授に就任。先生は日本心身医学会の会員でもあられ、「神経性食欲不振症の臨床」（医学のあゆみ），「副腎皮質の異常」（中山書店），「ボディ・イメージの障害」（臨床栄養）などの著書・論文がある。食異常行動の研究（拒食や過食）を続けられ、定期的にこれらの研究会で指導されている。

③藤枝惠子氏

先生には司会を兼任していただき、一般家政学の立場から話していただく。横浜国立大学から本学家政学部教授に就任。先生は横浜国大から一貫して「家庭科教育法」「教科教育学」「消費者教育」「家政学原論」を担当され、この方面の幅広い調査研究をされている。また、家族についての関心も深く本学において総合科目「家族」の中心的役割を担っておられる。また、関東私立大学教職課程研究協議会における一連の研究メンバーでもあられる。

④馬場房子氏

先生には消費者心理学の立場から話していただく。応用心理学会の運営委員の一人で、広島大学、ハワイ，イリノイ大学大学院で学ばれ、現在亜細亜大学教授。また、先生は産業・組織心理学会の会員で、「女性の消費者行動」（日本コンサルタントグループ），「働く女性の心理学」（白桃書房），「消費者心理学」などの著書・論文がある。先生のご研究は、心理学でも家政学にいちばん近いものではないかと考え、話題提供をお願いした。

シンポジウム

ファッションの効用
── 被服心理学の立場から ──

小林　茂雄
（共立女子大学）

1．はじめに

被服心理学は被服の購買，選択，着装，廃棄など被服に関する人間の行動（被服行動）に関して，個人の被服行動，集団の被服行動，集団における個人の被服行動に与える集団の影響などを研究する学問である。

被服は通常，服装として着装されてはじめて意味をもつ。この場合，被服の着装は個人的要因（欲求，自己概念，センスなど），対人的要因（対人認知，対人魅力など），集団的要因（集団目標，集団規範など），文化的・社会的要因（流行，社会規範など）に影響される。ここでは被服心理学の問題として，ファッションを採りあげ，その効用などについて考えてみたい。

2．ファッションにみる2，3の話題

被服には自己表現の手段としての「装飾性」，社会集団に所属する人間としての「社会性」の機能がある。これらの機能は社会規範の変化するなかで，あるものは変容し，また，あるものは変容せずに以前のままの状態にある。しかしながら，ファッションについては全体的にはユニセックス化に流れている。この流れは女性スタイルの男性スタイルへの接近である。

①今年の夏はいわゆる「へそだしルック」が流行した。このようなスタイルは以前の社会規範では想像できないファッションである。

②男性の下着で，いわゆる「ランニングやU首シャツ」は若者は着用しなくなっている。これらはオジンスタイルであるという。

③今年の流行色は黒である。黒色の布は白色の布に比べて2.5 倍も多く日光の熱線を吸収する。8月の猛暑のなかで黒のスポーツシャツ，ドレスの着装姿が目立った。

3．自己概念とファッション

自己概念は自分自身に対する知覚，感情，評価であり，自分の能力，性格，容姿・体型などをどのように考え，どのように感じているかをいう。被服の着装行動との関係では，性格，容姿・体型の自己概念が重要な意味をもつ。

性格の観点からは，外向的・内向的な性格の違い，自尊感情の高い・低いの性格の違いにより，派手・地味な着こなし，流行の採用の早い・遅いなどに違いがみられる。また，容姿・体型の観点からは，身体的な短所をカバーする着こなし，長所を強調する着こなしがなされる。これらの例は，自己概念により着装行動が影響を受けることを示している。

一方，華やかな衣服を着れば気持ちが晴れやかになる，落ち着いた被服を着れば気分も落ち着くことを経験する。これは，着装行動により自己概念が影響を受けることを示している。この考え方を応用したものに，ファッション療法がある。これはファッションの実践や教育を通して，精神的疾患などを治療しようというものである。

4．高齢者とファッション

高齢化が急速に進行しつつあり，近い将来4人に1人が65歳以上の高齢者で占められることを考えると，高齢者の衣の問題はますます重要になってくる。ただ一概に高齢者といっても，健康で老いの意識を感じない人々，自らも老いを感じ，健康にも衰えを感じ始める人々，身体的に衰え寝たきり，あるいはそれに近い状態の人々によって，衣に対する考えは異なる。

衣は食や住とともに生活には不可欠な要素であるが，より充実した生活を送るためには，その人なりに衣に気を遣いながら生活することが必要である。おしゃれ意識を持続させることが，生きがいを与え精神的に老いを遅らせることができるのではないかと思う。また，身体的に衰えた人々にとっては，ファッションにより情動を活性化することができるのではないかと思う。人は何歳になっても若くありたいという願望がある以上，高齢者のファッションはこの願望を満たすものとして重要である。

最近，一部の老人施設において化粧のメイクアップやファッションショーを体験させ，おしゃれ行動を通して情動を活性化させる試みがなされ効果をあげているとのニュースが報じられている。この例として，特殊老人ホームのさくら苑（横浜市）では車椅子などの高齢者が美容師に非常に和いだ雰囲気で化粧のメイクアップを受けていた。化粧のメイクアップによる情動の活性化については，鳴門山上病院の報告によると，自分の容姿への関心度が増加することのほかに，残存機能の回復に役立つなどの動きの活性化や精神の安定作用がみられたという。今後この分野でのファッションの活用が望まれる。

シンポジウム

心理学と家政学の関連性を求めて ―家政学が心理学に何を求めるか―

―食物学の立場から―

加藤達雄
共立女子大学家政学部食物学科栄養生理学研究室

Ⅰ．食生活：家政学は家庭における人間生活の基礎と実践とを研究するもので、研究対象には、生活する人間、生活のための素材、生活して行く環境とを含む。食物学は生活素材として食物を取り扱い、すなわち食生活に関するもので、特に家庭生活と切り離すことが出来ない。食物が人間に与える意義は単に栄養の補給にとどまらず、食べるという行為が人間の精神に与える影響も重要である。

食物学科では、食物学専攻と管理栄養士専攻の二つのコースに分けられている。前者は、主として素材としての食物のもつ諸性質と、食品としての利用を学ぶものであり、食物の供給、食品の選択と摂取、人体への吸収などの問題を含む。従って社会や人間との関連もまた大切である。後者は特に食物のもつ人体栄養としての意義について学ぶものだが、人間の身体的・精神的機能と密接に結びついている。

Ⅱ．食行動：食行動の発達には、遺伝子規制による本能行動プログラム、母親による養育行動プログラム、生後の模倣学習プログラムにより、食習慣が形成される。また食行動の機能として、食事量の調節、食品の選択性、摂食リズムがある。動物一般の性質として、甘味を好むという事があるが、これは長い進化の歴史の中で、糖質が安全で効率の良いエネルギー源として利用されてきたことにより、遺伝子の上に刻みこまれたものであろう。それに反しコーヒーやアルコールなどの嗜好は生後の学習の上で獲得されたものであり、社会的な慣習との関連が深い。摂食リズムもまた、遺伝子によって規制されている。乳児の哺乳行動には生後４週くらいで３、４時間おきのリズムが現れ、さらに後には昼間のみに摂食するようになる。昼夜リズムについては、ネズミの実験で、妊娠母ネズミの影響も観察されている。すなわち、出生直後の摂食リズムの形成に母の養育行動の関与する可能性がある。

Ⅲ．食欲中枢：脳の視床下部には、いわゆる満腹中枢、摂食中枢があって交互に活動し、摂食の開始と終了を指令して摂食量を調節している。この調節レベルにも、遺伝的な要素が大きいことは双生児や養子研究で示されている。視床下部を含めた大脳辺縁系は食欲の統制の中枢で、血糖値や遊離脂肪酸などの血液成分が体液性情報として、また肝臓で感知されたこれらの値や、胃腸管の動き、味覚などの内部感覚が神経系を介して視床下部に伝達される。食物の形態、色、匂いなどの外部感覚はそれぞれの感覚受容器を通して伝えられる。食欲中枢は、これらの体内外の情報を受け取り、大脳前頭前野の認知行動中枢と密接に連携しつつ、内分泌系や自律神経系により内部環境を調整するとともに、大脳運動野を介して摂食行動を実行に移す。

Ⅳ．摂食障害：社会環境の変化が人間の食行動に与える影響の例として、摂食障害を考えてみる。摂食障害は主として思春期前後の女性に現れるが、拒食と著しい痩せと無月経を主徴とする神経性食欲不振症と、発作的な大食を主徴とする過食症とがある。1960年代までは極めて希な病気であり、社会的に上位の階層に限られるとされていたが、1970年代ことにその後半、さらに1980年代になって著明に増加し、社会問題化するに至った。初期には拒食の形のものが多く、過食発作を伴うものは一部であったが、数の増加とともに過食症が増加した。以前は殆どみられなかったダイエットをきっかけとするものが増加したことも特徴である。

1970年代は、わが国の食糧の供給が、質、量ともに充実した転換期に当たる。この飽食と繁栄の上に痩せ志向が若い女性の間に広まった。痩身美容関連書籍数、記事数は1970年代、80年代を通じて増加した。一方、思春期の若い女性の体位の平均値は年々、痩せの方向に移動し、痩せ志向が広く全国に拡がっていったことを示している。

厚生省研究班の統計でも、過食症は神経性食欲不振症に比べ少ないが、実際はもっと多い印象がある。病院を訪れず一人で悩む者も多い。アンケート調査では中学生から大学生まで、むちゃ食い発作有りと答えた者は半数に近く、週２回３カ月以上続いた者も２％を上回る。早期に何らかの処置が望まれよう。

Ⅴ．おわりに：遺伝子による規制と異なり、養育行動、模倣・学習は社会の急激な変化により大きく影響される。母乳保育は初期の母子関係にとって重要だが、母乳栄養の率は激減している。これには女性の体位低下と社会進出が関係しよう。核家族化により子供の食卓状況を含めた生活環境も変化する。社会環境の変化はある程度は必然であり、現状に即した対応を考慮せねばならないであろう。

シンポジウム

一般家政学の立場から心理学への期待

藤枝 惠子
（共立女子大学）

1 一般家政学の立場とは

心理学と家政学の関連性についてのシンポジュウムが、今回とりあげられたことは初めての試みである。

家政学は、1984年の日本家政学会構想委員会による定義では「家庭生活を中心とした人間の生活における、人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基礎として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である」とされており，自然科学，社会科学，人文科学によって目的を追求すると位置づけられている。

したがって日本学術会議における研究領域の分類では複合領域にあり，上記の諸科学は家政学と関連する基礎科学と考えられている。

今回のシンポジウムでは，家政学の諸領域の中の被服領域で，被服心理学の立場から小林教授が，食物領域で食物学の立場から加藤教授がその関連性について述べられた。またこのあと消費生活領域の中の消費者心理学の立場から馬場教授も提案されるので、ここではこれらの領域以外の関連について、次の諸点から提案したい。

2．人間・家族・家庭生活領域の関連から

家政学の中心的対象は，個人としての人間，家族としての人間，家族の生活システムとしての家庭生活である。この場合の基本的な人間理解については，出生から死までのライフステージに即して、心理学の成果を活用し，研究を発展させた場合が多い。

それらには個性・パーソナリティに関連する人間理解，家族が愛情によって結ばれている心理的側面からの関係究明，親が子に対する不安定な心理的態度，また兄弟姉妹や家族構成等が及ぼす性格形成に関連した成果などをあげることができる。

子育て，性差，親子関係，高齢者の心理などは，今後の社会的要求に応える研究にとって重要であるばかりでなく、さらに介護することによるストレスや、心理的変化，福祉社会における高齢者の生活ニーズ，情報心理的な面など，家政学の立場からも心理学的アプローチをとりあげる傾向が多いと思われる。

心理学が医学でいう治療医学の立場に近いとすれば、家政学は予防医学の立場にあたり，相互の協力体制が期待されるところである。

3．家庭経営領域の関連から

生活経営の立場から家庭生活をさらに理想的に経営し、心身共に健康で生きがいのある家族の生活を維持するために、どのようなシステムで経営するか，人的・物的資源の活用をどう進めるかを研究するのがこの領域である。

この領域では，経営の時系列にそった経過や過程に対する心理的対応や、条件設定によって意思決定を行う場合の心理的葛藤，決断力や予想力をめぐる研究などが求められている。

4．住生活領域の関連から

住生活に関する領域では，生活空間の快適性・機能性・利便性等が追求される。このため住生活空間に対する心理的な認識についての理論が必要であり，特に空間心理学といわれる研究領域があるとするならば，空間が環境としてどのように人間に影響するか、住まいについては，広さ・色・形状などの要素や，そのふん囲気のもつ人間への影響的要素の関係を明らかにし、室内装飾の面のみならず，いわゆる住み心地のよさとは，物的面のみでなく人的面においても，どのような融合条件をもつものが役立つかの究明が期待される。

5．技術・技能領域の関連から

家政学の特色である実生活の向上・発展を期待するとき、生活技術の開発と実践化が求められる。

これらは家政学の各領域に関連するものであるが，技術や技能が人間の頭脳や腕の一部として生かされるためには，どのような習得過程が必要であり，個人的にはその人に適性があるか否かなどに関わる研究が，利用されている。しかし単なる単純技能のみでなく、総合的技術を駆使できる能力が今後は求められよう。

6．総合という全体的把握との関連から

以上各領域の課題的なものについて特色があると思われるものにふれてきたが，表面的提示であることをお許しいただきたい。

家政学の求める独自のパラダイムの理論として、総合という意味を共通理解し，基礎科学と考えられる諸科学の成果の活用と，家政学独自の研究方法の開発創造によって，新しい社会の人間生活の向上に，役立つものを求めて行きたい。

シンポジウム

心理学と家政学の関連性を求めて

－家政学が心理学に何を期待するか－消費者心理学の立場から

馬場　房子
（亜細亜大学　経営学部）

１．はじめに

家政学と消費者心理学との関連性を考察しようとすれば、まず、家政学とは何か、消費者心理学とは何かについて定義する事が必要であると考える。

そこで、家政学とは何かについて知るために、図書館を訪れて、入手できる範囲で読んでみた。その結果、家政学とは何かについては、歴史的にも、その定義が変遷してきているし、国によっても、いろいろであることがわかってきた。したがって、今回は、亀岡京子の定義にもとずいて[1]筆者の考える消費者心理学との共通するところと違うところを明示して、消費者心理学が家政学に何を役立てることができるかについての私見を述べたいと思う。

２．家政学と消費者心理学の共通点と差異点

亀岡京子によれば、家政学とは、「家庭生活を中心とする人間の生活を総合的にとらえて、人と環境との相互作用を人的・物的の両面から研究し、生活の質的向上とともに人間開発を図り、人類の幸福増進に貢献する実践的総合科学」であるとしている。

一方、筆者自身は、消費者心理学とは、消費者（生活者）としての人間の行動を行動科学的アプローチによって研究する学問であり、研究成果が、人々の幸福のために役立つことを願っている[2]。

以上の両定義を比較すると、家政学と消費者心理学は、かなり共通性をもっていると思える。第一に、生活している人間に係わる研究をしているということ、第二に、実証的に研究しようとしていること、第三に、研究成果を人々の幸福のために用いたいと考えていることなどである。

それでは、両者の違いはどんなところであろうか。亀岡によれば、家政学を構成する部門には、食物学、住居学、児童学、家庭経済学、生活福祉学などがある。消費者心理学の主要な関心は人間の行動であるので、たとえば、食行動、着る行動、住む行動、子供の消費行動、人間のお金の使い方などである。さらに、家政学では、たとえば、食べ物そのものの研究、着るものそのものの研究等も含まれているので[3]、消費者心理学よりも、ある意味で、広範囲にわたっていると考えられる。つまり、家政学は、亀岡の指摘にもあるように、人文科学、社会科学、自然科学にまたがる総合科学であるが、消費者心理学の方は、人文科学や自然科学に全く関係がないというわけではないけれども、主として、社会科学のいろいろな分野、たとえば、産業・組織心理学、経営学、マーケティング、社会学、文化人類学、経済学などとの関係がより深いといえよう。

３．消費者心理学が家政学に役立てる事ができる物は何か？

第一に、研究技法が役に立つのではないかと考える。筆者自身は、「行動科学的アプローチ」[4]を提唱しているが、生活する人間の行動を、ウオッチングしたり、イントロスペクションしたり、ヒヤリングしたり、アンケートしたりする事などで、情報を収集し、さらに、情報の分析、分析の解釈、結果の予測、結果の応用をするということでは、家政学が科学であると定義されているので、役に立つのではないかと考える。

第二に、人間観についての研究が役に立つのではないかと考える。亀岡は、家政学が「各人が持っている可能性を積極的に開発し、人間らしく活き活きと生活することを目標としており、価値ある生活を創造するための追求を目標としており、価値ある生活を創造するための追求がその研究の焦点となっている」と述べているので、消費者心理学がこれまで研究してきた、消費者（生活者）行動の「なぜ」（モチベーション）や価値観などについての研究などが役にたつのではないかと考えている[5]。

１）亀岡京子稿、家政学、日本大百科全書、小学館、１９８５年、２７２～２７３.
２）馬場房子著、「消費者心理学」（第２版）白桃書房、１９８９年。
３）菅原悦子ら著、「生活のサイエンス」、岩手日報社、１９９２年。
４）馬場房子稿、「行動科学的アプローチについて」人材教育、１９９３年、１０２～１０５。
５）馬場房子稿、「Ｂ理論と消費者モチベーション」亜細亜大学経営論集、第２７巻第１・２合併号、１９９１年、２４５～２６１。

シンポジウム

死と再生の現代における意味

企　画

中　村　昭　之

（駒沢大学）

”死と再生”については世界の宗教儀礼や文学、神話、童話 などに数多くみられる。それは極めて多義的である。このシンポジュームでは、この”死と再生”の現代的意義を明らかにしたいと考える。先ず初めに”死と再生”の問題は大きく便宜的に２つの領域に分けて考える事ができる。勿論この２つの領域は重なり会う面がある事をあらかじめお断りしておく。

（１）不死の生死観としての”死と再生”：これは”死と再生”を永遠の生命の希求を現すものととらえるのである。これには以下の５つがある。

１、肉体的生命の永遠の存続を希求するもの；例えば、湯殿山の地中の石室で入定をはたし、ミイラ（即身仏）になった鉄門海上人やキリスト教における最後の審判の日における肉体の復活にみられる。

２、肉体的生命は滅んでも、魂は永久に存在する事を希求し信ずるもの：これは、未開宗教、民族信仰から仏教、キリスト教にいたるさまざまの宗教にみられる。例えば仏教における輪廻転生に見られるように、霊魂の不滅とさまざまな形での、来世における実在の信仰がそれである。

３、自己の生命をそれに代わる限りなき生命に託するもの：芸術家にとっての作品。、母親にとっての愛児など、当の本人にとって永遠に存続する意味をもつもの。

４、現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの：例えば画家が一心不乱に画筆を運ぶ時、その一筆一筆に永遠の生命を感得している。過去や未来にとらわれず現在の瞬間瞬間を全力を挙げて生きぬく事によって生死を超越する禅の修行者などにみられる。

（２）変成としての”死と再生”：これは現在の自己が（夢、イメージや、身体的動作などにおいて象徴的な形で）一度死んでその後何らかの形に変化、再生するもの、変化は、性格、能力、などさまざまにわたる：これは宗教儀礼、通過儀礼、宗教的回心、心理療法などにおいてみられる

１、宗教儀礼：修験道では、死装束で入山し、死を意味する十界修行と言われる修行と儀礼を行い、仏に変身し、すべてを包み込む山中の他界で失われた霊的な生命力を回復する

２、宗教的回心や悟り：一種の態度変化である。これには、漸進的なものと、急激なものがある。禅の悟りを例にとると、坐禅（調身、調息、調心）によって、イメージや空想などの雑念を浮かぶままにし、意識をひたすら呼吸に集中し（一念）、時間の経過と共に、静かな湖面のような無念夢想の状態になる。

更にその静かな水面に石が投ぜられたように波紋が生じ、今までの意識の集中が転化して、新しい身心の状態が開けてくる。それが”悟り”であり、「身心脱落」とか「基調意識」とか「純粋主観」などと呼ばれている。主客合一の体験である。

２、通過儀礼：人間が一生の間に経過する各成長段階ごとに行われる一連の儀礼であり、成人式、結婚式を経過し死に至るまでの間に展開する多くの儀礼が含まれる。未開社会の成人式では、子供は死を象徴するさまざまな儀礼を通過して（子供としての自己は一度死にその後）初めて成人の価値観や行動様式を身につけ、成人として振る舞う事が許される。現代人はこのような通過儀礼を経験しないがしかし、”その「無意識の言語」とも云うべき夢の中で個人としての通過儀礼を体験する。つまり我々は伝承社会の一員として集団的な通過儀礼は行わないが、個人の成長段階において、一つの重大な境界を越えねばならない個人として通過儀礼を必要とする。これらのことを無視してしまった人は、突如として行動化される通過儀礼の原型の犠牲となり、通過儀礼として体験するべき象徴的な死を、現実のこととして迎えねばならない。つまり、自らの命を絶つたり、他の命を奪ったりする危険に落ち込んでいく”という。（河合、浪花）

３、心理療法　：現在の自己が死んで新しい自己に再生する事である。そういう意味では、”大死一番”とか”大我に生きる”と言われる宗教的な悟りと同じである。ユング心理学流に云えば、意識の中心である自我が一度死に、意識と無意識とを一つの全体に統合していく個性化の過程で新しい自己として再生される。

限りなく死に近ずづきその後、蘇生する体験（臨死体験）は最近注目を集めているが、それは厳密には”死と再生”には当たらない。しかし、それを手探りにして死の意味や定義を明確にし、死を乗り越えて再生へと向かおうとする希求を現すものと考える。

J.L.ヘンダーソン（河合隼雄、浪花博訳）1974
夢と神話の世界、新泉社。

シンポジウム

死における自我の「不染汚(ふぜんな)」の働き

中野東禅
(駒沢大学)

I、死と再生の場を整理してみると、1)生物的な死と、2)自我の死に分けてみることができよう。1)生物的な死を契機としてみると、①「死後世界」への再生を期待することによって、②自己存在を意味付ける場合、③死そのこと自体に生存の意味がある場合(目的を持った死)、④他者の死を生き残った者の存在の意味へ転換する場合と言うように分ける事ができる。2)自我の死についてみると、⑤汚れた自己への疑問により、非日常的な体験によってそれを超越して、純粋な自己を再構築する場合と言う事ができる。

II、仏教に於ける「死の現実認識の構造」

死をとうして再生するためには「死」と言う現実をどう受け止めるかが問題である。仏教に於けるそれは、①死は自我にとって矛盾対立したものとしての現実(苦悩としての死ー染汚)、②死は存在の原則としての事実であると言う立場(存在の真理としての死)、③死という原則を受容する純粋体験としての事実(死に照らされ純粋になるー不染汚)、④死と言う矛盾する現実を存在の真実体として背負う現実(仏の命としての死・再生)、と言うようにみることができる。

III、仏教に於ける死後観念の整理

死をとうして再生するという事は、1)死後観念と、2)死後観念によって生きる生き方との二面からみる事ができる。これについては日本的な霊魂観念と仏教の来世観との両面をみる必要がある。日本的な霊魂観念では、①霊魂の来世観は、イ、恐怖としての来世は浮かばれない霊や、地獄観念である。ロ、安心としての霊魂は「ご先祖」になる。②この霊魂と連動する現世は、生まれ変わりや、他の生命と連鎖していると解釈しているようである。

仏教的死後観念は、①迷いの人に対してはイ)地獄と、ロ)天を説く。②悟りの人については解脱を説く。解脱はイ)「あの世への心配がない」と言ったら良いかと思う。ロ)解脱の世界を対象化して来世とダブらせて「浄土」として立てる立場がある。浄土教ではロ)を往相回向とし、イ)を還相回向と言うことになる。

こうした死後観念に対応する現世の見方は、来世を地獄と天とする迷いの人の現世は、苦しみが苦しみを再生する「輪廻」の現世とみる。それに対して解脱の立場の人の現世は、現実を空の心で大切に生き、生に後悔が無い立場という事ができる。

IV、自我の死

愛する家族の死、あるいは自己が死に直面して、その事実の中で自我を超越してどう自己回復するかについて考察してみよう。

こだわりと恐怖の自我で自我を越えることは自己矛盾である。それは、自我の延長上の超越感覚でしかないという事が分かる(染汚の自我)。

従って、汚れた自我が働き出す以前の静寂な状態に立ち戻った所の「自己」(不染汚)こそ真に再生した自己ということになる。出会いとか純粋経験等はこの静寂に立ち戻ったことである。それが存在の現実の真理性を受容する力になる。仏教・禅における「死と再生」は以上のような構造という事ができる。

V、その現代的意味

死と再生を「死の受容」の在り方において考察してみることにしよう。

学生の死についての感想文による調査によると『死を考えるきっかけ』において「直接的な経験」と「間接的な経験」に分けてみると、『死をどう説明するか』の部分では間接的経験者は死を空想と恐怖による観念で一生懸命説明しようとする。しかし、直接的経験者は観念的に説明しようとせず、事実を受容しているという事が分かる。さらに『死の前をどう生きるか』という点では、間接的体験者は「人はいつ死ぬか分からない。だから、あれをしたい。これをしたい」というかたちで自己の願望をのべている。しかし、直接的体験者は「人はいつ死ぬか分からない。だから」までは同じであるが、その後、家族や、恋人、友人などの身近な人を「大切にしたい」と言う表現になる。

以上の事から死という事実を受容する事は自我が壊れて、自己存在が尊いものとして再生すると言う事が分かるのである。

シンポジウム

死と再生の現代における意味

― 宗教人類学の立場から ―

綾部恒雄
（愛知学院大学）

研究の目的　宗教人類学においては、「死と再生」に関してさまざまな角度からの研究が行われているが、本報告では、イニシエーション（initiation）儀礼の中で啓示される「死と再生」のモチーフの分析を通してその象徴的意味を捉え、その現代的意味について考える。

研究方法　諸民族、諸結社のイニシエーション儀礼の中から西アフリカ、リベリアに住むクペル族の「ポロ」と呼ばれるイニシエーション（成人式）とフリーメーソンのイニシエーションを採りあげ、これらのイニシエーションの中にみられる「死と再生」モチーフの意味を分析する。

結果

クペル族の成人式　「ポロ」というのはクペル族の男子が彼らの部族の慣習や信仰について教育を受ける部族のイニシエーションを指す。ポロはブッシュ・スクールで行われるが、ブッシュ・スクールは学齢期の少年の数が十分に揃っていると考えられた時に、同族の長老たちによって村から離れた場所に作られる。仮面をつけた男たちが、村へ少年達を連れて来るように派遣される。少年達の腹に鶏の血が入った袋が巻き付けられる。少年たちを布の上で胴上げしポロの柵内に投げ入れる時、槍で突き刺す真似をする。袋が破れて血が流れる。少年達は鰐の霊によって飲み込まれ、死んで霊界に入ったものと見なされる。ブッシュ・スクールは数週間続き、少年達はこの間に成人男子が知っておかなくてはならぬ部族の倫理、道徳、宗教儀礼などの知識を学び、厳しい訓練を受ける。ポロは最後に行われる吐き戻しの儀礼によって終了する。いったん死んだ少年たちはこの儀礼によって再生するのである。少年たちは水に浸され、新しい名前を貰い、それまでの義務を失い、村に帰るときは自分の親族の人々を忘れたふりをする。少年たちはポロを通過したことにより別人となり、成人として帰還するのである。

フリーメーソンの加入礼　フリーメーソンは世界最大の西欧的秘密結社であり、地中海を中央の海とするいわゆる「オイクメーネ」文化圏に生起した主だった神秘主義思想や象徴を採り入れている。たとえばユダヤの秘教カバラの思想、オシリスの儀礼、グノーシス派、バラ十字団の象徴主義、古代の冶金術などである。英国系の「古式公認スコッチ儀礼」では実に複雑な３３位階のイニシエーション儀礼を創り上げている。フリーメーソンの目的は「人類の道徳的、物質的向上」であるが、加入希望者が通過しなくてはならないイニシエーション儀礼には明らかに「死と再生」のモチーフが見られる。新加入者はまず真っ暗な「反省の部屋」に入れられる。彼はまず闇の世界であてどころのない象徴的な「旅」を続け、恐怖に満ちた経験を積む。旅の間に起こるさまざまな試練は彼に「死」の感覚を与えることを目的としている。新加入者は次いで恐怖に満ちた闇の中の旅から急に光に向かって上昇し、清浄な天使の声と舞の音が響きわたる天界へ出る。「死と再生」の象徴である。

考察　クペル族の成人式においては、適齢期の少年が槍で突かれ鰐の霊に飲み込まれた形でいったん「死亡」した形をとる。ブッシュ・スクールにおいて成人男子になるため割礼を含む修行を経た後、鰐の霊の吐き戻しの儀礼により別人となって「再生」する。フリーメーソンの加入礼では、新加入者は「死」の象徴である闇の世界での恐ろしい試練の旅を経た後、「再生」を意味する光の世界へ上昇する。クペル族、フリーメーソンのいずれのイニシエーションの場合でも「死」はこれまでの自己との訣別であり、試練、修行が課せられる。「再生」はそのような「死」を経た人間がより高い人格をもった別人となって現世へ戻ることを象徴している。

近代化のプロセスは、世俗化、合理化のプロセスであると同時に、古来人間の成長について深い意義をもっていたイニシエーション儀礼が消滅していくプロセスでもあった。現代の我々はイニシエーション儀礼を体験するどころか、その言葉の持つ意味も、存在理由さえ理解できなくなってきている。しかし、明瞭な人間像を欠き、確固とした世界観を持たず、自我の追求に終始している現代の人間の世界が如何に混沌とし、絶望的なものであるかはここに改めて論じるまでもない。「イニシエートされない人」は「永遠の少年」として自我コンプレックスの中に苦しみ、非行その他の反社会的行為に走りがちであることも、最近の心理学的研究が明らかにしてきているのである。

シンポジウム

死と再生の現代における意味――禅心理学の立場から――

恩田　彰
（東洋大学）

1　禅と生死の問題

禅には「生死事大、無常迅速、各宜醒覚、慎勿放逸」と、生死の問題は、待ったなしの一大事であるということばがある。また道元禅師のことばに「生をあきらめ死をあきらむるは、仏家一大事の因縁なり」（正法眼蔵の諸悪莫作）とある。仏教の根本問題は、生死の真実を徹見して、生死の苦悩を解脱することだというのである。同じく「生死の巻」に「生死の中に仏あれば、生死なし」またいわく「生死の中に仏なければ生死にまどはず」とある。生死は生命現象をあらわすが、前者は真の事実すなわち本分（本質）の世界から見ると、生死はないということだ。後者は現象の世界から見ると、生死があるということで、生きる時はただ生きるだけ、死ぬ時はただ死ぬだけ、そこに迷うことがない。現象界の生死の事実は、そのまま本分の世界すなわち空の生死のない世界である。

無門関の第47則に兜率の三関という則がある。この第2関に「自性を識得すれば、まさに生死を脱す。眼光落つる時作麼生か脱せん」とある。真の自己を悟れば、生死を解脱できる。そうなったら、どんな死に方をするかということだ。第三関は「生死を脱得すればすなわち去処を知る。四大分離していずれの処に向ってか去る」で、生死の問題を解決すれば、ゆくところがわかる。それでは死んだらどこへ行くかという問題である。死んだら、どこに生まれるのかという、まさしく死と再生の問題である。白隠禅師にも「死字の公案」なるものがある。自分が死んで、火葬場でこの身が焼かれてしまった時、自分はどこへゆくかという問題である。禅の死生観を示す則に碧岩録55則の「道漸弔慰」がある。道吾が弟子の漸源と二人である家にお悔やみにいった。その時漸源は棺桶を打ってたずねた。「この人は生きているのですか、死んでいるのですか。」道吾は答えた。「生きているとも言わない。また死んでいるとも言わない。」漸源「どうして言わないのですか」道吾「言わない。言わない。」という。本質界から見れば、生死はない。しかし現象から見れば、肉体的に死んでいるが、霊的には生きているともいえる。そこで道吾は生きているとも死んでいるとも言わないのだというのである。禅の悟りの世界では、生死はないから、生か死かの二つではなく、生死一如である。

2　禅の悟りと死と再生

禅のことばに「大死一番絶後に蘇る」といわれるように、「悟る」すなわち仏性（真の自己）に気づくことは、「死んで生まれかわる」ということだ。自己が死にきって、自己のはからいが全くなくなったところから、本当に自他一如の真の自己が働き出てくるのである。これは生命現象のメカニズムに、そのモデルを見出すことができる。有機体の細胞は、常に新陳代謝をくり返している。古いものがなくなり、それに代って新しいものが生まれ出てくるのである。これは生命の創造（生成）の働きを示している。

この死と再生を示す則に無門関14則「南泉斬猫」がある。（南泉和尚は、僧堂の東堂と西堂の修業者が、猫について言い争っていたので、猫をつまみあげて言った。「諸君が何か適当な一句をいうことができたら、この猫を助けてやろう。もし言うことができなかったら、この猫を斬ってしまうぞ。」修業者たちは、誰も言えなかった。そこで南泉は猫を斬った。夜になって、趙州が外から帰って来た。南泉は、昼間のことを趙州に話した。すると趙州は、履をぬいで、頭の上にのせて出ていった。南泉はいった。「もしお前さんが、あの場所にいたら、猫を助けることができたものを。」）　ここで一刀で斬られたのは、猫ではなくて修業者たちである。私たちのいろいろな分別の観念、妄想が出てくる自我の源をたち切ったのである。そして趙州が履を頭にのせて出ていったのは、そこに無心の自由な行動が見られる。すなわち死んで生まれかわった、自由人の創造的な活動である。至道無難禅師の歌に「生きながら死人となりてなり果てて、思いのままになすわざぞよき」というのがある。これは「大死一番、絶後に蘇る」ということで、前半は大死一番、後半は大活現成である。人間は今まで生活していた世界の中で死んで新しい世界に再生する。その場合、肉体の死は一回限りであるが、精神的な世界では死と再生は何回もくり返される。そして人間の生命は浄化され、進歩向上をとげていくのである。一生のうちで大悟数回、小悟数知れずというのは、精神的に死と再生を何度もくり返していることを示すものである。ここに人間の自己創造のメカニズムを見出すことができる。

シンポジウム

日本応用心理学会シンポジューム

「死と再生の現代における意味」

－臨床心理学の立場から－

ホリスティック心理学研究所　白岩　紘子

人間は、生物として身体においては、細胞は絶えず死と再生を繰り返しているのに、心理的には、なかなか死に切るということが難しい。自分への固定化した枠やこだわりから自由になれなかったり、心理的な傷などのために恐れや不安でいのちが疲弊し、窒息状態になりがちである。心理治療というのは、恐れや不安、固定化した自我概念で”いのち”の流れがブロックされた状態に流れを起こすことである。

そういう意味で　死と再生というテーマは、まさにセラピーの課題そのものであると感じている。しかも、現代という時代は、暮らしは豊かになり、文化的な環境も整って、言論の自由も保証されている世の中になってきているのに、漠然とした恐れや不安に怯える人たちは、確実に増えてきている。それぞれの自我概念の枠の中で行き詰まって、いのちの流れが滞り窒息状態にいるいる人たちは、何を求めているのだろうと思って触れていくと、まず、しっかり行き詰まるところまで行きたい、死にきるところまで行きたいと指向しているように思えてならない。死に切って再生することをほんとうに求めているように思える。それは、”いのち”がいのちとしての本文を発揮したいと切望しているといえる。

そこで、　クライエントたちは、どのように心理的な死を体験し再生へのプロセスをたどろうとしているのか、私のカウンセリングとフォーカシングによるセラピーの中から取り上げてみたい。

事例１：「死にたい」という訴え　３０代女性－－－結婚後に不安が表面化して退行現象を起こして周囲の人たちを巻き込んでいる。アメリカの大学に１年間いくことになり、その後も向うに永住したいということが浮上してきた。夫は、１年間子供を連れていくことに関しては認めるにしても、将来自分もアメリカに住むことに関しては確約できないと初めて自分を主張した。夫は自分の思い通りにすべきである。それは当然なことという思い込みに亀裂が入ったからパニックになって、死ぬしかないとなった。結局「しがみついている人が居なかったら私は生きていけないんだ。」というところまで話し合いができるようになった頃には、死にたいということばは聞かれなくなっていた。継続中のケース。

例２：「イメージによる死の体験」－－親を嫌悪し断絶状態、時々うつ状態になり死にたくなる４０代女性「死んでみるという体験」を提案－－イメージで現世の全ての煩わしいことはもう終わって死の床にいるという感じに充分に浸って、その感じをことばにしてもらった。その体験から、死にたいと願望していたことは、やすらぎを求めていたんだということを実感した。自分をもっと休ませて許してやろうという気持ちがでてきた。

フォーカシングでは、自分が死ぬ儀式をイメージで浸ったり、お墓のイメージがでてきたりする。それは、その人にとっての自己概念や囚われの何かが終ったということを意味する。

例３：「ブラックホールに入りたい願望と恐怖」－－４０代女性－－フォーカシングで、真っ暗な穴が見えた途端に恐いといって中断。（漠然とした死への恐怖や自分の感情や情動への恐れなどと結びついている様子だった。）再びフォーカシング。真っ暗な穴はよく見るとマンホールの穴で蓋がしてある。少し安心。穴の中にいるイメージに変わった。穴は洞窟。恐くない。途中で戻って洞窟を背中にして横たわっている。入りたい時はいつでも入れる。外は明るく、心地よい風が吹いている。次のフォーカシングで真綿にくるまった繭という安心で心地よいイメージに浸った。居ても立っても居られない不安な状態は落ち着きを取り戻した。

フォーカシングでは、真っ暗な穴、トンネルなどのイメージがでてくる。これに入って抜け出る体験も、心理的な死と再生のプロセスである。

次に、生まれ直し、再生の体験を胎児のところから出生までをリアルに体験する場合の事例。

例４：「出生時再体験」－生まれ直し体験－女子学生。フォーカシング：壺の中にじっとうずく待っている自分「外界はずいぶん眩しそう。何だか恐い。」イメージが壺から雫に変わる。雫は柔らかく、肌に馴染む素材で体温があるようにやさしさ、柔らかさのあるもの。「居心地がよくずっとこうしていたい。」外界の何ものかが雫の先端をつかみ振り回す。雫の底は柔らかく破けそう。「恐いよう、まだ出たくない。」雫の中で必死に落ちまいと踏張る。何ものかが去った。柔らかく弾力のあった雫はすでに堅くなり始め、先端に手を差し入れようとしても時既に遅し。出られない。焦る。悲しい。ふと暖かく大きな手があれば雫は溶けると思う。しかし、手が見つからない。やっと何者かの手が雫を溶かしてくれるが、からだにまとわりついている薄い膜は自分で破くしかない。なんてことなく破ける。やっと雫の外にでる。

ワークショップの後、母に自分の生まれる時のことを尋ねてみた。「予定日前に破水し、病院に行った時には、もういきむことも出来なくなって誘発剤を注射して生まれた。へその尾が首に２回も巻いていて、あと少し遅れたら危なかったと言われた。」

このようなリアルな子宮の中からの生まれ直し体験は、まさに精神的な再生体験である。

シンポジウム

留学生問題について ―受入れ体制の改善について―

企画・司会　松崎　巖
（共立女子大学）

遣唐使の時代はおくとしても、わが国は明治以降、留学生についてはもっぱら送り出し国であった。例外としては明治期と第二次世界大戦中にアジア諸国から留学生を受入れた歴史があるが、これについては十分な研究がなされておらず、留学生受入れのノウ・ハウについてはほとんど蓄積がない。そのわが国も戦後五十年、高度成長をとげ、多くの留学生を集めるにいたっている。いわゆる「留学生十万人受入れ政策」の実施によって、文教予算の中でも留学生関連予算は優先順位を与えられ、その伸び率は著しい。国立大学では来日する留学生に日本語の基礎教育を行ない、カウンセリングをはじめとする各種のサービスを提供する留学生センターが次々と設置され、そのスタッフ定員（教官）は他部局の定員削減を尻目に増大している。私立大学においても同様なサービス部門を設けるばかりでなく、国際学部という形で、留学生、帰国子女と日本人学生が共に学ぶ受入れの形態をとるところも少なくない。

しかしながら、わが国の留学生受入れ政策の重点は相変わらず施設やスタッフ定員のといったハードな部分であって、施設の中でどのよなサービスを行なうべきなのか、どのようなトレーニングを受けた専門家が長期的視点のもとに養成されるべきかというようなソフトの部分についてはほとんど何の手当てもされていない。例えばアメリカであれば、留学生問題についてはクロス・カルチュラルな視点からの心理学的研究の蓄積があり、異なる文化をもつ人々を対象とするカウンセラーが養成されている。また、教育学の分野では、国際教育学、比較教育学を専攻し、留学生の母国における教育歴と留学先の専攻の対応、外国語教育、教育内容のギャップの問題等についての研究・教育のトレーニングを経た留学生専門家が養成されている。文化人類学の研究蓄積の上に異文化間交流の専門家となるものも少なくない。

実はわが国でも、この複合領域の研究・教育は戦後長く行なわれて来ており、活用さるべき人材も育って来ている。ところが、わが国の大学では留学生関係の人員増はこの部門の仕事と必ずしも必然的な関係をもたない人々を配置する傾向がある。新しい定員は各セクションのセクショナリズムに利用され、留学生関連施設には留学生問題にはほとんど関心をもたず、個人本来の専攻の研究のみに専念しようとする人々によって占められることが少なくない。部局によっては専攻や意欲にかかわらず、専門ポストの空き待ち椅子に利用するケースも見られる。

施設が拡充されて行っても、スタッフの実態がこのような状況であるとするならば、来日する外国人留学生は、きわめて不本意な低効率のサービスしか受けられないことになる。

大学はすでにもっぱら研究だけを行なう機関ではなくなっており、そこでの教育・サービスの機能はますます高まってきているにもかかわらず、教官スタッフの採用・昇進はもっぱら専門の研究業績によって決定される。アメリカの大学におけるように教育実践、体育、舞踊等の実際的領域については、研究業績ではなく、実践・教育業績で評価を行うように改めることは、まだ困難であるとするならば、少なくとも留学生問題研究を一つの研究業績とし、留学生関係スタッフの採用・昇進にあってはこの領域関連の学習経歴と研究業績を要求すべきではないだろうか。留学生サービスは腰かけ仕事で、研究はこれとは無関係で、常にもとの専攻の空きポストにばかり目が行くような人々を、本来の留学生関係の仕事を専門として行なうべく教育を受け、かつ研究を行ない、その職務に専念する人材に置きかえて行かない限り、わが国の大学における留学生対策は成功するはずがなく、留学生たちは大学における留学生のためのサービス機構に大きな不満をいだきつつ帰国する事態は改まらないであろう。留学生政策におけるハードの面－財政・施設・設備・定員－については大いに改善されつつあるが、留学生に対してどのような人々が、どのようなサービスを提供すべきかについての調査・研究と具体策の追求が切なる課題としてつきつけられているのである。

シンポジウム

留学生問題について　－異文化交流の諸問題－
受け入れ側の立場から

金　子　尚　一　（共立女子大学）

はじめに

私の場合、これまでの四十年間、ほとんど切れ目なく異文化に属する人達との接触・交流が、授業を通して続いている。後半の十七・八年間はアジアの人達とのそれであり、前半の二十二・三年間は西欧文化（含米国）圏に属する人達とのそれであった。ここでは、ある意味で、日本と非常に深く係わっている韓国・中国・豪州の人達が日本との関係で持つ問題の具体例を、私に与えられた立場からいくらか提示して考えてみたい。（金子は心理学には全くの素人です）

Ｉ，韓国人の場合

ａ.韓国・北朝鮮で生まれ、その文化の中で育った人なら、誰でも知っていて、その誰からも偉人とされ、非常な尊敬を受けている論介(ﾉﾝｹﾞ)と呼ばれる女性がいる。この女性は妓生(ｷｰｾﾝ)、日本でいう芸者であり、ノンゲは日本でいう源氏名であり、実名は不明である。1592年、秀吉の野望から発した命令により、秀吉の軍勢が第一回の李氏朝鮮を侵略した際、最後まで頑張っていた晋州(ﾁﾝｼﾞｭ)の町が秀吉軍の猛攻で陥落した日の夜の事である。秀吉の部将達が晋州城で祝宴をはった時、その席にノンゲも侍らされていた。この時、酔を感じていた一部将をノンゲは外に連れ出し、城を巡る様にして流れる急流に突き出している巌頭に立つや、彼女は、この部将を抱きかかえ、死出の道連れにして、身を躍らせて、急流の中に姿を消したのである。この部将は、大衆レベルの知識の持ち主の間では、加藤清正であると信じられている事が珍しくないが、どうやら、日本では、当時、剣客として有名であった毛谷村六助（歌舞伎のある出し物に、今も主人公として登場する人物）であるらしい。これは非常に際だった例の一つなのかも知れないが、彼の地には、この様な悲しい話が無数にあって、そういう事を聞かされながら育って、しかも私達の目の前に立っているのが生身の韓国人なのである。

ｂ.食事の際、日本でも、中国でも、両手を使うのが当然だが、朝鮮半島ではそうではない。彼の地の人々は片手で食事をとるのが礼儀に適ったやり方で、両手を使うのは無教養で、乱暴な人間のする事だと教えられて育つ。この種の事についての日本人の無知も文化摩擦の種となる事がある。

Ⅱ，中国人の場合

Ｉで述べた様な日本人として頭をあげられない悲しい話は中国にもたくさんあるが、ここでは、それとは別種の問題をとりあげる。

ａ.日本では、大変な昔、中国文化が作り出した漢字を取り入れた。従って、表面的に両国は同文である様にみえる。両国人もそう思いやすい。しかし、この事がお互いにあいてを十分に学習させない様に機能し、相手を誤解させる様に働く事が多々あると、私としては、思っている。ここでは、中国人学生の場合だけを取り上げる。来日した中国人学生の中には、漢字が多用されている日本社会を見て、日本人には言わないが、日本文化は中国文化に従属していると思い込んでしまう学生がいる様である。優秀な学生の場合、この種の捉え方が間違いである事に早く気づき、そんな考えから解放されていく様ではあるが。

ｂ.中国人は私達から見ると決断が速く非常に気が短いのかなと思われる面を見せる事も多いが、また、恐ろしく気が長い、とても適わないと思わせる面もあると同時に、他国人には、どう考えたらいいのか解らないという面をみせる人もいる（例 豚小屋と万里の長城）。これらが理解できる様になるのも、今後の私達の課題である。

Ⅲ，豪州人の場合

豪州は英国文化が骨組みの中心になっている国だが決然として英国とは異なる国である。大抵の日本人には豪州は優雅な行楽地としか見えない様だが、困った事である。二例　ａ.日本との戦争経験は豪州史の中で最大の国難。　ｂ.非常に知日度、親日度が高く、公平に多面的に問題を見られる人が多い社会。

Ⅳ，普通人が日本人に対して持つ感じを理解しておく必要性

(1)朝鮮半島の人の場合

①文化は我々から日本に流れたのであり、その逆ではない事を日本人は知らないのかと言う感情の存在

②日本は、狡猾・残虐な人間によってつくられている国だ［年齢の高い人は被支配者としての長い、筆舌に尽くせぬ経験が忘れられない。］－留学生にも無意識のうちに上記の感情があって、それが不意に表面に表れる事がある。

(2)中国人の場合（戦争の問題は別として）

一体となっている二側面を持ついくつかの感情の存在がある。日本人は、ａ礼儀正しく静かな人達だ←→ウラ・オモテのある人間だ　ｂ几帳面である←→ずるがしこい　ｃ物事に対する配慮が細かい所まで行き届く人達だ←→融通がきかなくて、人情味に欠ける人間だ

(3)西欧文化の人達の場合

問題に対する態度がアイマイだから好きになれないという人達がいるのは事実である。

シンポジウム

留学生問題について
—留学生の立場から—

谷 峪
（東京大学大学院）

1、今回はおもに「外国人留学生」という異文化を背負った人と日本人との関わりを糸口として、自分とは異なった文化・社会・価値観などを持つ人々をどう理解し、また、留学生は日本人とどのように違い、あるいは同じであるのかについて考えてみたいと思います。

2、そのために、留学生の立場からエミック（Emic）の視点で、より一般性を持つ問題、すなわち文化（として総称される社会的環境）と心的プロセスとの間のダイナミックな相互規定関係の性質を明らかにするための手段として日本での留学生たちの「エピソード」をあげながら、コミュニケーションの中での問題を考えて見たいと思います。

3、日本に来る動機に関しては、大体以下の八種類分けられます。①日本には興味がある。②日本語を勉強するため。③指導教官が有名であるから。④文部省の奨学金がもらえるから。⑤日本語専攻であるから。⑥アメリカに行きたかったのに、ビザがおりなかった。⑦留学さえできれば、日本でもかまわない。⑧マネー。

このように留学生の留学目的はさまざまであることはっきりしているのですが、やはり国とか、個人の背景とかにより、個人差が大きいです。一般的に言えば「日本留学は一番理想的である」と思う人は極少ないです。それはなぜかと言うと、まず「留学生」と「就学生」という言葉から見てみます。

留学生　大学院、大学、短期大学、高等専門学校。

就学生　高等学校、盲学校、聾学校、養護学校の高等部、専修学校の高等課程か一般課程、各種学校。一九八八年末に、上海で起った就学生騒動。

在留期間更新の違い。医療費補助制度の違い。奨学金を受けるチャンスの違い。

このように見てくると、留学生と比べて、就学生の場合は生活の困難が多く、また、来日の目的も極めて多様であると言えましょう。

4、留学生問題を考えている時、留学生にとって一番大きな問題は日本語の問題ですが、これは言語問題だけではなく、日本人の外国人留学生に対する態度の問題でもあります。自分たちと異なるもの、見慣れないものには誰しも不安をいだきます。それとは関わり合いたくないと念ずます。しかし、考えてみれば、相手もそう思っているかも知れません。

こういうこともありました。あるF国から来た留学生は、三ヶ月ぐらいたって、やっと生活にもなれてきました。私と同じ学生寮に入ったのですが、まわりは各国からの留学生ばかりで、寮はきれいだし、住み心地はいいですが、日本人と親しくなれそうもありませんので、日本語が専攻の彼女にとっては、あまりよい環境ではないと思って、つい、日本人の家に下宿しました。初めて部屋を見に行ったとき、下宿先の奥さんは、彼女の日本語が「とても上手で、びっくりした」と言いました。彼女は「四年間勉強しましたが、当然だと考えていました。しかし、日本に来て、日本語をほめられたのは、内心、うれしかったですよ」と言いました。その後、彼女は寮に遊びに来て、また次のような話をしてくれました。「この間、あるパーティがあって招待された。そこの会場で出会ったどこかの会社のおじさんが、私の日本語を聞いて、目を丸くして「いやぁ、日本語がお上手ですね」と、まるでイタリア人のするような大げさなジェスチャーです。ところが、私のそばにいる日本語がたどたどしいマリアさんにも同じ感激の身ぶりをして見せました。私は逃げました。」

この驚いたり、感心したりものは鎖国の時代の名残なのかもしれません。日本人が外国人の日本語をほめることは二点に分類(1)お世辞や挨拶。(2)外国人には本当には理解できないと思い込んでいる。(1)の結果は受けられるか、あるいは戸惑うか。(2)の結果は日本が離れていく気がすると嘆息する。

5、本当に日本の大学で勉強したいと思う人を留学生として受け入れるようにすること、と同時に、そのような留学生の生活上の困難をできるだけ小さくしてあげるようにすることは、今後の日本の留学生問題の大きな課題であると思います。

6、留学生カウンセラー、留学生担当教職員・専門職員の養成と配置、留学生と地域社会との交流をはかる自治体職員の養成、良質の日本語教員の養成と配置、日本語教授法と教材の開発などにも考えなければなりません。

シンポジウム

留学生問題について
－異文化交流の諸問題－

依田　明（横浜国立大学）

私がシンポジウムの話題提供者に選ばれたのは、中国人留学生と協力して日中共同調査を行い、それなりの成果をあげたためと考えている。私たちはこの研究を、本格的な日中比較研究のパイオニア・スタディと位置づけている。今後、すぐれた日中共同研究が行われることを期待しているので、まずこの共同調査がどのような経緯で進行したかを報告する。その後に、留学生や異文化交流の問題点を指摘したい。

本格的に留学生の指導を始めたのは、1990年中国の黒龍江大学日本語科を卒業したMが大学院に入学し私が指導教官になってからである。彼女は積極的な性格で、この年の夏休みに上海の華東師範大学心理学系を訪問し、繆小春教授、劉金花助教授の指導を受けた。その時、繆教授から私に華東師範大学で講義をしてくれないかという要請があった。

私は1987年、ISSBD Satellite China Conferenceに出席し、北京、南京、上海を訪問している。当時、中国では「ひとりっ子政策」が推進されていた。中国の子どもたちへの関心もあったので、講義をすることにした。90年、10月に上海にでかけた。私たちが開発し発達科学研究教育センターから刊行された、幼児の性格検査である「こどもテスト」を持参し、繆教授たちとの共同調査の可能性を検討した。その結果、横浜市と上海市で「幼児の性格形成と母子関係」に関する調査を行うことになった。

帰国後、ただちにMを中心に大学院生、学部生、中国人の研究生、それに埼玉大学の清水弘司さんにも加わってもらって研究チームを編成し、精力的に調査の準備を開始した。上海側とは電話、ファックスで緊密な連絡をとった。91年 7月、上海で「こどもテスト」の予備調査を行い、日本で作られたテストであるが中国でも使用できることを確認した。そして、調査に関する最終的な打ちあわせをした。

91年10月から92年 2月まで、横浜市と上海市で幼児とその母親、それぞれ 600名を対象に調査が実施された。「こどもテスト」は個人検査であるので、訓練を受けた大学院生、学部生が幼稚園、保育園にでむきテストをした。

調査が終了した92年 3月、結果の処理の意思統一のため、上海を訪問した。この時は統計処理とコンピュータの知識を持った大学院生数名に小型コンピュータを持参させ、同道した。この調査の一部がMの修士論文となった。

92年 4月、RとSが大学院に入学した。彼女たちは北京の出身であった。夏休みに、北京市で上海市とまったく同じ調査を行った。この時は、中国科学院心理学研究所の荊其誠教授たちの指導をいただいた。この結果の一部が、RとSの修士論文に使用された。

これらの調査の第一次分析の結果は、93年末に刊行された家庭教育研究所が発行している「家庭教育研究所紀要16号」に 6本の論文で発表された。

この調査のために、私は90年から95年まで 6回中国を訪問している。そしていくつかの大学と学会で 6回講演し、 2つのシンポジウムで発表している。留学生の出身国に関心と興味を示すことが、留学生の信頼を強めたと考えている。また、共同研究者である繆氏を93年に、劉氏を94年に横浜に 1週間ほど招聘した。私たちが上海でお世話になったのであるから、当然の返礼である。

この国際的共同研究を実施してみてつくづく感じたのは、個人的な人間関係がいかに重要かということであった。個人的なつながりと信頼感がないと、共同調査をスムーズに進められない。

とくに中国との共同研究で問題になるのは、両国の貨幣価値の相違である。共同研究といっても、実際は研究費は日本側で用意しなければならない。いくつかの財団から研究助成金を頂戴したが、すべての費用をまかなえない。

つぎに、言葉の問題。今回は留学生たちが完璧に通訳を果たしてくれた。今後は英語による意思の疎通が重要になる。留学生全体を考えると、漢字文化圏以外の国からの留学生にとっては日本語の読み書きの学習は、非常な負担となる。英語による教育ができるように、教官も努力する必要がある。

日本と出身国の文化の違いの認識については、留学生自身の努力に期待している。私としては、できるだけ日本人大学院生、学部生と親しく接触する機会を提供している。

さらに、留学生専用のカウンセラーの配置も必要であると考えている。

研　究　発　表

一般・原理－１

精神的健康としてのブッダの涅槃

－修行の目標から－

○加藤　博己　　　　　中村　昭之
（駒沢大学大学院人文科学研究科）　（駒沢大学文学部）

［目的］筆者は精神的健康を治療，予防，増進の３つに分類し，増進とは何かを明確にするために，各種方法による精神的健康状態を個別に提示（内省や測定）し，比較することにした。今回は，その第一段として，昨年の日心での発表に続き，身心一如の坐禅により得られる精神的究極状態であるブッダの“涅槃”を，修行の目標から明らかにし，精神的健康状態の一基準を作成せんと試みた。

［方法］（使用文献）Samyutta-nikaya, vols.1-5, Pali Text Society（パーリ語）の邦訳である，高楠順次郎監修『南伝大蔵経』（大蔵出版）と増谷文雄訳『阿含経典』（筑摩書房）の２点の相応部経典に該当する部分を使用した。

（手続き）『阿含経典』を何度も通読し，ブッダ自身の目標，並びにブッダが比丘に示した目標が述べられている経を取り上げ，比較検討した。なお，検討の際には，自説を肯定するのに都合のよい経のみを抜粋することのないよう注意し，かつ，目標が明らかとなる前に，何度も『阿含経典』を通読し，該当する部分を先に取り上げ，その後に検討に入った。

［結果］ブッダ自身，並びにブッダが比丘に示した目標は，以下の通りであった。

まず，ブッダ自身の目標は，「老いと死の苦しみ」つまりは，この世間の「苦」からの出離であることが明確に述べられていた（相応部経典一二，一〇）。

次に，ブッダが比丘に示した目標は，４種あった。１つ目は，「生・老・死・愁・悲・苦・憂・悩」といった，「この隙間もない苦の集積をなくすることを知ろうと」することである（同二二，八〇）。これは，ブッダ自身の目標と合致する。

２つ目は，「貪欲・瞋恚・愚痴の調伏を究極の目標となす」とブッダは言う（同四五，五六）。

３つ目は，目標を問われたならば，「われらは，貪欲を離れんがために，世尊のもとにおいて清浄の行を修するのである」と答えるがよいと，ブッダは言う（同四五，四一）。

４つ目は，「家を出でて出家するものは，すべて，この（苦の聖諦，苦の生起の聖諦，苦の滅尽の聖諦，および，苦の滅尽にいたる道の聖諦という）四つの聖諦を，あるがままに，はっきりと理解せんがためである」とブッダは言う（同五六，三）。

以上をまとめると，ブッダの目標は，「四聖諦を，あるがままに，はっきりと理解するため」，「苦から出離するため」，「貪欲を離れるため」であると言い換えられる。そして，その究極の状態を涅槃（貪欲・瞋恚・愚痴の調伏）と呼ぶ。

［考察］今回の経典の検討により，ブッダは，修行の目標を簡潔に説いていることがわかった。今回の結果と，涅槃自体を調べた結果を総合し，精神的健康という観点からみるならば，究極の涅槃の状態は「生・老・死・愁・悲・苦・憂・悩」といった様々な苦しみ，そして，「貪欲・瞋恚・愚痴」のない状態であると言える。またそれは，「すべての意志は停止され，執着するところなく，心が解放されて自由自在となり，心の動揺がなくなり，寂静にして，安楽に住し，充ち足り，恐怖せず，煩悩を離れて，苦より解脱した（最高智の）状態であり，「静けくまた，つねに安らかに眠る」ことができるという。

（目下の課題）今回明らかとなったブッダの涅槃を精神的健康状態の一基準として，さらに明確に位置づけるために，涅槃の境地の段階の有無や，涅槃にいたるまでの段階状態と，どのような段階を，どの位の期間を経て，その境地にたどり着くのか，といったことを調べる予定である。

また，ブッダが，究極の“涅槃”への道（方法）を悟った時点で，既に涅槃に達していたのか，それとも達していなかったのかという，悟りと涅槃における時間差の有無も調べる必要がある。

（展望）上記の手順により，ブッダの“涅槃”が，精神的健康状態の一基準として明確になれば，他の方法による精神的究極状態を明らかにするごとに，どのような方法をとると，どのような精神的健康状態に至るかということが明確となる。他の方法とは現時点では，仏教におけるブッダ以外の者の修行法ヨーガ，気功法，太極拳等の姿勢を整え，呼吸を工夫した東洋的行法である。

また，ブッダの言う“涅槃”と似たような精神的状態にある者，または，涅槃に至る途中段階にあると思われる者の生理的指標をとったり，質問紙を用いたり，詳しい内省報告を得るという方法により，さらに詳しく精神的健康に関する知見が得られるであろう。

参考文献

加藤博己　精神的健康としてのゴータマ・ブッダの悟り　日本心理学会第５８回大会発表論文集　1994

問答法録音聴取後の人物評定

齋藤　幸一郎
（常磐大学）

【目的】

これまでの心理学の歴史において、観察法として正式に話題にされてきているのは、外部観察法と内部観察法すなわち内省法とであるが、私は、1979年頃、われわれ人間が持ちあわせている共感能力といったものをも観察法として生かして用いることができるのではないかという発想を抱き、その後、第３の観察法として共感的観察法という名の観察法を提唱してきている次第である。

ところで、本実験の目的は、その共感的観察法の補助手段のひとつである（と私が考えている）ところの問答法ともいうべき方法の、観察法としての有効性を検討するところにある。つまり、実験者とあるひとりの人物との間での問答法のプロセスの録音を聴取した被験者群と、録音を聴取せず、ただ、その人物が回答した一種のＳＣＴ（文章完成法検査）の結果のみからその人物についての評定を求められた被験者群とで、果たして、前者の方が後者よりも「正しい」評定に達しているかどうか、を調べようとするものである。

【方法】

１）ＳＣＴの実施――Ａ君という大学院修士課程在学中の一人の女子学生に、各項目どれも「人生とは」という冒頭語に続く２行分の記入スペースが設けられた２０項目からなるＳＣＴ形式の用紙を手渡し、時間制限なしで、冒頭語に続けての自由な文章を記入してもらった（所要時間25分であった）。

２）問答法の実施――Ａ君と実験者（私）とがテーブルをはさんで着席し、Ａ君本人が記入したＳＣＴ回答を話題として、できるだけ自由かつ気楽な雰囲気を作りながら、問答法による面接を行なったが、その問答のプロセスは、終始、テープ録音された。

３）人物評定用紙の作成――上記ＳＣＴ回答のコピーを15名の学部男女学生に配布したうえで、上記問答プロセスの録音テープを再生して（前後の付随的な会話部分を削除した32分間）聴かせ、聴き終わった後、このＡ君という女性についてどのような印象を持ったか、その人物像を、配布された横罫用紙に自由に記述してもらった。このようにして得られた記述内容の中から、実験者である私の判断で、Ａ君の姿をよく示していると思われる１３箇の特徴を抽出し、それぞれの特徴と同一方向（２段階）、反対方向（２段階）、ならびに中間段階を示す計５段階にわたる選択肢をもった１３項目からなる評定用紙を作成した。

４）人物評定のデータの収集――教室の場で、実験群（117名の男女学生）の場合、前記ＳＣＴ回答のコピーを全員に配布した上で、それを見ながら前記の録音テープ（32分間）を聴いてもらい、聴き終わった直後に、前述した人物評定用紙を配布し、Ａ君について評定してもらった。他方、統制群（66名の男女学生）の場合は、録音テープを聴かせることなく、ＳＣＴ回答のコピーと評定用紙とを配布し、ＳＣＴのみの材料からＡ君について評定してもらった。

【結果と考察】

各評定項目における選択肢の選択分布に関しｔ検定の結果、実験群と統制群との間に５パーセント以下で有意差のあったものは１３項目中９項目あり、したがって、有意差のなかったものは４項目であった。

まず、有意差のなかった４項目は、「不安が多い人かどうか」「楽観的か悲観的か」「興味が浅く広いか狭く深いか」「情緒的な人か知性的な人か」であったが、有意差がなかった理由としては、これらの特徴については、ＳＣＴでの20箇の記述文が与えた印象と問答法の32分間の録音が与えた印象との間に大した差がなかったからではないかと思われる。

他方、有意差のあった９項目とは、「自分の意見がはっきりしている人かどうか」「依存的な人か自立的な人か」「現実主義的か理想主義的か」「能動的か受動的か」「なりゆきにしたがう方かその反対か」「悩みの持ち主かそうでないか」「内向性の人か外向性の人か」「対人的興味が強いか対物的な興味が強いか」「決断力のある人か慎重派の人か」であったが、これらの項目への選択傾向に注目すると、特筆すべき結果が見出された。すなわち、これらの項目で示されている人物特徴の場合、統制群における選択分布傾向よりも実験群における選択傾向の方が、ひとつの例外もなく、実験者である私が予め与えてあったＡ君についての判定の方向へと近づいていた、という事実である。

以上の結果は、問答法録音聴取ということはそれだけでも共感的観察の客観性を高めるのに役立っていたのだということ、を示しているのである。

生態学的心理学の方法による犯罪発生場面の基礎的研究

○細 江 達 郎 ・ 長 澤 秀 利
（岩手大学人文社会科学部） （岩手県警察本部）

問題：犯罪心理学は主として犯罪をした者の資質の探求を行なってきたが、これは犯罪研究においては片務的である。人がどのような場面で犯罪を行なうかという発生場面の研究が対応されなければならない。社会科学では外的状況は規範とか役割概念に留まり、物的環境は扱わず、また「環境科学」では物的環境が中心であって、人的側面はそれとの関係で位置づけられる。本研究はこの基本的問題点に対応するために、個々の犯罪行動の具体的な生起に焦点を置くことができ、かつ行為者と状況の両者の出会いを動的に把握可能な生態学的心理学(Ecological Psychology)の方法（R.G.Barker,A.W.Wicker)により犯罪発生場面にアプローチしよう とするものである。そのことを通して、昨今話題となる地域安全活動やコミュニティーポリシングの寄与への基礎的展望を得ようとするものである。

目的と方法：生態学的心理学は人的構成要素と非人的構成要素を包括した行動セッティング（Behavior settings：ＢＳ）の枠組みが中心となる。そこには一定の行動パターン（定立型）が存在し、これを挟んで人間的要素と非人間的要素は類似形態的な対応をしている。犯罪行動も、類似形態がその行動の生起から終了までの中の随所に組みこまれることになるが、行動全体としては類似形態的な調和がとれているわけではない。ＢＳはこの不調和を自己制御する能動的システムでもある。自己制御システムは行動を感知し、その行動の適切性を判断し、不適切でない場合、これを修正あるいは排除するメカニズムを持っている。犯罪が生起する場面はこの自己制御システムのいずれかの不全という視点からみることができる。本研究ではＩ県Ｍ・Ｈ市の犯罪発生場面（常習窃盗犯の対象地域・家屋 、及び自転車盗頻発地域）を対象にして、犯罪発生に係わるＢＳ、定立型及び非定立的行動、類似形態とその欠如、自己制御システムの作動過程を観察法等によって明らかにしようとするものである。さらに、犯罪者の側の質的差異と制御システムの作動との関係を通して、犯行者と状況の動的対応の基礎過程の解明を目指すものである。今回は予備調査の中で明らかになった、この方法の犯罪研究への可能性について報告する。報告では軽微とされるが頻発する自転車盗（場面誘引的でかつ初発が多い）を対象として検討する。

調査結果：自転車窃盗の犯罪発生場面の特徴を概観すると以下のようなことがいえる。被害者（抑制者）がいない場面で犯行を行う潜行型が中心となる。被害物の存在＋被害者の非存在＋抑制者の非存在といった夜間や昼間閑散期が犯行機会を増大することになる。しかもこの状態の確認は、戸外という犯行場面の特徴から（空き巣等とことなり）容易に可能であるといえる。不審者と推定されないような、通常の接近、通常の離脱が可能である。逃走経路も通常な行動経路の中に自然と入ることができる。つまり通常な行動と平行して発生することになる。行為者の内的緊張（バスにおくれた。雨がふってきた。自分も盗まれた。）と場面誘引的状況：無施錠、放置、乱雑、閉鎖的な構造、孤立的におかれた被害物：との出会いが犯行を生起させる。しかし場面誘引と積極的な場面形成（破錠）も並存している。多様な自己制御システム（監視員巡回、登録標識の識別、駐輪箇所の指定、駐輪の整理、施錠の補完）への努力がなされているがその効果が必ずしも十分とはならない。

考察：①生態学的心理学の視点の意義；犯罪防止における環境整備の重要性、特に初発非行での場面誘引的状況の統制に効果的。②ＢＳの視点から見た犯行発生場面；人間的と非人間的な二つの構成要素があり、二つの構成要素は類似形態的である。多数の自転車の集合：多数の人、コーナー：隠れる、乱雑に放置された自転車：乱雑多様な行動、閉鎖構造：隠蔽行動、といったように、物的要素は類似な行動を誘発する。③定立型の行動と犯罪：犯罪が定立型と類似な行動で自然に行われ、不審に思われない。自然な接近、自然な犯行、自然な離脱が可能となる。通常起きない非定立型の行動でも犯行は起き、しかも場面形成に進めばその可能性は大きくなる。④自己制御システムの働き；本来自転車の置かれたところにはこの作動は少ないが、多くの試みがなされている。感受システム（センサー）はないか不完全、執行メカニズムや維持メカニズムは遅れて作動することが一般的である。

今後は駐輪場といった犯行の具体的場所のレベル、街区レベル、さらには都市レベルに対応しでまた同様な場面誘引的初発非行から、場面形成的な犯罪を対象としてこのアプローチの可能性を探究していく。

教育評価の研究（その35）

――生涯学習時代に於けるあり方をさぐる――

岸本 英男　　（大泉会四期会）

○ 標題設定の理由と研究経過

今日、教育の荒廃が叫ばれて久しい。特に学校教育に於て、その教育力の低下が憂うべき状況にあると指摘され、その対策が朝令暮改的にジャーナリズムをにぎわすが、事態に改善のキザシはなく、悪化の一途をたどりつゝある。今年は戦後５０年、日本は後発資本主義国の焦りから国策を誤り(1)ヒトラームソリーニの軍国主義に眩惑された軍閥の野心に手を貸したあげくの有史以来、未曾有の敗戦。焦土と化した敗戦国から、漸く経済大国と称される程の復興をとげたとは言え、同じ敗戦国ドイツとは戦後処理に雲泥の差がありそこから両国の教育問題――ひっきょう、それは世界観価値観ひいては教育評価観にリンクして、やがては未来を切り拓く青少年の可能性に対する政策的スタンスが問われてくる。――に顕著な差が見えてきた事になろう。その原因を考えれば、５０年前の両国の敗戦時の教育改革に一因があろう。日本ではアメリカ合衆国の教育使節団による自由主義民主々義の基礎的理念と行政機構の抜本的改造が勧告され、教育基本法の制定とその民主的な運営が今日の教育文化の基礎をきずいた事になるが、ドイツでは、ナチズムというヒトラーの独裁体制を排除しただけで、既に西欧自由主義民主々義体制の洗礼を受け、高度の文化国家を形成していた教育的風土は、そのまゝアデナウァー首相(2)――彼はチャコールグレーのモーニングで有名であり、日本では吉田茂元首相の紋服羽織袴雪駄ばき。それぞれになぞらえて、両国復興のシンボルとされたが、吉田は「臣茂」としての価値観。それに対してアデナウァーはキリスト教民主同盟、自由民主党、ドイツ党の三党連立内閣の首相として左右のイデオロギーを止揚し分断された東西ドイツの統合を先ず経済大国、次いで政治大国へと過渡的に発展させる遠大な政治理念を構想したが、ラジカルな再軍備――それは東西冷戦の激化に便乗する――政策の結果、青少年の右傾向が進みソ聯の東独援助友好条約締結の外交戦略に破れ、営々として築き上げた彼の１４年間の実績、乃ち徹底的に破壊されつくしたドイツ（西独）を経済大国に復興させた功績であるが、外交戦略――東西ドイツ統合実現のための手段としての政治大国への悲願で――ナチスの戦争犯罪を次々にあばかれ、ネオナチ的軍国主義への復活を懸念する国際世論の前に、空しく崩壊した事になろう。歴代首脳の一人として、この評価観の変遷から学びとったワイッゼッカーの英知(3)に吉田政権を継承してきた保守本流の日本の政治家は学ぶべき事が多かった筈であったが……。

○ 目的と方法

以上の事から、筆者は「評価」の概念を単なる教育而も学校教育という発達期にある児童生徒対教師の狭い教育学的人間関係から出発して、その背後にひそむ総合的な文化価値的システム全般を射程に入れ、今日解決困難と目されている教育問題にアプローチし続けよりよき仮説をさぐり、創造し実証し確かな知識として応用され得るコモンセンスの普及を実現する事を目的とする。方法は応用心理学の所謂感応理論を用いた

○ 結果と考察

既に本研究は、筆者のライフワークとして、戦後の日本教育のあり方に、ある時は当事者として、又傍観者として、筆者なりのアプローチを試みてきたが、結論としては、既に本学会第６０回大会に於て発表した如く教育評価の概念を名実ともに満足させ得る前提条件は「正しい政治家による正しい政策の実施(4)という一事につきる。つまりその条件をみたす政治家が、国家統治上の代議権者として、主権者たる国民から選択されているか否かが問われ続けているわけであり、この前提に誤認がある限り、教育評価は成立し得ず、世界の民主的先進国家に対して、正義を主張してもナンセンスである。戦後５０年、漸く保守本流の禅譲により日本に連立政権が誕生したが、保守党一党独裁の積年の病弊による国民の政治不信、つまり今回の国政選挙６割の棄権という恐るべき政治的危機を生じた事になる。東西ドイツを統合させ、日朝関係にも比せられるチェコとの外交戦略にも勝利し、ＥＣ統合に於ける名誉ある位置を目指して、ひたすら自国の冒した歴史的誤謬を率直に認め、誠実な補償をし続けている愚直とも言うべきドイツの政治姿勢は、同じ敗戦国で同じ経済大国として復興しながら、最高学府に学び、最高の教育評価をほしいまゝに独占した所謂エリート群が大量に怪力乱神教にのめりこまざるを得ない日本の教育的風土の他山の石とすべきであろう。

註(1) 村山富市首相 談話(戦後50周年記念”95,8.15) (2) アデナウァー(平凡社大百科事典) (3) ワイッゼッカー (ETV特集 ”95,8.17.18 戦後50年へのメッセージ) (4) 教育評価の研究(その33) 発表論文集 ”94,2.28

事例研究の方法論的基礎

岩手医科大学　田中潜次郎

（１）全体的な評価

事例研究に対する方法論的な評価は実に多様である。たとえば、事例研究法は方法ではない、なぜなら case study method は言葉としてもおかしいから（Wolcott, 1992）とか、諸方法のなかの「できそこないの子」（Yin, 1989）とまで酷評される一方で、「ある個人の人格のもっとも包括的な研究」（矢田部, 1962）、個人の人格を「全体的にとらえようとする」という意味で「最も総合的」な方法（北村, 1969）として高く評価する考え方もある。

また、最初の探索的な「問題提起の方法」（誠信心理学辞典, 1981）という位置づけもある。これとは反対に、てっとり早いマス・スタディで作業仮説をたてるがグループファラシーのおそれがあるから、手間のかかるケース・スタディで入念に検証することに意味がある（丸山, 1982）と、いわば最終的な方法とみなすこともある。

（２）分析的な評価（特徴と問題点）

藪原（1986）は交通事故領域における事例研究の意義について、事故発生を人間と状況の複雑の相互関係において捉えるには「事例研究が最適」であり「迫力がある」が、条件Ａのもとで事象Ｂがあったとしても、コントロール群がないために、ＡだからＢだとはいえないところに事例研究の問題があるという。

北村（1969）は、事例研究によって１人の人間の全体的な人格像を浮かび上がらせることができるし、その人の行動もある程度予測できるが、さらに進んで「人格の一般的理論の構成に導かれることもあるが、それは容易な道ではない」と述べている。

事例研究の問題点として上に指摘された因果的説明と一般性は、通常の実験計画では、母集団から抽出された標本を実験群とコントロール群に無作為に分けることによって手続上は同時に解決される問題である。しかし、論理的には性質のちがう問題であり、最近の方法論では（Cook & Campbell, 1979; Yin, 1989）では、事例内部の因果的説明は内部妥当性の、一般性は外部妥当性の問題として分けられている。本論の目的は、事例研究がもつ問題を因果的説明と一般性に分離して考察することである。ここで事例とは１人の人間だけでなく、現実の世界にある１つの組織・地域あるいは事象をさすものとする。

（３）因果的説明を事例内部でおこなう方法

対象を全体として見るという姿勢を方法の手順として考えると、対象の広さ（多面性）、長さ（過程性）、深さ（多層性）の３つの要素をいかに活用するかが重要である。

広さとは、問題を文脈のなかで見るという事例研究の伝統的な着眼点であり、対象を特定の側面に限定せずいくつかの側面に着目する場合である。一定の公共政策が社会問題の解決に有効にはたらいたかどうかを評価するためにつくられた現代の準実験では（Cook & Campbell, 1979）、複数の異なる従属変数をパターンとして見る非等価従属変数型が、対象の広さに着目した方法である。１つの事例内部でいくつかの変数を比較対照することがコントロールに準じる機能をもつ。

長さとは、対象を時間の流れのなかにおく場合であり、発達心理学の縦断研究がその典型である。現代では、行動療法の有効性を評価するために作られた単一事例実験法が、対象の時間特性を重視する方法の代表例である。この方法は、同じ対象をくりかえし測定するという点では従来の縦断研究や時系列分析と変わらないが、実験の全体期間を行動療法の開始前と開始後に分けて、開始前の状態にコントロールの機能をあたえることによって、行動療法と行動変容の因果関係を１つの事例のなかで説明する明示的な形式をもつことに大きな特徴がある。

深さに着目した場合、事例内部に大小いくつかの水準の分析単位を設定することが可能である。Yin（1989）はこれを埋め込み型の方法と呼んでいる。

（４）一般性の問題　Sampling に代わる replication（再現）の論理

再現（性）は Skinner らの行動分析から行動療法にいたる系統の概念であり、通常の一般性の概念に対応する。たとえば、ある行動療法が１人の患者の一定の問題行動の修正に有効なことが示されたあと、２～３人の患者で同じ結果が再現されるならば、その行動療法はその問題行動の修正に一般的な有効性をもつとみなされる（Barlow & Hersen, 1984)。Yin（1989）はこの論理を使って、事例研究の方法的位置を次のように考えている。すなわち、１つの事例研究は統計的にはサンプルが１つ（Ｎ＝１）であり、一般性を言うには程遠い手続きとみなされる。しかし、それ自体が部分ではなく全体であり、総合的で完結的な性質をもつことを考えれば、１つの事例研究は、１つの世論調査における１人の回答者や、１つの実験における１人の被験者と同じではなく、むしろ１つの調査や実験と同じ方法的位置を占める。したがって、数回の調査や実験によって知見の一般性が実証されるとすれば、１つの事例研究の知見は、あと数個の事例研究によって一般性が確保されることになる。本来の事例研究を単一事例研究と呼ぶとすれば、この手続きは複数事例研究の型と呼ばれる。

検査・測定１－１

ＭＭＰＩ臨床尺度による１０年間の学生の評定差

○草薙和美　　稲松信雄

（東邦大学医学部）

［目的］MMPI尺度を用いて，最近10年間の医学部学生の評定差を検討することである．

［方法］被検者：'84医学部入学時１年　男子学生（M）64名，女子学生（F）23．'94　同入学時１年（M）70名，女子学生（F）30名。検査用紙：84年度はMMPI冊子式I型を，94年度は，その改訂版を使用（改訂版は一部標準点を修正したもので，今回は両年度とも素点で比較検討）．プロフィール用紙は旧版を使用。

［結果］臨床尺度（10項目）に注目すると，いずれの数値（素点）も偏差値30－70の間に含まれ，いずれも正常範囲といえる．当学生の特徴をプロフィールから検討する。男子学生では偏差値ほぼ50を示したものとして，84年ではHs＜心気性＞，Hy＜ヒステリー＞，Pd＜精神病的偏り＞．94年ではHs，Pd，Pa＜偏執性＞，Ma＜軽そう性＞であった．　偏差値45を示したものは，84年では，Pt＜精神衰弱＞，Sc＜精神分裂病＞．94年では，Pt，Sc，Si＜社会的内向性＞であった．女子学生では 偏差値50を示したものとして，84年はMa，そして94年にはPaが示した．偏差値45を示したものとして，84年はPd，Pa．94年では，Hs，Hy，Scであった．そして，50を超えたものは，同年ともMf，Maであった．男女共に，DがM（'84:24.4，'94:24.4）F('84:23.2，'94:22.9）の素点はいずれも偏差値50をはるかに下まわる結果となった．これは抑うつ傾向にある学生は極めて少なく，そして当大学医学部学生の 1つの特徴であることが示唆される．平均値の差に注目すると，Paのｔ値（M:2.811，F:3.062)はいずれも0.1%の有意差があった．しかしこれも正常範囲での結果であり，83年に比べると，94年の素点（M:12.1，F:12.0）がより平均値に近ずいた為である．Siでは，平均値に差がみられるが標準偏差が大きいので統計的には，有意差はなかった．

［考察］結果で指摘したように当医学部の男女学生は共に，ここ10年間抑うつ性尺度においては低得点で，変化がない，これが一つの特徴と言えよう．それは，私立医大入学者という恵まれた家庭環境で，比較的苦悩が少ないことの表れではないかと推測される．　次に実習を通して女子学生の積極的，自主的行動が目立ち，10年前よりそれが顕著に思われたので，性尺度に変化のあることが予測されたが，女子学生は10年前も現在も興味の対象が男性的方向にやや傾いている．これは医者を目指す女子学生の一般的傾向なのかもしれない．加えてMa＜軽そう性＞の素点がやや高い，Maは行動や思考の活発さや一般的活動水準の高さを知る指標である．そのことはSi＜社会的内向性＞の素点がやや低いこととも相関して当女子学生の特徴を示していると思われる．

今回特に注目すべき点は，Pa＜偏執性＞が男女共10年前に比べて，0.1%水準で有意な差が見られた事である．結果でも指摘したが，いずれの素点も正常範囲である．Paは40項目から構成されており，10年前に比べ3-4項目多くその項目をチェックしていることになる．中には1項目のチェックでもアブノーマルが予想されるものがあるが，今回項目の分析まではできていない。大胆な予測として，母集団全体が10年前に比較してややパラノイヤ的傾向にあるのではないかと思われたが，改訂版の標準化から考えて必ずしもそうではないように思われる。

84'& 94'のMMPI臨床各尺度の平均値&SD及び差の検定

	臨床尺度名		'84 医学部（M）（64名）	'84（F）（23名）	'94（M）（70名）	'94（F）（30）	84':94' M:t-value	84':94' F:t-value
1	Hs（心気症　）	MEAN	14.9	14.0	14.9	15.7	0.000	1.646
		SD	3.55	3.92	3.91	3.44		
2	D（抑うつ　）	MEAN	24.4	23.2	24.4	22.9	0.000	0.222
		SD	4.30	4.81	4.97	4.77		
3	Hy（ヒステリー　）	MEAN	22.1	20.3	22.7	21.5	0.821	0.900
		SD	3.94	5.15	4.41	4.36		
4	Pd（精神病質的偏り）	MEAN	23.1	21.5	23.8	23.6	0.939	1.446
		SD	4.21	3.51	4.34	6.10		
5	Mf（異性への興味　）	MEAN	25.3	33.4	25.11	32.3	0.241	0.989
		SD	4.21	3.85	4.81	4.00		
6	Pa（偏執性　）	MEAN	10.5	9.5	12.1	12.0	2.881**	3.062**
		SD	3.00	2.71	3.35	3.02		
7	Pt（精神衰弱　）	MEAN	27.9	27.0	28.0	27.9	0.114	0.514
		SD	5.25	4.98	4.87	6.98		
8	Sc（精神分裂病　）	MEAN	29.4	26.8	29.8	28.9	0.404	1.106
		SD	5.30	4.98	6.01	7.24		
9	Ma（軽躁性　）	MEAN	17.9	18.7	18.1	20.2	0.255	0.903
		SD	4.29	3.59	4.71	7.15		
0	Si（社会的向性　）	MEAN	25.9	26.1	27.8	29.2	1.354	1.272
		SD	7.75	7.67	8.32	9.29		

** P< .001

バイリンガル再検査法によるＭＭＰＩ新日本版の検討

田中　富士夫
（中京大学）

目　的

ＭＭＰＩ新日本版(1993)のミネソタ原版との等価性を、バイリンガル再検査法を用いて、尺度レベルとプロフィールの形状の類似度の観点から検討する。

方　法

被検者　英語圏で１年以上生活した経験を有する15歳以上の男性105名、女性131名。平均年齢は男性37.1歳（SD 9.0歳）、女性35.2歳（SD 10.3歳）。英語圏での滞在期間の平均は男性53.1カ月（SD 62.0カ月）、女性54.0カ月（SD 56.0カ月）であり、滞在国は米国が最も多く、次いで英国、カナダ、豪州の順であった。

手続き　１人の被検者にＭＭＰＩのミネソタ原版と新日本版を２週間の間隔をおいて郵送法で実施した。被検者を、初回に原版を受け２回目に新日本版を受ける英日群とこの逆順の日英群に無作為に２分した。しかし、返送は被検者次第となった為、平均実施間隔は男性20.4日（SD 11.4日）、女性20.1日（SD 11.2日）となり、被検者数は男性の英日群57名、日英群48名、女性では英日群69名、日英群62名となった。

結果と考察

１．原版と新日本版の基礎尺度得点

各被検者の両版について、？を除く13尺度をミネソタ基準のＴ得点を算出し各群毎に比較した。結果の一例として女性日英群の平均プロフィールを図１に示した。各尺度について版・実施順・両者の交互作用の有意性を分散分析で検定した結果、男女共全尺度で原版の方が新日本版よりも高く（*Ma*は$p<.05$他は$p<.01$）順序効果は男性で*Hs*, *D*及び*Si*、女性では*Mf*と*Pt*が有意（$p<.05$）で、*Hs*以外は初回の方が高い。交互作用は男女共多くの尺度で有意であり、いずれも原版は初回に実施した方が高いが、新日本版ではこの順序差がより小さいか無いという現象である。両版のＴ得点の平均間に統計的に有意な差が認められたが、臨床解釈上で意味のあるＴ得点の差は10程度以上と見做されているから、新日本版では*D*及び男性の*Pt*と*Sc*が原版より高い値をとるといえそうである。

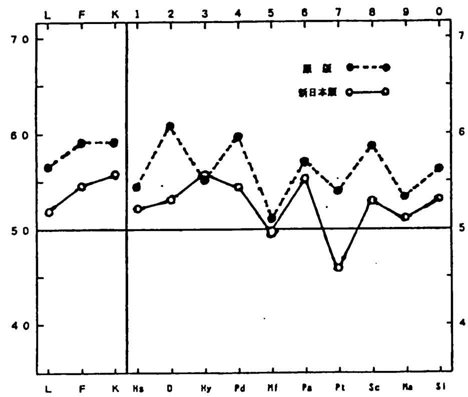


図１　原版と新日本版の平均プロフィール
（女性　日英群：N=62）

２．尺度毎の原版・新日本版間相関

基礎尺度について各被検者の原版と新日本版のＴ得点間の相関係数を求めた結果が表１である。男女共に*Si*が最高で、最低は男性では*Pa*、女性では*Mf*である。これらの値は、従来報告されてきた翻訳版と原版との相関係数の値に近く、Clark(1985)の日本語統合版での値より高い。

表１　版間相関（r）

尺度	男性	女性
L	.788	.696
F	.627	.583
K	.692	.752
Hs	.559	.566
D	.564	.674
Hy	.632	.557
Pd	.495	.650
Mf	.591	.513
Pa	.470	.530
Pt	.581	.612
Sc	.523	.657
Ma	.573	.585
Si	.835	.840

３．プロフィール形状の類似度

各被検者の原版と新日本版のプロフィールの形状の類似度を表すためにDu Masの指標を修正した類似性指数*ps*を用いた。この指数の各群の平均とＳＤを求めた結果が表２である。表には、参考までに新日本版を２週間後に再検査した３標本（N=39, 45, 53）の類似性指数も併記した。結果は、原版と新日本版のプロフィールの形状の類似度が新日本版を２回繰返した場合ほど高くはないが、両プロフィールの形がある程度類似していることを示している。この程度の類似度が等価性の条件として満足すべきかどうかは、直ちに判断できない。今後に残された問題である。

表２　プロフィール類似性指数の比較

	男性		女性		女性	女性	男性
	英日	日英	英日	日英	再	検査	群
平均	.314	.439	.381	.443	.646	.667	.645
ＳＤ	.381	.307	.354	.345	.278	.260	.272

dysthymic群にある看護学生の描画（バウム像と雨中人物画）特徴

藤井博英・○樋口日出子
（常磐大学）　（秋田県立衛生看護学院）

1．研究目的

心理テストのうち投影法（Projectivetechnique）は、意識的操作が及びにくく、被験者の無意識領域を含めた幅広い心理状態の検索が可能である。

現代青年の中には、①憂鬱気分があり、②不安が強く、③気力や決断力が低下し、④絶望感等の精神症状が散見されている。しかし、思春期青年の内面的問題は、投影法のような媒体を採用しなければ把握できないと北村らが述べている。そこで我々は、学生の理解に対する補助的な情報を得るための用具として描画テストが有用と考える。

今回我々は、Maudsley-Personality－Inventory（以下MPIと略す）と描画テスト（雨中人物画法とバウム・テスト）を導入して、学生の理解に努めた。Eysenck，H・JはMPIからみた神経症傾向で内向的（Neuroticism^{+}・Extraversion^{-} 以下N^{+} E^{-}と略す）の高い性格の人をdysthymic と名付け、性格上の問題を引き起こすとしている。そこで我々は、dysthymic に属する学生の描画テストの被験者個人の特有な象徴的意味のPost －Drawing －Interrogation（以下PDIと略す）で、その内面的な問題の把握に努めた。

2．方法

1）MPI及び各々の描画テストを看護学生1年生96名の対象に施行する。（このテストは異常性の確認ではなく、人間理解のためであることを説明した。テスト・データは、本来被験者本人に帰属するものであり、我々は①守秘と②結果を知らせる等の義務があり、面接する旨を告げた）所要時間は、各々の心理テスト15分程度とする2）dysthymic 群の学生3名の描画特徴とPDIにより心理状況の把握をする。(1)N尺度のスケールは、平均点22.5、標準偏差10.1であり、神経症傾向にある尺度を33～48（N^{+}）とした。E尺度のスケールは、平均点30.4、標準偏差9.7 であり、内向的を0～20（E^{-}）とした。この得点範囲を2次元展開したN^{+}・E^{-}をdysthymic 群とする。3）描画法の分析者は臨床心理士及び当研究者の計3名である。4）PDIの施行は当研究者である。

3．結果と考察

学生Aの雨中人物画法の人物は、片手を隠し、傘を投げ出して水たまりの中にたっている。さらに、バウム像は落ちる実と陰影が樹木全体につけられていた。これらの描画特徴から学生はコミュニケーションを拒否し、諦観や抑鬱状態を表していると解釈した。そこで、被験者個人の特有な象徴的意味「片手や落ちる実」について問いかけた。すると、学生は親しい友人を失い、抑鬱的になり、何事に対しても無気力でやる気がない旨の心情を吐露した。

学生Bの雨中人物画は、大きな高いビルに後向きの人物が存在し、雨に打たれている。さらに、バウム像は、幹の輪郭であったはずの線がそのまま枝になる“メビウスの樹木”である。これらの描画特徴から、学生は、世間から逃避し、現実を拒否している傾向が強く、精神病理的退行を示していると解釈される。そこで、「特に高いビルに立つ後向きの人物は、何を意味するのか」を問いかけた。すると学生は、学校生活に対する絶望感や不安、また友人への不信感などから高い所から飛び降りて死にたいという自己破壊的な考えを持ち、自殺念慮があった旨を号泣しながら語った。

学生Cの雨中人物画は、雨の降りが強く、傘をさしている。人物はレインコートを着て、長靴をはいている。さらに、バウム像は、樹冠を形づける線も弱く散漫な重複線である。また、落ちる実や幹の先端処理を開放にした3分岐であった。これらの描画特徴から、学生は、ストレスが強く、過剰防衛傾向にあり、刺激を受けやすく、自己を支えようとする試みはあるものの、決断力が低下していると解釈される。これらの特有の象徴的意味「雨の強さや幹の先端処理と落ちる実」について問いかけた。すると、学生は、HB抗原陽性の為、今後、選択した道をこのまま歩んでよいのか葛藤状態にあり、さらに自分の内面の脆弱性を他人に悟られたくないという気持ちを涙ながらに語った。

4．結語

学生理解のためには、投影法である描画テストを用いることが有用であり、且つ、その被験者個人に特有の象徴的意味をPDIで多くの補助的な情報を得ることが可能である。

ＴＡＩＳ日本語版

(Test of Attentional and Interpersonal Style)

加藤　孝義
(東北大学大学院情報科学研究科)

原著者: Robert.M.Nideffer,Ph.D. Copyright 1973

【TAISアウトライン】

Paper and pencil inventory(所要時間25分)144 items.
104 items(日本語版)
17 Subscales: 6 ⇨ Particular attentional abilities.
2 ⇨ Ability to control behavior.
9 ⇨ How man behaves in interpersonal situations.

英語版の他、フランス語版、ドイツ語版、ロシア語版、スペイン語版.

【TAISの目的】

1)或る特定の仕事や実行場面で効率的であるための能力を理解する基礎を提供する.
2)このような効率性を予測する能力の測定.
3)個人のTreatment, training programの発展.
A)Selection & Screening; Buisiness executive, talented music students, police applicant, psychiatric patient.
B)Employee counseling;個人の長所短所を診断して仕事上のカウンセリングに利用する.
C)個人間のコミュニケーション
Employee-employer, counselor-client, coach-athlete.
D)Training and/or treatment program のデザイン
個人の長所・短所を診断して、適応力の改善を図る.

図1. にTAIS によって測定される注意能力の四つのタイプが４象限に位置づけられている.

【各尺度の意義】

《注意の尺度》

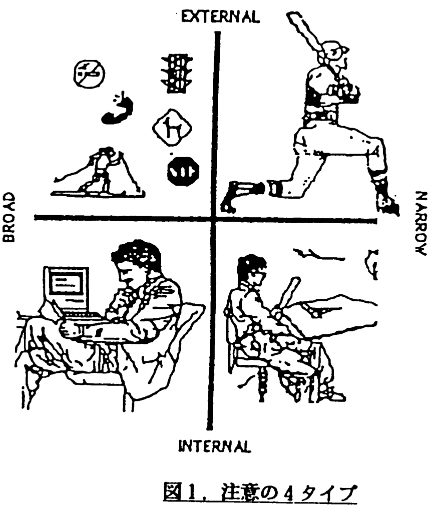
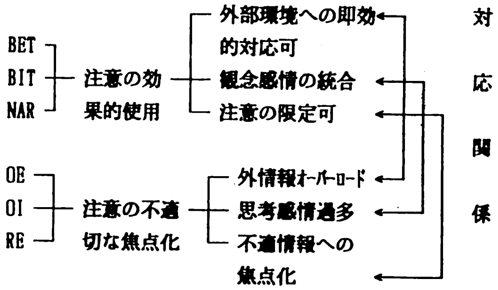


図１. 注意の４タイプ



『コントロール尺度』

INFP: 外部環境への対応多様・多忙性の指標
BCON: 行動のコントロールを引き出す意欲・能力の指標

『対人尺度』

CON:対人状況におけるコントロールの必要度
SES:自己価値・自信の感情の度合い
P/O:能動的競争的スポーツへの身体的志向度(協調性と関連)
OBS:無益な思考へのこだわり
EXT:他人との親和関係・行動傾向
INT:孤独をエンジョイ する指標
IEX:知的表出傾向
NAE:否定的表出の攻撃的傾向
PAE:身体的・言語的感情表出の度合い

【日本版標準化】

<u>分析 I:</u>　a)Cronbachのα係数による尺度の最適化によるitem選択(α>.6). 144(item)→104. b) 性差検定(n.s.) c)Z,T得点算出 d)因子分析(Varimax): 4因子抽出(F1. Attentionally effective;F2. Performance anxiety;F3. Extraversion; F4. Distractible-Impulsive) 原著とほぼ同一因子. Ss:704(F:373, M:332, 教養課程学生)

<u>分析II</u>. Test-retest による信頼性係数の算出
OBS=.634 以外の各尺度は、全て0.7 以上の係数を得た(Ss:F=61, M=34, 19-21 歳の学生, 1月のインタバル)

以上の結果から、TAIS日本語版が利用できるのではと結論される. なお妥当性の一つの検証法として、Y-G 及び16PF等との相関関係を検討した。Y-G の結果のみ示す。

なお妥当性のひとつの検証法として、Y-G, 16PFの心理テストとの相関関係を検討した。その結果についても、かなりの妥当性を認めることができた。

＜文献＞

Nideffer, R.M. 1977 Test of attentional and interpersonal style, Interpreter's manual, Enhanced Performance Associates, San Diego, Cal.
Nideffer, & Sharp, R.C. 1976 Attention control training.

大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅤ

○藤田 勉　　久東光代　　川島 真
（長野県短期大学）（日本女子大学）（尚美学園短期大学）

目 的

大学改革の気運が高まる中，各大学ではシラバスの作成，学生による講義評価の実施など様々な形で講義の質的改善に取り組んでいる．中でも，学生による講義評価を導入する大学が近年急増しており，平成4年度には38大学（国立9，公立0，私立29）であったのが平成6年度には138大学（国立39，公立6，私立93）で実施されるようになった（高等教育局大学課大学改革推進室，1995）．今後も学生による講義評価を導入する大学は増加することが予想されるが，学生による講義評価の妥当性や学生の講義評価行動に影響を及ぼす要因についてはこれまであまり検討されていない．

藤田・久東・川島（1994）は，学生による講義評価が試験の得点や出席状況・授業態度・試験の成績についての自己採点と有意な相関があることを示したが，本報告ではこれらの変数に加え，学生が教員に対して持っている全体的な印象（好感度）に着目し，講義評価との関連について検討した．

方 法

対象者　平成6年度前期に一般教育科目「心理学」を受講した女子短期大学生253名．

手続き　「心理学」の試験時に試験用紙とともに「授業評価シート」を配付し，講義に対する評価を求めた．講義評価は10項目（「講義はわかりやすかったか」，「講義はまとまっていたか」，「板書は見やすかったか」，「声の大きさはどうだったか」など）からなり，各項目に対して0点（非常に悪い）～10点（非常に良い）で評定してもらい，これら10項目の評定値の合計を講義評価の総合点とした．また，学生が教員個人に対して持つ全体的な印象を好感度という尺度でとらえ，0点（非常に悪い）～100点（非常に良い）で評定するよう求めた．その他，「試験の難易度」，「成績のつけかた」，「出席状況・授業態度・試験についての自己採点」についても0～100点の間で評定してもらった（藤田ら，1994参照）．

結 果

講義評価の総合点と試験の得点および各質問に対する評定値間の相関係数を求めた．結果を表1に示す．

表1．講義評価の総合点と各変数間の相関係数

試験の得点	.15*
出席状況の自己採点	.25***
授業態度の自己採点	.26***
試験の自己採点	.18**
教員に対する好感度	.39***
成績のつけかた	-.03
試験の難易度	.07

*p<.05，**p<.01，***p<.001

前発表（藤田ら，1994）の結果と同様，本研究でも講義評価の総合点と試験の得点（t=2.33, p<.05），出席状況の自己採点（t=4.12, p<.001），授業態度の自己採点（t=4.32, p<.001），試験の自己採点（t=2.90, p<.01）の間に有意な相関が見られた．しかし，講義評価の総合点と最も強い相関関係を示したのは新たに加えられた変数である教員に対する好感度で（t=6.63, p<.001），「教員に対する好感度が高い（低い）学生ほど講義評価の総合点も高い（低い）」という傾向が認められた．また，教員に対する好感度は出席状況の自己採点および授業態度の自己採点とも強い相関が見られ（それぞれの相関係数は，r=.20，r=.25），「教員に対する好感度が高い（低い）学生ほど出席状況・授業態度の自己採点が高い（低い）」ことがわかった．

考 察

学生に講義評価を求めることは講義内容や講義形式の改善に役立つが，その反面，教員が学生からの評価を気にするあまり単位の認定基準を甘くしたり，人気とりに走るなどの危険性をはらんでいる点が指摘されている．本研究では，講義評価と教員に対する好感度の間に強い正の相関が見られたが，この結果は，教員に対する好感度を高めることがより良い講義評価につながる可能性を示唆するものであると思われる．好感度を高めるために講義の質的改善に努めるか，あるいはそれ以外の努力をするかは，教員自身の選択に委ねられている．

引用文献

藤田勉・久東光代・川島真　1994　大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅡ　日本応用心理学会第61回大会発表論文集，94.
高等教育局大学課大学改革推進室　1995　大学改革の進捗状況について　大学と学生，358,56-63.

大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてⅥ

○川島　真　　久東光代　　藤田　勉
（尚美学園短期大学）（日本女子大学）（長野県短期大学）

目　的

前発表（藤田・久東・川島，1995）では，講義評価の総合点と試験得点間の相関関係の有無を検討するため，学生に「授業評価シート」への記名を求めた．つまり，学生は匿名性が保持されていない状況で講義評価を行ったわけで，そのことが講義評価をする上で何らかのバイアスとなっていた可能性もある．匿名性が保持されている状況とそうでない状況での人間行動には少なからず差があることは社会心理学の分野の様々な研究からも明らかであり，特に前発表のように最終的な成績がつけられていない（単位が認定されていない）時点で講義評価を求める場合には，匿名性が保持されているか否かが講義評価の内容に大きく関わってくることも推測される．本研究では，このことを検討するため，前発表で学生に求めた講義評価（記名評価）の直後に，無記名で再度講義評価をしてもらい（無記名評価），両者の間に何らかの差があるか否かについて検討した．

方　法

対象者　平成６年度前期に一般教育科目「心理学」を受講した女子短期大学生253名．

手続き　前発表で学生に記入を求めた「授業評価シート」を回収した直後，再度「授業評価シート」を配付し同じ質問項目に対して無記名で回答してもらった．提出は自由としたため回答が得られたのは253名中240名であった（回収率は94.9%）．

結　果

前発表で行われた記名評価の結果と無記名評価の結果を比較した．両者の差をまとめたものを表１に示す．講義評価の総合点は，記名評価が平均92.26点（*SD*=6.42），無記名評価が平均91.87点（*SD*=6.48）であり，ともに最高点は100点，最低点は70点であった．総合点は無記名評価の方が若干低かったが統計的に有意な差ではなかった．講義評価を質問項目別に見ると，すべての質問項目（10項目）において無記名評価の評定値が記名評価の評定値を下回っていたが，いずれも大きな差ではなかった（最も差が大きかった項目「講義に熱意が感じられたか」でも0.11点）．

表１からもわかるように，講義評価の総合点以外の項目についても，記名評価と無記名評価間で評定値に大きな差は見られなかった．

表１．記名評価と無記名評価の差

	記名評価	無記名評価	差（記名－無記名）
講義評価の総合点	92.26	91.87	0.39
出席状況の自己採点	92.26	90.75	1.51
授業態度の自己採点	83.46	82.17	1.29
試験の自己採点	58.33	58.54	-0.21
教員に対する好感度	92.45	92.13	0.32
成績のつけかた	53.06	52.10	0.96
試験の難易度	67.06	66.33	0.73

次に前発表と同様，講義評価の総合点と各変数間の相関係数を求めた．結果を表２に示す．出席状況の自己採点，授業態度の自己採点，試験の自己採点，教員に対する好感度の４項目と講義評価の総合点との間に有意な相関が見られ，記名評価で認められた相関関係は無記名評価においても確認された．ただし，算出された相関係数は，記名評価よりも無記名評価の方が高い値となっており（藤田ら，1995の表１参照），無記名で講義評価を求めた時の方が変数間の関係がより顕著に現れていたようである．

表２．講義評価の総合点と各変数間の相関係数(無記名評価)

出席状況の自己採点	.28***
授業態度の自己採点	.30***
試験の自己採点	.22***
教員に対する好感度	.40***
成績のつけかた	-.06
試験の難易度	.03

***$p<.001$

考　察

最終的な成績が発表されていない段階で講義評価を記名および無記名で求め，両者の比較を行ったが，本研究の結果を見る限り，記名評価と無記名評価の間に大きな差は認められなかった．

引用文献

藤田勉・久東光代・川島真　1995　大学生による講義評価に影響を及ぼす諸要因についてV　日本応用心理学会第62回大会発表論文集（印刷中）．

住環境評価の構造性

畠 山 彰 文
（早稲田大学大学院人間科学研究科）

1. 研 究 の 目 的

本研究の目的は住環境の快適性いわゆる住み心地が居住年数の変化といった時間的変化や環境の変化と共にどのように質的な変容があるかということ、すなわち現在の住居の選択動機、以前の住居と比べた住み心地項目の改善度、さらに地域の整備課題という3点から評価を求め、住環境評価の構造を明確にする事である。

2. 方 法

調査項目は住居に関する項目（入居年数、引っ越し回数など）、住環境意識に関する項目（総合的な現在の住居の住み心地、入居動機、諸要因からみた現在の住居の住み心地、今後の地区整備）、対人関係に関する項目（近所付き合いの大切さ、近隣友人の数）、地域の環境問題の解決法に関する項目など、24の質問項目から成り立っている。住環境意識に関する項目では「とても重視（大切）」、「重視（大切）」、「何とも言えない」、「あまり重視しない（大切ではない）」、「重視しない（大切とは思わない）」（「現在の住居の住み心地」の項目では「改善」、「やや改善」、「どちらでもない」、「やや悪化」、「悪化」）の5段階で評定を求めた。調査地域は札幌市内の3地域を対象とした。すなわち、郊外の住宅地区（1994年8月23日から30日および同年9月28日から30日まで；155票回収；回収率92.9％）、都心の住宅地域（同年10月5日から8日まで実施；113票回収；回収率91.1％）、農業地域の住宅地域（同年10月12日から14日まで；113票回収；回収率91.1％）である。調査対象者はいずれの地域においても各世帯の主婦（いない場合はそれに相当する役割を果たす女性）とした。調査方法は学生調査員が各戸を直接訪問し、調査の主旨を説明し、調査用紙を配布および回収する、留め置き法を実施した。

3. 結 果 お よ び 考 察

各得点の平均は動機35.35(満点55；s.d.6.486)、住み心地66.76(100；10.227)、地域整備25.67(35；4.339)である。これら得点を標準化した値を分析に用いた。また、居住年数は平均15.4年(s.d.9.356)で、5年以下の「短期」、5～15年未満の「中期」、15年以上の「長期」に分類した。引っ越し回数と住居の選択動機との関係では引っ越し回数の少ない人の割合が動機得点が高いほど多い（$p<.0001$）。居住年数と住居の選択動機との関係では居住年数の長い人の割合が動機得点が高いほど多い（$p<.05$）。居住年数と住み心地とでは、居住年数の長い人の割合が住み心地得点が高いほど多い（$p<.05$）。居住年数と地域整備では居住年数の長い人の割合が地域整備得点が高いほど多い（$p<.05$）。これらの結果から居住年数が長い人ほど、住居を選択した動機、住み心地、地域に関する自らの生活環境に高い意識があることが示唆される。また、居住年数別に分類して、主因子分析法を実施すると居住年数が「長期」の群では第1因子が「医療施設の利便性」、「ス-パ-等の利便性」、「金融機関の利便性」、「最寄りの駅からの距離」の項目で因子負荷量が高く、「利便性」の因子である。第2因子では「空気の良さ」、「緑の量」、「家の広さ」、「近隣騒音」の項目で因子負荷量が高く、「地域環境・家の広さ」である。一方、居住年数「中期」・「短期」群では第1因子では「空気の良さ」、「緑の量」、「間取り」、「家の広さ」、「近隣騒音」などの項目で負荷量が高く、「地域環境（家の広さ）」の因子となっている。第2因子が「医療施設」、「買物施設の利便性」などの項目からなる「利便性」である。因子分析の結果から居住年数が長いほど地域環境よりも利便性の良さが感じられると考えられる。

また、住み心地について住み心地の高・中・低得点群との間に全体で得られた第1因子の「地域環境・家の広さ」因子と、第2因子である「利便性」の因子得点について差があるかを検討した。その結果、両因子とも、各々住み心地得点の各群の間で有意に差があることが認められた（$p<.0001$）。すなわち、住み心地の得点が高いほど有意に地域環境、利便性が改善されたと感じるのである。さらに住み心地得点の高中低の判別がどの項目によるかをみるために、判別分析の逐次選択（ステップワイズ）法を試みた。「災害の安全性」、「家の広さ」、「金融機関の利便性」が評価に有意に差のあることが明らかとなった（いずれも$p<.0001$）。次にステップワイズ法により選択された3項目により住み心地得点の高中低を判別すると、正判別率が「高得点群」が82.4％（42名）、「中得点群」が72.8％（171名）、「低得点群」が85.2％（23名）であり、高・低得点群では概ね判別できると言える。

日本人の生活意識（２）国民性と交際

高　橋　　敦（おさむ）
（東海学園大経営学部：前相愛大）

研究の意図と内容

前回の（１）「自然環境」観に続き、さらに日本人の交友またコミュニティへの参加意識について、国際的なズレを探った。われわれの持つ他文化へのショックの深層には、まだ十分に把握しえない習慣的な意識の問題が複雑に存在する。調査と分析を繰り返すことによって、将来の地球社会人への脱皮の方向、方策について考究したい。

研究方法とデータ

アンケートまたは面接回答による調査と、集計、検証、分析、考察による。主調査は　A．過去２０年間に接触できた滞日外国人（５年程度、６５国４２０人）と滞外日本人（同様４６国２０５人）の比較〔別紙参照〕B．発表者が勤務した南米、ドイツなどの調査　C．大阪府教研共同研究（親子の意識調査、年次報告1982-92 毎年、当責任者は高橋）の三つ。ほかに二次調査として小規模のものを国内外で実施している。

なお、内外の学校十数校、近畿日本ﾂｰﾘｽﾄ・外人ｾﾝﾀｰ、ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ﾋﾞｼﾞﾀｰｽﾞ・ﾋﾞｭｰﾛｰ などの調査協力をいただいた。

主な調査研究の結果

海外移住者の問題（Racing Traits)から近隣のコミュニティづくり、子育てと教育など多岐にわたる。各節を通じ、「著しい、傾向が強い」の表現は危険率＜１％で有意、「・・といえる、傾向がある」は、＜５％で成立したものとする。

１）南米についていえば、日系移住者の混血率は著しく低く（一般グループと二世代比６：１など別紙）、他方、国土の民族占住への信仰は非常に強い。「みんな一緒」という非現実的な安心なのである。

ｃｆ．自己紹介関連国名数（出生、国籍、居住、言語、両親祖父母など）日本人1.2 欧米 4.2

２）対話における「迎合性」が非常に強い。たとえば「去年より暑いね」といった即断不能の挨拶に対しても、日本人の５６％は「全く、その通り」と反応し疑問をふくむ例は１１％しかない。ドイツでの同じ回答では自分の感想を述べる者３０％、疑問や抵抗１２％にたいして、賛意を示す者は２１％であった。これは「形式・前例の踏襲」にもあらわれる。

３）一般に初対面者、車中同行者などとのミニ・コミュニティづくりは難しく「形式、一緒、迎合」への手探り、手続きが実施された後になる。

４）家庭交際の意味検証。町内で最も親しい人を思い浮かべて、その交流のレベルを調査し比較・・

％	日本　男	女	南米	
知人はない	1,5	1.7	1,0	.9
あいさつはする	１０,4	9.0	6,2	4,7
立ち話はする	１８,1	２１,9		
留守預かり	3,1	2.4	5.0	7.0
おすそわけ	２２.4	２３.7		
訪問	２２.8	２４.5	８７.7	８７,3
家族ぐるみ	１９.7	１５,5		
（対象　ＰＴＡ	1000人	964	194	220 ）

５）子育てと教育（海外）。交際に関する親の注意を生徒から集めた。「多様な友人を持つ」「誰ともつきあう力」「困れば先生に相談を」など違い歴然！

６）コミュニティづくりと男女共学の教育が欠落。小中高の友人数国際比較、同性異性比６：４か２：１の世界で日本のみが一方的にゼロに近い。異性は人格以前に非行源との発想？　交友の同年令占有も国際的には異例。交友が超年齢なのも海外調査では普通。

考察と今後の問題

＊日本の島国的同族生活が、多くの有利とともに「一緒」への甘え、周囲や形式への「迎合」も育てた。これが対話文化を抑え、ミニ・コミュニティでの自己実現を妨げ、いじめを助長してもいる。

＊逆に、干渉から自己を防御すれば「交際文化への殻」を作り、「朱に交れば赤くなる」などの神話（前年）を育て自己実現を放棄する。共学なども同じ。

＊対話とは本来「個」を実現しあい「違い」を探しあうプレイのはず。それが一致を喜び、回答を求めるものになると対話ではない。個を訴えるにはユーモアやムードづくりの才能が必要になる。その機会に乏しいわれわれにユーモアが不足するのは当然だろう〔皮肉をいえば代替はみやげとゴマスリ〕。

＊「生きる力」としての多様な交友（異性、新人など含む）と周囲への働きかけの勧め、話し方の教えは親にとって大切。手続き抜きにすぐ身辺に小コミュニティを創りあうこそ「２１世紀能力」の一つだ。

＊幼時から社会的能力を鍛えつつ成長する諸国に比し、中学以後社会的に引退する日本の子の断絶はどう回復できるのか？

＊ほか南米など移住日本人社会の分析も課題。

－－－別紙資料ご参照（昨年分も）－－－

社会・文化１－３

固定的役割分担意識の性別・年齢別分析

稲毛　教子
東京国際大学

［研究目的］男女雇用機会均等法が施行されて10年になっているが、今日なお女子学生の就職は困難を極めている。男女平等社会の実現には、固定的な性別役割分担意識を是正していくところから始めねばならない。国立婦人教育会館では、「青年男女の固定的性別役割分担意識是正のためのプログラム研究」を1992年から３年計画でおこなった。その際「固定的役割分担意識チェック・リスト」を作成した。それは研修への動機づけと研修効果をみるためであったが、今回は、固定的な性別役割分担意識は男女のいずれに、どの年齢層に問題があるかを明らかにすることを目的とした。

［対象者および方法］国立婦人教育会館の研究に協力した「国立山口徳地少年自然の家」では地域の男女高校生リーダー50名('94)を、「国立赤城青年の家」では教師を志す首都圏大学の男女学生74名('93)を、別途、首都圏在住の５才児の両親１87名('95)を対象に「固定的役割分担意識チェック・リスト」を研修会場で、面接時に、郵送で依頼し、回収した。

［結果］10代の高校生、20代の大学生、30代の親を性別・年齢別に分析した結果は、どの年齢層においても男は女よりも固定的性別役割分担意識が全体的にみて強いといえる。高校生では男女差が全くか、殆どない項目が20中12項目であった。大きな差を示したのは次の３項目で「男は仕事、女は家庭」、「男の職業、女の職業はある」、「女の指図・命令はいや」である。大学生では20中17項目が男女ほとんど同じ傾向を示している。男女で大きな差を示した３項目は「男は仕事、女は家庭」、「妻の収入・地位が上はいや」であり、男大生の意識の古さが残っているが、しかし、女大生も「結婚したら夫の姓を名乗るのがよい」という意識が男大生を上まわり、社会通念に未だとらわれている。

５才児の父母の意識は、高・大学生と違って、父母間に意識差が目立つ。差を示した８項目は、「夫は家事・育児に口を出すべきでない」、「妻は夫の仕事に口を出すべきでない」、「女の指図・命令はいや」、「女の上司はいや」、「男は中心的役割、女は補助」、「育児休暇をとる男は変っている」、「妻が仕事、夫が家事は変っている」、「男女の育て方は違う」で、父親は母親よりも未だ古い意識を残存している。一方、両親とも新しい意識のみられた項目は、「リーダーは男、サブリーダーは女」、「出席番号は男が先」に反対を示し、子どもを持つ親ならではの意識がみられる。その逆に、両親とも若い年齢層より古い意識の残存がうかがえる項目は、「男は仕事、女は家庭」、「女はあらゆる分野に進出は難しい」、「仕事・家事の平等分担は理想でしかない」である。

性別をさらに年齢別にみると、全体的に若い年齢層の方が意識は新しいといえる。しかし、高校生は大学生と較べて新しい意識とはいえず、むしろ30歳代よりも古い意識がみられる。男の年齢別分析で差が大きくみられた項目は、「男は中心的役割、女は補助」、「女の上司はいや」、「女の指図・命令はいや」、「夫は家事・育児に口を出すべきでない」、「妻は夫の仕事に口を出すべきでない」で、いずれも30歳代男性と男大生とにきわだった差がある。女の年齢別分析で差が大きくみられた項目は、「男は仕事、女は家庭」、「仕事、家事平等分担は理想でしかない」、「妻の収入・地位が上はいや」、「男女の育て方は違う」であり、最後を除いて30歳代女性と女大生とにあきらかな差がある。「男女の育て方は違う」で教師志望の男女大学生が、現実に子育て中の30歳代親よりも古い意識をもっている。

年齢・性別共に意識差がみられなかったのに「妻が仕事、夫が家事は変っている」、「女がリードで、男が従うのは変っている」、「男女の違いは政治・経済人格に及ぶ」、「出席番号は男が先」の４項目があり、いずれも反対意見で新しい意識なのだが、「男は仕事、女は家庭」、「男の職業、女の職業があるのは当然」と男女の棲分け意識が依然として存在している。

［考察］固定的性別役割分担意識は変ってきている。しかし、高校生が30歳代の、時に大学生の意識に近かったりしているが、彼等が問題意識薄い年代であること、また、地域差も考慮に入れて、ごく自然に早くから影響を与えることが大切である。さらに、この種の意識は女性より男性が古いのは当然であるが、いかに男性の意識の変容に迫っていくか、それには家庭にあって妻が、母親が、外にあっては女教師や女性先輩などの明確な意志が大切であり、女性自身がめざめていないところがあるので、男女共々にアプローチしていくことが求められる。

社会・文化１－４

幼児期における国民性形成（１）：

保育者と幼児の言語表現を中心に

金村　美千子
（秋草学園短期大学）

Ⅰ．はじめに

婉曲表現は、話し手が曖昧な表現をして聞き手が話し手の伝えたいことを察するものであり、相手を傷つけまいとする人間関係重視の心理規制が働いている。これは、人間関係を重視して相互依存関係を維持していく社会すなわち「間人主義社会」に適した言語表現として我が国に定着してきたものと考えられる。

これまでのところ、幼児の言語発達を国民性の形成という視点から研究したものは皆無である。本研究においては、幼稚園で保育者と幼児が、「婉曲表現」を使用しているという事実に焦点を当てて考察したい。

Ⅱ．方法

1993年11月25日から12月３日迄の間に岡山県Ｔ市の公立幼稚園で録音された言語資料を用いる。録音方法は４歳児（男児14名、女児13名）の担任Ｓ保育者に、携帯用カセットテープレコーダーを身につけてもらって、自由遊びの場面・昼食の場面・帰りの会の場面を各５回ずつ合計８時間56分録音してもらった。保育者の経験年数は約25年である。

Ⅲ．結果と考察

婉曲表現を、表現方法の違いから間接表現・省略表現・ソフトな文末表現の３つに分けて検討する。

１．間接表現

Ｓ保育者の使用した間接表現例をあげよう。

①　脱いだ靴どうするの？　Ａ君のお外の靴は。
a
あそこの靴箱へ入れて来ようや。
b

②　お部屋で帽子かぶっている人、どうしたらいいかな。

間接表現は、話し手がメッセージを間接的に表現するので、聞き手はメッセージが何を意味しているのかを判断しなければならない。メッセージの意味を解釈するには、場の状況・前後の文脈・文化的背景など諸々の情報を基盤にしなければならない。そこで、保育者は自らの間接表現の意味を幼児が読み取るには難しいと判断した場合には、①のように間接表現(a) の後でメッセージについて説明(b) を加えていることがわかる。Ｓ保育者によるこの型の表現は25例あった。

幼児の言語理解力や生活経験などの実態を把握している保育者は、間接表現だけでも十分意図するところが伝わると判断した場合には②のように間接表現のみ使用していることがわかる。Ｓ保育者による間接表現は42例あった。

友子(4:11)：Ａちゃんどんどん成長した。大人に。
Ｓ保育者　：そうよ。大きくなって大人になろうね。

これは、昼食時に友子が「残さないで食べなさい」というメッセージを「たくさん食べたら、どんどん成長して大人になれるよ」と間接表現したかったと思われる。そこで、保育者がそれを察して正しい表現を言い添えていることがわかる。

２．省略表現

①Ｓ保育者：折紙するんだったら、机の上でしたら。
②洋(4:11)：本当は押してみないと。判子押してくらあ（押してくるわ）。

金田一春彦は、日本人らしい表現の一つとして、物を言わない方がいいという気持ちから、あとの方を省いて止める言い方、すなわち、省略表現をとりあげている。Ｓ保育者の省略表現は、①を含めて18例あり、幼児が、それ以前に反復されてきた同一の生活経験や場の状況などから、後に続く言葉を容易に察することのできるものばかりであった。②のように、《前後の文脈から、どこまで話し手が表現すれば、聞き手がメッセージを正しく読み取れるか》を判断して表現できる力が、４歳児に身についていることがわかる。

３．ソフトな文末表現

①Ｓ保育者：Ａ君も出したんだったら、片付けた方がいいと思うけど。
②孝夫(5:04)：椅子、ないが。

日本人は断定表現を避ける傾向があり、そのための手段として「断定しない意味を表す語句を文末につける」ことを、金田一春彦は指摘している。Ｓ保育者によるソフトな文末表現は①を含めて69例あった。幼児のソフトな文末表現を見ると、②のように終助詞の微妙なニュアンスの相違を確実に把握して文意に適した終助詞を選択していることがわかる。

Ⅳ．まとめ

本研究においては、幼稚園で保育者と幼児の間で婉曲表現が使用されているという事実を指摘した。今後は、婉曲表現力と行動変容についても研究したい。

阪神・淡路大震災後のうわさについて

三宅　洋一
（兵庫県警察本部）

<はじめに>

平成７年１月17日午前５時46分兵庫県淡路島北部を震源とするマグニチュード 7.2の地震が発生し、兵庫県下での死者は5,480 名、倒壊家屋（全壊・半壊）は192,706 棟の大災害となった。

この様な災害後には、災害に対する前兆現象・地震・火事・盗難・災害の再発・予測に関するうわさが流布することはこれまでの研究・調査によって明らかにされている。本研究は今回の震災後にどの様なうわさが流布されたかをアンケート調査によって明らかにしようとするものである。

<方法と対象>

１　対象者：兵庫県警察職員３３８名（男性333 名女性５名、年齢範囲19～59歳、平均年齢40.0歳）

２　調査期間：平成７年２月～６月までの間

３　調査内容：

1)「震災後２・３日後の間にうわさを聞いたことがある」

2)「震災後２・３週間後の間にうわさを聞いたことがある」

3)「うわさは聞かなかった。」

4)「わからない」

上記の調査表に、1)・2)の回答を得た人について、うわさの内容を簡潔に記載させた上（複数回答）、うわさに対する信頼性についても「本当と思った」・「半信半疑」・「信じなかった」・「わからない」と評定させた。また、うわさを聞いた人は、住所地・勤務地・出動先いずれで聞いたのかも無記名で記載させた。

<結果>

１　うわさの有無

「震災後２・３日後、２・３週間後の間にうわさを聞いたことがある」・・２００名(59.2%)

「うわさは聞かなかった」・・８８名(26.0%)

「わからない」・・５０名(14.8%)

２　うわさの内容

うわさは70数項目にわたっており、内容を各項目別にまとめてみると以下の例があり列挙する。

1)『災害の再発・予測に関するもの』

ア　近いうちに大きな地震がくる（日時・場所・マグニチュードを特定したものを含む）

2)『災害の前兆・予言に関するもの』

ア　鳥がいなくなった・小動物が騒いだ

イ　予知した人がいる

3)『被災地で広まる災害直後の混乱に関するもの』

ア　放火・窃盗等が発生している

4)『被災地周辺・外部で広まる被災状況に関するもの』

ア　神戸（三ノ宮）・淡路が全滅している

イ　瀬戸大橋・武庫大橋が落下した

5)『災害・被害の原因に関するもの』

ア　明石・瀬戸大橋の建設工事が原因である

6)『災害後の仕事・勤務に関するもの』

ア　退職時期・異動時期が延びる

３　信頼性について

近いうちに大きな地震がくるといううわさについて、「本当と思った」22.9%、「半信半疑」59.0%「信じなかった」14.8%、「わからない」3.3%であった。

<まとめ>

地域によりうわさの内容が異なっていることが判明した。うわさの流布は、大震災後には不安感を生む土壌があり、緊張感を連続して維持しなくてはならないため、不安定な心理状態に加えて、将来予想される事態を誇張し、わい曲した情報が交錯して伝わったためと思われる。

女子プロレスに対する社会的態度の研究

富家　孝
（日本女子体育大学）

【緒言】

私は、２０年間新日本プロレス・リングドクターをやっている関係上、プロレスには非常に大きな関心と愛着を持っている。

わが国では女子も入れて、独立系も含めて現在は約２０以上の団体があるが、特に女子プロレスは異質なものとしてとらえられているようである。

プロレスを愛する私としては、それが不思議でたまらないが、一般の人々のイメージにもそれなりの理由があることと思う。

そこで今回、女子プロレスについての社会的態度を調査してみた。

【目的】

女子プロレスに対する社会的態度を測定するため、試合ＶＴＲ視聴後、質問紙に評定を行わせ、女子プロレスラーのイメージに関連する因子構造を見いだすことを目的とする。

【方法】

被験者：関東近郊にある女子大学文学部心理学科１年の学生７０名。

使用ＶＴＲ：１９９５年２月２６日に行われた全女Ｑｕｅｅｎ　Ｄｏｍ’９５が収録されているビデオテープを用いた。全６試合のうち、４人ずつの計８人が出場した１試合を人格心理学の講義時間中に視聴させた。

質問紙：長島(1966、1967）によって作成されたSelf Differential Scale（以下、ＳＤＳと略）を社会的態度の測定に用い、この質問紙に含まれる形容詞対３８項目を、５件法（「とても」「かなり」「どちらでもない」）で評定させた。

【結果】

ＳＤＳの３８項目に対し、正規性の検討を行ったところ１６項目に問題が見られたので削除した。

残りの２２項目に対して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値の大きさにより３因子を指定したところ、最適解を得た(Table 1)。

得られた３因子の第１因子は、対人的な印象に関わる項目対が多いことから「印象形成」の因子、第２因子は、選手の人柄をイメージするときに用いると思われる項目があることから「選手の人柄」の因子、第３因子は選手の性格について評価するときに用いると思われる項目があることから「選手の性格」の因子と名づけた。

各因子を構成する項目の合計点を下位尺度得点とし、３尺度得点の相関係数を算出したところ、「印象形成」因子の得点と「選手の人柄」因子の得点の間に有意な負の相関が見られた(r=-.39,p<.01)。

なお、「印象形成」と「選手の性格」および、「選手の人柄」と「選手の性格」の合計点に有意な相関は見られなかった。

【考察】

プロレスは、競技と言うより全く異質なショースポーツとされているが、その中でも女子プロレスは男子プロレスよりもさらに「うさんくさく」「いかがわしい」ジャンルに見られている。

しかし、その女子プロレスに対しての態度やイメージを決めるのは、結局個々の選手に対する好意を持つ気持ち、また、その選手の人間の全体像が決め手になっているようである。

そのような意味で、このジャンルは他のスポーツにくらべて人間的な要素が大きな位置を占めているといえよう。

Table 1　バリマックス回転後の因子負荷量

項		目	F１	F２	F３	共通性
19	角がある	丸い	0.720	-0.225	-0.057	0.573
18	不安な	安らかな	0.643	-0.045	-0.163	0.288
20	苦しい	楽しい	0.623	-0.066	0.137	0.412
15	つめたい	あたたかい	0.588	-0.124	0.176	0.393
13	きびしい	やさしい	0.587	0.131	0.009	0.362
3	不安定な	安定した	0.512	-0.056	-0.160	0.288
14	卑屈な	おおらかな	0.483	-0.388	0.135	0.403
11	やわらかい	かたい	-0.433	0.100	-0.017	0.198
26	誠実な	不誠実な	-0.079	0.744	-0.220	0.609
29	敏感な	鈍感な	0.165	0.705	-0.066	0.529
32	注意深い	不注意な	-0.275	0.652	0.197	0.541
23	深い	浅い	0.052	0.625	-0.052	0.397
28	慎重な	軽率な	-0.411	0.581	0.172	0.536
33	まじめな	不まじめな	-0.387	0.499	-0.034	0.400
16	気持ち悪い	気持ちよい	0.426	-0.536	0.277	0.546
10	たよりのない	たのもしい	-0.010	-0.025	0.613	0.376
27	内面的な	外面的な	0.138	0.040	0.601	0.382
21	地味な	派手な	0.042	-0.104	0.549	0.314
36	理性的な	感情的な	-0.250	-0.049	0.394	0.220
二乗和			3.394	3.015	1.519	7.929
因子寄与率　(%)			17.86	15.86	7.99	

看護１－１

看護学生の自我同一性に関する研究
――因子構造と因子得点平均値に影響を及ぼす属性

岡村　千鶴　　　　　　　　　　　　○内海　滉
（東京女子医科大学看護短期大学）　　（千葉大看護学部看護研究センター）

［目的］近時，看護教育におけるカリキュラムの問題性は，益々その意義を高め，人間のケア学的学科編成の基礎として重要視されている。特に，学生各人の当該カリキュラムに対する自我同一性は数多くの研究者の注目するところであり，各学生養成機関からの報告が積み重ねられつつある。われわれは，Erikson をはじめとする自我同一性研究の主流に立ち戻り，Marcia 松下の構造的アプローチにより，若干のデータを得たのでこれを検討したい。

［方法］学生 348人のうち同意を得られたもの 326人を対象に「看護学生の自我同一性に関する調査項目」（48項目）および属性16項目を整理し，前者の全学年での因子分析および各学年別の因子分析の得点を属性群別に比較，分散分析にて，その影響を観察した。

［結果］表 1．表 2．表 3．は全学年における因子負荷量の表である。

因子負荷量表（全学年３２６名）　表1

	項目	F1：職業の同一性達成	F2：価値の早期完了
36	私は，自分が将来の職業を目指して着実に歩んでいると思う。だから，よほどのことがない限りその志望を変えることはないと思う。	0.72	
30	以前，私は将来の職業について，いろいろと考えたり迷ったりしたが，今は，はっきりと決心がついた。	0.70	
46	私は，かつて自分に向いた職業があると思っていたが迷いが生じ，今はどのような職業がよいか模索中である。	−0.66	
33	将来，私の興味のもてる職業に就きたいと考えているが，まだ具体的には決めていない。	−0.61	
37	私には理想の職業はあるが，私の能力からすれば，実現は無理だろう。結局，それをあきらめて別の職業に就くのではないかと思う。	−0.61	
38	私の考えている将来の職業について両親も賛成してくれているので心強い。	0.57	
40	私は，将来の職業として考えているものがある。しかし，もしもっとよい職業が見つかれば，その職業を変えてもよいと思っている。	−0.53	
48	今まで志望していた職業と全く関係がない職業でも，よい職業があれば，その方を選びたい。	−0.51	
47	今，勉強していることは将来の職業に結びついており大変役立つと思う。	0.49	
35	将来，私は定職につくつもりがない。	−0.44	
29	私には将来つこうと思っている職業がある。両親は私がその職業に就くことを賛成してくれているし，私もその職業に就くことは親孝行の１つだと思っている。	0.43	
7	私は，両親の生き方を立派だと思う。両親の生き方を参考にしつつ，自分なりに生きていきたいと思っている。		0.79
24	私がとても興味があるのは，両親の価値観や人生観である。		0.72
28	私が，一番尊敬しているのは両親である。		0.71
27	私は，両親の価値観や人生観は正しいものだと思っている。		0.65
17	私は，両親の価値観や人生観を知りたいと思う。		0.63
16	私の考え方は，両親に強く影響されていると思う。		0.56
15	私は，両親とは違った生き方をしてみたいと思う。		−0.56
4	私は，両親と価値観や人生観についてよく話し合う。		0.51
19	両親と私の価値観はかなり異なっているが，私は自分の価値観を変えるつもりはない。		−0.51

表　2

	項目	F3：価値の拡散	F4：職業のモラトリアム
21	自分にとって大切なことは何かなどあまり考えたことがない。	0.68	
23	私は，自分の生き方についていろいろ考えたり，他人の生き方をみたりするうちに自分にとって大切なことが何かわかった。	−0.65	
12	「自分にとって，生きていく上で大切なこと」等と堅苦しく考えるのはいやだ。	0.58	
10	私は，人生の目標を持っている。	−0.58	
25	私には，今のところはっきりした価値観がない。これから自分なりの価値観を見出していこうと思う。	0.54	
20	私は，自分がいつ頃から今のような価値観を持つようになったのかわからない。	0.51	
14	自分の生き方について確信が持てなくなったことがあるその時から，自分の生き方について考えることをさけている。	0.49	
3	私には，尊敬している人がいる。その人と同じようにはできないが，自分なりの一生を一生懸命生きていこうと思う。	−0.49	
9	尊敬している人がいる。	−0.48	
1	私は，まだ自分の生き方に対する姿勢が定まっていないだから，自分の生き方について確信が持てないでいる。	0.36	
44	自分の成長に結びつくことだったら，どんな仕事でもしたい。		0.56
48	今まで志望していた職業と全く関係がない職業でも，よい職業があればその方を選びたい。		0.52
40	私は，将来の職業として考えているものがある。しかしもっとよい職業が見つかれば，その職業を変えてもよいと思っている。		0.51
41	私は，できるだけ多くの資格を取りたいと思う。		0.49
45	当面の試験（看護師国家試験）に合格したら，次の試験を受けたいと思う。		0.48
31	私は，どのような職業が時間に縛られず，自分の意志のままに行えるかわからないが，とにかく時間に縛られず自分の意志のままに行える職業に就きたい。		0.46
32	自分の自由な時間がもてる職業がよい。職業が忙しすぎるのはいやだ。		0.45
18	私は何事にもとらわれず，とにかく自由に生きていきた		0.44

表　3

	項目	F5：価値のモラトリアム	F6：職業の早期完了	F7：価値の達成
5	自分の生き方に自信がもてなくなったことがあるその時から，自分がどのような生き方をしたらよいのか思い悩んでいる。	0.70		
13	時々，私は何のために生きているのだろうかと考え込むことがある。	0.65		
6	自分にふさわしい生き方を見出そうと努力しているが，今はまだ見つかっていない。	0.64		
26	私には，かつてはっきりした価値観があったように思う。しかし現在は，はっきりしたものをもてずに悩んでいる。	0.60		
1	私は，まだ自分の生き方に対する姿勢が定まっていない。だから，自分の生き方について確信が持てないでいる。	0.52		
25	私には，今のところはっきりした価値観がない。これから自分なりの価値観を見出していこうと思う。	0.41		
46	私は，かつて自分に向いた職業があると思っていたが迷いが生じ，今はどのような職業がよいか模索中である。	0.36		
34	私には，一応将来つきたいと思っている職業があるが，自分に自信がなくて考えがぐらつくことがある。	0.37		
11	両親の生き方に反発を感じたこともあったが，今はわかるような気がする。	0.33		
42	私は，将来の職業についてすんなりと決めたと思う。		0.57	
3	私には，尊敬している人がいる。その人と同じようにはできないが，自分なりの一生を一生懸命生きていこうと思う。		0.52	
43	今，私がつきたいと考えている職業は，いくつかの職業の中からよく検討して決めたものである。		−0.52	
9	尊敬している人がいる。		0.47	
39	私が将来つきたいと思っている職業は，小さい頃から考えていたものだ。その職業に就くことに疑問を持ったことはない。		0.45	
19	両親と私の価値観はかなり異なっているが，私は自分の価値観を変えるつもりはない。			0.54
8	私は，今後も自分の生き方や価値観を変えないと思う。			0.51
31	私は，どのような職業が時間に縛られず，自分の意志のままに行えるかわからないが，とにかく時間縛られず，自分の意志のままに行える職業に就きたい。			0.51
22	両親には，もっと私の価値観・人生観をよく理解してもらいたい。			0.50
18	私は，何事にもとらわれず，とにかく自由に生きていきたい。			0.39

看護学生の自我同一性に関する研究（第３報）

――― 衛生看護高校における調査 ―――

○松永　保子　　　　　　　内海　滉
（新潟県立看護短期大学）　（千葉大学看護学部）

［研究目的］

衛生看護高校は、将来の職業を看護婦と決めた生徒が入学してくるが、卒業後、全員が必ずしも看護婦になるわけではなく、多数の生徒が在学中に、本当に自分は看護婦に向いているのか、との疑問を持つ。看護婦の養成において、職業的自我同一性を植えつけることはきわめて重要である。

中学校在学時という早期において、すでに将来の職業を決めねばならぬ衛生看護高校生を対象に、看護婦という職業が生徒自身の中でどのようにとらえられているか、職業に対する迷い、不安、意欲などを調査する。

［研究方法］

W看護高校 158名、C看護高校84名、計 242名の１～２年生を対象に、松下（1990）が作成した「自我同一性地位テスト」（中西が J.E.Marcia の「自我同一性地位面接」を基に作成した60項目からなる質問紙をさらに看護短大３年課程生用に作成したもの）を衛生看護高校生用に改めた質問紙と同時に行った25項目のフェイスシートにより検討した。

「自我同一性地位テスト」の全調査48項目は５段階に数量化して入力し、バリマックス回転による因子分析を行い、８因子を抽出した。

また、フェイスシートの全項目もそれぞれ数量化して入力し、各項目ごとに分散分析を行った。さらに８因子の因子得点とフェイスシート得点との相関係数を算出した。

［結果及び考察］

第１因子では職業の同一性達成と職業のモラトリアム因子、第２因子では価値のモラトリアム因子、第３因子では価値の拡散因子、第４因子では価値の早期完了因子、第５因子では価値の早期完了と職業の拡散因子、第６因子では職業の拡散と職業の同一性達成因子第７因子では価値の早期完了と価値の拡散因子、第８因子では職業のモラトリアムと職業の同一性達成因子に分離した。しかし、第３、第４、第５、第７、第８因子には他の幾つかの要素が含まれていた。

分散分析において有意であったものは、Ｐ＜.01 ではＱ20の第１因子、第２因子、第３因子、Ｑ21の第１因子、Ｑ23の第４因子、 Ｐ＜.05 ではＱ20の第４因子、第６因子、第７因子、Ｑ21の第６因子であった。

因子得点とフェイスシート得点との相関では、「誇り」と「やりがい」で職業のモラトリアムにおいて正相関、職業の拡散において逆相関がみられた。しかし、「尊い仕事」に相関がみられなかったのは、「尊い仕事」という概念が実感されなかったと思われる。

また、職業の同一性達成については第１因子と第６因子に部分的に含まれており、高校生においては未だに危機感を体験していないためと思われる。

Q.20 看護学生であることに誇りを持つことについての分散分析

第１因子

	変動	自由度	分散	分散比F
群間	11.95	2	5.97	6.18**
群内	230.04	238	0.97	
総	241.99	240		

第６因子

	変動	自由度	分散	分散比F
群間	6.41	2	3.20	3.29*
群内	231.94	238	0.97	
総	238.35	240		

Q.21 看護婦はやりがいのある仕事だと思うことについての分散分析

第１因子

	変動	自由度	分散	分散比F
群間	21.37	3	7.12	7.65**
群内	220.62	237	0.93	
総	241.99	240		

第６因子

	変動	自由度	分散	分散比F
群間	11.48	3	3.83	4.00*
群内	226.88	237	0.96	
総	238.35	240		

**:p＜.01
*:p＜.05

因子得点との相関

	f_1	f_2	f_3	f_4	f_5	f_6	f_7	f_8
Q.20 誇り	-.21**	.07	.20**	.19**	-.10	.14*	-.13*	.08
Q.21 やりがい	-.29**	-.01	.14*	.17**	-.04	.20**	-.11	.09
Q.23 尊い仕事	-.07	-.02	-.02	.06	.02	-.05	-.02	.01

**:t検定p＜.01
*:t検定p＜.05

看護1－3

看護職の自我同一性形成に関する研究

○安藤詳子　　渡邉恵子　　内海滉
（名古屋大学医療技術短期大学部）　（名古屋大学医療技術短期大学部）　（千葉大学看護学部）

【目的】

筆者らは昨年本学会で看護職員の中の臨床実習指導者の自我同一性について看護学生と比較した結果、看護学生の場合より臨床実習指導者の方が、職業観・価値観ともにあるまとまりをもった意識を持っていることを報告した。しかし、臨床実習指導者は看護職員集団の中でリーダー的役割を担う立場であり、看護職員一般の傾向との違いが予測された。今回、看護職員一般（ある病院に勤務する看護婦(士)全員）を対象に調査結果の検討を進めたので報告する。

【方法】

対象は、国立大学病院の看護職員 451名である。

調査方法は、留置法による自記式質問紙法である。

質問内容は、松下らの開発した看護学生用の自我同一性地位テストを看護職員用に一部修正した質問紙と看護職員の属性に関する項目である。

分析方法は、自我同一性地位テストの回答を因子分析して、バリマックス回転法により８因子を抽出し、属性群別に因子得点を比較検討した。

【結果】

回収数425（回収率94.2%）の内、有効回答 420を因子分析し、累積寄与率48.9%で８因子を抽出した。対象者の平均年齢は 30.9±9.8歳で、現病院就業継続平均年数は7.9±8.5年であった。

エリクソンの自我同一性理論に基づくMarcia, J. E. の四つの自我同一性地位の概念を採用し、中西の同一性地位の尺度により因子分析によって抽出した８因子について以下のように命名した。第１因子から順に価値のモラトリアム因子、職業の早期完了・同一性達成因子、価値の同一性拡散因子、価値の早期完了因子、職業のモラトリアム因子、職業の同一性拡散因子とし、第７因子，第８因子を雑因子と命名した。

属性群別比較では、特に、職業の早期完了・同一性達成因子の所属部署別の因子得点平均値に相違がみられた。（表１参照）

所属部署別の職業の早期完了・同一性達成因子の因子得点平均値は、ﾘﾊﾋﾞﾘ系病棟が最も高く、外科病棟および外来とは有意水準5%で差がみられる。内科病棟と外科病棟を比較すると内科病棟の方が高く、小児科病棟は内科病棟と外科病棟の中間に位置していた。また、病棟外の部署では、集中治療室，手術室，外来の順に因子得点が高かった。

表１　職業領域　早期完了・同一性達成因子
所属部署別　因子得点平均値

所属部署	n	因子得点M	
外科　病棟	39	-0.18	*
内科　病棟	62	0.18	
ﾘﾊﾋﾞﾘ系病棟	29	0.27	
小児科病棟	35	0.01	*
集中治療室	34	0.11	
手　術　室	30	-0.12	
外　　来	38	-0.24	

＊ P<0.05

【考察】

自我同一性地位の構造については、臨床実習指導者の場合(1)では、職業領域と価値領域ともに同一性達成とモラトリアムの二つの地位にまとまっていたが、看護職員一般では、そのまとまりは見られなかった。臨床実習指導者は看護職員集団の中で看護実践能力に優れリーダー的な立場であることが関連し、「自分なりの確立した、或いは、迷いながらも努力している」という意識が看護職員一般よりも高いと考えられる。

職業の早期完了・同一性達成因子において看護職員の所属部署別に相違がみられたのは、診療科等が影響し業務内容が異なるため看護独自の機能を発揮できる機会に違いがあることが関連すると考えられる。

これまで看護学生及び看護職員の自我同一性について検討してきたが、一定地域の国立短大及び病院の調査結果であり、今後調査対象をさらに拡大して分析する必要がある。

（文献）

(1) 安藤詳子他：看護職員の自我同一性－看護学生と臨床実習指導者の比較，日本応用心理学会　第61回大会発表論文集，P42

看護1－4

看護教育における自己教育力

○佐藤みつ子　森　千鶴　　　　内海　滉
（東京都立医療技術短期大学）　（千葉大学看護学部）

【目的】

自己教育力とは、自分で、自分を、教育する力を言い、これは自分の中に教育する自分と教育される自分をもち、葛藤を通してよりよい自己を形成する営みのことを指す。看護教育においては、青年期にある人を対象に教育し、しかも生涯学習の必要が叫ばれている現代では自己教育力を育成することが欠かせないことである。筆者らの調査結果では、1年次、2年次、3年次の学年別により目標への向かい方や学習意欲に違いが認められ、これは学習環境の影響によるものと考えられた。そこで、本研究では、学習のひとつである家庭学習の状況と自己教育力との関連および経年的変化について明らかにすることを目的とした。

【方法】

看護短期大学生平成4年度入学生を対象に3年間継続的に調査した。1年次84名、2年次78名、3年次78名で合計すると延べ240名である。調査内容は、梶田の自己教育力調査項目を用い、これに家庭での学習時間、学習計画、予習復習の状況の質問項目を加え、5段階スケールで質問紙法で調査した。

【結果】

有効回答は、219名（91.3%）である。

1．家庭における学習状況について

学習時間は、1年次および2年次が「1時間未満の学習」が多く、3年次は「2～4時間の学習」が多かった。学習計画の立案は、1年次が「学習計画は立案せず」が多く、2年次は「数日～1週間の計画立案」、3年次は「学習計画を立案せず」が少なかった。学習計画にそっての実施では、1年次は「計画倒れ」が多く、3年次は、「計画にそった学習」が多い。予習復習では、1年次が「2～3日毎」、2年次は「試験の前だけ」「ほとんどやらない」が多い。3年次は「予習復習」をしない者が少ない。

2．家庭での学習状況と自己教育力との関連

自己教育力調査項目を因子分析し6因子を抽出し、『プライド因子』『自己統制力因子』『向上因子』『自信喪失因子』『目標達成意欲因子』『学習嫌悪因子』と命名した。累積寄与率（49.3%）。年次別では、学習嫌悪因子において、1年次と2年次および3年次との間に0.1%以下で有意な差が認められた。また、学習計画の立案状況では、1年次において「数日から1週間の計画は立てる」群と「計画は立てない」群との間にも5%の有意差が認められた。学習計画にそった実施状況では、1年次の場合、プライド因子において「一部計画にそった学習」と回答した群と「計画倒れに終わる」群との間に5%の有意差が認められた。

2年次の場合、学習嫌悪因子において、「一部計画にそった学習」と回答した群と「計画倒れに終わる」群との間に5%の有意差が認められた。

【考察】

1．家庭における学習状況

家庭での学習時間は、1、2年次よりも3年次の方が多くなっている。また学習計画も1年次は立案しない者が多く、2年次になると数日から1週間という短期的な計画を立て、さらに3年次になると長期的な計画を立てる者が多くなっていた。この学習計画の実施状況をみると、1年次は計画倒れの者が多く、2年次は1年次よりも計画にそった学習をしていることがわかった。

これらのことから、学年が進むにつれて学習の計画性や実行力が高まり、自主的な学習習慣が身についていると考えられる者が多くなっていることが明確になった。これは、3年次の学習が臨床実習が多くなり、また国家試験受験を間近に控えていることを実感しているためと推察される。

2．学習状況と自己教育力との関連

1年次が、他学年よりも学習嫌悪意識が低く、2、3年次は高い傾向が認められた。1年次の方が、家庭での学習時間が少なく、学習を嫌うまで学習していないためと考えられる。学習状況との関連では、1年次は、数日から1週間の計画は立てる群と計画は立てない群とでは、学習計画性のある群の方が学習嫌悪意識が高い傾向が認められる。一部計画にそって学習する群とそうでない群では、計画にそって学習する群の方がプライド意識が高い傾向が認められた。

これらのことから、学習に興味をもち計画を立て、計画にそって学習している方が、自分に満足をしていたり自信をもっていることが明らかになった。

看護1－5

看護学生のSelf－Esteemに関する研究
－SEと小児看護学実習の自己評価との関連－

○山口桂子　（愛知県立看護大学）
内海　滉　（千葉大学看護学部）

研究目的

Self-Esteem（以下SEとする）とは、自尊感情と邦訳されることが多く、一般に「人が自分の自己概念と関連づける個人的価値及び能力の感覚」と定義され、「個人の行動や適応様式を規定する重要な要因」といわれている。一方、小児看護学臨床実習は、非常に多くの人間的関わりの中で行われる学習の形態であるが、その課題達成の過程においてSEが重要な役割を果たしているのではないかと考えられる。

そこで、今回は、SEと実習終了後に行う目標に対する自己評価との関連に注目し、分析・検討したので報告する。

研究方法

(1)対象：A看護短期大学3年課程3年生42名と同2年課程2年生40名の計82名である。

(2)方法

1)SEの測定：Rosenberg,M のSelf-Esteem 尺度を用いて、小児看護学実習の終了時に測定した。SE得点の分類は、合計得点の20点以下を低得点群、21～29点を平均群、30点以上を高得点群とした。

2)自己評価の調査：実習終了時に学生自身が記入する自己評価表を用いた。その内容は、実習目標6領域25項目から構成されており、各項目について「できる・ややできる・ややできない・できない」の4段階での自己評価を行うものである。実習目標の内訳は、成長発達段階の把握と評価－4項目、疾病理解－4項目、日常生活援助の実施－3項目、両親・家族の理解－4項目、看護過程の実施と評価－8項目、看護技術の習得－2項目である。分析にあたっては、4段階評価を「できる」4点から「できない」1点まで点数化し、集計・分析した。

結果と考察

1　SEの得点

全対象のSE得点は、最低点15から最高点39まで分布し、低得点群10名(12.2%)、平均群57名(69.5%)、高得点群15名(18.3%)に分類された。また、平均値では、25.47 ±4.46で、菅らの青年期の平均値とほぼ一致した。これを課程別・入試方法別に見ても差は認められなかった。

2　SEと自己評価との関連

実習目標に対する自己評価との関連を見ると、6領域全てにおいて高得点群が高い自己評価をしており、特に看護過程の実施では、他の2群との間に有意差が見られた。

3　SEと目標の因子分析との関連（表1参照）

目標25項目について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、累積寄与率 43.29%で5因子を抽出した。因子の解釈は、第1因子「アセスメント・計画因子」、第2因子「家族理解因子」、第3因子「発達評価因子」、第4因子「知識活用因子」、第5因子「援助行動因子」である。因子得点の平均値について、SE得点別の比較を行ったところ、「アセスメント・計画因子」において有意差が見られた。

以上より、SEの多少によって自己評価に違いのあることがわかった。中でも、SEの高い群では自己評価が高くなり、その傾向は特にアセスメントや計画の立案など看護過程の中の思考部分に著明に見られることがわかった。この傾向に対して、教員は、教員自身の評価と比較しながら、学生の過大評価や過小評価に対する適切な指導を行い、個々の学生が自分の学習課題を正しく認識できるように関わることが必要である。

表1　SE得点別因子得点の比較

	低得点群	平均群	高得点群	
F1	-0.629	-0.120	0.876	*
F2	-0.448	0.032	0.179	
F3	0.302	-0.119	0.252	
F4	0.539	-0.061	-0.129	
F5	0.102	-0.028	0.039	

*低－高間：P<0.01, 平－高間：P<0.01

看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因の分析（その5）

○村本淳子　（東京女子医大看護短大）
内海　滉　（千葉大学看護学部看護実践研究指導センター）

＜はじめに＞

患者・家族の性に関する看護問題の抽出やその援助方法を考える時、他の看護援助とは異なり看護者の性の価値観・考え方が大きく影響する。性科学者であるPoorman は看護者自ら、自分の性の価値観を明らかにしておくことの重要性について述べている。さらに学生は性のアイデンティティ確立の時期にあり、性の体験・考え方とともにその要因について把握しておくことは重要である。

我々は58回の本学会から看護学生の性の考え方・行動に影響を及ぼす要因について報告してきた。
今回は看護学生の性に関する体験・行動・考え方に着目し、それらの正準相関分析により影響因子について明らかにすることを目的とする。

＜方法＞

調査対象は都内の３年課程私立看護短期大学の２年次の学生 113名で、平均年齢は19.7才である。

調査方法は選択法の質問用紙を用い、アンケート方式で調査した。質問内容は家庭の環境20項目、性に対する自分の考え・性行動18項目、性のイメージ20項目、異性の親（ここでは父親）のイメージ20項目の合計78項目である。

＜結果および考察＞

回収率は100%で、そのうち有効回答は 111名（98.2%）であった。

１．性行動・体験・考え方の実態

性行動・体験の実態については、性行為の体験の有無がほぼ50%ずつで1993年度の全国平均よりやや高かったが、その他の体験は全国の平均とほぼ同様な結果であった。また性の考え方の実態については表のとおりである。

看護学生の性の考え方の実態

	はい	どちらともいえない	いいえ
異性に関心がある	88人79.3%	20人18.0%	3人 2.7%
性について学習したい	44人39.6%	62人55.9%	5人 4.5%
学校で性について学習したい	37人33.3%	51人46.0%	23人20.7%
性の知識はある方だと思う	50人45.1%	43人38.7%	18人16.2%
性の話しは人にするべきではないと考えている	8人 7.2%	37人33.3%	66人59.5%

２．性行動・体験・性の考え方の因子と影響を及ぼす因子

それぞれバリマックス回転法により、因子分析を施行し、それぞれ３因子を抽出した。その結果、性行動体験・性の考え方の第１因子は“性の話しをしたり、性の話しを聞いたりすることが好きで性の学習をしたい”という性の考え方が肯定的である因子、第２因子は自分の性役割を肯定している因子、第３因子は性行動が消極的である因子であった。

性行動・性の考え方に影響を与える因子として『家庭内のこと』『性ということばのイメージ』『父親のイメージ』の項目からそれぞれ３因子ずつ合計９因子を抽出した。

３．性行動・体験・性の考え方の３因子の上下別と影響を及ぼす９因子との関係

表に示すように、３因子の上下別に９因子の影響因子をみると、６項目で有意の差がみられた。性行動・体験・性の考え方と最も関係する要因は『性ということばのイメージ』であった。

性の行動・考えの3因子の上下別と影響を及ぼす要因との関係

影響を及ぼす因子 ＼ 性の行動・考えの3因子／因子の上下	性の行動・考え f1因子		性の行動・考え f2因子		性の行動・考え f3因子	
	上	下	上	下	上	下
家庭内f1因子			.511 ***	-.482		
家庭内f2因子						
家庭内f3因子						
性語イメージ f1因子			-.397 ***	.708		
性語イメージ f2因子	.596 *	-.659				
性語イメージ f3因子	-.421 *	.509			.245 *	-.372
父親イメージ f1因子						
父親イメージ f2因子			-.375 *	.172		
父親イメージ f3因子						

*P<0.05　**P<0.01　***P<0.001

発達・教育1－1

看護学生の情意的発展

その4－自由討議における変化

○金井　悦子　糸井　志津乃
日本赤十字武蔵野女子短期大学

＜研究目的＞

看護学生の自由討議における情意的発展の変化を明らかにする。

＜研究方法＞

1)期間・対象　平成6年6月～7月　1年生　82名
平成7年6月～7月　1年生　77名　　計 159名

2)研究のすすめ方；学生を8名位のグループに分け、グループ毎に自由にテーマを決め討議をすすめる。週1コマ5回実施。学生は1回終了毎に、○印をつける。

3)分析方法；①「関係発展評価法」に記入された○を数量化、関係別発展率を算出する。②5回の発展点を各項目毎に1・2・3回第1位相、2・3・4回を第2発展位相、3・4・5回を第3発展位相とし、位相の変化を明らかにする。

＜結果及び考察＞

「関係発展評価法」につけられた学生全体の自己・人・物・集団内関係別発展をみると（図1）、最も高いのは人との関係①、次いで自己との関係①、人との関係③の順となっている。

159 名の学生について項目毎に位相別に分類すると3パターン7型に分けられた。3相に共通している継続的パターンは、高い発展を示している同一発展顕在と発展の低い同一発展潜在の2つに、2相に共通している典型的パターンは、後期発展顕在・後期発展潜在及び1・3相が低く2相目が高いもの、1・3相が高く、2相目が低い不同発展待機の3つに、また1相のみで共通のない単発的パターンは、1・2・3相が上昇している持続発展顕在と1・2・3相のいづれかが単発的機会発展待機の2つに分けられた。

学生全体の自己・人・物・集団内関係の発展率を見ると、全体状況を作っている人としての認識が育ち、ありのままの自己の安定がもたらされ、役割をとりながら自由にふるまえている。またテーマについて知識情報を活用することができ、集団の動きにのってグループの成員として活動していることがあらわれている。

各位相による変化発展パターン別に関係発展を項目別にみると表1の通りになる。

自己との関係について①は典型的後期発展顕在と単発的持続顕在、②は単発的持続発展顕在、③は典型的後期発展顕在、④⑤は典型的後期発展顕在と単発的持続発展顕在が多く、自己の安定・拡大・確立・充実・開発の変化の認識が後期に顕在する認識が育っている。

人との関係について①は継続的同一発展顕在高く、③④は典型的後期発展顕在に次いで単発的持続発展顕在が高く、⑤については継続的同一発展顕在と典型パターン後期発展顕在及び後期発展潜在を合わせると68％（109名）になり、その人の存在の仕方や、その人らしい仕方で継続したり前期後期に顕在するという変化発展が見られる。物との関係については①②④⑤共に典型的後期発展顕在に30％づつの顕在がみられるが、これはその時のテーマに即して知識技術を統合しながら新しい状況をつくり後期に顕在化しているといえよう。

集団内関係について①②は単発的持続発展顕在に③④⑤は典型的後期発展顕在にのびがみられているいるが、これらは討議を重ねることによって状況のなかでうすれることなく顕在化しており、コミュニケーション演習の学習目標の最終段階である自己と人と物（テーマ）はいまここで新しく変化発展していることを体験を通し認識しているということができる。

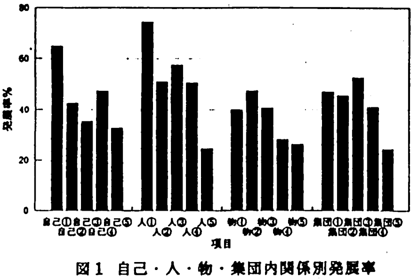


図1 自己・人・物・集団内関係別発展率

表1　変化発展パターン別　自己・人・物・集団内関係発展(率)

発展変化パターン ＼ 項目	継続的		典型的			単発的	
	同一発展顕在	同一発展潜在	後期発展顕在	後期発展潜在	不同発展待機	持続発展顕在	機会発展待機
自己との関係①	26 (15.7)	0 (0.0)	53 (33.3)	17 (10.6)	11 (6.9)	40 (25.2)	12 (7.5)
自己との関係②	26 (10.0)	8 (5.0)	37 (23.2)	15 (9.4)	11 (6.9)	[illegible] (35.2)	16 (10.0)
自己との関係③	12 (7.5)	18 (11.3)	41 (25.7)	28 (17.6)	12 (7.5)	41 (25.7)	7 (4.4)
自己との関係④	15 (9.4)	9 (5.6)	51 (32.0)	21 (13.2)	15 (9.4)	33 (20.7)	15 (9.4)
自己との関係⑤	8 (5.0)	19 (11.9)	51 (32.0)	22 (13.8)	9 (5.6)	40 (25.1)	10 (6.2)
人との関係①	47 (29.5)	1 (0.6)	36 (22.6)	36 (22.6)	11 (6.9)	27 (16.9)	11 (6.9)
人との関係②	21 (13.2)	12 (7.5)	39 (24.5)	24 (15.0)	12 (7.5)	38 (23.8)	13 (8.0)
人との関係③	25 (15.7)	4 (2.5)	40 (25.1)	21 (13.2)	14 (8.8)	38 (23.8)	17 (10.6)
人との関係④	13 (0.8)	2 (1.2)	45 (28.3)	24 (15.0)	14 (8.8)	42 (26.4)	19 (11.9)
人との関係⑤	7 (4.4)	41 (25.7)	35 (22.0)	33 (20.7)	12 (7.5)	23 (14.4)	8 (5.0)
物との関係①	15 (9.4)	15 (9.4)	48 (30.2)	29 (18.2)	13 (8.1)	27 (16.9)	12 (7.5)
物との関係②	19 (11.9)	6 (3.7)	44 (27.6)	27 (16.9)	17 (10.6)	28 (17.6)	18 (11.3)
物との関係③	20 (12.5)	10 (6.2)	37 (23.2)	33 (20.7)	15 (9.4)	26 (16.3)	18 (11.3)
物との関係④	11 (6.9)	30 (18.8)	47 (29.5)	19 (11.9)	14 (8.8)	26 (16.3)	12 (7.5)
物との関係⑤	9 (5.6)	39 (24.5)	44 (27.6)	20 (12.5)	11 (6.9)	22 (13.8)	14 (8.8)
集団内関係①	23 (14.4)	9 (5.6)	35 (22.0)	23 (14.4)	11 (6.9)	[illegible]	14 (8.8)
集団内関係②	19 (11.9)	10 (6.2)	36 (22.6)	16 (10.0)	17 (10.6)	[illegible]	17 (10.6)
集団内関係③	23 (14.4)	4 (2.5)	47 (29.5)	25 (15.7)	14 (8.8)	28 (17.6)	18 (11.3)
集団内関係④	9 (5.6)	16 (10.0)	57 (35.8)	18 (11.3)	16 (10.0)	26 (16.3)	17 (10.6)
集団内関係⑤	4 (2.5)	35 (22.0)	[illegible]	16 (10.0)	9 (5.6)	31 (19.4)	11 (6.9)

※（　）＝％

「関係学・心理劇式 集団状況・発達評価法」の基礎研究Ⅱ

――「３つで考える」思考の展開の構造――

矢吹　美美子　（児童臨床研究会）

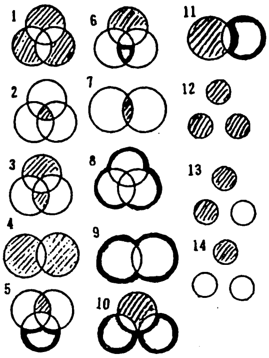
１．目的

本研究会では、1989年より本評価法の作成研究を進め、「３つで考える－三者関係的思考」の課題を用意した。その基礎研究として、幼児の思考の展開について、①二者で差異性を考える場合、どちらか一方の特性を基に他者を比較するという思考が展開しやすく、三者で差異性を考える場合には、相対的に独立した三つのものの特性をとらえることと、三者に流れる共通基盤をとらえることができ、三者の差異を構造化して考える思考が展開する傾向がある（1990）②乳幼児は、自己と人と物との、また、父母子の三者関係的状況において、生活・体験し、思考や「同じ」「違う」等の抽象概念を育てている。関係思考の展開は知覚や体験のイメージなど内容の把握はさまざまで、自己においてだけ成立するような差異思考の共通基盤であっても、擬態音で表わされる感覚的把握であっても、状況を共有することで理解できることばの使い方、ことばで説明できず行為で表演する方法であっても、関係思考は展開している（1994）などが明らかになった。本研究では、３つで考える思考の展開の構造について考察する。

２．方法

評価法を活用した幼児（4:9～6:6）の発達相談活動の実践体験と資料（93～95）の分析。30名については田中ビネー資料と比較。本評価法は６～８名の小集団で進められ、本課題は３～４名の小集団に分化して行なわれる。分析数78集団 234名。課題は三者の共通性差異性を問う。①挟、包丁、鋸②犬・鳩・かぶと虫③トマト・大根・ほうれん草④自動車・飛行機・船

三者における共通性・差異性の関係思考の段階	思考の関係構造→	二者共通	三者共通	二者異同	三者異同
1、三者差異	３つの共通基盤においてそれぞれの 違い				○
2、三者共通	３つの似ているところ		○		○
3、二者対一者差異	２つの共通基盤にたって、他1つとの違				○
4、二者差異	２つの共通基盤においてそれぞれの 違い			○	○
5、二者対一者比較	２つの共通基盤にたって、他 を 比較				○
6、一者対二者比較	1つの 特性と 共通基盤をもつ2比較				○
7、二者共通	２つの似ているところ	○		○	○
8、三者差異基盤	2つに 違いを成立させる 共通基盤				○
9、二者差異基盤	3つに 違いを成立させる 共通基盤			○	○
10一対各二者比較	1つの 特性をもとに他各 2 者 を 比較				○
11二者比較	2つにものを比較			○	○
12三者の個別性	3つのもののそれぞれの 性質			○	○
13二者の個別性	2つのもののそれぞれの 性質			○	○
14一者の個別性	1つのものの性質			○	○



３．結果と考察

1)「３つで考える」関係の展開の図式化（表）

２者思考では、4.7.9.11.13.14.の６通りの展開が、３者思考では、1～14の構造で展開し、3.4.5.6.7.9.10.11については、それぞれ３通りの組み合わせができ30通りの思考の展開の基盤となる関係の構造ができる。２者共通性を問う、３者共通性を問うは、思考の関係の構造に限定をつけての問い掛けである。基盤に３者の関係において思考を進めるために思考の構造化を誘う問い掛けについても法則性が考えられる。例えばⓐ２者差異（4a）に「もう一つは？」さらに「Ｃは？」と第３のものを問う、ⓑ黙っている時には「A知ってる?」「B･･･?」「C･･･?」との問い掛けに３者差異（1a）の思考が誘われるなど。

2)内容把握と表出のしかたを横軸に、三者の関係思考の構造を縦軸にとり表にすると、どの３つで共通差異を考えるかによって幼児の思考の展開に特色が見られる。三者思考は1.2.3.5.6.で、二者の共通性は、1～7で展開している。①では、認識的に思考を展開しやすく②では一生懸命考えて細かい部分での対応関係を考え、③では知覚的なイメージでとらえたことを手掛かりに考えている。

3)幼児から見た三者関係の把握内容（分析数78名）

共通性①挟、包丁、鋸；切るものa(19)b持つもの(5)b使う(2)b同じ手に持つ、押える手切る手同じ(2)b危ないもの(1)c尖っている(1) ②犬・鳩・かぶと虫:a動物(1)b歩く(3)b餌を食べる(2)c足がある(2)g目(1)g尖ったところがある角歯口ばし(1)s舌ある(1) ③トマト・大根・ほうれん草;a野菜(11)g 葉っぱある(6)f緑(2)

差異性①1a包丁は野菜を切る鋸は木を切るはさみは紙を切る(13) b包丁玉葱（きゅうりトマト）切る鋸板切る(c固いやつゴリゴリ2)髪床屋さんで切る(1)d鋸ギコギコ挟チョキチョキ包丁カタカタ(1)e使い方行為で(2) f鋸いっぱい尖ってるギザギザ包丁上の方尖ってる挟２つ上尖ってる(1) gギガギガ真直細いとこある(1)

<共同研究者>児童臨床研究会　顧問松村康平
三神静子　水流恵子　小野真理子　柴田てる子
大沢真理子　蒸和美　中山美代子　小里国恵

発達・教育１－３

大学教育における心理劇（５）

——課題の表演——

黒田　淑子
（お茶の水女子大学生活科学部）

【目的】

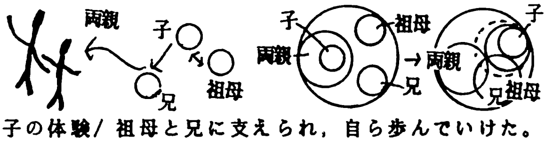
この研究の目的は，大学教育におけるひらかれた心理劇の活用の可能性を探り，活動内容や参加者の養成過程に応じた教育プログラムを作成し，その効果や実施上の留意点について探究していくことである。今回は，第４報(1994)に続き，養成過程のⅡ～Ⅲ期（監督・補助自我チームの体験，監督体験）に位置づく演習での，課題にかかわる心理劇の活用のしかたの１つ：課題の表演（課題の基本的な関係構造をとらえ，仮説的な場面を設定して課題の本質とその変化の可能性を表演する心理劇）について，次のような観点から考究を進める。課題提起のしかた；参加者と課題との関係；心理劇の役割体験；個と集団と課題のかかわり；他。

【方法】

Ｏ大学における演習（1992～1994年度後期選択「児童臨床学演習」「生活臨床学」参加者13～20人）から，いくつかの典型的に異なる具体例を取り上げ，上記の目的にそった分析・考察を行う。この演習では，講義，心理劇，文献ゼミ，フィールドワーク，集団討論を組み合わせて行っている。課題の表演の心理劇は，参加者個々の課題提起の過程で，類似した課題の小グループ（３～６人）を構成し，グループごとに，監督，補助自我（補助自我的演者）の役割を交代しあって行うものである。参加者全員が監督の役割を担う。１回の表演・共有の時間は１０～１５分。補助自我の人数が足りない場合は，観客グループから協力参加する。

【結果：課題の表演の具体例】

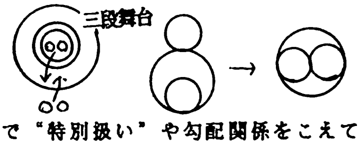
Ａ）親子関係の転換―子の自立における第３者の役割



子の体験/ 祖母と兄に支えられ，自ら歩んでいけた。

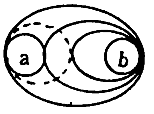
Ｂ）「違う」人々のコミュニケーション―相互関係へ

共有・討論から：援助されるのを待つだけでなく，相互に歩み寄ることで"特別扱い"や勾配関係をこえて柔軟な関係を構築していけるのではないだろうか。



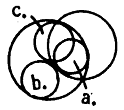
Ｃ）心の声を感じる―多様なメッセージとかかわり方

「ａにｂがかかわりｂの心が感じられたらａが動く」

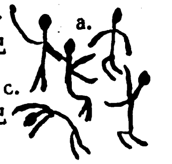


1)初めての出会い－ゆっくりまわりながら近づく；2) 悩む人に－かたわらに寄り添う；3) けんかの後－物を媒介に

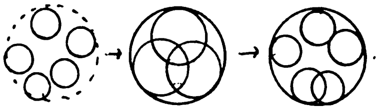
Ｄ）孤独の不安―自己の多面性



a.楽しく話している自己
b.とりこまれる不安
c.もっと何かしたい自己



Ｅ）祭りの後―集うことの意味



三段舞台へ，地域での楽しい集いの表演

【考察：課題の表演の効果・留意点】

１．関係状況における課題の明確化　課題にかかわるもの（構成単位：親・子・第３者／他者・自己の３つの側面など）が舞台に，それぞれの姿勢で位置を占め，その関係の質（勾配，相互，接近，離反など）を表演することによって関係状況が浮き彫りになる。

２．関係状況の変化・課題の展開の予測　監督の演出あるいは補助自我チームの自発的な動きにより，関係状況が変化し，課題の展開のしかたの可能性，及びそのきっかけが見えてくる。

３．参加者と課題との関係の深まり　観客においては課題をめぐる関係状況とその変化を視覚的に把握できる；補助自我的演者においては状況の担い手として課題を実感できる；監督としては，自己の課題を参加者の表演・体験・感想を介して，より具体的に多角的に認識し，関連する課題をも見出すことができる。

４．心理劇の基礎体験　参加者は，順次，監督，補助自我（演者），観客の役割を交代していくが，舞台の活用を含めて，心理劇の５つの要件の基礎体験を積み，心理劇と主体的にかかわる機会を持つことになる。

５．個・集団・課題の重層的な関係構造化　参加者一人ひとりの課題の表演を通して，集団における個々の存在が浮き彫りになり，課題の類似性をとらえて構成した小グループを媒介とする活動が行われ，共通課題をも明らかにして課題の重層的な探究が行われる。

６．基本的な枠組みの余白の探究　留意点は，実践例に対応する綿密な探究は行えないので，課題の表演で明らかになった枠組みの余白を，異質の心理劇を含む他の諸活動を通してさらに探究していくことである。

精神遅滞児の歩行に関する一考察（３）

－観察法による評価のばらつきと運動学的パラメータの対応－

○青山真奈美　・　豊村和真
（北星学園大学大学院）・（北星学園大学文学部）

［目的］

精神遅滞児の歩行について，歩行場面を録画したビデオを観察しながら評価表を用いて判定した「観察法による評価」のばらつきと，同被験者の歩行に関する「運動学的パラメータ」の値の対応を検討する。

［方法］

被験者：精神遅滞児（以下障害児群）は札幌市内中学校の特殊学級に在籍する１～３年生の生徒計２３名（女子９名，男子１４名）であった。ＩＱの範囲は２３～７７（鈴木ビネー）。健常児群は札幌市内中学校に在籍する１～３年生の女子９名，男子７名の計１６名であった。

実験手続き：体育館に長さ１０ｍ幅１ｍの歩行コースを設定した。被験者がそのコース内を自然歩行で往復する様子を正面と側面の２方向からビデオに記録した。被験者の身体各部にマーカーを装着（図１参照）し，これらを計測点として画像自動追尾システムを用いて運動学的パラメータを算出した。一方の観察法による評価は，記録されたビデオを大学生判定者１０名が２４項目からなる評価表に従って６段階評価した（表１参照）。

［表１　評価表の質問項目の略記］
Q1 足の裏全体つけている/Q2 つま先立ち/Q3 ぴょんぴょんはねて/Q4 地面を蹴る力ない/Q5 内股/Q6 外股/Q7 足ひきずって/Q8 両腕ふり/Q9 両腕あげて/Q10 膝つきでて/Q11 顔・首傾き/Q12 まっすぐ前/Q13 お腹つきでて/Q14 お尻つきでて/Q15 腰さがって/Q16 前屈み/Q17 上半身ゆれ/Q18 上半身傾き/Q19 ふらふら/Q20 肩に力/Q21 動作ゆっくり/Q22 手足に力ない/Q23 一定のリズム/Q24 歩行の上手さ（上手＝1，下手＝6）＊注：各項目の程度に応じて6段階評価

分析手続き：運動学的パラメータを以下に示した。

正面方向～首の揺れ，脇・肘・膝・股の開き，体軸の揺れ，

側面方向～歩行速度，歩幅，首の傾き，上腕の上がり，肘の曲がり，腰の曲がり，足の上がり，膝の曲がり，足の接地角度，

評価表による結果については，判定者１０名間での標準偏差を判定のばらつきの指標として用いた。運動学的パラメータを説明変数，評価のばらつき（標準偏差）を被説明変数として重回帰分析を行った。

［結果］

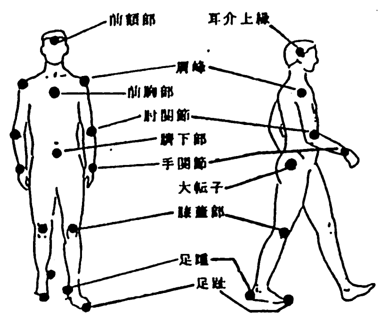


図１ 正面および側面の身体各部のマーカー位置

重回帰分析の結果は，被験者全体での自由度調整済み重決定係数（ADJR-SQ）は，高くなかった。障害児群と健常児群別で重回帰分析を行った自由度調整済み重決定係数は以下のとおりであった（偏回帰係数が５％水準で有意な変数のみ記述した）。

項目（ADJR-SQ）	運動学的パラメータ
******************障害児群******************	
Ｑ１（0.8009）	歩幅・首の揺れ・股の開き・体軸揺れ・首の傾き・上腕の上がり・脇の開き・膝の開き
Ｑ４（0.6850）	股の開き・首の傾き・膝の曲がり・脇の開き
Ｑ１１（0.6438）	体軸の揺れ・足の上がり・膝の曲がり・脇の開き・肘の開き
Ｑ２２（0.6382）	歩行速度・股の開き・首の傾き・上腕の上がり・肘の曲がり・脇の開き
******************健常児群******************	
Ｑ５（0.9762）	歩行速度・歩幅・股の開き・体軸揺れ・首の傾き・足の上がり・上腕の上がり・接地角度 肘の開き
Ｑ１０（0.9266）	歩行速度・首の傾き・膝の曲がり・
Ｑ１４（0.9000）	歩行速度・歩幅・股の開き・体軸揺れ・足の上がり・上腕の上がり・接地角度・膝の曲がり・脇の開き・腰の曲がり
Ｑ２２（0.9378）	歩行速度・歩幅・股の開き・体軸揺れ・首の傾き・足の上がり・上腕の上がり・肘の開き・膝の曲がり
Ｑ２４（0.9318）	体軸揺れ・足の上がり・肘の開き・膝の曲がり・脇の開き

付記：本報告は非学会員である服部篤隆らとの共同研究である。

障害児の母子保育について

――プール遊びからの検討――

後藤嘉余子
（東京家政大学）

はじめに：発達に遅れのみられる子どもの保育に当たっては、子どもへの対応のみならず、母親に対する適切な援助が必要である。また、年少の子どもの指導には母親の理解と協力が不可欠で、子ども、母親、保育者の相互的なかかわりの中で展開される保育が望まれる。このような考えに基づき、従来より母子同室制保育を進めて来たが、今回は、その一環として実施しているプール遊びを取り上げ、そこに展開される母と子の行動に若干の検討を加えたい。

方法：東京家政大学児童学科幼児通所施設（通称わかくさグループ）に在籍し、プール遊びに参加した母子のうち、一定期間継続したケースを、1991～1994年度の記録（水泳指導チェックリスト）に基づいて４例抽出した。記録の整理に当たっては、プール内における子どもの行動を、指導の経過に沿ってケース別にまとめるという方法をとった。なお、入室時の年齢は１歳９か月～３歳５か月、ＤＱは45～78（遠城寺式）であった。また、入室時の調査、面接等の記録、保育者による保育記録も参考資料として用いた。

結果と考察：１．プール遊びにみられる特徴

表１は、プール遊びの主要な活動について、行動の変化に着目しながら、チェックリストに基づく記録をケース別にまとめたものである。いずれも、発達遅滞に加えて対人関係上の問題を有し、感情表出の乏しさ等が指摘されているケースである。４例共、比較的自由に行動出来る「水中歩行」や「ジャンプ」では積極的な参加がみられるものの、「腰かけキック」、「輪になって遊ぶ」といった人とのかかわりを要する活動には必ずしも行動に変化が認められるとは言い難い。Ｓ．Ｗは正にその典型例といえよう。しかし、Ｕ．Ｓの場合は、周囲の状況を見て行動しようとする様子もうかがえる。一方、Ｕ．Ｏは、参加当初より水中を好み、僅か２か月で指示に副った行動が可能になっている。水中の解放感、常に人とのかかわりのある状況がこのような変化をもたらしたものと考えられる。

２．かかわりの変化

プール内におけるかかわりは、当然ながら母親が中心で、他者からの働きかけによるかかわりは極僅かである。況して他者への働きかけは、殆ど偶然に委ねられているといっても過言ではない。「介助されて」、「促されて」、「抱かれて」等に母親へのかかわりの深さがうかがえる（表１）。しかし、プール遊びの経験を重ねる中で、他者へのかかわりが増して来ると、母親のかかわりも多様化する傾向が見受けられる。Ｔ．Ｓはその顕著な例であろう。母親への全面依存から介助者の働きかけに笑顔で応じるようになる過程で、母親にも過剰介助を脱し、水との触れ合いを楽しむ余裕が生じる。このことが、子どもの問題を再認識し、かかわりを変える切っ掛けになるように思われる。

おわりに：プール遊びを通してみられたかかわりの変化は、水中場面に留まらず日常の生活に反映される必要がある。個々のケースを基に検討していきたい。

表１　ケース別プール遊びの経過

	年齢	準備体操	腰かけキック	水中歩行	輪になって遊ぶ	ジャンプ
Ｓ．Ｗ（男）	4:0	参加せず	参加せず	走り回る	前後左右に動く	両足で床を蹴る
	4:4	介助されて行う	促されて交互に蹴る	走るように進む	抱かれて加わる	好きなように跳ぶ
	4:6	同　上	足を持たれて動かす	バランスよく歩く	手をつなぐが両足を上げる	両足で床を蹴る
Ｕ．Ｏ（男）	4:0	理解できない	参加せず	参加せず	参加せず	参加せず
	4:2	少し身体を動かす	リズムよく蹴る	一人で歩く	前後左右に動こうとする	リズムをとり連続して床を蹴る
Ｔ．Ｓ（男）	4:2	介助されて行う	リズムよく蹴る	一人で歩く	手をつなぎ共に動く	連続ジャンプを楽しむ
	4:6	同　上	何とか交互に蹴る	同　上	同　上	両足で床を蹴る
	5:1	参加せず	リズムよく蹴る	バランスよく歩く	前後左右に動く	同　上
	5:8	少し身体を動かす	リズムよく蹴ろうとする	一人で歩く	手をつなぎ真似て動く	同　上
Ｕ．Ｓ（女）	5:1	参加せず	参加せず	すぐ手をつなぐ	真似をして動く	一人でやろうとする
	5:8	何もやらない	促されて足を動かす	歩くがすぐ抱きつく	動こうとしない	一緒に片足で跳ぶ
	6:8	介助されて行う	促されて交互に蹴る	バランスよく歩く	一緒に真似て動く	連続ジャンプを楽しむ
	8:0	真似をして行う	何とか交互に蹴る	一人でバランスよく歩こうとする	楽しそうに手をつなぎ一緒に動く	同　上

カール・ロジャーズの態度三条件についての一考察

東京農業大学　　岸田　博

〔本研究の動機〕

カールロジャーズの基本的態度三条件が大切だといわれて久しいが、近年その言葉の浸透振りをみると、その基本概念の意味が本来の意図と異なって使用されている例がみられる。それはそれなりに理由があるのであろうからその使い方を否定するわけではないが、カール・ロジャーズが意味を込めたことと、条件の呼称が年とともに異なってきていること、それにつれて意味するものも異なってきていることを述べ、今後の研究の資料として提供したいと思う。

〔三条件の出現年次とその表現・意味の変遷〕

自己一致、受容、共感的理解の三条件のうち一番最初に文献に現れるのは、受容である。英語でAcceptanceと表現されているのは、１９４２年の著書「カウンセリングと心理療法」である。その意味するものは、おおよそ、“カウンセラーはクライエントの攻撃性、不適当性、アンビバレンスなど、クライエントが何を語ろうともその感情をクライエントの表現として受け入れるというもので、そこにあるそれを認めてそれが何であれそれを受け入れる”と表現されている。この表現の仕方は日本ではあまねく知られている内容である。

この呼称とその意味付けは、１９５４年の論文まで変化はない。５７年の論文「パースナリテイ変化の必要にして十分な条件」の中で、無条件の肯定的配慮(Unconditional Positive Regard)という表現にとって変えられたのである。５９年の論文の中では、この概念は次のようになっている。まづ、肯定的な配慮というのは、“暖かさ(warmth)、好きになること(liking)、尊敬(respect)、同情(sympathy)、受容(acceptance)などの態度を含むものとして定義される。”とあり、受容は肯定的配慮の一つの構成概念となっていることが言えよう。であるから、無条件の肯定的な配慮とは、“もし、私がある人の自己経験をそれ以外の自己経験と比べて、肯定的な配慮を持つに値するとか、しないとかいうように、比較することができないような仕方で知覚しているならば、その時私は、その人に対して無条件の肯定的配慮を経験しつつあるといえる。”と表現される。もっと簡単にいえば、“その人を尊重するということである。これは、その人のここの行動について、いろいろと異なった評価が与えられるかも知れないが、そのようなことに関わりなくその人を尊重することを意味している。”とあるのである。ここに引き出した論文は５９年であるけれども、５４年から５７年の間に何が起こって、彼のこの概念をこのように変えてしまったのかという事を考えてみる必要があると思う。

それは、１９５６年に、彼のそれまでの功績に対して科学功労賞が与えられたことであったし、その遠因になったものは、他の学者から出ていた、学問研究に事例数が少ない、統制群がない、変化を直接に測定していない、などであり、それに答えるために、５４年にダイモンドとともに著した心理療法と人格の変化(Psychotherapy and Personality Change)という書物であった。これら一連の業績は、彼のシカゴ大学時代のものである。６１年の論文には、無条件の肯定的配慮が載っている。それ以後この概念の根本的な呼称ならびに意味の変化は今の所認められない。１９８０年のA Way of Beingにもこの呼称になっている。

自己一致はどのような経過をたどって現れたのであろうか。彼の伝記によると、４８年から５１年までの間面接をしていた女性から感得したとある。この事実は、５１年の「来談者中心療法」に明らかである。それまでは、受容のみで、その他は、４６年の論文に温かい感情が必要であると解かれていた。Congruenceと呼ばれていた自己一致は、５４年の論文では、純粋性(Genuineness)と呼ばれるようになり、定着したかのように見えたが、５８年の論文では、両者が入り交じって使われている。それは、５９年に、Congruenceを一致と呼び、それをあるがままと呼んでいることをみてもいえることである。この概念は６１年には、GenuineとRealとを併用しているので、概念は、徐々にCongruenceを離れて、純粋性ないしは、真実性の方へ動いていっているように見える。それは６７年の論文にもみられる。そして、最終的には、８０年の論文には、Realで統一されている。これは、自己一致でもなく、一致でもなく、真実そのものであること、あるがままであること、即ち、専門家の陰に隠れないことを意味するものと思われるのである。

共感的理解についても自己一致と同じ時期に論文に現れている。ただ、５４年の論文の中には認められず、重要の概念に変化がくる５７年に論文の中に登場する。あたかもあなたであるかのように・・という表現は、この年代に使われたものであるが、６１年には、共感的理解と共感との語が共用されている。ただ、８０年になると共感のみになり、その内容も価値判断をせずに発言をすると変化している。これは、彼のいう自己表現そのものである。

〔おわりに〕

カール・ロジャーズの態度条件について、おおざっぱではあるが、その意味するところを追ってみた。勿論彼の論文を全部丹念に読み尽くしたわけではないので、今後更に手直しをする所存である。

カウンセリングにおける
クライエントの体験と非言語行動

井上　美香
中京大学　文学研究科

【問題と目的】

カウンセラーがカウンセリング中のクライエントの体験を理解する手がかりの一つとして非言語行動がある。Hill et al.(1990) によれば、クライエントの体験について、カウンセラーの理解を妨げる要因の一つにはカウンセラーがクライエントの非言語行動を誤って解釈している可能性があるという。

本研究では、カウンセリング場面においてカウンセラーがクライエントを理解していく上で、その手がかりとなるような非言語行動をクライエントが発しているかどうか、またクライエントの体験についてのカウンセラーの理解とクライエントの報告との一致率に、クライエントの非言語行動が関係しているかどうかを検討する。

【方法】

１．対象

６名のカウンセラーが、それぞれ２名のクライエントと約50分間のカウンセリング（１回のみ）を行った12例のカウンセリング場面。

（１）カウンセラー

臨床心理学を専攻し、修士課程を修了した大学院生及び研究生６名（男性；１名、女性；５名）で、平均年齢は28.7歳（25～37歳、SD=4.9）である。

（２）クライエント

カウンセラーと個人的な問題を話し合う動機のある大学生を募集し、研究参加協力を依頼した。参加したクライエントは、大学生１２名（男性；３名、女性；９名）で、平均年齢21.4歳（19～33歳、SD=3.7）である。

２．測度

（１）Client Reactions System（ＣＲＳ）日本語試作版－ＣＲＳ（Hill et al. (1988)）は、カウンセラーの発言に対して、クライエントがどのように感じたかについてを評定する２１項目、５尺度からなるカテゴリー・システムである。項目に付記された説明文を筆者が日本語に翻訳した。

（２）非言語行動－沈黙、頭の縦の動き、頭の横の動き、手や腕の動き、脚の動き、姿勢の変化、癖、微笑み及びアイ・コンタクトの９つの非言語行動を観察の対象とした。

３．手続き

（１）カウンセリングの実施及びＣＲＳ評定手続き

カウンセリングは対面式で行い、カウンセラーとクライエントの間隔は80cmとなるよう椅子を設置した。クライエントの右斜め前方から隠しカメラにより、クライエントの全身を録画した。

カウンセリング実施直後、クライエントはそのビデオを見てＣＲＳを評定し、二日以内に、カウンセラーがＣＲＳを評定した。

（２）非言語行動の評定手続き

評定者は音声を消した録画を見て、５秒毎に上記の９カテゴリーに該当する非言語行動の有無をチェックした。評定者は、筆者及び臨床心理学を専攻する大学院生３名（女性；３名）の計４名である。

【結果と考察】

カウンセリング中のクライエントの体験は、頭の縦の動き、頭の横の動き、手や腕の動き、癖、アイ・コンタクト、微笑みの６つの非言語行動と関連が見られたが、沈黙、脚の動き、姿勢の変化とは関係がなかった。

クライエントの非言語行動の表出の量から、カウンセラーはクライエントの体験を理解する手がかりを得る可能性がある。例えばクライエントが問題に直面している時、縦や横の頭の動き、手や腕の動き、癖、アイ・コンタクトが少なく、ネガティヴな体験の時、縦や横の頭の動き、手や腕の動き、微笑みが少ないというように、他の体験時より非言語行動全般が減少すると言える。しかし、正確にその体験を理解するには非言語行動の情報からだけでは困難であるとも言える。

また、カウンセラーがクライエントの体験を正しく理解しているかどうかを両者のＣＲＳの一致率から検討したところ、特にクライエントが問題に直面していると体験している時や、ネガティヴな体験を報告した時、カウンセラーはクライエントの体験を正確に理解していない傾向が見られた。例えば、クライエントがネガティヴな体験を報告している時、カウンセラーはクライエントが問題に直面していると誤解する傾向がある。その要因の１つには、カウンセラーがクライエントの非言語行動の情報を読み取れていない可能性があると思われる。

臨床・相談１－４

イメージ誘導法による妊婦のリラクセーション効果 ―胎児の肯定的なイメージと妊婦の胎児に対する愛着との関連から

杏林大学保健学部看護学科　高橋　真理

ここ数年出産準備クラスで、妊娠中のストレス緩和や、分娩に対する心身の準備を目的に、イメージ誘導法によるリラックス法が教授されている。しかし、その効果に関する実証的な研究は数少なく、特に妊娠期の効果に関しては検討事項が数多く残されている。筆者らはこれまでに、妊婦を対象とした「胎児の肯定的なイメージ」課題によるイメージ誘導法「胎児とのコミュニケーション」のテープを作成し妊婦に実施した結果、妊婦は非妊婦より容易にリラックス効果が得られること、自律訓練法のみのリラックス法教示より、イメージ誘導法の教示はより多くの妊婦に容易にリラックス効果をもたらす手法であることが検証された。

そこで今回は、胎児の肯定的なイメージの想起に影響を及ぼす重要な要因と考えられる妊婦の胎児に対する愛着度と、リラックス効果との関連を検証することを目的とした。

方法

対象はｋ病院健診でノンストレステスト（以下NST）実施に際し了解が得られた妊娠36～41週の初、経産婦46名である。調査期間は1995年3月～6月までである。手続きは、１）NST装着臥床安静後、２）自律訓練法の重温感覚による弛緩訓練の教示（約5分）、３）胎児の肯定的な反応命題イメージの教示（約6分）、４）消去動作を行い、以上２）～４）まではＭＤテープを用い、ヘッドホーンにより個人教示した。５）妊婦の胎児に対する愛着度の評価は、高橋らが作成した「妊娠期の母親の胎児愛着尺度」（38項目10領域から構成）を簡易化（各領域で38項目各領域で因子負荷量が高い項目を採択）した１０項目の簡易胎児愛着項目（以下胎児愛着度評価）を用い、５段階評定を求めた。リラックス度の評価は、①根建．上里（1984）のRE尺度（The rating scale of emotion as defined in terms of relaxation)の実施、②イメージ鮮明度は胎児の肯定的なイメージに対応した６イメージ項目を７件法で評点を求めた。

結果

初産婦と経産婦の比較

各尺度に対する総合評点平均に有意差はなかった（表1）。

胎児愛着度とイメージ鮮明度との関連

胎児愛着度合計評点をＭ±S.D.から高愛着群、中愛着群、低愛着群の３群に分け、６項目イメージ鮮明度各項目の平均評点におけるプロフィールを外観した結果、ほとんどの項目で、高愛着群、中愛着群、低愛着群の順で、イメージ鮮明度が低い傾向がみられた。

そこで、３群間で総合評点の平均を比較すると、順に31.30±2.75、29.74±5.21、25.09±5.54と有意に差がみられ（F=4.94、p<.02),Tuekey法による多重比較の結果、低愛着群は高愛着群、中愛着群よりイメージ鮮明度が有意に低かった（p<.05）（図２）。

表1　初産婦と経産婦の各評価尺度総合評点平均の比較

	愛着度	RE尺度	ｲﾒｰｼﾞ鮮明度
初産婦	41.7±3.7	31.1±6.9	28.7±5.8
経産婦	39.4±4.8	31.7±5.8	28.3±4.9
	F=3.24, p>.05	F=.18, p>.05	F=.04, p>.05

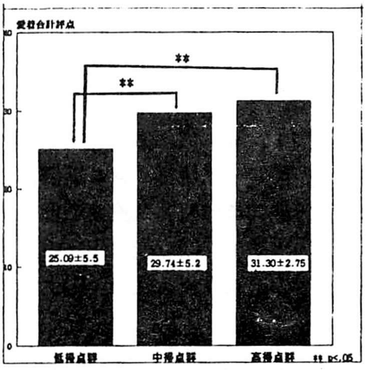


図２愛着度高中低群におけるイメージ鮮明度平均評点

胎児愛着度とRE尺度との関連

RE4項目の各平均評点を３群間で比較したプロフィールを外観すると、すべての項目で高愛着群が最も高得点であったが、低愛着群と中愛着群の順は逆転していた。また３群間で総合評点の平均を比較しても、統計的には有意ではなかった(F=1.29,P>.05)。

考察

今回の結果から、胎児の肯定的なイメージ誘導法によるリラックス効果には、妊婦の胎児に対する愛着度が影響していることが認められ、愛着が高い妊婦はより胎児の肯定的なイメージを想起しやすい傾向が示された。しかし、肯定的なイメージを繰り返しイメージすることで、妊婦の胎児に対する愛着が深まるかなど、イメージ誘導法の繰り返し効果に関しては不明である。今後更に検討を続けたい。

心理書簡法による生活習慣の改善についての研究Ⅱ

○新田　茂　　　　　吉田秀子
（坂戸市立教育センター）　　（心理書簡法研究会）

《目　的》

時間的展望の改善を目的とした心理書簡法の導入課題には、日常生活の見直しのための「生活日課表」と短期的な時間的展望を改善するための「生活計画表」とがある。時間的展望の改善には、長期的な観点からの見直しも重要であり、見通しを立てる習慣が必要である。長期的な時間的展望の改善を意図し、矯正教育（少年院）の実務に利用できる導入課題を考案する。

《方　法》

心理書簡法の時間的展望の四次元モデル、生活日課表、生活（日課）分析（新納、新田：1994）、生活計画表、生活（計画）分析（新田、上垣：1994）、常通（1994）の実践的授業研究、時間的展望に関する研究成果（勝俣：1972、1994、都筑：1993、1994、大橋他：1992、河野：1993）等を参考にして、矯正教育の実務経験から得られた知見を活用する。

《結　果》

「生活予想表Ⅰ．Ⅱ」による生活（予想）分析を考案した。<u>生活予想表</u>　1.用紙：Ａ４版横、2.記入欄：５項目×10区分約10年単位、3.設定項目：(1)住んでいる所、(2)自分の出来事、(3)家族の出来事、(4)友人の出来事、(5)世の中の出来事、4.種類：(1)生活予想表タイプⅠは、時間経過（行）が、出生時から死亡時（出生時まで、０才、１０年前の過去、現在、１０年後、２０年後、３０年後、４０年後、Ｘ年後（死亡予測、生存可能年齢を予想する）の未来、(2)生活予想表タイプⅡは，母親の妊娠が判明した時点から死亡後の初盆、墓参り等までであり、タイプⅠより前後が長い。5.記入方法（列）は、(1)住所欄：現在までに住んでいた場所を記入する。10年後以降の未来は、これから住むであろう場所を予想する。(2)自分欄：自分が何をしてきたかを回顧、何をするのかを予想する。(3)家族欄：自分を取り巻く家族に関する様相を回顧、予想する。(4)友人欄：過去、現在に交友のあった人たちについて回顧、予想する。(5)世の中欄：過去の世の中の出来事を回顧、これから起こるであろう出来事を予想する。

<u>対　象</u>　新入時（予科）・中間期教育過程（本科）生

<u>教　示</u>　今はここで生活しているけれども出院したら色々とやりたいと思っていることがあるでしょう。これからの将来のために今までの過去を振り返り、これからの生活を予想して書いてみよう。

<u>指導内容</u>　1.住居の側面：自分が生きていく場所を考えることで、近隣との付き合いについて考えさせる。2.出来事の側面：基本的には、生活計画表での指導と同様に、自分、家族、友人との関連を時間的展望から理解させる。タイプⅡの場合は、誕生の瞬間から人生が始まったのではないこと、両親、家族が生まれてくるであろう自分をどのように受け止めていたのかを考えさせ、さらに、人は死んでも関わりのあった人々の思い出の中に生き続けることを説明し理解させる。

＜生活予想表Ⅱ＞

平成_年_月_日　名前________

	——	0才 —年前		—才 40年後	—才 年後	—年後
住んでいる所						
自分の出来事 自分は何をしているか						
家族の出来事 家族は何をしているか						
友人の出来事 友人は何をしているか						
世の中の出来事						

《考　察》

生活予想表という形式で生涯を一覧することにより一生という長期的時間経過を目に見える形で把握することが可能である。生活予想表の作成により心理書簡法の「過去、現在、未来の私」等の課題設定が容易となり、人は独りで生きているのではなく、家族、友人との関わりの中で生きていること、個人を取り巻く世情にも関心を向けさせることが可能である。

《参　考》

常通佳子（1994）自己像の形成を促す性教育を目指して　生涯学習・ライフサイクルの視点から　現代性教育研究月報　VOL.12, NO.4　(財)日本性教育協会

臨床・相談１－６

心理書簡法の実際、課題設定の手順について

○吉田秀子　　　　新田　茂
（心理書簡法研究会）　　（坂戸市立教育センター）

《問　　題》

心理書簡法（Psycholettering Method）は、「思いやりの心育成」と「新しい可能性の発見」を目指して作られた心理療法である。手紙の書き手、すなわち心理書簡法の対象者（ライターと呼ぶ）は、手紙形式の作文を繰り返し書くことにより内省を深め、共感性を高めていくように方向付けられる。

手紙を書くときに必要な発信対象は、人物に限定されず、１１種類の発信対象（ターゲットと呼ぶ）が設定されている。心理書簡法の１１種類のターゲットの中には、過去、現在、未来といった時間の変化を基準にした課題設定がある。

ライター自身が、「過去の私」「今の私」「未来の私」といったライターとターゲットの役割を交互にとるといった一人二役を演じることになる。ライターは、「過去・現在・未来の私」の三つの立場の中から一つを選び、選んだ立場から発信する。「過去の私」から「未来の私」へ、書かれた手紙をライターは、ターゲットの立場で受け取り、返信として「未来の私」から「過去の私」へと手紙を書くことになる。時間の変化を基準とする課題設定は、時間的展望の改善が期待できる。このように時間を超えて、交互に立場を代えて発受信を繰り返すのが心理書簡法の基本である。

時間的展望の改善を目的とした課題設定は、過去から未来までの幅広い課題設定が可能ではあるが、対象によっては、課題設定そのものが漠然として、課題に取り組めないこともある。課題に対する興味を喚起すると共に取り組み易くする工夫が必要である。

《方　　法》

心理書簡法の補助技法、導入課題等から時間的展望の改善を目的とした「生活日課表」「生活計画表」「生活予想表」を目的、期間別に分類し、対象に応じた標準的課題を時間的展望に関する研究結果からの知見を活用して設定する。

《結　　果》

心理書簡法の時間的展望を改善とした補助技法、導入課題の特徴、長短期間を基準にして、各種「生活表」を図に示す通りに分類して位置付けた（図参照）。

生活習慣の改善といった日常的な時間的展望（現在展望）は、「生活日課表」作成を導入課題とする課題設定、「仕事をしている時の私」と「仕事をしていなかった時の私」「学校へ行っていた時の私」と「遊んでいた時の私」ができる。

生活表	生活日課表（日常）	日課表Ⅰ	休日の時の日課
		日課表Ⅱ	平日の時の日課
	生活計画表（短期）	計画表Ⅰ	1年～10年後
		計画表Ⅱ	2年前～8年後
	生活予想表（長期）	予想表Ⅰ	出生～死亡
		予想表Ⅱ	胎児期～新盆

図　生活表の分類

短期的な時間的展望の改善には、生活計画表が使用できる。計画表Ⅰは、未来展望を主としている。計画表Ⅱは、短期的な過去展望と現在展望、短期的な未来展望の有機的連関を主としている。

長期的な時間的展望の改善には、生活予想表ⅠⅡが使用できる。長期的な過去、未来展望と現在展望との有機的連関を主としている。

心理書簡法のターゲット設定は、「今の私」から「～年前、後の私」、有能感を喚起するための「成功した未来の私」、生活表に書かれた内容から「結婚した私」「家を建てた私」等のターゲットが設定できる。

時間的展望改善の段階的課題設定は、1.生活日課表による日常生活習慣の見直し、2.生活計画表による短期的時間的展望の改善、3.生活予想表による長期的時間的展望の改善の３段階が設定される。

《考　　察》

心理書簡法は、少年院における矯正教育の実務の中から生み出された心理療法であり、当然その主たる対象は被収容少年である。といった特殊性のため日課表の設問が矯正教育の実務に役立つように設定されている。一般の小、中、高等学校での実施に際しては、設問の変更も必要となる。受験、進学にともなう就学期間による期間設定、高校生時代、大学時代といった区分設定で、課題は、「～時代の私」となる。

将来の事を考え、見通しを立てた生活をしようと心がけても、具体的な資料がないと改善の箇所が不明確で見通しは立てにくいものである。そういった時に心理書簡法の課題は役立てられる。

中小企業の組織環境に関する研究Ⅲ

S県を例とした労働環境のクラスタリング

○小林　東[1)]　辻　昭[2)]　小森田哲哉[1)]　佐野　毅[1)]　松田浩平[1)]
[1)]東海大学短期大学部(静岡校舎)　[2)]静岡英和女学院

【序　論】

S県の中小企業を対象に、その経営戦略と労働条件の実態及び組織風土に関する研究を(辻ら,1993)すすめている。そのなかでも、人的な側面と密接な関係を持つと思われる経営戦略については応心61回大会で発表した(辻ら,1994)。また、Do因子とPDS因子にもとづく組織風土の因子論的な研究についても応心61回大会で発表した(佐野ら,1994)。これらにより、S県の中小企業のおかれている経営環境の実態を示した。

また、労働環境の整備については他県と比べてS県の経営者は、従来から行なってきた施策を一歩ずつすすめるという慎重な対応であった。しかし、優秀な人材の確保のために地道であるが投資を続けてゆく姿勢が見受けられた。

【目　的】

本研究では、労働環境に関する中小企業の取り組みには業種・規模・市場環境など個別の企業の事情により差があると仮定した。そのため、より明確な実態を明らかにするためには、労働環境に関連した項目をもとに個別企業のクラスタリングを行ないクラスタごとの特性を調べる必要があると考えた。労働環境への対応の差は、組織風土や今後の採用計画などにも反映されると考えこれらの関連について調べる。

【方　法】

辻らの研究(1993)で収集したデータを用いた。この中から、人事労務戦略に関連した人材確保・職場環境・専門能力者の育成・中途採用・高齢者の雇用・女性の雇用・臨時雇用・給与体系に関する9項目と、勤務形態の改訂状況に関する5項目と、労働環境への投資に関する5項目と、労働時間短縮計画に関する3項目を抽出した。

これらの22項目は全てカテゴリカルなものであるため、欠測値の無い412企業についてEuclidの距離のかわりにCity Block Distanceを求めた。この親密性行列から最遠距離法で階層的クラスタ分析を行なった。クラスタ数は、Dendorogramと逐次結合されるクラスタ間の親密性の増加傾向をもとに決定した。得られたクラスタごとに業種・規模・分析項目・採用計画・組織風土などについてクロス集計を行なった。

【結果と考察】

最遠距離法による階層的クラスタ分析の結果をもとに4クラスタ解として解釈する事が妥当であると考えた。各クラスタの概要を以下に示す(クラスタ名のあとの括弧内の数字は該当サンプル数を示す)。

クラスタⅠ(81)：各業種にまたがっている。専門能力者の育成を自社で行ない能力給の比率を高める傾向である。育児休業や休暇制度については実施するかしないかの方針が明確になっている。年間総労働時間の平均は1966時間で少なく更に時短の方向である。

クラスタⅡ(101)：製造業と卸売業が中心である。全体的に現状の労働環境を継続し変革や投資には慎重な姿勢である。臨時雇用および女性や高齢者の雇用には消極的で労働環境への投資も消極的である。年間総労働時間の平均は2128時間と長く時短にも消極的である。

クラスタⅢ(141)：規模が大きめで製造業・卸売業・建設業が中心である。中途採用には消極的で、また高齢者・女性・臨時職員の雇用にも消極的である。能力給の割合がやや高い。工場・事務室・食堂・休憩室など労働環境への投資は既に行なわれている。年間総労働時間の平均は2061時間であるが時短の方針である。

クラスタⅣ(89)：規模が大きく製造業・卸売業が中心で職場環境改善への投資の優先度が高い。能力給の割合が最も高い。労働環境への投資に積極的で、育児休業なども実施の方向である。年間総労働時間の平均は2007時間であるが時短への志向が最も強い。

これらの4クラスタと調査翌年(1994年度)の採用計画について集計し割合(%)を表1に示した。なお「採用の予定無し」は「減らす」に含めた。これによれば、クラスタⅣに分類される企業は、他と比較して高学歴者の採用に積極的である。またクラスタⅡに分類される企業は、従業員数を抑制気味で縮退的である。

表1．労働環境クラスタと翌年度の採用計画

	高校卒		短大卒		大学卒	
	増加	減少	増加	減少	増加	減少
クラスタⅠ	12.3	49.4	8.7	55.0	12.5	62.5
クラスタⅡ	14.4	43.3	10.2	62.2	18.4	61.2
クラスタⅢ	16.7	40.6	9.6	61.8	13.1	56.2
クラスタⅣ	10.3	39.0	12.8	45.3	19.3	40.9

Do因子とPDS因子で表される組織風土と4クラスタの関係を表2に示した。これによれば、クラスタⅡの企業では、従業員への組織からの圧力が強くなっている。逆にクラスタⅣの企業は組織環境性がすぐれていることがうかがわれる。

表2．労働環境クラスタと組織環境因子

	Do尺度得点		PDS尺度得点	
	mean	SD.	mean	SD.
クラスタⅠ	-.1269	.9837	.0972	.9780
クラスタⅡ	.1166	.9644	-.2337	1.0873
クラスタⅢ	.0302	1.0595	-.0260	.9696
クラスタⅣ	-.0646	.9550	.2180	.9174

中小企業の組織環境に関する研究Ⅳ

S県における組織風土のパターン分類

○松田浩平[1)]　小森田哲哉[1)]　佐野 毅[1)]　小林 東[1)]　辻 昭[2)]
[1)]東海大学短期大学部(静岡校舎)　[2)]静岡英和女学院

【序 論】

S県の中小企業を対象に、辻を中心に「経営戦略と労働条件の実態及び組織風土に関する研究(1993～)」を行なってきた。これまでに、経営戦略の概要(辻ら,応心61回)と組織風土の因子論的な検討(佐野ら,応心61回)を発表した。

PDS(Plan Do See)因子とDo(伝統性・封建性)因子で表される組織風土の分類はS県の場合も因子論的に有効であった。羽石ら(1995)は次のように定義している。PDS因子が高い職場は科学的マネジメント機能が充分でコミュニケーションが活発である。いっぽう、Do因子が強い職場は監督者からの圧力が強くコミュニケーションが少なく無理やり働かせようとする雰囲気の職場である。

中小企業の組織風土は、規模・業種・業態・市場・競争条件などの組織構造と組織過程に関連する要因以外に企業の歴史的背景や経営者の理念などの個別的事情を反映することも考えられる。そのため、全体的な特徴だけでなく組織風土をパターン化して分析する必要があると考えた。

【目 的】

S県の中小企業の組織風土をPDS因子とDo因子にもとづく4パターンに分類する。小林(応心62回)による労働環境によるクラスタ分析の結果と組織風土の4パターンとの対応についてもクロス集計し調べる。

【方 法】

辻らの研究(1993)で収集したデータを用いた。組織風土に関する40項目を分析の対象とした。これらの項目は、羽石(1995)の提案にしたがって因子得点化し、N(0.0,1.0)の正規分布に近似させた。これをDo因子得点を横軸にPDS因子得点を縦軸にし、表1のように第1象現から第4象現までに付置される4パターンに分類した。実際には典型的なパターンを抽出するため、両因子の絶対値が 0.425以下の企業は平均型とし今回の分析対象からは除いた。羽石の分類法は調査対象の中での相対的な位置関係を示すものである。羽石によれば人材をもとに組織を活性化する意味ではA型が最も望ましく以下B型・C型の順と考え、D型の組織には何らかの改善が必要であると主張している。本研究での分析は、あくまでもS県の中小企業における相対的な比較検討のためであって絶対的な分類ではない。

表1. 組織風土の4パターン

タイプ	PDS	Do	象現	組織風土の特徴
O型	中庸	中庸		平凡・中庸(平均型)
A型	高い	弱い	2	活発・自由(イキイキ型)
B型	高い	強い	1	活発・強制(シブシブ型)
C型	低い	弱い	3	沈黙・自由(バラバラ型)
D型	低い	強い	4	沈黙・強制(イヤイヤ型)

【結果と考察】

分類された4パターンには、従業員数・資本金・経営戦略に目立った差はみられなかった。各パターンに含まれる業種を表2に示した。O型を除く該当数からは、S県の場合はA型とD型による2極構造を持つことがうかがえる。

表2. 組織風土パターンへの業種該当数

業 種	O型	A型	B型	C型	D型	合計
製造業	104	17	5	9	37	172
サービス業	23	15	1	4	11	54
卸売業	48	25	3	7	10	93
小売業	24	9	1	4	6	44
建設業	21	9	4	7	8	49
その他	38	13	3	1	13	68
合 計	258	88	17	32	85	480

各パターンに該当した企業の勤務形態と労働環境の方針を関連を表3に示した。数値は、各項目について「すでに実施」「現在検討中」と回答した企業の割合(%)である。

表3. パターン別の労働環境改善への取り組み

改善項目	A型	B型	C型	D型
フレックスタイム制	21.8	6.2	12.5	24.7
保育時間調整	21.8	17.6	18.7	14.1
育児休業制度の実施	39.1	52.9	37.5	36.5
2週間以上の長期休暇	17.2	23.5	28.1	10.6
労働環境改善への投資	67.0	70.6	71.9	67.9
高齢者雇用への対応	20.1	23.5	9.7	14.1
女子雇用への対応	42.0	47.0	16.1	31.8
休憩室・食堂など	60.2	52.9	59.4	53.6
禁煙・分煙への対応	48.3	70.6	12.5	41.2

女子雇用への対応については、A型の組織風土を持つ企業は「実施」「検討中」のうち既に実施している企業が多い。これはサービス業や卸売業が多いことも理由として考えられる。年間総労働時間と今後の時短縮目標については、パターン間に特に目立った差はみられなかった。

労働環境に関する4クラスタとの関連を表4に示す。数値は、各クラスタごとの該当企業数である。パターンとクラスタには特に関連はなく相互に独立した指標と考えた。

表4. 組織風土パターンと労働環境4クラスタ

労働環境	O型	A型	B型	C型	D型	合計
クラスタⅠ	39	17	3	7	15	81
クラスタⅡ	47	17	3	11	23	101
クラスタⅢ	76	22	4	9	30	141
クラスタⅣ	52	20	3	1	13	89

翻訳・通訳者の適性に関する一考察

○土屋 隆裕　　　玉井 寛
(統計数理研究所)　　(日精研リサーチ)

【問題と目的】

英語を始めとした語学への関心が高まっていることは，語学についての様々な出版物が発行され，数多くの語学学校が存在している現状を見ても理解できよう．語学に関心を寄せる人は語学に関する検定試験を受けたり，語学に関連した職業を選択することも多々あるだろう．

語学を活かした職業として代表的なものは「翻訳者」と「通訳者」である．これら二者は語学力という因子が関わる点では同じように見えるが，実際の仕事内容を細かに比べると相違点も多い．その相違点の中には「語学が好き」という想いだけでは対処できない面もあろう．職業適性という観点からいえば，翻訳者と通訳者それぞれの適性を明確にし，語学関連職を希望する者への適切なガイダンスを行なうことが必要になる．

本研究は，翻訳と通訳というそれぞれの職業に必要な(特有な)要因を探り，翻訳者適性と通訳者適性とを弁別できる尺度を作成することを目的とする．

【方法】

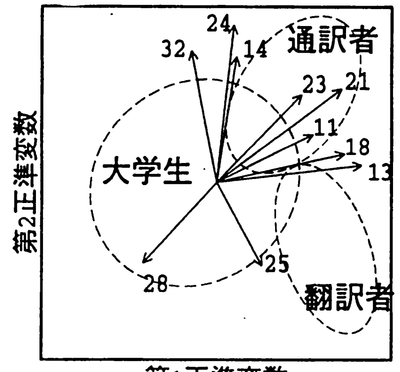
(1) 調査対象者 … 首都圏の大学生(ESSに所属する学生を含む) 155名と翻訳者13名，通訳者21名を対象に質問紙調査を行なった．

(2) 質問紙 … 翻訳者や通訳者を目指す人向けの雑誌や鈴木(1985)の先行研究などを参考に96項目の質問を作成し，6件法で回答させた．また，翻訳者と通訳者に対しては，翻訳と通訳についての文章完成法の質問も5項目用意した．

【結果と考察】

大学生と翻訳者，通訳者の正準判別分析については，96項目のなかから三群の得点の差が顕著な36項目を用いた．正準判別分析の結果，三群を判別するために第2正準変数まで得られる．各群の正準得点の分布はおよそ図に示されるとおりである．図から，第1正準変数は，大学生と語学職従事者を判別する軸，第2正準変数は，翻訳者と通訳者を判別する軸であることが分かる．各軸の性質を知るために，図には36項目のうちいくつかの項目の正準構造が矢印で示されている．すなわち，矢印の向きはその項目の得点が高い方向を表わし，矢印の長さは関係の強さを表わす．例えば，項目13の得点は語学職従事者では高く，大学生では低いということになる．この矢印を参考に図を解釈すると，語学職従事者は大学生に比べて「国際情勢の理解や異文化への理解」といった項目の得点が高い，通訳者は翻訳者に比べて「社交性や外向性」の得点が高い，という結果が得られる．

文章完成法の言葉を概観すると，翻訳者と通訳者との差は，1.対象の違い(文献vs.人)，2.時間の違い(根気・忍耐vs.迅速・臨機応変)，3.性格の違い(粘り強い・粘着質vs.社交的・友好的)，4.結果の違い(仕事が活字として残るvs.あまり残らない)といった点に集約できる．今後は，文章完成法で記述された言葉を参考に適切な質問項目を増やし，翻訳者や通訳者の調査人数を増やすなどして，信頼性や妥当性の向上に努める必要がある．



13 マスコミなどで報じる新しい外国語にどんな意味があるのかを考える
18 世界で何が起こっているか，新聞やニュースなどで調べる方だ
11 世界経済や国際政治の情勢に気を配っている
21 外国から来た人とも臆することなく接することができる
23 国連や世界的機関の活動が世界に及ぼす影響を理解していると思う
24 自分のよさを積極的に相手に伝えていくことができる
14 人づきあいするのは好きな方だ
32 交際範囲が広い方だと思う
25 人とのつき合いは煩わしくて面倒だ
28 初対面の人にものを教えたり，教えられたりするのは苦手だ

図　正準判別分析の結果

職員研修の試み
（教職員の資質とメンタルヘルス）

高橋　哲也
東京都生涯学習情報センター

ｏはじめに

教職現場はストレス現場であるといわれている。

ストレスがこうじると精神疾患などの心の不健康状態を招き、ひいては学校教育活動にも影響しかねないことから、教職員の心の健康（メンタルヘルス）の重要性が指摘されている。一般的に、研修や相談態勢の充実などがその対策として揚げられているが、年々心の不健康状態にある、教職員の数は増え続けており、日々の教育現場でごく普通の教職員が心の不健康状態に追い込まれているという実態にそった具体的対応が求められている。

教職員の資質（校長、教頭、教諭、）「任用前要員」

最近、教職員は道徳心に欠けている。教養性に欠けている。礼儀作法が知らない。言葉使いだけでなく、態度も悪い。他の人のこと（保護者）等、悪口を平気で話している。このようなことで、時々マスコミ等で問題にされている。保護者等から不信感を持たれ、社会的にも、教職員の資質が問われている。

現在、管理職に求められている資質

・能力　（知識・技術）企画力、（折衝・応対力）
　（理解・判断力）指導力、
・態度　積極性、協調性、責任感、
・理念　（創造・調和）

・教職員（校長、教頭、教諭、）の問題点

・自己中心的、他者不審、頑固、固執、協調性に欠ける等、受容と共感がなされないのが現状である。

・教職員の資質の向上はただ研修のみでなく、教職員自身のメンタルヘルスも同時に考え、対策をこうじなければならない。

ｏ目的

現在、急転する社会情勢の中で、「人間として自己確立して生きる」ということが難しくなっており、教育現場でも、児童・生徒の育成や保護者との対応、職場における人間関係など、一人ひとりの主張や表現を大切にするコミュニケーションが求められている。

このため自己を見いだし、自己を育てるトレーニングとして活動するため、実践の場・体験学習の場として研修を計画、実施した。（感受性の訓練）

この研修は、教職員が教育相談の知識と技術を身につけることを目的とし、教育相談の知識、技術を習得できるようにした。研修は講義と演習のバランスを考え、各種療法、事例研究など、実際に役たつよう計画し実施したことが特色である。

各自が役割分担し、ともに考え、共に触れ合い、ともに感じながらら、各自、感受性訓練をした。

一人ひとりの悩みや困難な教育上の諸問題などを解決し、自己実現が図られるようにするなど、さまざまな配慮をし、自然に自分自身に気づくことに焦点があげられるので、自分を知り、自分の成長のための研修でもある。研修では、自由に話し合いをし、話し合いのなかから、各自が、学習指導、学級経営、自己の悩み、同僚間の問題、などの悩みについて、そのつど相談に応じた。

ｏ教職員の心理

心のバランスを崩す教職員はほかならぬ学校教育現場で生み出されている。心の不健康を生み出す要因、背景として、教職員の職務内容や職場環境の問題がある。学校教育現場の多忙化の実態が教職員の相互支援をおそっているのが現状である。

ｏ現状に対しての対応

ストレスや悩みを抱える教職員のための相談体制。

教育現場では、心の暖かい管理職。理解ある管理職等であり。冷たい管理職。管理職の管理・統制の強化を招かないことが大事である。

ｏ教職員の資質

この研修は、教職員の資質を高め、教育相談の知識と技術、教養を身につけると同時に交流の場であり、教育現場の苦悩をわかちあう場でもある。

ｏ結論と今後の課題

職場内で問題解決ができる環境作りが必要であり、研修を通じて、受講者に援助、助言を行なった。

1，各自が、研修効果を上げる。
2，受講者に対して、多面的な対応と配慮をする。
3，受講者の資質の向上を図る。
4，不適応者に職場適応を図る。
5，人事等について、相談が受けられる体制作り。
6，医療と連携した相談体制の確立を図る。

ｏ受講者はカウンセリングの研修等、必要性を強く感じ、継続研修の要望があった。

勤労者のメンタルヘルスと職場環境

雫　石　礼　子
（岩手県立盛岡短期大学）

１．問題　近年の技術革新によるコンピュータの発達は、テクノストレスの問題をなげかけ、職場でのメンタルヘルスが重要視される状況を生じさせている。こうしたなか演者は、某コンピュータ使用業務企業を対象にメンタルヘルスについての調査を行ったので、その結果の一部を報告する。

２．方法　Ｉ県内某コンピュータ使用業務企業の従業員全員を対象として健康習慣、ツァンのＳＤＳ、職場満足度、コンピュータ機器利用状況、コンピュータ不安等の計９５項目からなるアンケートを実施した。調査時期は平成７年６月。

３．結果　全問回答１２０人のデータを分析する。
（１）対象者の属性　表１～４は性，年齢、所属、勤続年数と機器利用の程度との関係を示したものである。機器を毎日使用するものは女に多く、年代別では３０代までと４０代が多く、所属別ではⅡの事務部が多く、勤続年数別では１～５年がもっとも多かった。なおコンピュータ関連機器の利用（複数回答）ではオンライン端末が４割、オフコンが２割で多かった。
（２）健康習慣については７、８時間の適正睡眠７割、毎日の朝食摂取９３％、過度の飲酒なし７２％、喫煙なし６３％であったが、間食せずは３６％、定期的な運動実践なしは５割をこえており運動不足の傾向がみられた。
（３）ＳＤＳの結果は男３８．３８，女３９．７１で性差なく、年齢、学歴でも有意差はみられなかったが、表５にみるとおり、所属別でⅣの部署の従事者が他の部署のいずれと比較してもうつ得点が有意に高かった。
（４）コンピュータ不安は平田の愛教大コンピュータ不安尺度を使用したが、男５５．２３，女５７．６４で性差なく、年齢別でも、所属別でも差がなかった。

４．考察　勤労者のメンタルヘルスをＳＤＳ得点を指標としてみたが、職場の中の業種によって差がみられた。この職場はコンピュータ使用業務を特徴としているが、中高年者の多い職場である。職場満足度などの分析中のデータを加え、このような心理的負荷をうむ職場要因について今後明らかにしていきたい。
（本研究は岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学教室のご指導をえました。記して謝意を表します。）

表１　男女別機器利用

	男	女	(%) 計
毎日使用	１６ (24.6)	４９ (75.4)	６５
使用せず	４５ (81.8)	１０ (18.2)	５５
	６１	５９	１２０

表２　年代別機器利用

	～３０	４０	５０	６０～	(%) 計
毎日使用	２５ (38.5)	２２ (33.8)	１５ (23.1)	３ (4.6)	６５
使用せず	２ (3.6)	１０ (18.2)	２５ (45.5)	１８ (32.7)	５５
	２７	３２	４０	２１	１２０

表３　所属別機器利用

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	(%) 計
毎日使用	１１ (16.9)	３６ (55.4)	３ (4.6)	１１ (16.9)	４ (6.2)	６５
使用せず	３ (5.5)	８ (14.5)	１４ (25.5)	８ (14.5)	２２ (40.0)	５５
	１４	４４	１７	１９	２６	１２０

表４　勤続年数別機器利用

	～1	1～5	5～10	10～	(%) 計
毎日使用	１０ (15.4)	２７ (41.5)	２０ (30.8)	８ (12.3)	６５
使用せず	９ (16.4)	１５ (27.3)	１４ (25.5)	１７ (30.9)	５５
	１９	４２	３４	２５	１２０

表５　ＳＤＳ所属別平均得点

所属	数	得点	標準偏差
Ⅰ	１４	３５．２１	８．１４
Ⅱ	４４	３９．１８	７．６０
Ⅲ	１７	３８．２９	８．１５
Ⅳ	１９	４４．００	８．２７
Ⅴ	２６	３７．６９	７．６６
	１２０	３９．０３	８．１１

表６　コンピュータ不安所属別平均得点

所属	数	得点	標準偏差
Ⅰ	１４	６１．０７	１０．４３
Ⅱ	４４	５６．５５	８．９２
Ⅲ	１７	５３．８８	１０．８７
Ⅳ	１９	５４．６８	１５．１３
Ⅴ	２６	５６．６２	１１．１６
	１２０	５６．４２	１１．０１

新卒看護婦の職業的同一性とキャリア観

松下由美子
自治医科大学看護短期大学

１．はじめに

看護学生という立場から転じて、看護婦として働きはじめた新卒看護婦の職業的同一性は、基礎看護教育を受けるなかで形成されてきた職業的同一性とどのようにつながるのか、また初職のなかで培われる職業的同一性が、その後の職業生活のなかでどのように変化発展していくのかという問題についてはほとんど検討が加えられていない。今回は、その転換期のまっ只中にある入職時オリエンテーション期間中の看護婦の職業的同一性がいかなる様相を呈しているのか、また職業的同一性の発達の度合いがキャリア観にどのような影響をもたらしているかを把握したいと考えた。

２．研究方法

１）調査票の作成：Marcia J.E.の自我同一性地位の考え方を参考にして、看護学生用に松下が作成した「職業的同一性地位テスト」を看護婦用に一部改正した23項目から成る５件法のテスト、ならびにキャリア観（今後の職業や生活をどのように送りたいと考えているか）についての３項目からなる自記式調査票を作成した。

２）調査対象：関東地区の４つの大学病院で働く新卒看護婦242名

３）調査方法：平成７年４月入職時オリエンテーションの会場で調査票を一斉配布、留置式で回収した。有効回収数（率）は221（91.3％）であった。

４）分析：①職業的同一性地位テストの23項目のうち、回答の分布に偏りのある（80％以上）１項目を除外した。②22項目を因子分析（主因子法，バリマックス回転）し、因子のまとまりがよく説明が付きやすい３因子を抽出した。③因子分析の結果、共通性の低い１項目を除外し、さらに②と同様の手続きで因子分析を行った。④各因子とも因子付加量が 4.0以上の項目で下位尺度を構成し、信頼性係数（Kronbach α）を算出した。⑤各下位尺度得点の平均点±１S.D.を基準に高・中・低群を設け、キャリア観に関する項目とのクロス集計を行った。

３．結果および考察

１）因子分析の結果

第１因子の寄与率が22.0であり、累積寄与率は38.8であった。第１因子は「私は未だに自分が本当にやりたい仕事が何なのかよくわからなくて悩んでいる。」「できるだけ早い時期に今の仕事をやめたい。」などの項目で構成されるため「職業的同一性拡散地位因子」、第２因子は「今持っている資格のほかに取りたい資格がある。」、「自分の成長に結びつくことだったら、どんな仕事でもやってみたい。」などの項目で構成されているので「職業的同一性モラトリアム地位因子」、第３因子は「私の就いた職業について両親も賛成してくれているので心強い。」、「私は今の職業についてすんなりと決めた。」などで構成されているので「職業的同一性早期完了地位因子」と命名した。「職業的同一性達成地位因子」は抽出されず、入職時期の看護婦は職業生活への不安や迷い、模索の最中にあると考えた。

２）信頼性係数の算出

３つの下位尺度はそれぞれ11，4，3項目で構成されており、信頼性係数は、全体が0.718、下位尺度の各々が 0.775, 0.685, 0.616であった。

３）職業的同一性地位テストの下位尺度得点とキャリア観項目とのクロス集計結果

①仕事第一かゆとりか

全体の78.2％がゆとりを持ってのんびり仕事をしたいと回答し、拡散得点の高いものほどその傾向が強かった（χ^2=15.93, P<0.01）。

②一つの病院に長く勤務するか否か

全体ではひとつの病院に長く勤務するが24.5％、いくつかの病院などを経験するが36.1％であった。拡散得点の高いものほど、職場異動の志向が強かった（χ^2=20.21, P<0.001）。

③好きなときだけ働くか定職に就くか

全体では77.2％が定職に就くと回答し、拡散得点の低いものほど定職を志向する傾向にあった（χ^2=9.12 P<0.1）。

④自分の５年先の状況をどう予測しているか

「看護職として何らかの形で仕事をしている」は全体の57.6％であった。一方、「結婚して家庭にいる」は14.2％、「わからない」は16.4％、「学校に通っている」は 5.5％という結果であった。

モラトリアム得点の低いものは、今の病院で正職員として働いていると予測する割合が高く、定着志向が見られた（χ^2=35.79, P<0.01）。早期完了得点の高いものも同様の傾向が見られた（χ^2=23.35, P<0.1）

⑤仕事と結婚・育児との兼ね合いをどうするか

仕事と結婚・育児を融合したライフコースを考えているか否かと職業的同一性形成との関連は見られなかった。

癌患者のストレス対処と適応

塚本尚子
（東京大学医学系研究科）

【問　　題】

癌患者の精神的側面についての研究の歴史は浅く、1950年代にはじめて記述的な研究が報告されている（Bard & Sutherland, 1955; Quint, 1965など）。近年の心理学におけるコーピング研究の発展により、癌医療においても癌患者の適応に関連するコーピングが注目されるようになってきた。Dunkel-Schetterら(1992)は、癌患者用のWays of Coping for Cancer Scaleを用いて603名の癌患者を対象に調査を行っている。この結果「社会的サポートの探索と使用」「積極的な視点」「距離を置く」「認知的な逃避－回避」「行動的な逃避－回避」の5つのコーピング因子を抽出した。適応との関連では「逃避－回避」方略を用いることは情緒的な混乱と関連しており、「積極的な視点」方略を用いることは情緒的な安定と関連している。さらに癌へのコーピングを決定する要因は、生物学的な疾患の特性でなく、癌に罹患することへの主観的評価にあることを示した。わが国では癌患者を対象としたコーピング研究は少なく、特に退院後の癌患者のコーピングと精神的適応についての研究はほとんどない。そこで今回量的な調査に先だって基礎資料を収集する目的で、癌患者の精神的適応とコーピングを探るために構造化面接を行う。

【方　　法】

対象は癌に罹患し入院治療を受けた後、現在外来通院中の患者10名（男性5名、女性5名。平均年齢52.3歳(24歳～72歳)）。特に適応との関連性を明確に捉えるために精神科医が退院後もフォローアップしている患者を対象とした。外来受診時精神科医により構造化面接を実施。質問内容は、現在のストレスとコーピング方略、発病後の物の見方や考え方の変化、癌の克服についての考えなど6つの項目について質問を行った。併せて精神科医の診断結果を参考にした。

【結果と考察】

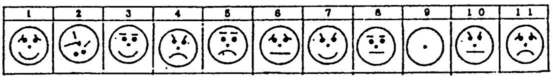
今回の面接の結果、ストレスの内容はDunkel-Schetterら(1992)が上げた「将来についての不安」や「身体的能力の制限」に加え、「口臭」「不眠」のような特殊な症状に関するものも含まれていた。患者の回答したコーピングと適応の関係は明確ではなかった。しかし癌克服についての考え方にコーピングの結果が反映されており、適応との間に関連性が見いだされた。「癌は怖いものではない」「克服するほどのものではない」とストレスの脅威を切り下げた2名は、「痛み」や「不眠」などの症状をストレスとしてあげ、それらの症状のコントロールをコーピングとして考えている。この2名は慢性疼痛、不眠症で現在投薬を受けており不適応状態にある。また「病変を除去すること」「期間が5年間経過すること」「癌が完治すること」と回答し、脅威との直面を回避した3名は、現在のストレスについて「体力の衰え」「再発の不安、病気の進行」「口臭」をあげており、対処としては「病院に通う」「複数の医師、病院への受診」「対処方法なし」と回答している。この3名はうつ状態、心気神経症、自己臭の診断を受けており不適応状態である。一方「病気であることを受け入れること、不安を受け入れ、まな板の上の鯉になれる」「病気のことを考えなくなること」「自分は病人であると思わなくなること」と癌の克服を情動のコントロールに向けている患者は3名であった。これら3名の患者は現在のストレスについて「将来の不安」「自信のもてなくなった自分」についてあげ、対処としては「気分転換」「あまり考えないようにする」「カウンセリングを受けている」「仕方がないと思っている」をあげていた。これら3名の患者には病的な不適応状態はみられない。Taylor.E.Sら(1984)は乳癌患者を対象とした研究おいて、認知的コントロールは適応に関連しているが、行動的コントロールは適応に関連してないと指摘している。今回の面接結果から、コーピングを情動のコントロールに向けられる患者のみが、心理的なストレスを認知し、コーピングを行い適応的に退院後の生活を送っている事がわかる。情動的なストレスを認知しないことは一見ストレスが少ないように見えるが、身体症状として出現し、長期にわたるより重篤な問題を引き起こしている。今回の面接では精神科医の治療を受けている患者を対象にした。しかしこれらの患者は特殊な存在ではない。癌への罹患が契機と考えられる反応性うつ、反応性不安を退院後長期にわたり経験し続けている患者が20～30%存在することが多くの研究によって指摘されている。こうした現状から今後さらに介入を含めた研究の蓄積が必要であると考えられる。

環境音に対する感情表出の検討

田之内厚三
（麻布大学環境保健学部）

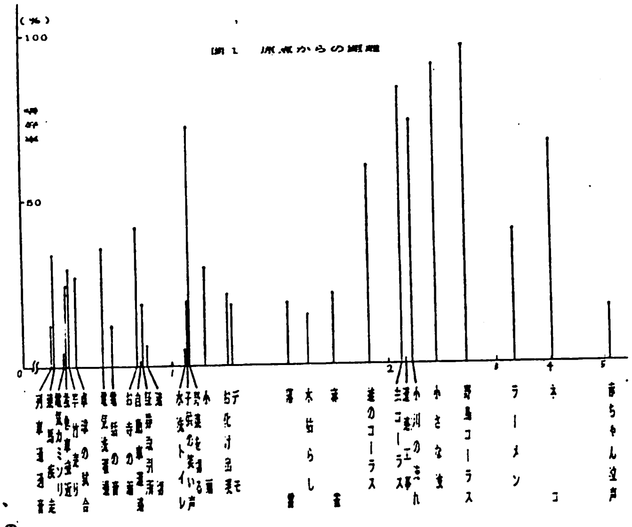
目的：茅原（1993）は、種々の環境音を聴かせることによってどのような場面と行動を想起するかを検討し、ある特定の環境音の間には場所と行為の想起イメージに共通の傾向があるということを見い出している。そこで本研究では、感情表出においても同様の傾向が見られるのではないかという仮説に立ち、Thayerら（1969）が用いた略図的顔面図形を選択肢として、この点を検討した。

方法：Porteousら（1992）は、環境音を6分類しているが、それに茅原の結果を加味し、30種類の環境音を選択した。〔自然音〕木枯らし、落雷、小さな波、小川の流れ、小雨。〔動物音〕ネコ、虫、競馬の疾走、蛙、野鳥。〔人間の声〕デモ、赤ちゃんの泣き声、竿竹売り、子供の笑い声、証券取引所。〔人間の活動音〕卓球試合、野菜を切る、麻雀、ラーメンを食べる、水洗トイレ。〔モーター音〕電気洗濯機、列車通過音、道路工事、自動車道路、電気カミソリ。〔何かを示す音〕電話の音、お寺の鐘、救急車接近、お化け出現、踏切。これらをランダムに約40秒間呈示し、そのときの感情を次の11種類の表情図形から1つだけ回答させた。また、



好意度についても5段階評定させた。被験者は大学1年次149名（男66名、女83名）。

結果と考察：予備調査として表情図形が表している感情を再検討したところ、サーヤーらの結果とほぼ同様の傾向が見られたが、中性図形の2や9、あるいは8についてはかなり異なった結果が得られた。30種類の環境音に対する表情の判断率を概観すると、自然音や動物音には3（陽気、愉快、幸福）や8（静かな、沈着）の図形が多く選択されているが、他のカテゴリーにはあまり共通した傾向は見られなかった。また、眉が下がっていると「悲しさ」の表われとされているが、〈落雷〉〈赤ちゃん泣声〉〈救急車接近〉なども選択されていることから、眉が下がっている表情には「恐怖」や「困惑」あるいは「かわいい」といった感情も含まれていると推測できる。次に、数量化理論3類によって表情図形への反応の数量化を行った。図1は、3次元上に位置する各環境音の原点からの距離と各音に対する嗜好率（「好き」の割合）との関係を示したものである。原点に近いものは一般的な環境音であり、原点から遠い距離にあるものは特殊な環境音として位置づけられる。また、各環境音の序列と嗜好率との間にはまったく相関関係が見られないない。



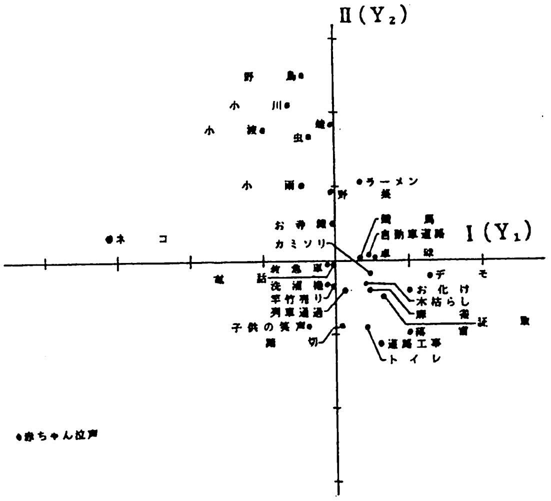


図2　30の環境音の布置

図2は、各環境音を2次元上に布置したものである。この結果から、I軸は快－不快に、II軸は音の大きさに関係する軸であるといえよう。この図からも〈赤ちゃんの泣声〉と〈ネコ〉が特殊な感情を抱かせる環境音であるということがわかる。一般的には、従来からいわれているように、静かな音には快い感情を、大きな音には不快な感情を抱くという傾向が見られる。

「新文字」の感情価についての研究

中島　彩花
（産能大学）

問　題

「あ゛」のように，本来ならば，濁点・半濁点をつけない文字にそれらをつけた文字（本研究では，このような文字を「新文字」と呼ぶ）について大学生273名に実施された調査（中島，1994）では，その43.0％の者が新文字に抵抗を感じなかった．さらに中島による大学生247名を対象とした調査（1995）によると，新文字によってユニークな感情をあらわすことができることが見いだされた．すなわち，濁点がつくことによってネガティブな感情を，半濁点がつくことによってポジティブな感情を，それぞれより明確に表現することが理解された．しかし,これらは，単独な文字に対する評定で，文脈の中においてはこの新文字の感情表現が変わる可能性がある．今回の研究では，1994年の調査で実際に抽出された新文字を使用して，①文字，②句，③文，の3条件のもとで，濁点の効果に相違があるかどうかを確認する．

方　法

【被験者】　総合科目「人間の心理と行動（心理学）」の授業を受けている大学生175名（男子70名，女子105名）．

【刺激材料】　調査で実際に抽出された「あ゛ーあ゛しにそー」という文をそのままコピーしたものと，濁点を消したものを用意し，下記のように下線をつけた．

条件：①文字条件「あ」「あ゛」
　　　②句条件「あーあ」「あ゛ーあ゛」
　　　③文条件「あーあしにそー」
　　　　　　　「あ゛ーあ゛しにそー」

【質問紙】　質問紙はＢ５版,3枚一組になっている．1枚目はフェイスシート，2枚目は通常文字についての質問，3枚目には新文字についての質問がそれぞれ印刷されている（なお，2枚目と3枚目の構成はランダムに組み合わされている）．質問は次の通りである．

(1)下線部はどのような感情をあらわしているか（自由記述）

(2)その感情の快・不快の程度（7段階評定）

(3)その感情の強弱の程度（7段階評定）

被験者は先に記した175名であるが，①文字条件には52名，②句条件には70名，③文条件には53名が回答している．

結果と考察

①文字条件における，快・不快の程度の評定の平均値は，「あ」が4.38（SD=1.16），「あ゛」が4.90（SD=1.39)であり，新文字の方が不快感情の程度が有意に高くなった（$t=2.28$，$p<.05$）．

また，強弱の程度の評定の平均値は「あ」が4.10（SD=1.18），「あ゛」が5.17（SD=1.38）であり，新文字の方が強さの程度が有意に高くなった（$t=4.50$，$p<.01$）．

②句条件における，快・不快の程度の評定の平均値は，「あーあ」が4.76（SD=1.01),「あ゛ーあ゛」が5.60（SD=0.90)であり，新文字の方が不快感情の程度が有意に高くなった（$t=6.07$，$p<.01$）．

また，強弱の程度の評定の平均値は「あーあ」が3.72（SD=1.26),「あ゛ーあ゛」が5.18（SD=1.27)であり，新文字の方が強さの程度が有意に高くなった（$t=6.44$，$p<.01$）．

③文条件における，快・不快の程度の評定の平均値は，「あーあ　しにそー」が5.08（SD=1.07),「あ゛ーあ゛しにそー」が5.75（SD=1.07)であり，新文字の方が不快感情の度合いが有意に高くなった（$t=4.00$，$p<.01$）．

また，強弱の程度の評定の平均値は「あーあ　しにそー」が4.38（SD=1.55),「あ゛ーあ゛しにそー」が5.58（SD=1.49)であり，新文字の方が強さの程度が有意に高くなった（$t=4.59$，$p<.01$）．

つまり，濁点がつくことによって，あらわされている感情は，刺激が文字のみの場合でも，句であった場合でも，文であった場合でも，不快の程度はより高くなり，また，強さの程度もより高くなることが分かった．

新文字の濁点は，不快感情をより明確に伝えようとするものであり，なおかつ，より強い感情を伝えようとするものであることが考えられる．

今後は，他の文字についても同じような結果が得られるか，また，今回は書き文字についての調査であったが，活字（明朝体）による調査も進めている．

参考文献：

中島　1994　感情の特殊な表現文字について　第61回応用心理学会発表論文集　p97

中島　1995　感情をあらわす濁点・半濁点文字の研究　第3回感情心理学会発表抄録

認知・感情－6

Personal Spaceに関する基礎研究(3)

○都築道子　　　豊村和真
(北星学園大学)

目的

本報告では心理量を直接被験者に求めるマグニチュード推定法の技法を応用し,Personal Space(以下 PS と略す)の測定を行い,基礎的なデータを得ることを目的とした。

方法

被験者は,大学生(男性 25 人,女性 46 人)でいずれも,接近者とは全く面識がないか,本学構内で顔を見かけたことがある,という程度の面識であった。接近者は,大学生男女各 1 名ずつ計 2 名で,全ての実験において接近者の服装,頭髪,表情などは統一した。実験は本学の地下実験室で行った。(図 1 参照)

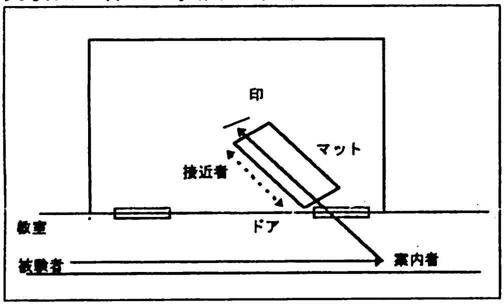


図 1 実験場面

接近者は測定前に被験者に影響を与えないよう,ドアから入り,マットの上を移動した。被験者が爪先を合わせる印から 300cm まで 50cm ごとに目印を付け,その位置に合わせてランダムな順で接近者が立ち止まり(立位置),その度に視線を合わせた。実験者は別室でモニターにより被験者の様子を観察し,テープ録音した教示を使用した。

実験は二種類行われた。実験 1;被験者の PSの境界線を Stop-distance 法により測定した。接近者が部屋に入り,被験者にゆっくりと近づいた。接近者は,被験者の合図した位置で立ち止まり,二者間の距離を測定した。

実験 2;標準刺激は実験 1 で測定した被験者の PS の境界線に接近者が立った時に感じる気詰まりの程度を 100 とした。教示は,「この地点(標準)の気詰まりの感じを 100 とし,数字が大きくなるほど気詰まりだと感じるとします。接近者が他の位置へ移動し,最初のこの地点と比べて,その地点の気詰まりの感じを数字であらわして下さい。思い浮かんだ数字をそのまま言って下さい。」であった。被験者の様子を確認しながら,六種の距離を測定し,記録した。

結果と考察

マグニチュード推定法の技法を用いた気詰まりの程度の測定により得たデータは全て対数変換し,分析を行った。

被験者の性別と接近者の性別の組み合わせの 4 通りについて,分散分析を行った結果,有意差は無かった。

Stop-distance 法で測定した対人距離の平均値の差を検定した。立位置 50cm 以上 100cm 未満を ps グループ 1 とし同様に 50cm ごとに全部で 5 グループに分け,立位置毎に分散分析した結果,全ての立位置で有意な差があった。また,ps グループ毎に分散分析した結果,1%水準で有意差があった。($p<0.0001$)(図 2 参照)

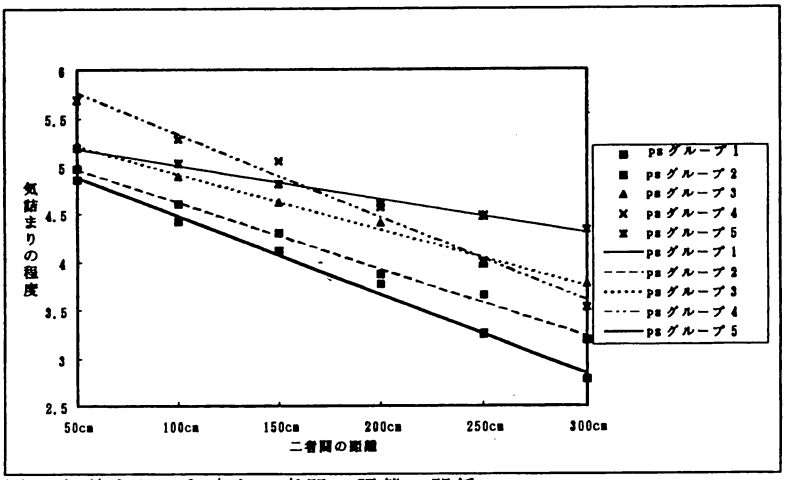


図 2 気詰まりの程度と二者間の距離の関係

Personal Spaceに関する基礎研究(4)

○豊村和真　　都築道子
(北星学園大学)

はじめに

第３報に引き続き，本報告では心理量を直接被験者に求めるマグニチュード推定法を用い，被験者を中心とする８方向に他者がいる場合の気詰まりの程度を測定する。

方法

被験者：大学生９名(男性２人､女性７人)でいずれも，接近者とは面識がない。なお第３報の被験者とは重複していない。

接近者は女子大学生１名で，全ての実験において同一人であり，接近者の服装，頭髪，表情などは統一した。

手続き：第３報と同様にStop-Distance法による値を基準として接近者が５０～３００ｃｍ（５０ｃｍ毎）の距離をとった場合(接近者立位置)の気詰まりの程度を部屋の中央に立たせた被験者に数字で表現させた。

方向の変更は被験者が回転することにより実現した。接近者は実験開始後部屋に入り，立位置へと移動した。立位置および方向（８方向＝正面，真後ろ，左右，左右斜め前，左右斜め後ろ）の順序はランダムとした。

被験者の視線を統一するために，被験者の正面の壁にはりつけた１６ｃｍ×１６ｃｍの紙を見るように教示した。ただし接近者が被験者の正面から接近する際は，接近者の目を見るように教示した。なお，方向によっては被験者が接近者の位置を視覚的に確認できないため，接近者は常に電子メトロノームを携帯し，実験が終了するまで電子音を鳴らし位置を示した。また本試行前に，上記の８方向の中間の方向による練習試行を行なった。

室内は被験者と接近者のみであり，接近者は被験者と言葉を交わさず被験者に対する教示，気詰まりの程度の数字の聞き取りなどは全てビデオ，オーディオを使用して別室から行った。

結果と考察

気詰まりの程度を対数変換して，被験者全員の平均値を算出し，スプライン補間した結果を図１に示した。図１では，被験者の正面はＸが０，Ｙが４００の時である。Ｚ軸（高さ）は気詰まりの値として数値で言わせた値を対数変換した値であり，Ｘ軸，Ｙ軸はそれぞれ前後と左右である。前方は図１からは見にくいが，ほぼ凹凸もなく，一定の割合で減衰しているのは第３報で述べたとおりであった。ただし，図１においては５０ｃｍ以内の部分は誤差が大きく，一応表示したに過ぎないことに注意すべきである。概ね全体的になだらかな曲線を描いていた。後方に若干の高まりが見られた。個人別の値についても検討したが，相当個人差が見られた。

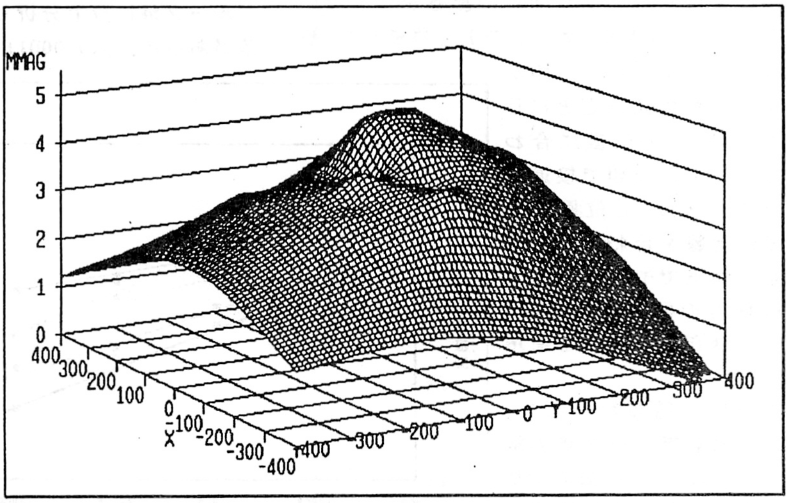


図１　3次元表示による気詰まりの程度
(縦軸は気詰まりの程度･Xが０,Yが400の時が正面)

知覚された定性的および定量的特徴による顔の統計的識別

○足立浩平、渡辺昭一
（科学警察研究所）

１．目的

人間によって知覚された特徴情報を計算機で処理し、顔の識別を行うシステムが考案されている。これらのシステムでは、まず、多数の顔の各々について観察者が知覚した特徴をコード化して、データベースが構成される。そして、上記の観察者とは別の者が知覚した未知の顔の特徴コードを計算機へ入力し、この入力データと合致した顔がデータベース中から検索される。

以上のシステムでは、特徴のコード化法として、(1)定量的方法と(2)定性的方法のいずれかが用いられる。(1)は「目の大きさ」や「顔の太り具合」といった量を評定尺度によって観察者に評定させ、評定値をコードとする。(2)は、「顔が三角形」や「二重瞼」といったキーワード記述をコード情報とする。(1)では扱い難い定性的な特徴情報を顔の識別に利用できる点が(2)の長所であるが、(2)では無視される量的情報を利用できる点は(1)の長所であり、両者は優劣が付け難くむしろ相補的な性質を持つ。そこで、(1), (2)のいずれかではなく、両者を同時利用する顔の識別法を提案し、精度を評価する。

2. 定性・定量情報を同時利用するシステム

システムの概略：データベース中の各顔$i(i=1,\cdots,I)$についてN名の観察者がJ種のA段階尺度によって評定を行うと同時に、キーワードによる特徴記述を行う。キーワード記述は、予め用意されたK個のキーワードからなる集合$\{1,\cdots,k,\cdots,K\}$に照らして、キーワードkが記述されたか否かによってコード化される。入力データも同様に評定値とキーワードから構成され、評定値をまとめて、$\mathbf{y}=[y_1,\cdots,y_j,\cdots,y_J]'$、キーワード群を$\mathbf{z}=[z_1,\cdots,z_k,\cdots,z_K]'$（$z_k$はキーワード$k$の記述の有無を1-0で表す二値変数）で表す。

データベースの各顔について上記の入力データ$\mathbf{x}=[\mathbf{y}',\mathbf{z}']'$が得られる確率を求め、確率の高い顔を探し出す。尺度評定とキーワード記述の独立性を仮定すると、顔iについて$\mathbf{x}$が得られる確率は、

$$p(\mathbf{x}|i)=p(\mathbf{y}|i)\times p(\mathbf{z}|i) \qquad (1)$$

で表せる。ここで、$p(\mathbf{y}|i)$および$p(\mathbf{z}|i)$はそれぞれ、尺度値群$\mathbf{y}$およびキーワード群$\mathbf{z}$が得られる確率である。

確率の算出方法：$p(\mathbf{z}|i)$の算出には、足立ら(1992)の多項分布(特徴復元抽出)法と最尤法・零確率回避法を用い、

$$p(\mathbf{z}|i)=\prod_{k=1}^{K}\left(\frac{g_{ik}+K^{-1}}{\sum_{k=1}^{K}g_{ik}+1}\right)^{z_k}\times(\text{定数}) \qquad (2)$$

とする。ここで、g_{ik}は顔iについてキーワードkを記述した観察者数である。

$p(\mathbf{y}|i)$については、各尺度評定値の独立性を仮定し、

$$p(\mathbf{y}|i)=\prod_{j=1}^{J}\theta_i(y_j) \qquad (3)$$

とおく。ここで、$\theta_i(y_j)$は、顔iを見た観察者が尺度jについて評定値y_jを与える確率である。この$\theta_i(y_j)$を求める方法として多項分布法と正規近似法を提案する。

多項分布法では、最尤法・零確率回避法を利用し

$$\theta_i(y_j)=\frac{f_{ij}(y_j)+A^{-1}}{N+1}\times(\text{定数}) \qquad (4)$$

とする。ここで、$f_{ij}(y_j)$は、顔i、尺度jについて評定値y_jを与えた観察者数である。一方、正規近似法では、段階尺度を近似的に連続体とみなして、評定値が正規分布に従うものと仮定した上で、最尤法を利用し、

$$\theta_i(y_j)=\exp\left[-(y_j-m_{ij})^2/(2s_{ij}^2)\right]/s_{ij}\times(\text{定数}) \qquad (5)$$

とおく。ここで、m_{ij}およびs_{ij}はそれぞれ、顔iの尺度jに関する観察者の評定値の平均および標準偏差である。

3. 実験的評価

考案した方法を、実験的データベース(I=100, J=36, K=605, A=7, N=30)を対象として評価した。目撃者証言による顔画像検索への応用を考慮して、データベース中のいずれか１名の顔画像を被験者(大学生)に提示した後、記憶に基づいて、その特徴を尺度上に評定させると同時にキーワードで記述させ、入力データを収集した。データベースの各顔について入力データが得られる確率を求め、被験者が目撃した顔の確率が最大であった場合、識別成功とした。以上の手続きを延べ63(被験者7名x顔9)回繰り返して、識別成功率を求めた。

以上の手続きを、評定値(ユークリッド距離・多項分布法)だけ、および、キーワードだけを用いる方法によっても行った。表1に識別成功率を示す。評定尺度およびキーワードの両者を用いる方法は、いずれか一方だけを用いる場合に比べて優れ、定性的および定量的特徴情報を同時利用することの有効性が示された。

表１．識別成功率 (%)

評定値＋キーワード		評定値だけ		キーワードだけ
多項分布	正規近似	距離	多項分布	多項分布
52	56	32	37	43

顔写真による目撃者の同定判断（３）

―― ２回目の写真面割りの同定精度に及ぼす効果 ――

渡辺　昭一
（科学警察研究所）

はじめに

Lindsay and Wells (1985)は、継時提示で面割り写真を見せられた目撃者は、同じ写真を同時提示で見せられた場合よりも、相対判断処理を用いることが困難になり、誤同定が少ないことを示した。目撃者の相対判断への依存が誤同定を増加させるならば、同定に失敗した目撃者に再び写真を提示して再考を促すことは、高率の誤同定の回復をもたらす可能性がある。

また、相対判断をしやすい目撃者を「篩にかける」ために、実際の写真面割りを実施する前に、容疑者を含まない面割り写真(blank lineup)を示して同定させる方法が提案されている(Wells & Luus,1990)。しかし、この方法の有効性を示すデータは、Wells(1984)の実験以外には見当たらない。

実　験　1

継時提示による写真面割り後に、目撃者に同時提示により２回目の写真面割りを実施し、再び同定判断を求めることの同定精度に及ぼす効果を検討した。

方　法　被験者は大学生88人で、半数は犯人が含まれている（犯人存在）面割り写真、他は犯人の代わりに見掛けが犯人と似ている無実の容疑者を含む（犯人不在）面割り写真から犯人の同定を試みた。

被験者に、模擬犯行場面のビデオ録画を目撃させた後に、被験者のリハーサルを妨害するための課題および犯人の顔の特徴についての記憶再生課題を行わせた。続いて、10人で構成された面割り写真から犯人を同定するように求めた。面割り写真の機能的サイズは、犯人存在条件7.86、犯人不在条件9.17であった。

次に、被験者に先に提示したのと同じ写真を同時に提示し、もし望むなら以前の判断を変えてもよいと教示して、２回目の写真面割りを行なった。

結果と考察　表１に、面割り写真の継時提示とその後の同時提示による目撃者の同定判断を示す。

表１　同一の面割り写真を２回提示したときの目撃者の同定判断

写真面割りの条件	同定判断（%）容疑者*	ディストラクター	「犯人はいない」
１回目（継時提示）			
犯人存在	19(43.2)	10(22.7)	15(34.1)
犯人不在	2(4.5)	12(27.3)	30(68.2)
２回目（同時提示）			
犯人存在	16(36.4)	17(38.6)	11(25.0)
犯人不在	6(13.6)	17(38.6)	21(47.7)

*容疑者は犯人存在条件では犯人、犯人不在条件では無実である。

目撃者に面割り写真を見る２回目の機会を与えると、犯人存在条件では正同定率を若干低下させ(Z=.76,ns)、ディストラクターの誤った同定を増加させる(Z=2.01, p<.05)。犯人不在条件では正否定率が減少し(Z=2.75, p<.01)、誤同定が増加した(Z=2.57,p<.05)。最初の写真面割りで同定しなかった目撃者は、２回目の機会を与えられると、実験者が彼らの最初の判断が間違っていることを暗示していると感じるものと思われる。

実　験　2

Blank lineupを継時的に提示した後に、容疑者を含む実際の（２回目の）写真面割り行なうことの同定精度に及ぼす効果を検討した。

方　法　84人の被験者を、犯人存在と犯人不在のいずれかの条件に同数ずつランダムに割当てた。各被験者は、犯人存在または犯人不在の面割り写真を見せられる前に、blank lineupが提示された。Blank lineupは、すべてがディストラクターで構成され、犯人に似ている無実の容疑者が含まれていない点で犯人不在の面割り写真と異なる。

結果と考察　Blank lineup後の継時提示による写真面割り(blank-lineup条件)と実験１の１回目の継時提示による写真面割り(non-blank-lineup条件)における目撃者の同定判断を、表２に示す。

表２　Blank lineupと実際の写真面割りにおける目撃者の同定判断

Blank lineup条件		実際の（２回目の）写真面割り（%）犯人存在	犯人不在
ﾃﾞｨｽﾄﾗｸﾀｰを同定(誤同定) 32(38.1) →	正同定	4(25.0)	*
	誤同定	2(12.5)	4(25.0)
	誤否定	10(62.5)	*
	正否定	*	12(75.0)
「犯人はいない」(正否定) 52(61.9) →	正同定	13(50.0)	*
	誤同定	1(3.8)	5(19.2)
	誤否定	12(46.2)	*
	正否定	*	21(80.8)
Non-blank-lineup条件 88(100.0) →	正同定	19(43.2)	*
	誤同定	10(22.7)	14(31.8)
	誤否定	15(34.1)	*
	正否定	*	30(68.2)

* 生起しない

Blank lineupで同定した目撃者は、同定しなかった目撃者よりも、２回目の写真面割りの犯人存在条件での正同定が少ない(Z=1.75,p<.05)。Blank lineupで同定しなかった目撃者は、non-blank-lineup条件の目撃者よりも、犯人存在条件での誤同定が少なく(Z=2.06, p<.05)、犯人不在条件の正否定が多かった(Z=1.93, p<.05)。Blank lineupを用いることにより、犯人の正同定の可能性を低減する傾向は認められなかった。この結果は、blank lineupから同定する目撃者は、後の写真面割りの信用性が低いことを示している。

検査・測定２－３

顔パタンからの年齢推定におけるOWN－ANCHOR効果

－目撃証言をめぐって－

越智啓太
（警視庁科学捜査研究所）

１、問題

目撃者の証言についての従来の研究は、それがいろいろな面で信頼できないものであるという事を示してきた。しかしながら、目撃情報のいくつかの側面については極めて信頼性が高い事が知られている。例えば渡辺ら(1987)は、実際の事件の対人供述のうち年齢についての供述は信頼性が高いものであることを指摘している。年齢の認知については多くの実験も行われてきたが、これらの実験の結果においてもやはり、年齢認知はかなり正確であることが明らかになっている(Korthaseら,1982)。ところが、これらの実験を詳細に検討してみると年齢の知覚においていくつかの系統的なバイアスがかかってくることもわかってきた。例えば、対人魅力の低い顔は年齢が過大視される事(Garder,1965;越智,1994)や顔の一部が隠されると年齢が過大視される事(Pittenger and Shaw,1975)、子供は一般に大人の年齢を過大視する事(根ケ川,1994)などである。本研究ではこれらのバイアスのうち、判断者自身の年齢による係留効果(own-anchor effect)について検討する。判断者による係留効果とは、自分自身のデータが対象の判断に影響を与える現象であり、目撃証言研究の中では身長に関する係留効果、つまり目撃した人物の身長を実際のものよりも自分の身長に近く知覚してしまう現象、や体重に関する係留効果が指摘されている(Flin and Shepherd,1986)。

２、方法

従来の年齢知覚の実験では、顔の写真が刺激として用いられていることが多いが、現実の顔刺激については年齢認知に影響する要因が複雑で明らかになっていないものも多いことから本研究では、Pittengerら(1975)にあげられている人間の横顔の線画を刺激として用いた。これは基準となる横顔の輪郭線画と、それをもとに、基準線画の耳の部分を極として極座標で$\theta'=\theta$、$R'=R(1-k\cos\theta)$のカージオイド変換（パラメータ k=-.25～+.55）及び絶対座標で$Y'=Y$、$X'=X+Y\tan\theta$（$\theta=-15°\sim15°$）のアフィン変換を施した図形３５個からなる。この図形を被験者に提示し、それが何歳ぐらいに見えるかを絶対的な値で回答させた。実験は質問紙によって行われた。被験者は２２歳から４５歳の学生・会社員６８名であった。

３、結果と考察

カージオイド変型に伴う知覚された年齢の平均値の変化をFig.1(1)に、アフィン変換に伴う知覚された年齢の変化をFig.1(2)にあげる。Pittengerらの研究と同様に前者の変型は加齢知覚に影響を与えたが、後者の変型は明確な効果はなかった。傾向分析の結果、カージオイド変型はこの範囲では、加齢知覚に一次関数的に影響している事が示された(F_{linear}:$p<.01$)。次に３５個の各図形について、被験者自身の年齢と推定された年齢との相関を算出した。その結果、いくつかのパタンについてこの相関が見られた(Fig.2)。これは、顔の線画パタンの年齢知覚が判断者の年齢に影響されていることを示しており、係留効果が生じたと考えることができる。係留効果が生じた顔パタンは基準パタンを若干変形したものであり、基準図形や極端に変形されたパタンについてはこれらの関係は明確でなかった。これは、年齢知覚においては基本的には絶対的な年齢判断の基準が用いられるが、中程度の変形によってこれらの判断基準を用いるのが困難な場合に自己参照バイアスが生じる事を示しているのかも知れない。

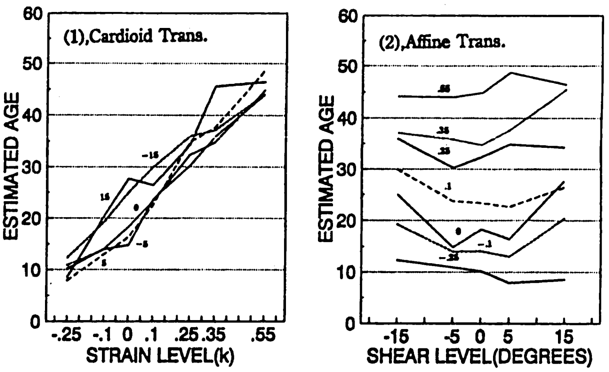


Fig.1 幾何学的変形を施した顔パタンと推定された年齢の関連

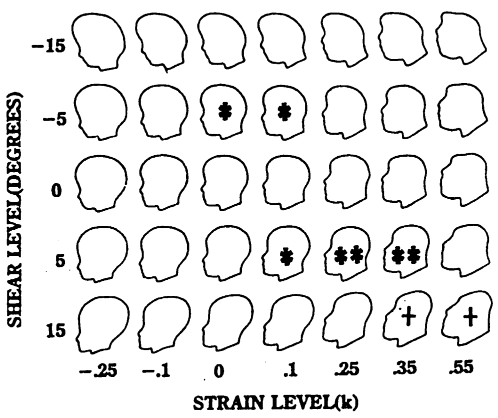


Fig.2 被験者の年齢と推定された年齢の相関
(** p<.01 * p<.05 + p<.1)

女性を対象にした顔の目立ち易さの要因について

○福　本　純　一　　　福　田　　廣
（山口県警科学捜査研究所）（山口大学教育学部）

顔記憶において目立ち易さの効果が知られている。福田ら(1989)は顔刺激の組み合わせを操作することにより、顔全体のゲシュタルト的な特性に基づいた絶対的属性としての目立ち易さの存在を確認した。さらに、全体的な印象として捉えられる目立ち易いと評価される顔貌の意味空間を明らかにするため、男性の顔を使用し、顔から得られる情報の因子分析を行い、印象的要因を軸とした５因子を抽出した。これを利用して、目立ち易いと評価される顔の構造分析を行い、回避・危険性が高く、社会的望ましさにおいて低く評価される意味空間を有していることを明らかにした(1990)。そこで今回は、目立ち易い顔の意味空間内容について、対象の性差に応じて違いがあるか否か、女性の顔を対象に検討を加えることを目的とした。

方　法

【被験者】18～21才までの大学生98名(男子54名、女子44名)

【評定刺激】女性の首から上部の白黒の正面顔写真（年齢19～24才）72枚を評定者25名に継時的に提示し、顔の目立ち易さの程度について５点法による評価を求め、得られた平均得点に基づいて上位７枚、下位７枚の顔写真を高評定群（目立ち易い顔；M=4.26）刺激、低評定群（目立ちにくい顔;M=2.27）刺激として使用した（$t=23.158, P<0.01$）。

【評定項目】評定項目は、男性の顔を対象にした目立ち易さの分析（福本ら,1990）に用いたと同一の項目により、印象項目37項目と形態項目19項目の計56項目で構成する評定用紙を作成した。

【手続き】Ｂ5版台紙中央に貼付した顔写真（7.5×11cm）を評定用紙と共に配布し、７段階尺度による評定を求めた被験者は高低各１刺激を任意に割り当てられ、１刺激に対し14名の被験者が評定を行った。従って、のべ被験者数は196名（7×14×2）となった。

結果と考察

全評定項目に対する評定値を主因子法（バリマックス回転）により因子分析を行い、因子負荷量が0.45以上の項目について第６因子まで解釈を行い、結果をTable1に示す。

１　女性の顔を対象にした因子構造

第Ⅰ因子は「華やかさ・開放性の因子」、第Ⅱ因子は「回避・馴染みにくさの因子」、第Ⅲ因子は「端正さの因子」、第Ⅳ因子は「性度の因子」、第Ｖ因子は「眼部の形態の因子」、第Ⅵ因子は「顔の輪郭の因子」とそれぞれ命名した。顔貌から得られる情報の内容は、印象的要因が大きいことが示唆された。

２　目立ちやすい顔の意味空間

高低各評定群の平均因子得点について、因子ごとにｔ検定を行った結果、第Ⅵ因子を除く各因子において有意な差が認められた（順に$t=13.67$、$t=2.22$、$t=2.37$、$t=2.98$ $t=2.63, p<0.05$）。また、因子別に各項目の両群の平均評定値についてｔ検定を行っところ、44項目中27項目で有意差が認められ、第Ⅰ因子では全項目で有意であった。因子ごとに項目の評定内容を検討すると、第Ⅰ因子の高評定群は、陽性的方向（例；外向的、積極的）に評価され、低評定群では逆に陰性的方向（例、内向的、消極的）に評価された。また、第Ⅱ、Ⅳ因子では項目による変動はあるものの、両群の評価は中性点の回りに付置する傾向が強いが、高評定群の第Ⅱ因子では陰性的方向（例；こわい、強情）に評価される項目がみられる一方、第Ⅳ因子では陽性方向（例；かわいい）に評価された。第Ⅲ因子では、両群とも陽性的方向（例；きちんとした、真面目）に評価されたが、その程度において、高評定群がより高く評価される傾向があった。また、形態的要因の第Ｖ、Ⅵ因子では、高評定群の特徴は、目が大きく、面長な傾向がみられた。

３　顔の因子構造と目立ち易さの性差

女性の顔を刺激とした本研究の結果を男性の顔の結果（福本ら,1990）と比較すると、眼部の形態の因子を除き、ほぼ類似した因子が得られ、いずれも印象の因子が軸になって構成されていた。しかし、男性では回避・危険性が第Ⅰ因子であるのに対し、女性では華やかさ・開放性があげられ、対象の顔の性差に応じ評価基準が異なることが示唆された。男性の場合、全体として好感度の低さが目立ち易さの要因となっているのに対し、女性では大胆さ、積極性といった活動性、力動性を中心とした特性によって、目立ち易さが特徴付けられているといえる。

Table 1　女性の顔を対象にした意味空間の因子分析結果

項目			F1	F2	F3	F4	F5	F6	共通性
17	大胆な	－ 臆病な	.807	.142	-.051	-.084	-.017	-.087	.685
45	にぎやかな	－ 孤独な	.791	-.036	-.310	-.017	-.052	.029	.727
18	あかぬけた	－ 野暮ったい	.755	.032	-.020	.299	.071	-.098	.676
51	活発な	－ 無気力な	.749	.061	.089	-.185	.219	.086	.662
2	愉快な	－ 不愉快な	.615	-.288	-.102	.162	-.074	-.059	.506
23	豊かな	－ 貧弱な	.566	-.255	.093	-.153	.071	.212	.467
41	彫りの深い	－ のっぺりした	.531	.088	.114	.094	.424	-.343	.609
15	個性的な	－ 平凡な	.521	.217	-.144	-.029	.117	-.078	.360
55	好きな顔	－ 嫌いな顔	.503	-.273	.190	.433	.062	-.065	.559
10	年寄りじみた	－ 若々しい	-.492	.185	.068	-.332	-.054	-.214	.441
33	鈍い	－ 鋭い	-.629	-.399	-.303	.148	-.072	.087	.565
14	素朴な	－ きざな	-.611	-.4142	.053	-.145	-.025	.222	.616
56	目立ちにくい	－ 目立ちやすい	-.716	-.048	-.070	-.117	-.207	.223	.626
24	暗い	－ 明るい	-.761	.147	.146	-.062	.081	-.067	.637
13	消極的な	－ 積極的な	-.793	-.153	-.095	.058	-.081	.086	.679
42	内向的な	－ 外向的な	-.872	-.140	.018	.097	-.046	.027	.792
36	こわい	－ やさしい	.119	.816	-.082	-.078	.120	-.071	.711
43	意地悪な	－ 親切な	.064	.753	-.275	-.067	.063	-.079	.611
3	薄情な	－ 思いやりのある	.038	.724	-.162	.113	-.068	.044	.572
12	近づきにくい	－ 近づきやすい	-.141	.694	.093	-.085	.120	-.050	.535
22	目つきの鋭い	－ 目つきの優しい	.285	.606	.160	-.214	.137	-.051	.541
39	強情な	－ 素直な	.344	.541	-.071	-.278	-.016	-.082	.501
31	感じの良い	－ 感じの悪い	.273	-.593	.166	.265	-.018	.126	.540
6	柔和な	－ どう猛な	-.228	-.671	.089	.149	-.067	-.104	.547
30	暖かい	－ 冷たい	.062	-.737	.022	.064	-.024	.185	.586
25	きちんとした	－ だらしない	.165	.007	.633	.039	.051	.111	.444
5	賢い	－ 賢くない	.208	-.010	.629	.087	-.067	-.029	.451
9	清潔な	－ 不潔な	.314	-.030	.564	.217	-.040	.180	.498
46	繊細な	－ 粗野な	-.223	-.263	.454	.395	-.003	-.016	.482
1	感情的な	－ 理性的な	.292	.123	-.513	.074	.054	.102	.382
48	しまりのない	－ ひきしまった	-.360	-.170	-.537	-.022	-.220	.183	.528
38	下品な	－ 上品な	-.069	.215	-.587	-.353	-.046	.062	.528
29	不真面目な	－ 真面目な	.369	.246	-.706	.012	-.071	.054	.703
7	軽率な	－ 慎重な	.318	.156	-.721	.249	.081	.093	.722
21	女性的な	－ 男性的な	.132	-.327	-.049	.609	-.097	-.051	.510
49	かわいい	－ にくらしい	.330	-.351	.073	.612	-.013	.035	.501
20	たくましい	－ 弱々しい	.374	.141	.057	-.661	.079	.062	.610
54	出目	－ おく目	.101	.192	-.087	.039	.706	.058	.557
40	目の大きい	－ 目の小さい	.402	.007	.055	.020	.568	-.192	.525
19	えらの張った	－ えらの張ってない	-.014	.009	-.028	-.142	.470	-.128	.258
8	上がり目	－ 下がり目	.116	.326	.150	-.189	.460	.039	.391
53	角張った	－ 丸い	.129	.184	.046	-.155	.334	-.538	.477
11	面長	－ 丸顔	.231	.104	.045	.112	-.109	-.609	[illegible]
26	頬のこけた	－ 頬のふっくらした	.139	.348	.065	.133	.190	-.566	.518
寄与率(%)			17.248	10.760	7.340	5.290	4.049	3.645	

気功中の血圧変動について

○内田 誠也、菅野 久信、藏本 逸雄
ＭＯＡ九州生命科学研究所

【はじめに】

近年、気功が注目され、その効果の研究がさかんになりつつある。そこで本研究は、盲検法を用いて外気功における受け手の血圧、心拍数を連続的に計測することによって、施術に同期した現象を研究した。

【実験方法】

実験は、施術の始まりや終わりが受け手に分からないようにするため、耳栓した上でヘッドホンを被せ、最大出力で波の音を流して聴覚情報を遮蔽し、アイマスクをして視覚情報を遮蔽して行なった。

施術実験室内は、一定温度（25±0.5℃～27±0.5℃）、電磁波シールド、外音遮蔽されており、測定はFinapres（OMEDA）を用い、最高最低血圧および心拍数を連続計測した。測定者はビデオカメラで施術者や受け手の状況を監視した。また、施術開始終了は、受け手に知らせておらず、15回の実験を行い、その中で２回は施術を故意に行なっていない。

施術者は、気功師1名、岡田式治療師7名に協力いただいた。受け手は、8名に協力いただいた。また、施術実験中、施術者は受け手に触れる事を禁止した。

【結果】

今回見られた施術に同期した最高血圧、心拍数の変動の顕著な例を図１に示す。この実験における施術は、受け手の前の方から10分間、後方より10分間行なわれた。その結果、前方より施術し始めると最高血圧が上昇し、後方を施術し始めると安定化し、周期的な変動を示した。その後施術者が実験室より出ると変動がランダムとなり、血圧も徐々に減少し始めた。しかし、心拍数は血圧と同期して変動しなかった。

そこで、すべて実験における最高血圧の基線の変動と周期的変動の結果を表１に表わす。顕著な変化が見られた場合を○、若干の変化が見られた場合を△、変化がなかった場合を×とした。その結果、両方とも顕著な変化を示した実験はおよそ30%であったが、ほとんどの実験は、どちらか一方になんらかの変化が認められた。終了後聴取し、すべての人が施術されていることに気付かなかったことを確認した。

【考察】

一般的に、外気功等の非接触的治療行為の効果は、受け手の自己暗示やセルフコントロールの効果と考えられ易い傾向にある。以前少数例において報告[1]したが、例数を増やした今回も施術者と受け手の非接触的同期現象の結果が観測された。また、小林らも[2]、二重盲検法下で、レザードップラ血流量等で計測し、施術に同期した現象を捕らえたことを報告している。このことから、外気功等の非接触的治療行為の効果は、なんらかの情報が施術者と受け手の間に伝達された結果、受け手の血圧変動となって現われたことが示唆される。

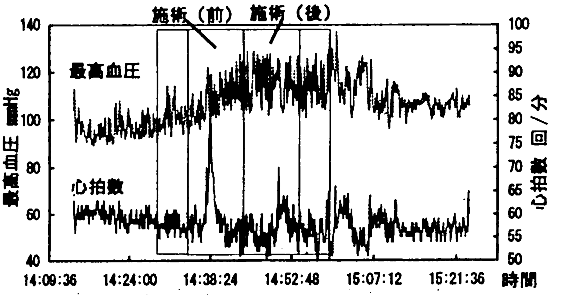


図１ 施術中の最高血圧および心拍数変化

表１ 実験結果の一覧

No.	施術者	受け手	基線の変化	周期的変化
1	T(45).m	F(24).f	△	×
2	無し	I(28).m	×	×
3	T(45).m	H(26).m	△	×
4	L(43).m	F(24).f	×	△
5	L(43).m	T(27).m	△	×
6	K(62).m	T(21).f	○	○
7	T(27).m	W(21).m	○	○
8	I(28).m	N(21).f	△	×
9	無し	F(24).f	×	×
10	T(27).m	F(24).f	△	△
11	F(41).m	N(21).f	○	○
12	T(27).m	F(24).f	×	△
13	M(60).m	H(22).m	×	△
14	T(27).m	F(24).f	×	×
15	S(32).m	N(21).f	○	△

施術者および受け手は、[イニシャル（年齢）性別]となっており、男はm、女はfと表記した。

参考文献

1. 菅野久信，内田誠也： 脳波および自律神経機能に及ぼす手かざし治療の効果，エム・オー・エー健康科学センター研究報告集 1： PP303-315, 1993.

2. 小林啓介，板垣美子：生体エネルギーの二重盲多層ベースライン実験（2），エム・オー・エー健康科学センター研究報告集 2： pp179-211, 1994.

検査・測定2－6

ＦＩパフォーマンスにおける加齢の効果

○北川公路　　　　　小野浩一
（駒沢大学人文科学研究科）　（駒沢大学文学部）

FI（fixed-interval・定間隔）強化スケジュールの下での、人間の行動は２つの反応パターンに分かれる。ひとつは、インターバル間で多くの反応を示す高比率反応パターン（Lender, Lippman,and Meyer,1968）、もうひとつは、インターバル間で少ない反応を示す低比率反応パターンである（Baron, Kaufman, amd Stauber,1969）。実験場面において被験者が、このような反応を示す理由のいくつかは指摘されているが、いまだ不明の部分も多い。

本研究は、FIパフォーマンスにおける加齢の効果を調べるために、成人期以降の３つの年齢層のFIスケジュール下での反応を比較検討した。

方　法

【被験者】低年齢層群：21～23歳10名（男女各５名・平均21.4歳）。中年齢層群：35～44歳６名（男３名女３名・平均38.7歳）。高年齢層群：68～78歳10名（男女各５名・平均72.1歳）。

【装置】スチール製の反応箱（21×38×21cm）を実験装置として使用した。被験者に向かっているパネルの下段中央に反応用のボタンが１個、ボタンの上に緑の色光刺激提示ランプ、上段中央に強化ランプ（オレンジ色ライト）がある。実験者と被験者は、ついたてをはさんでお互いの顔が見えないようにした。実験の制御と記録はパーソナルコンピュータNEC PC9801RXを使用した。

【手続き】FI60秒・LH（Limited Hold）５秒スケジュールを60分間行った。被験者には、「緑色のライトがついているときにボタンを押して、オレンジ色ライトをつけて下さい。オレンジ色ライトをつけるにはある一定の時間が経過してから、ボタンを押すことです。また時間が経過しすぎてボタンを押してもライトはつきません」という教示を与えた。

結果と考察

以下の３つの反応測度について、３つの群の比較を行った。①各群の全被験者の５分毎の累積反応数。②強化後の反応休止（post-reinforcement pause:PRP）：強化子提示から次のインタバルの初発反応出現までの時間の被験者別の平均。③各被験者の１分あたりの反応数（running rate）の平均値：初発反応から強化子提示までの反応率。

図１は、各被験者の累積反応数、図２は各被験者のPRPの結果を年齢層別に示したものである。表１は、１分あたりの反応数（running rate）の平均である。①、②の測度において、個人差がみられるが、全体として以下のことが明らかである。（１）年齢が増加すると累積反応数が増加する。中年齢層群は、低年齢層群と高年齢層群両方の反応パターンが入り混じっている。（２）年齢が増加するにつれてPRPが短くなる。すなわち、低年齢層群ではPRPは全体的に長く、中年齢層群は長いPRPと短いPRPの両方を示し、高年齢層群は１人を除いて短くなっている。③において、年齢が増加するにつれrunning rateが増加する。このように本実験は、加齢に伴う反応頻度、反応速度の増大、およびPRPの減少という結果を示した。

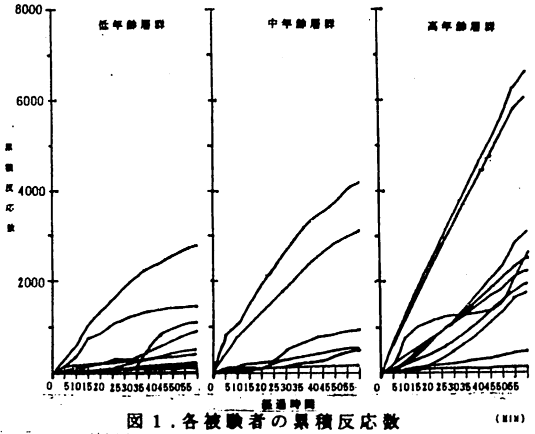


図１．各被験者の累積反応数

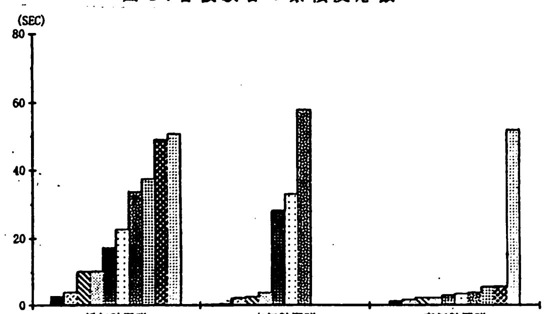


図２．各被験者のPRP（強化後反応休止期間）平均値

表１．各被験者群の１分あたりの反応（runnning rate）の平均値

低年齢層群	中年齢層群	高年齢層群
17.94	27.13	47.7

実験の実施にあたり神奈川県茅ヶ崎市老人クラブ連合会、駒沢大学職員の皆様に協力して頂きました。記して感謝します。

異文化適応とその測定

○岡村 美奈　　久米 稔
（早稲田大学）

［はじめに］

異文化に接した際にとる態度として星野は、Karen Horneyが「神経症的葛藤とその解消の試み」の中で述べている基本的葛藤の３つの指向性、すなわち、「人々の方に動く」（moving toward people）、「人々に対して動く」（moving against people）、「人々から離れる」（moving away from people）に基づいてtoward, against, away, indifferent, copingの５つを提唱しているが、筆者たちはこれらの態度に因んで接近・同化、対立・攻撃、逃避・拒絶、無関心・無頓着、理解・応援の５つの尺度を設定し、そのような態度や反応パターンがよく見られる日常生活の場面として15場面（15項目）を選定し、異文化適応検査を作成した。

本研究では、この異文化適応検査の結果と三菱電機株式会社の「国際人養成テスト」の結果の関連性を検討することを目的とした。

［方　法］

被験者：高・大卒一般事務職系の男女94名（内女子12名）（年齢範囲は24～36歳、平均年齢30.4歳、SD＝3.55）

手続き：上記の被験者に対して個別に検査用紙を配布し、後日、自由返送の方式で回収する方法をとった。回収率は72.9％であった。

［結果と考察］

異文化適応検査の配点は、15の検査項目のそれぞれに設定してある５尺度に対応する５つの選択肢のどれを選んでも、その選択肢が該当する尺度に粗点１点が与えられるようになっており、各尺度とも満点は15点である。

国際人養成テストの採点は、20の質問項目に前もってウエイトづけがなされた得点が配点してあり、選択した質問項目の配点の合計でなされるようになっている。満点は100点で最低点は０点である。

異文化適応検査の結果の判定（典型、準型）では、接近・同化型10名、対立・攻撃型22名、逃避・拒絶型37名、無関心・無頓着型14名、理解・応援型11名であった。対立・攻撃型、逃避・拒絶型がかなり多くなっていた。

２テストの結果（粗点）をもとに相関係数を算出した結果が表１である。異文化適応検査の内部相関では、肯定的尺度（接近・同化、理解・応援の２尺度）と否定的尺度（対立・攻撃、逃避・拒絶、無関心・無頓着の３尺度）の間に、接近・同化と対立・攻撃の間を除いて、負の有意な相関が認められたが、否定的３尺度の間では、負の数値ではあったが、有意な相関は認められなかった。

外的規準として設定した国際人養成テストとの相関では、無関心・無頓着との間に有意な負の相関が、また、理解・応援との間に有意な正の相関が認められたのみであったが、異文化適応検査の各尺度の判定型に基づく判定群とそれ以外の群の２群を構成して、国際人養成テストのテスト結果の平均値の差の有意性の検定を行った結果では、接近・同化（t(92)=2.000, df=(92), p<.05）、無関心・無頓着（t(92)=2.313, p<.02）理解・応援（t(92)=2.459, p<.02）の各々の尺度で有意差が認められた。異文化に近づき、同化しようとする傾向や、異文化の異質性に気を遣い、積極的に理解しようとする傾向が、立派な国際人、国際人として資格十分努力次第で可能性大と結びつくことが判明し、部分的に規準関連妥当性が検証されたといえよう。

表１．相関係数　　N＝94

		異文化適応検査				
		接近・同化	対立・攻撃	逃避・拒絶	無関心・無頓着	理解・応援
異文化適応検査	接近・同化					
	対立・攻撃	－０．１６６				
	逃避・拒絶	－０．４２１**	－０．０２０			
	無関心・無頓着	－０．２１０*	－０．０３２	－０．１９２		
	理解・応援	－０．１４３	－０．３３２**	－０．５０８**	－０．３０９**	
国際人養成テスト		０．０８７	－０．０５３	－０．１６７	－０．２７６**	０．３１２**

P<0.05 ---- *　　P<0.01 ---- **

Ｐ－Ｆスタディ母－子場面と期待水準

○藤田主一　　　髙嶋正士
（城西大学女子短期大学部）　（共立女子大学家政学部）

【目的】Ｐ－Ｆスタディの検査内容をより深く追究するという観点から，今日，大きく２つの研究方向が検討されている。１つは標準法に吟味を重ねていくものであり，２つには標準法以外の施行方法を工夫していくものである。我々は後者の立場から，Ｐ－Ｆスタディ児童用の母－子場面を手がかりに，母親と子どもの相互関係を求めた（藤田，1989など）。具体的には母親に対して，①実際の子どもの反応内容，②子どもの反応として期待する内容，③子どもの反応として期待しない内容，子ども自身に対しては，①母親が期待すると思う反応内容，②母親が期待しないと思う反応内容を，それぞれ求めたのである。

ここでは，女子大学生から見た反応水準を，Ｐ－Ｆスタディ母－子場面に基づいて検討しようと試みた。

【方法】⑴被験者：埼玉県内の大学に通学する女子学生 128名である。⑵調査材料：Ｐ－Ｆスタディ児童用24場面から，絵画刺激と言語刺激の内容および従来の研究報告を考慮して選択された母－子の対話場面と想定される10場面である。具体的には以下の通りである。

①場面１「お菓子は兄さんにあげたから …………」
②場面４「困ったわね。その自動車私には ………」
③場面７「あなたは悪い子ね。うちの花を ………」
④場面10「悪いことをした罰に，押入れに ………」
⑤場面14「そんなところに隠れて，何をして ……」
⑥場面15「けがはしなかったかい。」
⑦場面16「あなたのボールを取ったりして ………」
⑧場面17「出かけるから，寝て留守番して ………」
⑨場面19「また寝小便したのね。小さい弟 ………」
⑩場面23「おつゆが冷めてしまって悪かった ……」

⑶手続き：各場面を見て，①右側の子どもが普通に答える内容，②左側の母親が期待する答え方，③左側の母親が望まない答え方を，回答欄に記入させた。

【結果と考察】表１，表２，表３は女子大学生から見た「子どもの反応水準」「母親の期待水準」「母親の非期待水準」の結果を，アグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。方向は他責的(E-A)，自責的(I-A)，無責的(M-A)，型は障害優位(O-D)，自我防衛(E-D)，要求固執(N-P) の計６分類である。 128名の言語反応は標準法によってスコアリングしたが，標準法において不可能な反応については"その他"とした。

⑴場面１：子どもの反応水準の内，アグレッションの方向は他責的（Ｅ′やＥ，ｅで96.5%）であるが，女子大学生はこれを母親の期待しない方向（92.6%）であると見ている。一方，母親の期待水準は母親の言動を許容したり，我慢するよい子を演じる無責的（Ｍ′やＭ，ｍで83.2%）な方向である。

⑵場面４：子どもの反応水準の多く（88.2%）は母親への要求（直す，新品購入）と父親の参加や依頼（ｅ反応；55.4%）であるが，非期待水準は直せない母親に対する非難や強い購入要請に向かう（94.5%）。

⑶スコアリングは同一であっても，言語反応に感情が含まれていると期待・非期待水準の方向が異なる。

⑷仮説的であるが，母親の期待水準は自責的と無責的方向，非期待水準は他責的方向であると思われる。

表１　女子大学生から見た子どもの反応水準（%）

分類	アグレッションの方向				アグレッションの型			
場面	E－A	I－A	M－A	その他	O－D	E－D	N－P	その他
1	96.5	0	3.5	0	39.5	51.2	9.3	0
4	88.2	5.5	5.5	0.8	25.4	11.3	62.5	0.8
7	20.3	79.7	0	0	5.9	90.6	3.5	0
10	52.0	30.0	6.3	11.7	37.5	42.2	8.6	11.7
14	45.0	2.3	52.7	0	54.3	44.9	0.8	0
15	48.5	44.9	5.8	0.8	97.6	0.8	0.8	0.8
16	31.6	2.4	64.4	1.6	25.8	58.6	14.0	1.6
17	41.8	0	58.2	0	23.8	20.7	55.5	0
19	37.5	59.4	0	3.1	0	94.9	2.0	3.1
23	39,8	9.8	50.4	0	54.6	19.2	26.2	0

表２　女子大学生から見た母親の期待水準（%）

分類	アグレッションの方向				アグレッションの型			
場面	E－A	I－A	M－A	その他	O－D	E－D	N－P	その他
1	11.7	4.3	83.2	0.8	24.2	17.6	57.4	0.8
4	57.8	21.1	21.1	0	14.8	9.0	76.2	0
7	0.8	99.2	0	0	1.2	77.3	21.5	0
10	1.2	91.4	7.4	0	0.8	75.8	23.4	0
14	5.5	6.2	88.3	0	83.6	16.4	0	0
15	10.5	85.6	3.9	0	94.6	3.1	2.3	0
16	4.3	2.3	93.4	0	5.4	85.6	9.0	0
17	7.4	0	92.6	0	0	47.3	52.7	0
19	0	100.0	0	0	0	65.2	34.8	0
23	5.9	28.5	65.6	0	57.8	30.5	11.7	0

表３　女子大学生から見た母親の非期待水準（%）

分類	アグレッションの方向				アグレッションの型			
場面	E－A	I－A	M－A	その他	O－D	E－D	N－P	その他
1	92.6	3.5	3.1	0.8	14.9	50.0	34.3	0.8
4	94.5	0	5.5	0	7.4	26.2	66.4	0
7	98.4	1.6	0	0	1.6	93.7	4.7	0
10	94.1	0.8	2.8	2.3	4.3	91.8	1.6	2.3
14	87.5	1.6	9.3	1.6	10.1	87.5	0.8	1.6
15	91.8	5.9	0	2.3	52.0	35.2	10.5	2.3
16	96,9	0	3.1	0	57.4	11.7	30.9	0
17	96.5	0	3.5	0	17.6	27.8	54.6	0
19	94.9	4.3	0	0.8	0	98.0	1.2	0.8
23	99.6	0	0.4	0	4.3	53.5	42.2	0

社会的欲求と性格の関係（２）

○荻野　七重　　　　　　斎藤　勇
（白梅学園短期大学）　　　（立正大学）

目的：社会的欲求についてこれまで因子分析等に基づく分類と構造化を行い、それによって大学生の欲求とその行動傾向の調査や比較文化的調査、および欲求と性格との関係をみてきた。本研究はこの一連の研究における欲求と性格との関係についての続報である。今回はＹＧ性格検査の性格特性をベースに、各性格特性毎に欲求強度、行動傾向、欲求と行動のギャップとの関係をみていくことを目的とした。

方法：用いた調査票はＹＧ性格検査と欲求ー行動調査票であり、首都圏の大学生662名（男416．女246）を対象とした。実施方法は集団調査法である。欲求ー行動調査票は216の質問項目（54欲求×4 項目）からなり、欲求7段階評定尺度（ぜひそうしたい～絶対そうしたくない）、行動 7段階尺度（必ずそうしている～まったくそうしていない）で構成された独自のものである。

分析法．ＹＧ性格検査の12性格特性それぞれについて高得点群（上40パーセンタイル値に属する者）と低得点群（下40パーセンタイル値に属する者）とを求め、各性格特性毎に各種の欲求と行動、そのギャップについて、高得点群、低得点群の平均値を求め比較検討した。

結果と考察：右の表は紙面の都合上、これらの結果うち、欲求の強さに関するもの（男子学生）のみを示した。これによると、性格特性によっては欲求行動にあまり差を生じないものもあるが、しかしどの特性も何らかの欲求に違いがみられる。行動および欲求と行動のギャップについても性格特性と欲求の種類との間にそれぞれに特徴的な関連が認められた。

表１．ＹＧ性格検査の各性格特性における高得点群と低得点群の欲求強度の比較（網掛け部分：ｔ値　p＜.01 以上）

欲	求	抑鬱性	回帰性	劣等感	神経質	主観的	非協調的	攻撃的	活動的	のんき	思・外向	支配性	社・外向
A優越	1 自尊	0.42	2.17	2.44	2.30	2.12	4.11	5.70	1.98	1.96	-1.23	1.57	1.19
	2 競争	0.67	1.61	0.23	-0.46	0.68	1.08	4.25	2.98	3.09	0.36	2.38	2.62
	3 優越	0.26	2.17	2.49	1.02	2.09	3.60	5.86	2.15	2.46	-1.62	1.62	0.62
B攻撃	4 攻撃	0.12	1.66	-0.45	0.36	1.55	3.58	4.44	1.07	2.69	0.93	0.63	0.26
	5 反発	4.84	3.84	4.03	4.36	4.80	6.81	4.29	-1.56	1.03	-3.11	-2.81	-3.98
C権力	6 流行	-2.09	-0.09	1.16	0.31	0.21	1.11	1.52	3.54	2.50	0.26	1.01	2.48
	7 自己顕示	0.06	1.83	2.17	1.64	3.03	3.86	5.38	2.98	4.65	-2.04	1.40	1.66
	8 指導	-3.03	-0.12	-1.66	2.13	-0.09	-0.84	4.59	6.00	3.99	0.35	6.48	5.43
	9 名誉	0.28	0.59	1.90	2.88	2.02	3.44	3.42	2.93	2.35	3.00	0.74	0.86
	10 支配	0.37	2.83	1.55	0.85	0.83	4.39	4.48	3.38	2.80	-0.54	2.98	2.09
	11 権力	0.01	1.83	2.11	2.17	1.73	4.48	3.20	1.54	2.79	-1.67	0.98	0.40
D愛情	12 愛情	0.02	1.03	0.93	1.43	1.82	0.60	0.42	1.61	0.39	-0.58	0.02	1.46
	13 恋愛	0.93	0.31	3.84	2.55	2.22	1.28	0.32	0.61	1.68	-1.25	-1.20	0.56
	14 愉楽	-2.51	-0.09	-1.57	-2.77	-1.06	-0.31	2.00	3.46	6.14	3.37	3.97	4.51
E自由	15 自由	3.47	1.79	1.83	2.35	1.70	4.30	1.59	-1.59	1.99	-2.26	-2.24	-1.56
	16 自己表現	0.05	1.82	-0.16	1.60	2.71	1.06	4.13	3.58	2.50	-1.68	2.95	3.29
	17 不満解消	1.83	2.19	1.08	2.98	2.19	2.64	2.00	1.57	3.57	-1.86	0.52	0.35
F達成	18 達成	1.01	0.91	0.86	0.02	0.59	-0.04	1.52	1.61	-0.17	-1.68	1.48	1.48
	19 内罰	0.22	0.02	0.98	-0.46	0.86	-0.31	0.35	0.40	-0.27	-0.89	0.53	0.63
	20 自己成長	0.63	1.02	1.08	0.55	1.23	-0.02	0.19	0.87	-0.05	-2.23	0.59	1.43
	21 持続	0.95	0.86	0.71	0.40	-0.05	0.33	1.95	0.61	-0.02	-1.87	1.05	1.05
	22 自己実現	0.34	0.61	0.66	1.12	1.51	-0.21	1.58	0.61	-0.75	-2.24	0.27	0.72
	23 知識	0.29	0.59	1.76	2.69	1.55	0.15	0.89	1.33	0.21	-3.82	1.93	0.82
G主張	24 自己主張	-0.47	1.87	-0.01	0.87	0.90	2.46	4.91	2.82	0.91	-1.26	1.79	0.91
	25 批判	-0.35	1.16	0.87	1.14	0.47	2.12	2.83	2.11	0.99	-0.76	0.48	0.26
H感性	26 趣味	1.45	2.05	0.24	1.43	1.43	1.03	2.47	1.72	1.36	-2.78	1.19	0.25
	27 感性	2.76	0.70	0.86	2.42	1.43	0.55	0.53	-0.42	0.91	-8.18	-0.65	0.19
	28 理解	2.42	-0.98	1.79	4.29	1.48	1.41	1.65	0.50	-1.05	-7.13	-0.78	-1.17
	29 好奇	-0.70	-0.70	-1.42	-1.50	-1.74	-1.38	1.26	2.18	2.38	0.62	2.22	3.11
I援助	30 秩序	-2.89	0.65	0.94	-0.67	-1.61	-0.02	0.41	1.06	-1.43	0.36	0.89	0.55
	31 援助	-1.27	0.25	-0.07	0.18	0.19	-1.50	1.82	3.06	2.59	-0.58	2.65	3.53
	32 集団貢献	-2.51	0.74	0.39	-1.88	-0.76	-1.27	0.21	2.70	0.48	1.57	0.94	2.65
	33 教授	2.01	0.15	-0.60	-1.17	0.40	0.35	3.47	4.85	1.94	-0.72	3.55	4.57
J承認	34 承認	0.13	0.16	3.53	1.57	0.97	1.86	1.86	1.99	1.88	-0.65	0.02	2.11
	35 自己開示	0.09	2.34	2.69	1.25	2.30	2.68	1.88	1.99	2.37	0.05	0.99	1.89
K回避	36 屈辱回避	3.29	2.27	6.62	5.63	2.82	5.94	1.48	-3.99	-2.02	-3.34	-5.95	-3.84
	37 同調	0.91	2.18	5.36	2.98	2.46	2.36	2.24	-0.79	0.36	0.53	-3.45	1.69
	38 嫌悪回避	0.82	0.68	6.15	4.15	1.79	3.77	1.24	-0.89	0.41	-0.74	-3.64	0.55
	39 批判回避	2.22	2.06	6.40	4.44	2.68	4.42	2.47	1.71	-1.60	-2.91	-5.34	2.29
L譲歩	40 服従	-1.67	1.00	1.29	-0.08	0.63	0.40	1.16	1.21	-0.50	0.97	-0.69	0.53
	41 譲歩	2.34	0.02	4.54	3.21	0.92	1.30	-4.58	-2.42	-1.41	-1.99	-4.87	-1.58
M安心	42 安心	3.38	2.51	6.82	5.86	2.44	4.62	1.30	-2.24	-2.81	-3.55	-5.17	-3.37
	43 気楽	3.30	2.72	3.41	3.40	1.84	3.99	-2.00	-4.83	-0.67	-0.98	-5.46	-3.99
	44 挑戦	-0.57	-1.89	-3.17	-1.58	0.09	-0.60	4.09	1.77	2.81	1.56	1.88	2.41
	45 安全	1.41	2.08	4.50	3.39	0.86	4.02	-1.82	-1.66	-2.01	-2.29	-2.22	-3.00
N安定	46 拒否	5.55	4.78	3.24	4.62	4.50	6.04	1.67	-3.14	0.22	-3.83	-3.05	-3.04
	47 金銭	1.22	1.16	2.80	1.96	0.92	5.02	2.07	0.11	1.79	-2.27	-1.40	-1.63
O親和	48 依存	0.55	3.30	3.89	2.29	2.51	1.89	0.01	0.52	1.32	0.83	-1.69	0.28
	49 親和	2.42	0.27	-0.06	-1.28	0.57	-0.61	1.37	4.31	3.28	2.31	2.78	3.07
	50 協力	-3.23	-0.77	0.57	-1.32	-1.30	-1.13	0.65	3.97	1.74	1.62	1.93	3.78
	51 孤立	5.70	1.13	3.65	5.62	3.17	3.11	0.44	-4.03	-3.24	-5.19	-5.59	-5.71
P規制	52 恭順	0.17	1.72	1.33	0.27	0.60	1.01	2.54	0.96	1.03	-1.17	1.21	0.93
	53 自己規制	-0.25	0.47	1.11	0.80	0.27	-0.90	-0.07	1.21	-1.01	1.01	0.07	0.29
	54 迷惑回避	0.13	0.15	2.33	1.71	0.81	1.17	-1.71	-0.25	0.87	-2.00	1.74	-0.08

自己開示に関する研究
(1)青年の自己開示と人間関係

小　嶋　正　敏
（玉川学園女子短期大学）

【目的】　中学生，高校生，大学生を対象として，現代青年の自己開示の特質と傾向を明らかにし，あわせてその発達的変化について検討する。

【方法】　自己開示の測定は，加藤（1977）に基づいて，７領域(35項目)５対象について，４段階評定で行なった。被験者は，中学生122名(男59,女63)，高校生177名(男85,女92)，大学生223名(男102,女121)。

【結果と考察】　(1)対象別自己開示　　Figure1及び2の通り，どの発達段階においても，男女とも友人に対して最も自己開示がなされている。次いで母親，きょうだい，父親，教師の順となっている。ただし，全項目とも「１」と回答した場合の対象別評定値は35であり，「２」と回答した場合は70であることを考慮に入れて結果をみると,「十分にくわしく打ち明けて話す」対象(１と評定)は無く，「話すことは話すがそれほど深く話さない」対象(２と評定)は男子では友人のみ，女子では友人と母親のみであるということになる。ここに自己閉鎖的な傾向を認めることができる。

全般的な性差を検討すると，友人・母親・きょうだい・父親に対して女子の方が男子より自己開示していることがわかる。特に母親に対する性差が著しい。

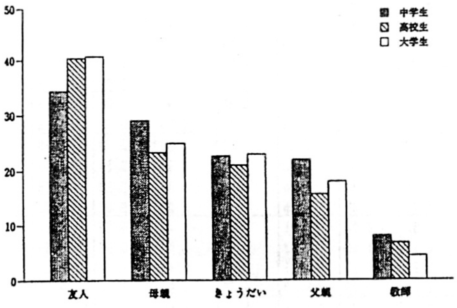


Figure 1　自己開示の対象別評定値（男子）

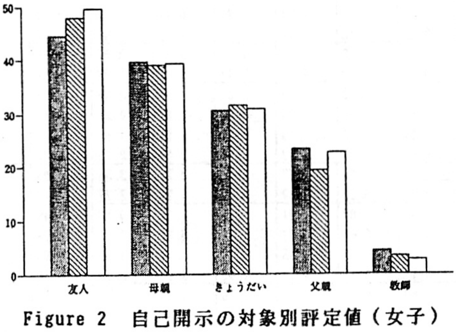


Figure 2　自己開示の対象別評定値（女子）

次に発達的変化について検討すると，①友人に対する自己開示は中学・高校・大学と学校段階が進むにつれて，男女とも高まる傾向にある。②母親に対する自己開示は男女で傾向が異なる。すなわち，男子では中学生で最も高いが，高校で低くなり，大学でやや高まる。それに対して女子では学校段階による差異はみられない。③また父親に対しては，男女とも中学生で最も高く，次いで大学生であり，高校生は低くなっている。このように高校生という青年中期の段階において友人への自己開示が高まる一方，両親に対しては閉鎖的になる傾向が認められ，その傾向は特に男子に顕著であることが示された。④きょうだいに対しては，男子で高校生がやや低くなっているものの，男女とも顕著な発達的変化は見出されない。⑤教師に対しては男女とも全般に自己開示が極めて少ないだけでなく，中学・高校・大学となるにつれてその程度が減少している。また，教師以外の対象に対しては男子より女子の方が自己開示が多いのに対し，教師についてはどの段階でも男子の方が多いのも特徴的である。

(2)領域別自己開示　　Table１は自己開示の領域別評定値の平均値である。①ほとんどの領域があまり自己開示されていない。唯一，女子の趣味だけが「話すことは話すがそれほど深く話さない」程度を越えており，その他の領域はその程度にも達しておらず，全般的に自己開示が低いことがわかる。②性差についてはすべての領域において女子の方が男子より明らかに開示が高い。③しかし程度の差はあっても，領域別の開示パターンは男女でほぼ同じである。すなわち，開示が比較的高い領域は趣味に関するものであり，次いで学校生活，友人関係である。一方，開示が低い領域は異性関係，社会観，性格に関するものである。④発達的に検討すると，男子の方が女子よりどの領域においても学校段階による差異が大きい。男子の方が自己開示の発達的変化が大きいと考えられる。

対象別領域別自己開示は次報告で分析する。

Table 1　領域別自己開示

性別	学校＼領域	身体	趣味	学校	性格	社会	友人	異性
男子	中学	3.56	4.96	4.30	3.07	2.61	3.47	1.41
	高校	2.94	4.52	3.91	2.76	2.56	3.02	1.91
	大学	3.07	4.59	3.50	2.67	2.81	3.37	2.33
女子	中学	3.88	5.47	4.98	3.58	3.37	4.58	2.84
	高校	3.69	5.41	4.78	3.67	3.03	4.23	3.66
	大学	3.71	5.45	4.54	3.88	3.35	4.76	3.56

自己開示に関する研究（1）

ー 聞き手と話し手の問題 ー

森　下　高　治

（流通科学大学）

問題）青年期の発達課題として，対人関係技能の習得が挙げられるが，自己と他者の関係で自分をいかに開示（深さと広がり）するか，逆に他者から開示を受けるかは，彼らが今後の円滑な社会生活を営む上に重要な意味があるものと考えられる。ここでは，社会人，勤労者の研究を進める第一段階として，学生対象の基礎研究から，これまでに明らかにされている自己開示研究を通し，次の3点の再検証を図ることを目的とする。

1.自己開示性と被開示性の関係

2-1.対象別，開示内容（領域）別の被開示量について

2-2.オープナー尺度（聞き上手度）とR-JSDQの関係

方法）1は，加藤，Jourard,S.M.を参考に8領域5項目，4対象からなる開示調査票と被開示調査票を94年6月に2週間の間隔をおき，A大学学生，男子162名，女子64名に実施した。また，2は小口のR-JSDQ(1989) にそって6領域6項目，合計36項目の調査票とMiller,L.C.，小口のオープナー尺度を94年5-6月にB大学学生，男子200名，女子40名に実施した。

結果と考察）研究1．自己開示性と被開示性との相関結果　ある特定の対象に開示する開示量と逆の特定対象から開示を受ける本人に対する被開示量を測定したところ表1のような結果（その一部を掲載）を得た。

40の事柄のうち，同性親友は13項目が r=.50以上の比較的高い相関がみられたのに対して，異性友人は1項目のみで対象による違いが明確に認められた。また，全般には4対象とも共通なもの，同性対象のみ，あるいは親友のみに特徴があるもの，逆に比較的低い相関を示すものなどの特色が見い出せた。

次に，性別，対象別に40項目各々の開示，被開示量を検討したところ，以下のことが明らかになった。

1.話し手の自己開示性（よく話しをする内容）は，男性が4対象ともQ11の学校の話題に対して，女性は同性親友がQ33の異性のこと，異性親友はQ20の喜びや楽しみについて，同性友人がQ11の学校の話題，異性友人はQ1の好きな食べ物と，男女によって話す内容が異なり，男性は社会的要素が強い開示傾向がみられた。これとは逆に，女性は個人的側面に焦点をあてた内容が含まれていた。一方，聞き手の被開示性（よく話し聞く内容）は，男性は開示性と同様，Q11の学校の話題が4対象とも共通で，最も多い。女性は，同性親友のみがQ2の映画，音楽の話しが第一位で，それ以外の対象は全て学校の話題であった。これから，開示性と被開示性により，また男女により違いがあることが判明した。

表1　自己開示性、被開示性にみる同一項目間の相関について　　いずれも１％水準有意

	同性親友	異性親友	同性友人	異性友人
Q　3関心のあるファッション	.5156	.5051	.4980	.4190
Q10性の悩み	.6212	.5509	.5173	.3912
Q16性格上の魅力	.5361	.3425	.5010	.3717
Q20喜びや楽しみ	.5490	.4377	.3672	.3785
Q22同世代の人たちの考えについて	.5361	.5186	.5024	.5093
Q33異性への魅力について	.5780	.4531	.4119	.3803

研究2-1 男女別，被開示量結果

表2　（R－JSDQ）の男性の平均と標準偏差

		平均	標準偏差
全体得点		91.215	47.670
開示対象	同性の親友	34.560	14.710
	異性の親友	23.660	17.784
	同性の知人	19.720	13.442
	異性の知人	13.275	12.549
開示内容	意見や態度	11.535	7.740
	趣味や関心	20.370	10.356
	勉強	18.000	9.395
	金銭	11.860	8.769
	性格	16.960	9.911
	身体や外観	12.490	10.082

表3　（R－JSDQ）の女性の平均と標準偏差.

		平均	標準偏差
全体得点		124.420	43.800
開示対象	同性の親友	47.275	12.814
	異性の親友	40.025	16.624
	同性の知人	20.550	14.757
	異性の知人	16.575	13.416
開示内容	意見や態度	15.775	8.886
	趣味や関心	26.650	9.606
	勉強	22.300	7.389
	金銭	13.450	10.346
	性格	25.525	10.464
	身体や外観	20.725	9.126

表2と3に示す通り，開示量の大きさは，女性同性親友＞女性異性親友＞男性同性親友＞ ‥‥ ＞女性異性友人＞男性異性友人の順であった。

以上から，女性は男性より開示を受ける傾向が強く，開示内容は男女とも趣味や関心の話題が多い。

一方，被開示量が少ない開示内容として男性は，意見や態度，金銭および身体や外観，女性も金銭，意見や態度などがあげられる。

研究2-2　オープナー尺度（聞き上手度）について

小口(1989)にならい，因子分析を試みた結果，Q1の話しをよく聞かされるは，ここでは共感因子として抽出された。次に，積極的意味をもつなごませ因子と受け身的な共感因子について，それぞれR-JSDQとの相関係数を算出した。

その結果，オープナー尺度総得点と被開示性総得点は，r=.333 で聞き上手度が比較的高いと開示される度合も高く，下位尺度ではなごませ因子の方が開示される程度が高いと言える。以上から，概ね三つの問題は検証されたが，開示対象の設定と開示，被開示領域の扱い，個人に焦点をおいた特性による研究と相互性を問題とする状況要因の両面を考え，第２ステップに入りたい。

自己像の国際比較（２）

○中川　作一　　　　　　沢宮　容子
（法政大学）　　　　　　（大東文化大学）

【目的】自己像の国際比較を試み、その文化的規定因をさぐる。

【方法】ＳＤ法。表に見られるような41の形容語対を尺度とし、「私」「私の仲間」「私の家族」「未来の私」の４つのコンセプトについて、その印象を問う。すでにこの方法によって、自己像は「対象性」「能動性」「情緒的評価」および「見通し」の４つの因子からなること、しかしこれらの因子の順位、組み合わせ、分化の度合いは、一定ではなく、むしろその変異の中に、被験者の集団特性があらわれていること、また自己が外接系と内接系に二重化するケースもあることが明らかにされている。（なお、対象性、能動性は、Ｇ．Ｈ．ミードのｍｅ、Ｉにほぼ対応する）今回は、前回紹介した韓国の学生と朝鮮大学校（小平市）の学生の自己像を比較する。今回から因子分析の回転方法をバリマックス回転とした。

１．韓国漢陽大学の学生（22歳まで）79名。在学中に兵役２年の義務あり。調査は1990年実施。２．朝鮮大学校の学生62名。同校は在日朝鮮人子弟（三世・四世）の高等教育機関。新しい民族のチュチェ（主体）を形成する教育をめざし、民族教育・祖国の統一・国際交流を三つの教育目標として掲げている。調査は1994年実施。

表　因子分析の結果（朝鮮大学校）

Rotated Factor Pattern

	No.			FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4
対象性・能動性	18	見えない感じ	見える感じ	0.70370	-0.29388	-0.07471	-0.14993
	14	無気力な感じ	意欲的な感じ	0.70030	-0.10933	-0.29552	-0.33990
	7	信頼できない感じ	信頼できる感じ	0.63407	-0.24024	-0.41638	-0.00408
	9	つめたい	温かい	0.60594	-0.27809	-0.33641	0.01338
	31	遠い	近い	0.59895	-0.41294	-0.05002	-0.06929
	30	消極的な感じ	積極的な感じ	0.59506	-0.14203	-0.30626	-0.35037
	24	投げ出したい感じ	かけがえのない感じ	0.59311	-0.41403	-0.22073	-0.13098
	26	分らない感じ	分る感じ	0.55450	-0.38105	-0.08375	-0.10890
	11	よわい	つよい	0.54836	-0.14082	-0.44122	-0.10285
	33	せまい	ひろい	0.53452	-0.45842	-0.12797	-0.26806
	27	力量に乏しい感じ	力量のある感じ	0.52685	-0.23726	-0.30552	-0.26257
	17	無目的な感じ	目的に引かれる感じ	0.51245	-0.08303	-0.29057	-0.50247
	2	浅い	ふかい	0.50515	-0.39334	-0.37059	0.01871
	36	不安定な感じ	安定している感じ	0.50456	-0.43708	-0.10412	0.07194
	21	受動的な感じ	能動的な感じ	0.44908	-0.08319	-0.26163	-0.37788
	4	不透明な感じ	透明な感じ	0.44604	-0.16481	-0.16854	-0.03906
	12	開かれている感じ	閉ざされている感じ	-0.39310	0.31122	0.35307	0.23722
情緒的評価・対象性	20	楽しい	苦しい	-0.29246	0.66429	0.31919	0.21659
	6	快	不快	-0.45487	0.61875	0.39690	0.08604
	28	好き	きらい	-0.33999	0.61302	0.36000	0.22946
	39	明るい	暗い	-0.27655	0.59062	0.28222	0.29951
	38	離れている感じ	結びついている感じ	0.57460	-0.58957	-0.08619	-0.16357
	35	よい	わるい	-0.39739	0.55203	0.35846	0.22876
	22	やわらかい	かたい	-0.16888	0.54136	0.10827	0.24453
	29	つながっている感じ	切れている感じ	-0.47860	0.52753	0.38142	0.13856
	40	不幸せな感じ	幸せな感じ	0.40555	-0.50725	-0.08532	-0.28541
	23	民主的	非民主的	-0.06478	0.50487	0.16887	0.22677
	1	満足できる感じ	満足できない感じ	-0.32916	0.48832	0.48604	-0.04937
	41	自由な感じ	不自由な感じ	-0.17579	0.42137	0.15469	0.17632
	19	相互的な感じ	一方的な感じ	-0.13791	0.38959	0.24390	-0.01604
	32	勝っている感じ	負けている感じ	-0.27987	0.30860	0.24078	0.30657
対象性（外接系）	8	頭がいい感じ	頭のにぶい感じ	-0.23124	0.18670	0.59810	0.06344
	5	大きい	小さい	-0.35400	0.40422	0.55328	0.04054
	15	美しい	みにくい	-0.41354	0.30378	0.54072	0.11896
	16	何かをもっている感じ	何ももっていない感じ	-0.13713	0.18273	0.50982	0.45654
	13	ゆたかな感じ	貧しい感じ	-0.34224	0.39943	0.48528	0.20800
	3	個性のある感じ	個性のない感じ	-0.03096	0.16587	0.44280	0.24553
	34	確かに「いる」感じ	どこにも「いない」感じ	-0.32328	0.31110	0.34185	0.20059
見通し	37	進歩する感じ	退歩する感じ	-0.19829	0.28851	0.19328	0.58297
	25	上昇する感じ	下降する感じ	-0.29409	0.41486	0.28760	0.55947
	10	これから変っていく感じ	このまま変らない感じ	0.03430	0.07279	-0.04963	0.41096

【結果】１．漢陽大学……「能動性」が「対象性（外接系）」と未分化なまま第一因子をつくり、第二因子は「情緒的評価」、第三因子は「対象性（内接系）」。これは自己像の二重化・ダブリング（Ｒ．Ｊ．リフトン）を示す。また、「見通し」の因子が抽出されなかった。

２．朝鮮大学校……表のように、第一因子「対象性・能動性」、第二因子「情緒的評価・対象性」、第三因子「対象性（外接系）」、第四因子「見通し」が抽出された。第一因子から第三因子まですべて「対象性」を内包し、自己像の未分化を反映している。

【考察】１．「対象性（外接系）」と名づけた因子には、「なにかをもっている感じ」「力量のある感じ」「大きい」「頭がいい」「ゆたか」「個性のある感じ」「勝っている」など、Ｅ．フロムのいう所有志向にかかわる形容語対が含まれている。一方、「対象性（内接系）」の中には一般に主体志向を示すものが含まれる。２．韓国の学生の「能動性」はこの意味の所有志向と重なっている。３．朝鮮大学校の場合、上述のように「対象性」が独立の因子として分化しない。しかし、第一因子には、「見える」「信頼できる」「近い」「分る」「安定している」「開かれている」など、内接系の「対象性」を示す形容語対がはいっており、「能動性」と未分化なうちにも、韓国学生との違いを示している。第三因子には、彼らの所有志向が現れているが、これは私たち日本人と同じ「zero-sum文化」の影響であろう。なお、尺度値の平均の比較は、わが国の風土に残る人種差別と、朝鮮大学校の民族教育の成果を暗示している（配布資料）。また、後者は同校のデータから抽出された「見通し」の因子にも現れている。

看護２－１

エイズに対する意識構造

── エイズ教育の看護学生に及ぼす影響 ──

○中　淑子　深田　高一　　草野　美根子　　内海　滉
（産業医科大学医療技術短期大学）（佐賀医科大学）　（千葉大学）

目　的：1994年 8月我国でエイズ国際会議が開催され、以来エイズ報道は激減した。しかし、エイズ感染者は着実に増加している。文部省は1993年から学校教育にエイズ教育を導入することを通達した。私共は1990年より看護学生を対象に、エイズに対するの意識構造を経年的に把握し啓蒙のあり方を検討している。今回は高等学校時代にエイズ教育を受けて入学した看護学生の意識構造を解析したので報告する。

方　法：１）対象：９つの看護学校１年生３５５名。２）調査時期：1994年６月。３）調査方法：各学校に自記式調査表を配布・回収。(1) 質問紙Ⅰ－1990年より我々が用いている40項目からなる質問紙。エイズのイメージを「そう思う」から「思わない」までを５段階評価するもの。(2) 質問紙Ⅱ－対象者の背景とエイズ教育の実際など。４）分析：①エイズ教育の概要、②因子分析による因子の抽出、③各因子と対象者の背景や教育の関係を検討。

結　果：

１．エイズ教育の概要

1994年度入学生の90.7%がエイズ教育を受け、授業時間は２時間から10時間と学校差が大きく、52%が3~5 時間であった。97.7%の学生はエイズの関心は強く、87%がエイズ教育は有意義と感想を述べている。教育の結果、友達とエイズを話題にする人は25.9%で、59%は変化ないと回答した。

２．因子分析による因子の抽出（表１）

累積寄与率47.59 %にて６つの因子を抽出した。第一因子より順に判断躊躇因子、自己関心因子、社会的肯定因子、同情否定因子、思索的因子、社会的否定因子と命名した。表２は過去の因子構造を比較したものである。

３．各因子と対象者の教育背景との関係（表３）

授業時間、家族や級友の感染、教育の感想などが第一・第二因子に影響を与えている。第三因子には教育背景の大半が影響し、エイズに関心を示し感染者への差別意識のない人、エイズ教育が有意義であった人、教育後に友人とエイズについて話す機会が多くなった人などに肯定的意識が強い。第四・第六因子は、授業時間や感染者を差別する人、将来の感染者看護にためらいをもつ人に否定的意識が強い。

表１　因子分析　累積寄与率47.59 %

	項目	f1	f2	f3	f4	f5	f6	因子命名
30	献血大丈夫？	0.76	-0.22	-0.07	-0.11	0.08	-0.02	
31	輸血大丈夫？	0.76	-0.17	-0.04	-0.10	0.06	-0.06	判断躊躇
32	キスちゅうちょ	0.63	-0.13	0.04	-0.10	0.12	0.15	因子
27	血友病患者さけたい	0.46	0.05	0.06	-0.13	0.00	0.28	
34	同性愛者理解できない	0.40	-0.07	0.07	-0.19	0.08	0.06	
36	自分には関係ない	0.06	-0.66	0.08	-0.16	0.05	-0.14	
37	日本の問題	0.05	0.61	0.29	-0.06	0.06	0.34	
35	関心ある	0.08	0.53	0.19	-0.11	0.06	0.17	自己関心
33	セックスちゅうちょ	0.39	0.49	0.02	0.10	-0.09	0.37	因子
11	もっと知りたい	-0.10	0.49	0.22	-0.15	0.20	-0.16	
4	性行動の乱れ	0.15	0.47	-0.17	-0.24	0.00	0.36	
28	外国旅行考えて	0.38	0.44	0.02	-0.17	-0.09	0.18	
6	プライバシーの保持	0.03	0.42	-0.04	-0.25	0.05	0.01	
38	身近な問題	0.02	0.19	0.68	0.07	0.09	0.00	
39	患者への理解	-0.07	0.23	0.66	0.09	-0.04	-0.10	社会的肯
23	放っておけない	0.06	-0.24	0.61	-0.21	0.13	-0.20	定因子
40	異性間交渉考えて	0.07	0.15	0.60	-0.05	-0.32	0.31	
24	人間的な病気	-0.16	-0.30	0.42	0.03	0.12	0.12	
18	かわいそうな	0.07	0.20	-0.10	-0.80	0.11	-0.10	
19	気の毒な	0.11	-0.09	0.08	-0.79	0.07	-0.06	同情否定
8	大変な病気	0.12	0.02	0.08	-0.61	0.10	0.23	因子
7	恐ろしい	. 0.03	0.17	-0.05	-0.56	0.05	0.18	
22	何とかしてあげたい	0.07	0.42	0.27	-0.45	0.06	-0.39	
21	あわれな	0.12	-0.40	0.24	-0.43	0.04	0.33	
15	不思議な	0.17	0.13	0.01	0.00	0.80	0.16	思索的
16	不可解な	0.09	0.11	0.04	-0.12	0.74	0.18	因子
12	奇妙な病気	0.16	-0.44	0.23	- 0.0	0.48	0.22	
25	身から出た錆び	0.00	-0.12	0.10	0.03	-0.03	0.65	
17	[illegible]そつな	0.16	0.01	-0.02	-0.05	0.34	0.63	社会的否
2	いやらしい	0.19	0.06	-0.08	-0.16	0.06	0.59	定因子
13	みっともない	0.17	-0.36	0.08	0.00	0.26	0.58	
9	汚らわしい	0.07	-0.56	0.12	0.01	. 0.17	0.57	
5	近寄りがたい	0.26	-0.06	-0.05	-0.29	0.00	0.46	
26	迷惑な	0.30	0.00	-0.07	-0.08	0.10	0.44	
	寄与率　(%)	15.12	12.50	6.66	5.09	4.22	4.00	

表２　因子構造の比較

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子
１９９０年度	偏　見	恐　怖	危　険	思索的	批　判	建設的
１９９３年	感情的否定	性行動否定	感情的肯定	社会的否定	血液否定	感情的恐怖
１９９４年度	判断躊躇	自己関心	社会的肯定	同情否定	思索的	社会的否定

表３　各因子と対象者の背景（教育）の関係

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	第六因子
因子命名	判断躊躇因子	自己関心因子	社会的肯定因子	同情否定因子	思索的因子	社会的否定因子
出身高校			※ 私立高校＞公立高校			
看護教育形態別		※※ 専門学校＞短期大学	※※ 短期大学＞専門学校	※※ 短期大学＞専門学校		※※ 短期大学＞専門学校
高校時代進路選考			※ 文科系＞理科系			
ＡＩＤＳへの関心			※※※ とてもある＞ある			
ＡＩＤＳ授業時間	※ ２Ｈ＞７～８Ｈ	※※ １０Ｈ＞２Ｈ		※※ ３～５Ｈ＞１０Ｈ		
感染者への差別			ない＞ある　※※※ ない＞わからない※※			ある＞ない※※※ ある＞わからない ※※
家族が感染したら	ためらう＞同様※※ わからない＞同様※※	ためらう＞同様※※ わからない＞同様※※				
級友が感染したら	ためらう＞同様※※ わからない＞同様※※	ためらう＞同様※※				
ＡＩＤＳ教育感想	※ まあまあ＞有意義	※※ 有意義＞まあまあ	※※ 有意義＞まあまあ			
教育後の変化			※※ 友と話す＞変化なし			
感染者を受持たら						※ ためらう＞挑戦

※※※＜．００１　※※＜．０１　※＜．０５

看護２－２

乳幼児の成長発達および家庭環境条件に関する研究（第２報）

○草野美根子　沖　壽子　中　淑子　内海　滉
（佐賀医科大学医学部看護学科）（産業医科大学）（千葉大学看護学部）

目的

乳幼児の発達は様々な環境要因によって影響を受けている。特に母子間の相互作用は全身運動の質的、段階的変化に大きく影響を及ぼしている。今回は第１報に続いて、乳幼児の発達と家庭環境条件（母親の養育に対する意識や態度）の関連を、更に検討する。

研究対象及び方法

研究対象：母親の妊娠、分娩に異常がなく、6歳まで追跡された16名（男児11名、女児5名）とその養育者である。

研究方法：新生児期から6歳までの発達状態と家庭環境条件を調査した。家庭環境はCaldwellの研究を参考とした（表１）。　これらの項目内容は母親への質問と訪問者の観察により、0、1で採点した。
更に6歳時の家庭訪問においては、育児におけるその時点の母親の悩みや不安の実態、各年齢時における育児上の問題点を食事、泣き、遊びを中心にして、母親の育児に対する態度や方法等を聞き取り調査した。

表１　家庭環境調査項目

母親と子どもとの相互関係	１１項目
母親の子どもに対する行動や態度	８項目
家庭の環境	６項目
オモチャの与え方	９項目
子どもを知ろうとする母親の行動	６項目
母親以外からの子どもに対する刺激	５項目
家庭環境の総得点	４５項目

結果

１）発達指数と家庭環境

乳幼児の各年齢における発達指数を分析した結果、平均値より高い群、低い群、変化が大きい群の3群に分類できた。家庭環境の得点を分析した結果、同様の3群に分類できた。

２）家庭環境と母親の養育態度

家庭環境の3群は項目内容別に検討すると、母親の養育態度をそのまま反映していたことから、母親の養育態度と同様と考えられた。

３）家族の条件と育児不安

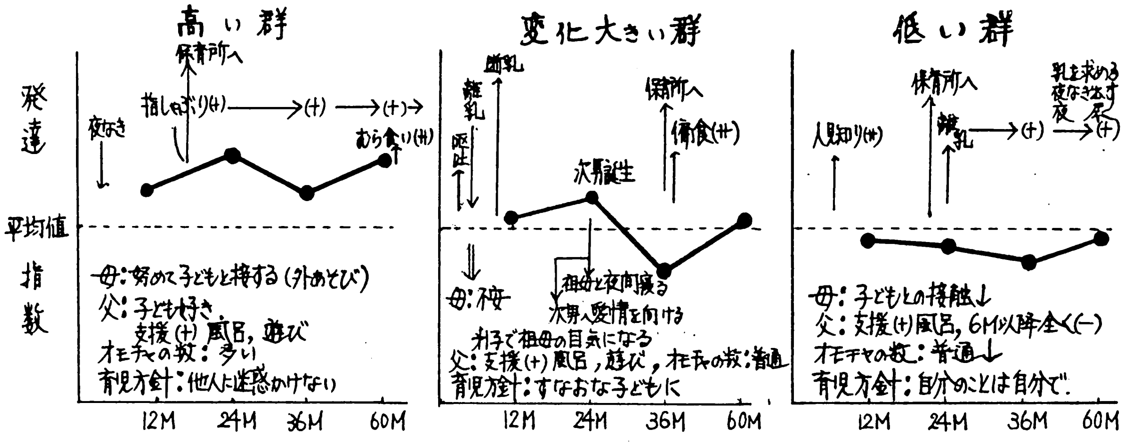
家族形態別では16世帯が核家族であった。核家族と三世代家族のいずれにおいても育児の不安は少なくなかった。今回の場合、これらの核家族は祖父母や親類が近所に住んでいて、外出の時はいつでも支援してもらえる体制が整っていた。しかし、育児不安の有無に差はなかった。

４）母親の養育態度と育児不安

母親の養育態度（3群）はいずれの場合も母親は育児に対する不安や悩みがあった。　偏食については7名（44%）と最も多く、その他に指しゃぶり、むらぐい、夜中に泣き出したりするなどの不安や問題が多かった。

５）事例検討（発達指数の3群）

発達指数で分類した3群の中で代表的事例を検討した。発達指数の平均値より高い群、低い群、変化が大きい群のいずれの事例も、育児に対する不安や問題は、個々にみられ、母親の意識や態度が発達に大きく左右していると思われる。



看護2－3

集中治療室における看護作業の分析
－患者への言葉かけに関する考察－

○櫻井由美乃　　越河六郎
（千葉県立衛生短期大学）　（労働科学研究所）

1．目的

集中治療室（以下ＩＣＵとする）での看護は、患者の病状が重いこと、そして滞在時間が比較的短い経過をとるという特徴がある。看護作業の内容は、治療の介助が中心となっており、患者とのコミュニケーションも制限されることが多い。その実体を捉える目的で、作業動作の観察と、患者との会話（言葉かけ）を記録し、ＩＣＵにおける看護作業の性質を分析した。

2．方法

調査対象：某公立救急専門病院のＩＣＵに勤務している看護婦3名を調査対象とした。

調査内容：30秒スナップリーディング法により、日勤の申し送り直後から、休憩時間を除く準夜勤者への申し送りまでの被験者の行動を記録した。更に、被験者が担当した患者のベット周辺での看護の状況と音声をビデオ収録した。ただし、患者のプライバシーに関わる場面は録画を中断した。

調査期間：平成6年8月13日、8月15日、9月9日の3日間。

結果集計：1)看護業務量

業務内容の分類は、「総合病院における病棟看護業務の労働科学的分析」(1987)で用いた『看護業務内容分類』を参考に作成した『看護作業内容分類』に基づいてスナップ数による業務量を集計した。

2)直接的作業と間接的作業

患者と直接接するか、あるいは患者の個人的空間であるベット周辺で行われた作業を「直接的作業」とし、患者と直接接することのない場面の作業は「間接的作業」として集計した。

3)看護婦の言葉かけ

看護婦の言葉かけの内容をセンテンスに分けて分類した。また、文脈からブロックに分け、看護作業との関連を分析した。さらに、言葉かけのニュアンスに含まれる看護婦の姿勢や態度といった要素をまとめた。

3．結果および考察

1)タイムスタディの結果からみたＩＣＵにおける看護の特性

看護作業のスナップ総数はスタッフＡ783、Ｂ765、Ｃ798、であった。三者に共通して頻度の多かった看護作業は、「観察・計測」「身の回りの世話」「書類の記録・点検」「診療の介助および治療的ケア」の4項目である。

「書類の記録・点検」を除く3項目は、作業量の70%以上が直接的作業であった。

「身の回りの世話」と「診療の介助および治療的ケア」との量的関係をみると、一方が増えると他方が減る傾向がみられた。苦痛を伴う処置の後では、患者は休養が必要となる。そこで、看護婦は「身の回りの世話」の内容・やり方を工夫することにより患者の心身の安静を確保していると考えられる。

「器具・器械の取扱い」のスナップ数は少ない。これは、器機を用いたモニター類の取扱いが「観察・計測」に、輸液ポンプの取扱いが「与薬」に含まれるなど、ＩＣＵの「器具・器械の取扱い」は独立した作業ではないためであると考えられる。

2)ＩＣＵにおける「言葉かけ」

看護婦の患者への言葉かけのセンテンスは、スタッフＡ157、Ｂ523、Ｃ521であり、内容から12の群に分類した。意識障害の患者を担当したＡは言葉かけが極端に少なかった。被験者に共通して多かった言葉かけは、「治療・処置、看護処置に対する患者の不安に対応」「患者の現状認識を助ける情報提供」「患者の感情表出を助ける」内容であった。また、言葉かけの特徴として、患者を受容・支持・肯定する、客観性を持つ、思いやりや関心を示す、励ます等の態度・姿勢が読みとれた。

その他の特徴として、会話が困難な患者への言葉かけは短く、「はい・いいえ」で答えられる質問応答の形式をとることなどが挙げられる。

3)ＩＣＵにおける看護作業と言葉かけの関係

「直接的作業場面」では「言葉かけ」が多くみられた。スタッフＢとＣの言葉かけは、「身の回りの世話」に伴うものが約40～50%であり、スタッフＡも35%程度を占めていた。

身体的苦痛を伴うことが多い「処置や検査」の場面での言葉かけは、治療に直接関係する内容で、しかも口癖に近いパターン化したものである傾向が認められる。また、「身の回りの世話」の中でかわされる会話でも、日常的な世間話などを内容とするやりとりはわずかであった。

看護2－4

看護学生の看護婦イメージに関連する要因の分析（1）

－看護教育課程別・新入生の比較－

○三上れつ　　有賀千世　　曽根原純子　　布施淳子
（山形大学）　（信州大学医療技術短期大学部）　（山形大学）

【目的】本研究では、看護教育課程別の新入生がどのような看護婦イメージ（現実像、理想像）を持っているのかを明らかにし、イメージに関連する要因について検討する。

【方法】調査対象：大学生59名、短大生60名、専修学校生73名、計192名。調査方法：質問紙調査。H7.4.11～4.20。調査内容：①属性（志望動機など6項目）②Self Esteem（管1984）③SD法：2つの概念に対する36の形容詞対からなる7段階評定。分析方法：各概念の36の形容詞対の因子分析を行い、SE得点・属性と因子得点についてピアソン積率相関係数、F検定、t検定を行った。

【結果・考察】

1．単純集計及び形容詞対の課程別平均値の比較

看護婦イメージのプロフィールの傾向は、現実像では専修＞大学＞短大、理想像では大学＞専修＞短大の順であった。形容詞対のうち3課程それぞれの対比較で有意差がみられたのは、現実像の「おもしろい」「知的な」「意欲的な」で専修＞大学＞短大、「清潔な」で大学＞専修＞短大、また理想像では「自由な」で大学＞短大＞専修の順で高かった。全体的に短大生の看護婦イメージが低かった。

2．因子分析及び課程別因子得点の平均値の比較

各概念の因子分析（主成分分析、7因子、直交回転、バリマックス法）の因子負荷量（絶対値0.40以上）により各因子を次のように命名した。<u>現実像</u>：累積寄与率(56.2%)；f1否定的人間関係、f2否定的社会的評価、f3働きがい、f4専門性、f5否定的性格特性、f6否定的外見、f7肯定的労働環境。<u>理想像</u>：累積寄与率(52.9%)；f1否定的社会的評価、f2否定的人間関係、f3否定的労働環境、f4専門性、f5肯定的性格特性、f6肯定的外見、f7働きがい。課程別にみた因子得点の対比較で有意差のあったのは、現実像のf1「否定的人間関係」で専修＞大学＞短大生、f2「否定的社会的評価」で専修・短大＞大学生の順でより否定的なイメージが強かった。また、f4「専門性」では、大学・短大生の方が専修学校生よりも肯定的なイメージであった。一方、理想像では、f1「否定的社会的評価」で大学生の否定的イメージが強く、f2「否定的人間関係」では専修・短大生の方が否定的イメージが強かった。

3．看護婦イメージに関連する要因

1)課程別にみたSE得点と各因子得点との関連

各課程の全体のSE得点（40点満点）の平均値は、大学生x̄27.12±3.80、短大生x̄22.75±4.78、専修学校生x̄26.29±5.19であった。大学生では有意な相関はみられなかった。短大生では、現実像のf2「否定的社会的評価」r=0.33、理想像のf3「否定的労働環境」r=-0.33で有意な相関（$p<0.01$）がみられ、SE得点が高いほど現実像の否定的社会的評価や肯定的労働環境のイメージが強かった。また、専修学校生ではSE得点が高いほど現実像のf1「否定的人間関係」r=0.24（$p<0.05$）で否定的イメージが強くみられた。

2)課程別にみた属性と各因子得点との関連

現実像のf1「否定的人間関係」f2「否定的社会的評価」f4「専門性」、理想像のf1「否定的社会的評価」f2「否定的人間関係」において、全ての属性（志望動機別、身近な医療関係者・入院経験・死別体験・1日看護婦体験の有無、勤続予定）で有意差がみられた。現実像のf1では看護婦志望の短大生が属性の別にかかわらずより肯定的なイメージをもっていた。f2では、看護婦志望の大学生で、入院や死別体験があり、出来るだけ看護職を継続する群で肯定的イメージが強かった。また、f4では看護婦志望の専修学校生で1日看護婦体験のない、勤続予定が低い群で専門性のイメージが低かった。理想像のf1では、志望動機が明確で、身近に医療関係者がおり、1日看護婦体験のない、出来るだけ看護職を続けるという大学生群で社会的評価のイメージがより否定的であった。f2では、看護婦または志望動機が不明の専修学校生で、属性の別にかかわらず、人間関係について否定的イメージが強くみられた。以上より新入生の看護婦イメージは固定的・観念的な面もみられるものの、入学前に看護状況に接触したり看護情報が得られることによって、より適確なイメージを形成していることが推察された。

看護２－５

看護学生の看護婦イメージに関連する要因の分析（２）

～看護専修学校の学年別による比較～

○有賀千世　曽根原純子　　今留忍　　三上れつ

信州大学医療技術短期大学部　　日本医科大学看護専門学校　　山形大学

【研究目的】看護婦を目指す意識がより明確であるといわれている看護専修学校生の看護婦イメージ(理想像・現実像)を調査し、イメージに関連する要因を学年別に検討し、今後の教育の指針とする。

【研究方法】対象：N医科大学看護専門学校の各学年より無作為に抽出した80名のうちの１年生77名、２年生60名、３年生38名、計175名。方法：質問紙調査 1995年４月中旬に実施。調査内容：1)属性：入学動機他 9 項目。2)Self Esteem(SE得点)　3) SD法:36形容詞対７段階評定。分析方法：各概念を因子分析し属性・SE得点と因子得点についてF検定、t検定、ピアソン積率相関係数を求めた。

【結果・考察】1.単純集計：表1より看護婦を目指す割合が学年の進行に伴って増加していた。

表１看護婦志向・SE得点の結果

属性	群	1年生	2年生	3年生
動機	看護婦	61.8	68.3	91.9
	看護婦以外	38.2	31.7	8.2
現在の志向	看護婦	61.8	71.7	70.3
	看護婦以外	38.2	28.3	29.7
将来の希望	看護婦	60.5	66.7	78.4
	看護婦以外	39.5	33.3	21.6 %
SE得点	(X̄±SD)	(26.55±5.22)	(26.11±5.02)	(25.58±4.49)

2.理想像・現実像のプロフィール：36形容詞対は、理想像6.0前後、現実像5.5前後で類似した。3.因子分析（バリマックス法）：1)理想像：固有値及び因子の解釈のし易さを考慮して６因子を抽出し、f1 就労環境、f2 パーソナリティ、f3 専門性、f4 やりがい、f5 信頼性、f6 科学性と命名した。2)現実像：理想像と同様に５因子を抽出し、f1 パーソナリティ、f2 やりがい、f3 専門性、f4 就労環境、f5 科学性と命名した。理想像のf5信頼性と現実像のf5科学性の因子以外はマイナスの負荷量を示していた。4.各概念の学年別因子得点との関連：有意差がみられたのは表2の通りである。理想像の１年と３年の間に差がみられたのは入学間もない１年生よりも、３年生の方が知識や経験から看護婦を肯定的にとらえているためと考えられた。また、３年生は実習の経験から現実の大変さを認めながら１、２年生より現実像を肯定的にとらえられている。これは、３年生くらいになるとだんだん理想像のイメージがはっきりし、目標を持つようになる一方で、現実とのギャップもわかるようになるためと考えられる。5.学年別の属性と各因子得点との関連：1)１年－２年：入学動機や一日体験の属性において理想像の科学性に関連が認められ、一日体験ではパーソナリティに関連がみられた。いずれも２年生が看護婦やその仕事を肯定的にとらえていた。2)１年－３年：全ての属性で有意差が認められた。３年生は各属性で理想像、現実像共に科学的ととらえていたが、現実像のパーソナリティ・やりがい・就労環境・科学性では否定的にとらえていた。なかでも将来看護婦を希望する者や看護の関心が深まった３年生は否定的であった。3)２年－３年：入学動機以外の属性で看護に前向きな３年生は、理想像のパーソナリティ・やりがい・信頼性で肯定的であった。しかし現実像の就労環境では各属性の相違に関わらず３年生は否定的にとらえていた。以上のことから１年生は理想を高くもっており、現実像をとらえにくく、３年生になると現実を厳しく認識しながらも、看護婦を肯定的にとらえているように考えられる。これは、１・２年生が現実の看護婦と関わる経験が少なく知識によって看護婦をイメージしているのに対し、３年生は知識や経験から看護婦像をより現実的にイメージできるようになるためではないかと考える。6.学年別のSE得点と各因子得点との関連：１年生は、理想像の専門性 $r=-0.239$ $(p<0.05)$、２年生は理想像の科学性 $r=-0.305$ $(p<0.05)$、３年生は現実像のやりがい $r=-0.417$ $(p<0.05)$、科学性 $r=0.492$ $(p<0.01)$で有意な相関が見られ、自己評価が高いほど自己の将来像である看護婦を科学的でやりがいのある仕事ととらえていると考えられた。

表2　学年別にみた因子得点の対比較

		1年	2年	3年	F値
理想像	f6 科学性	0.279±0.97	-0.121±1.04	-0.371±0.83	6.13 **
現実像	f4 就労環境	-0.046±1.00	-0.213±0.99	0.437±0.86	4.89 **
	f5 科学性	-0.164±0.95	-0.019±0.94	0.371±1.10	3.48 *

＊ $P<0.05$　＊＊ $P<0.01$

【まとめ】看護婦を目指す意識が明確である看護専修学校生の看護婦イメージと属性との関連を学年別に比較した結果、看護の知識や経験が看護婦イメージに影響を与えると考えられた。また、看護教育を通して自己の将来像である看護婦を肯定し、自己と近づける傾向があると考えられた。そこで、看護婦を肯定的にイメージできるように看護への関心を深め、実習に対して前向きに取り組めるような教育が重要になると考えられた。

看護2－6

残遺型精神分裂病者の時間認知

○森　千鶴
（東京都立医療技術短期大学）

Ⅰ　目的

人は１日を24時間で生活しているが、同じ時間でも、非常に短く感じるときもあれば、長く感じることもある。これは、その人のもつ時間認知との関連があると言われている。

精神分裂病者の時間認知について、精神病理学的に研究されている一方、自己の年齢評価、短時間の時間評価については、生物学的研究がされている。

臨床において残遺型精神分裂病者の行動をみると、食事にかける時間は短く、食事を待つために列を作るという行動がしばしば認められる。また、精神分裂病者が何もせず臥床しているときに、看護者が問いかけると「退屈ではない」という返事が返ってくることが多い。

そこで本研究では、残遺型精神分裂病者の時間の認知に注目し、観察された行動と認知を比較し、残遺型精神分裂病者の特徴を把握することを目的とした。

Ⅱ　方法

1．対象

対象は、ＤＳＭ－ⅢＲに基づく残遺型の精神分裂病者20名（男性10名、女性10名、57.3±13.0歳、以下、残遺症状群）である。対照群として陽性症状のある精神分裂病者17名（男性９名、女性８名、42.9±14.7歳、以下、陽性症状群）、残遺症状群と同様に長期入院をしている精神分裂病者以外の者７名（男性４名、女性３名、59.1±6.5歳、以下、その他の疾患群）、アルコール依存症で入院している者10名（男性のみ10名、48.7±11.3歳、以下、アルコール群）、痴呆老人13名（男性８名、女性５名、75.1±8.0歳、以下、痴呆老人群）、施設に入所している老人９名（男性３名、女性６名、85.3±10.6歳、以下、正常老人群）とした。

2．方法

対象者の認識を把握するために、入院期間の自覚や歴史的出来事についての自覚、時間の感じ方などについて面接による調査を行なった。また、看護者または、寮母に対象者の行動を連続した14日間を観察、記録してもらった。さらにこれと同様の期間に対象者に、入眠時間、起床時間を看護者または寮母が聞き集計した。

なお、これらのすべてについて対象者または家族に説明し、了承を得た。

Ⅲ　結果

1．入院（入所）期間の実際と自覚

入院（入所）期間の実際と自覚の差をとりあげ比較した。残遺症状群は、非常に短く感じているか、長く感じているかの両極に分かれる傾向が認められた（χ^2値＝57.6、df＝25、$p<0.001$）。

2．歴史的出来事についての自覚

「昭和天皇が亡くなってどの位経つと思うか」を質問し、実際の期間との差を算出し、各群で比較した。その結果痴呆老人群、正常老人群、その他の疾患群はわからないと回答した者が多く認められた。しかし陽性症状群、残遺症状群ともに短く感じている者が多く認められた（χ^2値＝54.73、df＝30、$p<0.001$）。

3．行動時間と認知

実際の１日の食事摂取時間と食事を待つ時間を比較すると、残遺症状群は、他の群に比べて食事を待つ時間が極端に長く（$F=21.3$、$p<0.001$）、食事摂取時間は極端に短かった（$F=19.5$、$P<0.001$）。

しかし、「食事を摂取している時間と食事を待っている時間とどちらが長いか」と質問したところ、どの群も食事をしている方が長いという結果であった。

4．睡眠－覚醒時間と自己評価

14日間観察された睡眠－覚醒の状態、および本人が自覚した睡眠－覚醒の状態を分けてダブルプロット法で比較したところ、残遺症状群は差が大きく、各病棟で日課として定められている時間帯と一致していた。

Ⅳ　考察

残遺型の精神分裂病者は、意図的に時間を使っているのではなく、与えられたように行動している様子がうかがわれた。また、看護者からみれば、午睡のように見える時間は、午睡としてではなく、別な時間認知をしており、実際とのズレが大きい。午睡以外の行動の時間も認知とのズレが認められた。木村は「暦時間や時計時間は、共同体意識と密接不可分な関係にある」と述べている。本研究に認められた精神分裂病者の時間感覚のズレは、精神分裂病者の共同体意識の希薄さにあるのではないかと考える。また外界の変化に対応することなく、独自の世界の中で行動していることのあらわれではないかと推察された。このような時間認知は、精神分裂病の疾患の特性ではないかと思われる。

達成動機と適応（２）

── 過去・現在・未来イメージと達成動機の関係 ──

樋口康彦(Yasuhiko HIGUCHI)
(関西大学社会学研究科)

はじめに

樋口(1995)は達成動機と適応の関係について明らかにするため、達成動機、危機対処方略、適応という３変数の関係について調査を行った。その結果、トラブルが起こった際、達成動機の低い者は効果的でない対処方略を用い、ひいては不適応へと陥るということが明らかにされた。それからまた、その不適応を導く低達成動機状態(無気力状態)ははじめから定められていたことではなく、以前に行った対処の失敗、不適応的経験の累積により規定されたものかもしれないということが考察され、円環的システムの存在が示唆された。しかし、人間が時間を超越した４次元的思考のできる存在であるということを考慮した場合、過去における適応経験だけではなく他の時間における適応も達成動機に影響を与えているのではないかということが考えられる。まず、現在抱いている適応感が影響を与えていることは当然のことであろう。それから、目標を持ちその実現のために現在を生きるといったことがあるように未来からの影響も考えられる。つまり、未来のある時点における自己のあるべき姿が現在の生活に対して方向づけを与え、その実現に向けての動機づけ的役割を果たしているといったことが考えられる。このように、人間が時間という一本の線上で生き、それを意識している存在である以上、ある時点(過去・現在・未来)における自分をどのようにとらえているかということが、現在の達成動機を予測する上で重要な問題になってくるのではないかと考えられる。そこで、本研究では適応を時間イメージという観点からとらえ、達成動機との関係について探索的調査を行うことにしたい。

調査

調査時期：1994年12月下旬.

被験者および調査方法：大学生218名(男性103名，女性115名，平均年齢21.1歳)．質問紙法。

質問紙の構成　**達成動機測定項目**：樋口(1995)の研究で標準化された達成動機測定の質問紙を使用した。①自己向上、②課題への取り組み、③イニシアティブ、④競争、⑤活動の合理化、⑥未来志向の６次元が測定可能である。非常によくあてはまる(５点)から全くあてはまらない(１点)までの５件法．計35項目。

過去・現在・未来における適応感測定項目：今回は、ある個人のある時代における適応感(充実感)を18の形容詞対を用いたＳＤ法によりとらえることにした。そして、答える時間像としては、①中学時代、②高校時代、③現在、④大学を卒業してから２－３年の間、⑤大学を卒業して10年後の５つを選んだ。次に18項目に対し因子分析を行い、その結果、計５因子を確認した。第１因子に「充実した－充実していない」等、適応に関するイメージを表す７項目が高い負荷を示したため、これらの項目を各時代における適応感測定項目とした。

結果と考察

時間イメージと達成動機の相関分析：５つの時代における適応感と現在における達成動機の関係についてとらえるために、両変数間の相関係数を求めた。Table１に結果が示されている。全体的に見て、中学時代から大学卒業10年後までのすべての時代において適応感と自己向上に対する動機および課題への取り組みに対する動機との間に有意な相関係数が見られる。このことは、過去において自分の行ったことがきちんとした成果を上げ環境に対して適応してきたこと、現在適応感を持っていること、未来における適応を予測していることが、自分を向上させることやなにかの課題に取り組む動機へとつながるということを示しているものと考えられる。

Table１　適応感と達成動機の相関分析結果

達成動機 ／ 適応感	自己向上	課題への取り組み	イニシアティブ	競争	活動の合理化	未来志向
中学時代	319**	290**	126+	-033	-011	046
高校時代	337**	318**	111	-085	-019	-051
現在	325**	233**	-044	-047	-090	-002
大学卒２－３年後	334**	326**	038	-040	-015	103
大学卒10年後	339**	288**	145*	037	-034	021

注１）＋ Ｐ＜.10　＊ Ｐ＜.05　＊＊ Ｐ＜.01

発達・教育２－３

保育園児の死亡事故について
―経年的変化を中心に―

岡本善之
（麻布大学）

研究の目的：保育園児の死亡事故について経年的に調べることによって、園児の死亡事故の抑制に資することを目的とする。少子化、病気による死亡の減少化のなかで、事故による死亡は特に注目されてきている。

方法：認可保育園の管理下（登降園中を含む）で起きた保育園児の死亡事故を対象とする。資料は日本体育・学校健康センター学校安全部発行の「学校の管理下の死亡・障害」（昭和57年版から平成６年版、昭和55年度から平成４年度の事故を所載）に拠った。

結果：表１～４に示す通りである。

(1) 保育園児の死亡事故数の経年的推移

昭和55年度から平成４年度までの13年間の推移をみると、年度によって突然死、頭部外傷、溺死、窒息死の計が、自動車交通事故死を上回る年度（55, 56, 58, 1, 2, 3, 4）と下回る年度（57, 59, 60, 61, 63）とがある。

表１　保育園児の死亡事故数の経年的推移

年度		昭和55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成 元	2	3	4	計
件	(1)	6	11	5	15	7	4	8	7	4	6	8	8	10	99
	(2)	3	8	16	9	10	11	9	7	5	3	1	4	7	93
数	計	9	19	21	24	17	15	17	14	9	9	9	12	17	192

（注）(1) 突然死、頭部外傷、溺死、窒息死。　(2) 自動車交通事故死。

表２　保育園児の死因別数の経年的推移（自動車交通事故死を除く）

年度	昭和60	61	62	63	元	2	3	4	計
突然死	4	2	2	4	4	3	5	5	29
頭部外傷			1		2	1		2	6
溺死		3	3			2		2	10
窒息死		3	1			2	3	1	10
計	4	8	7	4	6	8	8	10	55

（注）窒息死には溺死によるものを含まない。

表３　保育園児の突然死発見時の状況

年度	昭和60	61	62	63	元	2	3	4	計
歩いていた					1				1
遊んでいて							1		1
腰掛けていて							1		1
眠っていて	2	1	2	4	3	3	3	5	23
その他	2	1							3

表４　保育園児の突然死の年齢段階

年度	昭和60	61	62	63	元	2	3	4	計
１歳未満	1		1	4		2	2	3	13
１～２歳	1	2	1		2	1	1	2	10
３～４歳	1				1		2		4
５～６歳	1				1				2

年度ごとの計は９件から24件にわたり、平均14.7件。突然死等の計99、自動車交通事故死93でほぼ同数。

(2) 保育園児の死因別数の経年的推移

自動車交通事故死を除く、昭和60年度から平成４年度までの推移は計で４件から10件にわたっている。死因別計で突然死は29件で52.7%を占め、溺死10件18.2%窒息死10件18.2%、頭部外傷6件10.9% となる。

(3) 保育園児の突然死発見時の状況

昭和60年度から平成４年度までの８年間で見ると、眠っていて23件、79.3%で、突然死は殆どが午睡中など眠っている時に発見されている。

(4) 保育園児の突然死の年齢段階

上と同じ期間でみると、１歳未満13件44.8%、1~2歳10件34.5%と、２歳までで23件79.3%を占める。

考察：ここに示した保育園児の死亡事故数は、ほぼ総ての保育園児を基にした数と考えてよいものと思われる。それは、日本体育・学校健康センターへの加入状況が昭和60年度1,610,194人(90.2%)、平成４年度1,495,290人(91.5%)と加入率が高いからである。少子化もあって園児総数が減少化する中で死亡事故数は減少していない。保育時間の延長化、保育内容の多様化乳児年少児の増加等が原因として考えられる。

保育園児の死亡事故の内容として、ここでは突然死、頭部外傷、溺死、窒息死および自動車交通事故死を含めているが、死亡にまで至る過程には様々な要因が関与しているものと思われる。普通は園児の事故というような場合は、いわゆる不慮の事故、しかも転倒、衝突などによるものを指すことが多いと思われるが、ここでは真の原因が疾病にあったというような事例もかなり含まれているのではないかと思われる。

保育園の管理下の事故には登園・降園中の事故も含まれている。保育園の場合は登降園に園バスが使われることは少ない。多くの場合は保護者が付き添っている。自動車交通事故死の多くは登降園中に起こっているので保護者に対する交通安全教育などによる危険予知・危険回避能力向上などのための働きかけも必要である。

発達・教育２－４

幼児の家庭教育と青少年非行の関連性
－特に言葉の力について－

菊　地　藤　吉　（ホノルル大学）

(1) はじめに

この調査は、東京府中市の関東医療少年院を中心（当時の小川太郎少年院の好意による）に、八王子市の多摩少年院など関東地区の少年院６カ所を４年半がかりで５７２人の非行少年少女と膝つき合わせて話し合っているうちに、幼時の家庭教育が（特に親の悪い言葉の影響が）その子の心身の発達段階において、だんだん反抗心、又は劣等感が増して、そうした感情の強い者が、悪友に誘われ、または、悪い社会環境の矛盾を強く感じ、それに刺激されると、それが動機となって、誘いに乗り、結果として非行に走っていることが全体の８２．３％である事実につきあたり、真の原因は幼児の家庭教育であり、悪友に誘われたということは、その家庭教育という原因に対して、動機である。ということに気づいたのである。

(2) 非行の原因結果

すなわち、結果として現れる非行は、原因結果の法則によれば、真の原因に対して動機というべきものが殆どであることに突き当たったのである。

(3) 非行の実例

A子（山梨県甲府市生まれ）１４歳

関東医療少年院面接、まだあどけなさの残っている少女なのに、「放火」と言うことであった。

それはA子の記録によれば、６歳の秋、近所の主婦がA子の家へ遊びにきて、A子の母と話しをしているうちに、互いに子供の話になり、その時A子の母が、「うちの子は女子ばかり４人ですが、１人ぐらいは男の子がほしくて、末っ子のA子を妊娠する頃は、男子出産を神参りした」という。「しかし生まれて来たのはA子だったのでがっかりした。捨てる訳にもいかないので仕方なく育てて来た」と言ったという。

それまでにも「あんたが男の子だったらよかった」という言葉は何度も聞いたのであるが、この時は目先が暗くなるようなショックを子供ながら強く感じたという。それ以来子供ながらも「自分はこの家に不必要な子」「愛されていない子」という感じが、つねに潜在意識に付きまとい、自分でもひねくれて行ったと思うとのことであった。その子供の心を知らない親たちはその後も、ことあるたびに「男の子であればよかった」と言うので、中１の９月、母と言い争った夜、遂に自宅に放火したのだとのことである。

これは、レオンチェフ著、明治図書発行の「子供の発達心理」にも（幼児期の心の発達段階において、親の不用意な悪い意識を幼児の心に入れると、誠にゆがんだ状態に発達する。・・・）と書かれてあるが、親が不用意に言っていた言葉が、この子の発達段階にいよいよ膨らみ増大させていったものである。

このような調査の中で、幼時期に於ける家庭教育の（特に親の言葉がその青少年に何らかの影響を与えていると見られるケースは下記の通りである。

非行の種類	面接人員	幼時期家庭教育に関連
殺　人	1	1
強　盗	2	2
放　火	1	1
強　姦	1	0
暴行・傷害	67	51
脅迫・恐喝	19	13
窃盗	75	69
道路交通法違反	203	169
その他	205	167
計	572	474

尚、沖縄県南部の財団法人・総合教育研究所では家庭教育相談も実施しており、この５年間における青少年非行の相談は７９件であるが、内容のパーセンテージは、上記の図表とほぼ類似している。

(4) 結論

以上の例などによっても、青少年が悪友に誘われて自分の良心と闘っている時、この善と悪、右と左の両極限の前に立たされて悩み迷っている時に、自分でも忘れたと思っていた潜在意識の中にひそんでいた「幼児からの家庭教育、特に、親から常に言われていた言葉」が、突然浮かんで来て悪しざまに言われて来た子供は（どうせ幼い時から親からさえ愛されていなかったのだ）と思うと、口には表現できない口惜しさ、情けなさ、みじめさの感情が襲って来て、その時には、その興奮のため理性が失われ、自暴自棄になって前後の判断がつかなくなり、その結果衝動的に「非行を犯す」という決定的瞬間を迎えるという事実が調査上はっきりしている。

かかわり方の発展に関する研究（２９）

－人と人の間が育つ情報伝達－

○ 青木 玲子　　　小原 伸子　　　佐藤 啓子
（東京都女性情報センター）（文教大学）（文教大学）

Ⅰ 目的：高度情報社会における情報多様なメディアの発達は、コミュニケーション形態の変化をもたらしつつある。物を媒介とする間接的なコミュニケーションは､時間的,空間的な限界を超えてコミュニケーションの可能性を広げて来た言える。しかし、人間は、基本的に対人的コミュニケーションを基盤とすると考える。本研究は、「心理劇」の活用によって、情報伝達の体験を共有し、対人コミュニケーションにおける情報伝達の意味と基盤的なコミュニケーション媒体としての人を関係学的立場（創始者：松村康平）から以下の観点で察するものである。

1 情報伝達過程におけるコミュニケーション媒体としての人の特性とは、人と人との情報伝達の基盤的な特性はなにか。
2 ひとを育てる情報伝達とは。
3 人と人の情報ネッワークキング成立のプロセスについて。
4 心理劇プログラムの意義について。

Ⅱ 方法： 行為法 参加観察法 実践法

Ⅲ 経過 １９９５年7月8日，第５２回文教大学心 理劇研究会の活動の記録（ビデオ 録音テープ）により分析，考察する。 参加者１０人，（リーダーチーム ４人）

Ⅵ 結果と考察

第１ セッション

《設定の意図》Face to Faceによるもっとも基本的な情報伝達形態を体験することにより、 コミュニ ケーション媒体としての人について考察する。

1） 参加者が短文を伝達する ＜条件１＞ 正確に伝える
2）２つのグループに監督から１つの情報を伝える
　＜ 条件１＞ 自分の言葉で伝える
3）限られた時間，限られた場所で情報を収集し，伝える。

《考察》現代のコミュニケーション媒体のパターンは､①人ー人ー人,②人ー機械（物）ー人，③人ー機械（物）ー機械（物）ー人の３つのパターンと考えらる。第1セッションにおける人から人への情報伝達の場合,人は情報の受信者でもあり､発信者でもある。（１）人が情報を受信，（２）人が伝達･発信する（３）人から人への情報の伝達の類型を今回の活動の体験から関係学による５つのかかわり方,及び起動点で分析,考察すると以下の類型が明らかとなった。

（１） 受信する人と情報のかかわり（図１）
① 内在的: 情報を受信し受け止める ② 内接的: 情報内容に影響される ③ 接在的: 情報を受けとめ自己を新しく変革する ④ 外接的: 情報を正確にうけとめ批判する ⑤ 外在的: 情報を受信しない

（２） 発信･伝達する人と情報 自己と物（情報）の起動点が① 物（情報）に外接，②人に内接，⑤自己に内接；④情報に内接， ⑤物（情報）と人に接在しながら移動する。

（３） 人からひとへの伝達
1 点滅的伝達 （人と情報が内在）：受け止める
2 連鎖的伝達（人と情報外接）：受け流す
3 連環的循環的伝達（人と情報が接在）：受け継ぎ，受け止め新しく受け返す
4 相互作用的伝達（人と情報が内接）：受け返す
5 互換的伝達（人と情報が内接・外接）：受け継ぐ

以上の多様なかかわりは、それぞれに個別の特性を持ち、３つの項目の類型は、人が情報を伝達する場合の主体的選択の可能性を示すと考えられる。

第２セッション
《設定の意図》さまざまなメディアとなってふるまうとによりメディアの特性を知り、媒体としての人の特性を考察する。
1）「豊かな老後」の心理劇を展開しながらコンピューター，ビデオ，写真などのメディアになってふるまう。
《考察》（１）メテイアの特性を知ることは、情報伝達のより適確な媒体としてのメディアの主体的な選択をすることの可能性をもたらす（２）人は、多様なメディアとのかかわりで、知識的，情緒的側面をともに育てると考えられる。（３）物としてのメディア、正確で，大量な伝達の特性があり、時間的，空間的な限界を超えて情報の伝達が可能である。

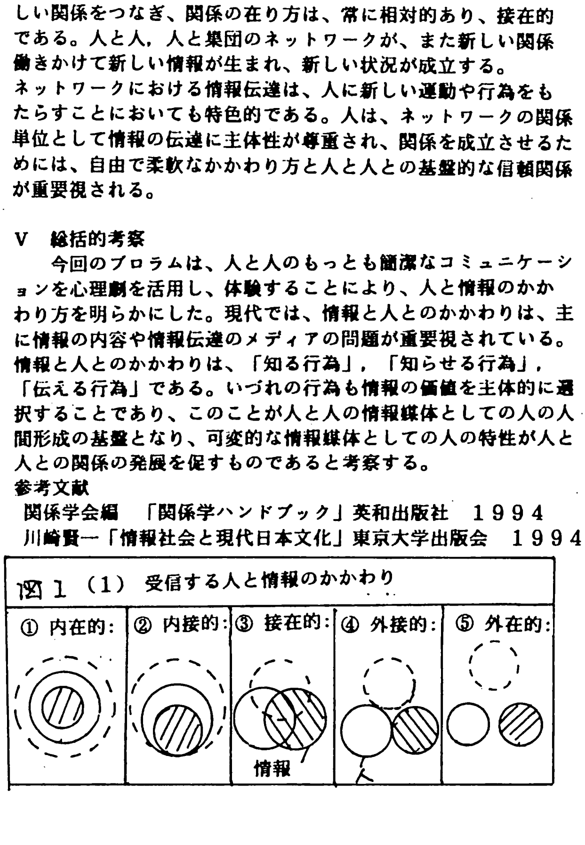
第３セッション
《設定の意図》人と人との基本的な情報伝達から、新しい行為を促す情報の連環的循環的伝達の体験をとおして、ネットワーク成立のプロセスを考察する。
（１）どのようなネットワークが必要か一人一人が自己の情報を発信する。
（２）参加者がお互いの情報を伝達し、ネットがわかるように手をつなぎあう。
（３）動きながら自由に情報を発信．伝達しあう。
《考察》情報ネットワークでは、人と人が情報を媒介として新しい関係をつなぎ、関係の在り方は、常に相対的あり、接在的である。人と人，人と集団のネットワークが、また新しい関係働きかけて新しい情報が生まれ、新しい状況が成立する。
ネットワークにおける情報伝達は、人に新しい運動や行為をもたらすことにおいても特色的である。人は、ネットワークの関係単位として情報の伝達に主体性が尊重され、関係を成立させるためには、自由で柔軟なかかわり方と人と人との基盤的な信頼関係が重要視される。

Ⅴ 総括的考察

今回のプロラムは、人と人のもっとも簡潔なコミュニケーションを心理劇を活用し、体験することにより、人と情報のかかわり方を明らかにした。現代では、情報と人とのかかわりは、主に情報の内容や情報伝達のメディアの問題が重要視されている。情報と人とのかかわりは、「知る行為」，「知らせる行為」，「伝える行為」である。いづれの行為も情報の価値を主体的に選択することであり、このことが人と人の情報媒体としての人の人間形成の基盤となり、可変的な情報媒体としての人の特性が人と人との関係の発展を促すものであると考察する。

参考文献
関係学会編 「関係学ハンドブック」英和出版社 １９９４
川崎賢一「情報社会と現代日本文化」東京大学出版会 １９９４

図１（１） 受信する人と情報のかかわり



子どものためのアサーション（自己表現）トレーニング（１）；アサーションできにくい場面について

○園田雅代（玉川大学）

《目的》アサーションとは「自分の気持ち・考え・意見・希望などを率直に正直に、しかも適切な方法で相手に伝えること」であり、「自分も相手も共に大切にしようという相互尊重の精神で行なおうとするコミュニケーションのこと」である。

昨今、大人を対象としたこのアサーション・トレーニングが様々な領域（学生相談所主催の大学生向けのもの、公的機関による社会教育・女性セミナー、看護職研修、企業研修など）で実施・展開されるようになってきており、コミュニケーションのスキルトレーニングとして人気を集めてきている。自己理解ならびに行動変容という内面的・外面的の２方向から重層的にアプローチする本トレーニングでは、参加者各人の問題意識やレディネスに応じて学習できる、また現実的な自信を育成しやすいなどのメリットが大きいように、演者らはトレーナー体験から実感している。

本研究の目的は、これまでの大人向けのアサーション・トレーニングをもとに子ども向けのものを開発していくところにある。特に小学５－６年生や中学生といった前思春期・思春期の子どもを対象に、学級集団のなかで利用できるプログラムを検討していきたい、と考えている。それに向けての一助として、子どもたちがどういった場面でアサーションをしにくいのかを予備的に調査することにした。

《方法》質問紙調査①選択式；友達とのコミュニケーションに関するもの（例；友達に仲間に入れて欲しいと思うことがあるか・そうして欲しいときそのことを自分から相手に言うか）１０項目、両親や教師とのコミュニケーションに関するもの（例；自分一人ではできなかったりわからなかったりするので両親や先生に聞いたり手助けして欲しいと思うことがあるか・そのとき自分から聞いたり手助けを求めたりするか）１０項目、その他（例；「ありがとう」と言いたいとき自分から言うか）３項目　②自由記述式；自分の気持ちや考えを言えてよかったと思うような最近のできごと、言えずに悔しかったり嫌な気持ちになったりしたできごと・それについての気持ちなど　対象小学５－６年生１９２名（男子９４名、女子９８名）時期本年７月中旬　なお調査は無記名法とし、神奈川県ならびに新潟県の２塾に依頼した。配布は２１０部、有効データ数が１９２部（91.4%）である。

《結果》学年別・男女別ならびに地域別で比較したものの特別な差異が抽出されなかったため、一括して扱った。友達とのコミュニケーションについて子どもたちが比較的よくアサーションをできている（「できている」というのはそう伝えたいときに伝えられているという意味である）のは、仲間に入れて欲しいとき（３件式「だいたい言っている」80.2%）、友達を遊びに誘ったり一緒に何かをやりたいと思い誘うとき（74.3%）、友達に何かをしてもらって嬉しいとき（69.5%）、友達から誘われても自分がそうしたくないとき（63.2%）である。逆に、アサーションできにくいのは、友達から誤解されたと思うときに自分の言いたいことを伝える（３件式「あまり伝えない」45.8%）　自分一人ではわからなかったりできなかったりするので友達に聞いたり手助けを求めたりする（43.2%）、友達からやって欲しくないことをされたときなどに嫌だという気持ちを伝える（42.5%）、みんなと違う考えを持っているときに自分の考えを伝える（39.8%）、の順であった。

次に、両親や教師とのコミュニケーションにおいてアサーションできているのは、両親や教師などからほめられたとき嬉しい気持ちでほめ言葉を受け取る（「だいたいできる」81.5%）、学校や家でのできごとや自分の好きなことの話を聞いてほしいときに自分から話しかける（73.9%）、勉強や友達関係のことで相談にのってもらいたいときこちらから相談をもちかける（63.7%）、両親や先生と話すとき緊張したり恐がったりせずに話せる（58.2%）などであった。できにくいのは、叱られたり批判されたときすなおに受け答えをする（「あまりできない」（43.1%）、誤解されたと思うとき自分の言いたいことを伝える（42.6%）、手助けを求めたいときに求める（39.5%）、自分のされたくないことや言われたくないことを相手に伝える（37.6%）であった。

自由記述の主な反応を例示すると、アサーションできて良かったのは、授業やクラブ活動で自分の意見や提案を先生や友達が聴いてくれたというのが多い。反面、アサーションできず嫌な気持ちになったことは、先生に誤解されて叱られた、疑われた、決め付けられたという反応が多く、特に教師とのアサーションという面で考えさせられる結果だった。総じて否定的な感情表現や緊張をはらみやすい場面で、子どももコミュニケーションに苦労しているという傾向が見られた。

糖尿病患者の自己コントロールと疾病認識

佐野　道
（日本大学大学院）

【目的】 慢性疾患について岡堂（1991）は、「日常生活とパーソナリティとが密接に関連しているため、自己コントロールの技能が重要である」と述べている。慢性疾患である糖尿病の患者の治療の基本は、食事・運動療法という生活に直結したものであることから、自己コントロールが重要な位置を占めることになる。

糖尿病患者の抱える食事療法や合併症といった様々な問題は、Rosenzweig（1938）が分類した６つの欲求不満状況に該当すると思われる。そこで、日常的な欲求不満に対する反応や対処方略と、糖尿病コントロールの行動とに何等かの関係が見られると考えた。この点に関して石井（1993）が、糖尿病教育における患者のコンプライアンスに対する心理特性の影響をＰ－Ｆスタディで研究した結果、「患者の非特定的で日常的な欲求不満状態における反応特性あるいは耐性は、糖尿病治療行動にも反映される」と述べている。そこで、欲求不満の対処方略と糖尿病コントロールとの関連性についてと患者が糖尿病の病態をどう認識しているか、という点を検討することが本研究の目的である。

【方法】調査対象：東京都内私立病院、糖尿病教育入院患者、２０名（女性１６名男性４名）平均年齢59.3歳(±9.65　40~72歳)。面接対象者、８名（男女４名）。

実施期間：１９９５年６月１３日～８月１５日。

調査実施：教育入院中の患者に、Ｐ－Ｆスタディ実施後、同意が得られた方に構造化された面接を行った。面接の質問内容は、・患者本人が自覚している糖尿病の程度　・患者本人が自覚している糖尿病発症のきっかけ　・不安に思うこと、であるが話す内容が質問から逸れていっても傾聴的態度で臨んだ。

結果の整理：教育入院患者はほぼ全員が重症に属していたため、罹病期間と合併症の有無から重症度にランク付けした。

【結果・考察】 Ｐ－Ｆスタディの結果の一部を示す。

表１　Ｐ－Ｆスタディの結果

	集団一致度 %	他責的固執反応	自責的固執反応
男	51.0 ± 4.79	3.0 ± 0.79	2.3 ± 1.3
女	49.4 ±11.67	2.3 ± 1.12	2.5 ± 1.0

集団一致度の得点は欲求不満耐性の１つの指標であることから、糖尿病患者は欲求不満に耐えるため適切な反応様式を取りにくいことを示唆している。また、自責的固執反応は「欲求不満を起こした原因を自分に求め、自分の努力によって問題の解決をしようとする」ことの指標であるが、今回の調査ではこの得点が高くても大半の患者が糖尿病コントロールの具体的な行動には移れないことを示している。或は、教育入院中であるため糖尿病コントロールに対しての反省が強くなり、それがテストに出ている可能性もある。

病状の認識については、「糖尿病は重いか」に対して１９名中１３名（68.4%）が否定的回答をし、重症であることを肯定したのは６名（31.5%）であった。しかし、糖尿病が比較的重くない患者は３名にすぎない。佐野(1992)の調査では、コントロール不良群の病状認識は軽症(23.5%)中程度(67.5%)という結果であった。そこで、重症者に病状を軽く認識する傾向があることから、誤った病状認識が糖尿病のコントロール行動への動機付け等を妨げていると考えられる。或は、糖尿病が足エソや失明になるとは知らず、軽い病気と認識している可能性もある。また、面接で明らかになったことは、「教育入院をして初めて糖尿病と自覚した」、「私は他の方と違い境界型だが念のため入院した」とまだ糖尿病になっていないことを強調することで自尊心を保っていると感じられる人がいた。発病のきっかけについては「子どもとつい食べてしまう」「姑を看取って解放されて食べた」と自覚しても具体的な生活の見直しが聴かれなかった。また男性では、「仕事のストレスと暴飲暴食である」と自覚しつつ、「酒を飲まないと営業ができない」「第一線を退くことになる」という考えがあり、この考え方が今後の生活の見直し作業を強く妨げていた。一方、糖尿病に対する認識が高い人は、今までの生活の明確な誤りの指摘や、「どこからどこまで歩くと２５分になる」、というように今後の生活の見直しが具体的に語られていた。こういった具体性のある生活の見直しが、糖尿病のコントロール行動には必要であると思われる。

臨床・相談２－２

認知された健康の水準と自己援助の役割

林　　潔
（白梅学園短期大学）

目的　今日健康とそれを維持する条件について，関心が持たれている。

健康の水準は自己認知や技能とも，相互に関連する部分があるものと思われる。

本報告では，認知された健康の水準に影響を与える条件としての，自己援助の役割について検討する。

自分の問題解決に取り組もうとする方向を支持し，促進する自分自身の態度を自己援助（self-help）とみなす。この自己援助の傾向と，認知された健康の水準とは関連するものと思われる。この仮説を検討することが本報告の目的である。

方法　認知された健康の水準の測定は，網元ら（1991）の質問紙を項目分析したものである。これは10項目からなる3肢選択の質問紙である。自己援助は，林，瀧本（1993）による。これはBurns（1991）のSelf-Help Inventoryをもとに作成されたものであって13項目からなる3肢選択の質問紙である。

これらの質問紙を，首都圏の大学2校の学生，男子121人，女子137人に実施した（1991年10月，1992年6月）。

結果　認知された健康の水準についての各項目と，全体得点の結果は，次のとおりである（項目は末尾。

項目	男子 M	男子 SD	女子 M	女子 SD
1	.92	.93	1.02	1.02
2	1.25	.59	1.37	.59
3	1.64	.58	1.50	.63
4	1.10	.60	1.10	.53
5	1.25	.58	1.41	.64
6	1.17	.71	1.06	.69
7	1.85	.45	1.80	.49
8	1.48	.63	1.66	.52
9	1.15	.73	1.37	.71
10	1.63	.65	1.66	.60
健康度	13.86	2.86	14.62	2.65

この結果，項目3,7,10への反応が全体に高く，好ましい反応がみられることが理解できる（女子の場合はこの他項目8をふくむ）。すなわち，身体の不調で休む，治療中の病気，病気の経験が比較的少ないという傾向がみられた。また比較的低いもの，すなわち好ましくない方向の多いものは項目1,4,6 — 定期検診，根がつづく，身体をよく動かすというものである。

認知された健康の水準と自己援助との得点との間には，男子.259，女子.313の相関係数が算出された。

考察　本報告の被験者は基本的には健康な若い人たちであるので，一般には厳しい病気の影響を受けている者の割合は少数であると思われる。その中で，仕事への持久性，身体を動かさないことが比較的問題になっている。これらをめぐる問題への心理，教育的サービスが授業とは別に，大学コミュニテイの課題となってこよう。

また認知された健康の水準と自己援助の度合いとの間に相関がみられたことによって，先にあげた仮説は成立したといえる。

カウンセリング，心理療法の役割は，人間の自己援助の態度を援助すること，その能力を高めようとするものであるといえる。自己援助の傾向の高い者には，事態を冷静に見るという傾向がある。さまざまな領域における，カウンセリング，心理療法の場および教育，訓練の機会において，来談者の自己援助についての訓練と開発の機会を設けることは意味があると思われる。健康に関連する自己援助の能力を刺激することが地域機関にも求められる（Sonoda, 1993）

これらの条件の設定は狭義の臨床の場のみならず，地域のサポート・システムの機能の課題としても理解できるのである。

1. 定期診断・人間ドックなどを受けたことがありますか
2. あなたは自分の健康をどう思いますか
3. からだの不調で職場，学校や家事を休みますか
4. 仕事，学校や家事に熱意があり根がつづきますか
5. 職場，学校や家事が楽しいですか
6. 仕事やスポーツでからだをよく動かしますか
7. 現在，治療中の病気がありますか
8. 朝食をとりますか
9. 嗜好品（酒・たばこ・コーヒー）のとり方について
10. 過去，入院あるいは1か月以上の安静・治療を要した病気にかかったことがありますか

臨床・相談２－３

家族療法のモデルとしての大江文学私見

田中　熊次郎
（田中心理学研究所）

Ⅰ　目的

ノーベル文学賞受賞者大江健三郎氏は、視野を世界的レベルに拡大して、創作に評論に、そして行動に、精力的に活躍されている。ところで、氏の作品には、“重症の障害児を中心に気遣いながら助け合う家族たちの心理と行動”が、細かく具体的に描写されているものがいくつかある。それらには、家族療法のモデルとして参考にすべき点、または、学ぶべき点があることを紹介したい。

Ⅱ　方法

大江氏の作品のうち、A「個人的体験」、B「壊れものとしての人間」、C「新しい人よ眼ざめよ」、D「静かな生活」、E「恢復する家族」の５つを選び、それらを資料として、家族療法のモデルとして参考にすべき点、または、学ぶべき点をを挙げて、私見を加えることとする。

Ⅲ　参考にすべき点、学ぶべき点、および、私見

A「個人的体験」

（１）バード（作者の呼び名）は、２５歳で結婚し２８歳で長男が誕生したのであるが、大脳が２つある奇形児であるため仰天し困惑し、自暴自棄に陥った。それは、数か月に渡る苦悩の毎日であった。

わが子が異常であることを知って、親が暗たんたる気分に襲われ取り乱すのは人間としての正常な反応であると理解しておく必要がある。

（２）バードは、絶望し苦悩しながらも、ついには子供を引き受けて育てていこうと決意する。

このような親たちの決意を尊敬し感謝する気持ちを持つべきであると考える。

B「壊れものとしての人間」

（１）ぼく（作者）は、嬰児を運ぶ救急車の内部で叫び声をあげている無垢なるものに、暴力をくわえる肉体になりかわるのではないかという底深い恐怖にとらえられていた。

人間は、互いに壊れやすい存在である。

（２）ぼくは、幼児の表情や身ぶりから過った想像をしたが、やがて訂正した。

お互いに他者の心を誤解することは容易であるが、理解することは困難である。誤解のままおし通すことを避けなくてはならない。

C「新しい人よ眼ざめよ」

（１）大江氏は、身辺の刺激に対するイーヨー（子供の呼び名）の反応を注意深く観察し、ささいな表情や動作の変化にも気を配った。そして、イーヨーの関心が鳥の声だと知ると鳥の声を、音楽だと知ると音楽を、あらゆる手段を尽くして適切に準備しようと努力した。このことは、我々の大いに学ぶべき点である。

（２）空論に酔う若者がイーヨーを誘拐した。

現実の実態に即応した策が重要である。

（３）問題とされる子供や障害児には、彼ら独特の思考の仕方や定義の仕方がある。こちらの不用意な言葉で意外な影響を与えたりもする。大江氏は、この点に着目して、人間や文化に関する思索を深めている。

（４）大江氏が、ヨーロッパ旅行をしている間に、イーヨーが暴力児に変わり、留守家族は非常に不安であった。しかし、氏が帰ると解消した。この場合、お互いに誤解があったようである。

問題とされる子供や障害児とは、彼ら独特の思考の仕方や定義の仕方によってつき合う必要がある。

D「静かな生活」

大江氏夫妻がアメリカに行っている間、妹マーちゃんが、兄イーヨーの世話をした。弟のオーちゃんも手伝った。また、逆に、兄の方が妹を防衛して乱暴者を撃退した。３人の仲良さが、暖かく人の心を打つ。

E「恢復する家族」

（１）重症の障害児であった光さんは、音楽に関する記憶力は抜群で、２９歳ころには新しい作曲家として評判になった。

（２）光さんの音楽を指導した田村先生は、ピアノを弾く指の練習にこだわらずに、メロディーをこしらえてゆく方向に導いたのであった。

（３）大江氏は、嬰児の脳の手術をしてくれた森安博士は、二十数年におよぶ家族みんなの心の医師であったと尊敬し感謝しておられる。

（４）大江氏は、一瞬の怒りで取り返しのつかぬことが起こると反省もするのである。

Ⅳ　考察

大江氏の家族は、各自の役割をそれぞれに分担して障害を持つ長男の成長を援護したと言える。

我々の学ぶべき点は、とても挙げ尽くせない。

臨床・相談２－４

精神分裂病患者の生活環境が痴呆症状に及ぼす影響 Ⅱ

ＭＥＤＥ検査による一考察

○石 川 正 人　　福 井 圀 泰
（下館病院）　　（ 江戸川女子短期大学）

はじめに

前回の報告において長期入院精神分裂病患者の知的機能水準は、同年令の健常者に比較して明らかに低水準となった。また、精神分裂病(以後:SCHIZO)特有と見られる知的機能や周辺機能(情緒不安定、身体不調、意欲低下) の特徴がみられた。この結果について、その要因となるものが、 1) 患者の生活環境の影響 2) 疾患の影響 3) 両者の交互作用による影響などが考えられた。しかし、これらの要因を直接操作的に分析することは困難である。そこで、長期入院患者(以後:INP) 、外来患者(以後:OUTP) 健常者(以後 :CONT)の３群の特徴を比較することによって生活環境要因を中心に検討を加えたい。

目　的

１．生活環境が知的機能低下に及ぼす影響について分析する。

２．SCHIZOの特徴について分析する。

方　法

INP 群(入院期間平均28年、平均年齢 63 才、19名)。OUTP群(平均年齢65才、28名) 。CONT 群(平均年齢60才 142名) の３群に基づく検討を行う。

検査期間：外来患者1994年12月～1995年 5月の間。

INP 及び CONT のデータは、昨年度発表のもの。

検査方法：病院臨床心理士によってMEDE(多面的初期痴呆判定検査　千葉ﾃｽﾄｾﾝｰﾀ) を個人ごとに実施。

検査項目：Ａ式（知的機能検査）は、ｴﾋﾟｿｰﾄﾞ記憶、意味記憶、操作記憶、短期記憶、知覚判断連続作業。

ｂ式(質問検査) は、記憶障害、情緒不安定、身体不調、意欲低下。

結果の処理

MEDEの検査結果処理に従って判定得点を導き出した。また、検査項目ごとの 3群の平均及び標準偏差値を算出した。その平均、標準偏差に基づいて差の検定を行った(表1)。

結果と考察

知的機能の特徴(A式検査)

知的機能の低下が最も顕著となったのは、INP で 次に OUTP 、CONTの順となった。INP,OUTP群の平均得点は、痴呆障害判定とはならなかった。INP は、ｴﾋﾟｿｰﾄﾞ 記憶、意味記憶、操作記憶が境界水準となり、短期記憶は健常水準であった。知覚判断連続作業は、障害水準であった。 OUTP は、ｴﾋﾟｿｰﾄﾞ 記憶、短期記憶が健常水準、意味記憶、操作記憶が疑境界水準であった。

記憶障害と周辺機能(b式検査) の概括的な特徴

INP 及びOUTPにおいては、記憶機能(一般物忘れ、自己懐疑、障害健在) 及び周辺機能(情緒不安定、身体不調、意欲低下) の全ての検査項目で健常水準であった。

この結果より、SCHIZOにおいて記憶機能障害が顕在しない事、短期記憶は健常者水準であると思われる。知覚判断連続作業や操作記憶の障害・境界水準は、SCHIZOの疾患特徴を現しているように思われる。

また、物忘れの不安や日常生活に対する不安や心配が健常者より小さいという特徴が見られた。特に、この感情鈍麻の傾向はOUTPに見られた。

1). 生活環境の影響について

SCHIZOが従来言われている通り、知的機能障害が顕在しないという立場に立てば、この知的機能の低下は、SCHIZOの自閉性や社会関係の希薄が影響要因の一つになっていることが考えられる。

2). SCHIZOの特徴

短期記憶は、 CONT に近い能力を持つ。しかし、知的操作や知覚判断連続作業ができない。 OUTP は、記憶能力に対して自己懐疑が強い。そして、情緒不安定、身体不調が訴えられる特徴がある。

（ご指導頂きました下館病院、羽田忠・斉藤由美子先生に感謝いたします）

文献：福井圀泰編著　1995 MEDE ﾏﾆｭｱﾙ 千葉ﾃｽﾄｾﾝﾀｰ

表１　入院・外来・健常者の各知的機能及び周辺機能の平均とその差の検定結果 （ 有意水準P＜*** .001　** .01　* .05 ）

		年齢	出来記憶	意味記憶	操作記憶	短期記憶	知覚判断	一般物忘れ	自己懐疑	障害顕在	情緒不安定	身体不調	意欲低下
入院	M	63	4.32	3.58	1.84	4.32	20.95	2.99	3.12	3.54	3.15	3.32	1.95
	SD	1.27	0.8	0.99	1.48	1.72	20.51	0.66	0.69	0.49	0.5	0.45	0.7
外来	M	65	4.61	4.25	1.96	5.36	34.7	3.24	3.64	3.57	3.55	3.57	1.98
	SD	5.21	0.82	1.12	1.32	1.47	24.2	0.98	0.62	0.78	0.3	0.4	0.67
健常	M	60	4.95	4.88	3.87	5.83	83.4	2.85	3.34	3.84	3.25	3.28	2.61
	SD	0.23	0.22	0.33	1.2	1.45	0.46	0.62	0.56	0.38	0.49	0.62	0.64
入院 健常 N=19 N=142 df=159			-7.45 ***	-11.58 ***	-6.69 ***	-3.59 ***	-41.75 ***	0.81	-1.57	-3.09 **	-0.83	0.27	-4.15 ***
外来 健常 N=28 N=142 df=168			-4.18 ***	-5.61 ***	-7.48 ***	-0.89	-28.55 ***	2.71 ***	2.55 **	-2.78 ***	3.09 **	2.35 **	-4.82 ***
入院 外来 N=19 N=28 df=45			-1.19	-2.09 *	-0.29	-2.2 *	-2.01 *	-0.98	-2.67 *	-0.15	-3.39 **	-1.98	-0.05

訂正　1994年度発表のタイトルを精神分裂病患者の生活環境が痴呆症状に及ぼす影響Ⅰに変更する。

痴呆性老人を含む高齢者生活集団の構造

大瀧法子
(特別養護老人ホーム 厳サンクチュアリ)

目的

集団混合処遇に於ける介護観察をもとに、痴呆性老人を含む高齢者集団のソシオグラムを作成し、図の形態から、その心理学的特徴を分析する。

方法

調査形式：観察法、生活場面の行動から判定

対象者（集団の構成員）：特別養護老人ホーム入所者80名、身体・精神機能障害者、加齢・慢性疾患のため専門的介護を要するもの。男性19名・女性61名(101 平均81.3歳)、居住区域はA・Bの2フロアで、介護形式は集団混合処遇。調査期間・1994、夏期(6月~9月)

調査の基準：『選択』（日常生活場面の対人・社会行動に於いて本人並びに構成員間で物理的・心理的に有益に作用するもの）『排斥』（選択行動と逆に作用するもの）、順位はこれらの頻度と強度、関係の継続性生活への影響の大小による。選択・排斥第2位まで。

観察者は介護専門職員（複数）、規定の評価基準に照らして妥当性のある所見をデータとして採用した。

手続

1 対象者 No,1~80について、身体・視聴覚障害や痴呆の有無・程度・類型と選択排斥各々1位・2位の人物とその理由となる観察所見を記録紙に記入する。

2 図上での個人識別の為に番号と痴呆の程度を符号化した記号を併用する。（○＝痴呆なし、△＝軽度～中度の痴呆、●＝重度痴呆で多活動性、▲＝重度痴呆で少活動性、痴呆の程度はDSMⅢ－Rに準じた）

3 1の記録に基づき、資料マトリクスを作成する。

4 3で得られた関係を、選択1位は ⇨ 2位は ⇨ 排斥1位は ➡ 2位は → の肢で図示する。

結果

ソシオグラム（図1）では選択・排斥肢が錯綜し顕著な分裂や凝集、下位集団の見られない形態となった

○は同符号への選択が多く番号(距離)を隔てた同士の関係もあるが、△●は痴呆の程度や番号の近い者で関係が成立する傾向がある。○の域では選択肢が高密度、逆に△●の域では排斥肢の密度が高い。尚、▲は障害の為、図上では被選択・排斥での登場に留まる。

選択・排斥の理由も、○の間では主に生活上の事柄△●▲の組合せでは、妄想・作話等の痴呆症状が介在した理由が多く、○△対●では主に排斥理由となった

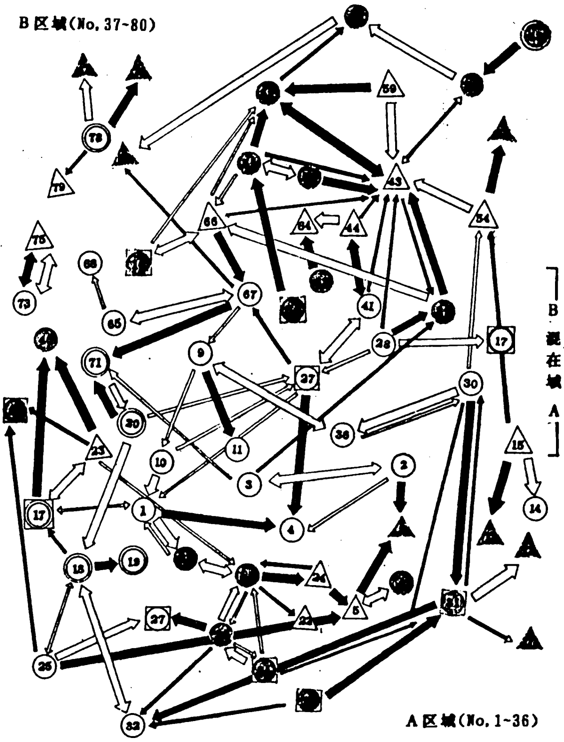


図1 選択・排斥のソシオグラム

考察

肢が分散・錯綜した形態はリーダー不在と下位集団の未形成を示し、牽引・反発或いは支配・従属関係などの勢力構造の不鮮明さが窺える。その誘因は様々だが、介護観察の見地からは、施設老人に特有の施設神経症的行動様式を基調としたWe-feelingを欠く集団雰囲気に注目したい。同様の視点から非痴呆対痴呆の関係について言えば、このような環境要因や痴呆に対する知悉の低質さから派生する個々人の困惑が集団形態に反映し得るという推察も否定できない。

一方、痴呆性老人同士の関係では、知的欠落症状に伴う対人認知の異常と病態失認から状況に適合した態度が歪曲し、妄想の所産である虚構的加工に補われた範囲内での対人反応が観察可能な様相として浮上している。これは従来より痴呆の辺縁症状として記述される『形骸化』の一端を示唆するものだが、加えて対人反応・態度が顕在するにあたっては、互いの妄想内容の親和性や正負の方向性も重要な要因である。

社会的スキル形成における「いじめられ体験」の影響について

－ 大学生不適応者を対象とした検討 －

東 條 光 彦
（ 千 葉 大 学 ）

【問題と目的】

いじめ問題については、昭和50年代後半から多くの事件が発生したことから、社会的に注目を集めるとともに「いじめの問題解決のためのアピール（昭和60年６月）」が発せられ、現在に至るまで種々の取り組みがなされてきている。しかしながら、昨年11月愛知県で起きた中学生のいじめを苦とした自殺事件を見るまでもなく、その取り組みは未だ中途にあるということができる。

さて、現にいじめの被害を被っている児童・生徒が、深刻な情動的混乱に陥ったり、社会的場面への不全感を持つことは想像に難くない。さらに、対人場面における種々の対処方略を習得すべき学校でこのような状態に陥ることは、被害者のその後の社会生活に少なからぬ影響を及ぼすものと推察される。というのもいじめの結果被害者は、社会的スキル訓練の主要な機会を逸してしまう可能性があると考えられるからである。

ところが前述の事例を見るまでもなく、いじめはそれ自体が顕在化しにくい性質である上、いじめの存在事実も加害者のみならず被害者の主観的判断に依存している。このため、いわゆる予後調査の対象としにくく、被害者が事後どのような経過をたどっているかについては不明瞭な点が多い。そこで本研究では、大学生の不適応者を対象として、いじめの被害者の予後と社会的スキルにおける問題点について調査することとした。

【対象および方法】

本研究の調査対象となったのは、平成４年６月～平成７年５月までの間に、本学学生相談室に新規来談し継続相談となった者のうち、職員、外国人留学生、および主たる相談内容が学習等に関する比較的軽微な問題で短期のうちに終了に至った例を除外した 129例（うち男子75例、女子49例）である。

調査の方法としては、対象例の相談記録からいじめによる被害経験およびその内容に関する記述を抽出した。そして被害経験のある症例に関しては、面接相談担当者以外の職員が当該症例における社会的スキル行使上の問題ついて以下の４つのカテゴリー（Gresham, 1988）に分類した。すなわち

①社会的スキル欠如（social skills deficit ：以下タイプⅠ）

②社会的スキル実行欠如（social performance deficit ：タイプⅡ）

③自己コントロール・スキル欠如（self-control skills deficit：タイプⅢ）

④自己コントロール実行欠如（self-control performance deficit ：タイプⅣ）

【結果と考察】

対象となった129 例中いじめによる直接の被害経験を有する症例は26例（20.2%）で、経過期間は平均４年10か月であった。具体的被害内容としては、身体的暴行（４例）、無視・言語的攻撃などの精神的圧迫（21例）、金品の搾取（３例）、重複（４例）、不明（２例）であった。また上記26例のうち、社会的スキル行使上の問題を有すると判定されたのは88.4%にあたる23例であった。今回の対象者は広い意味で何らかの対人関係上の問題を抱えていると見ることもできるが、初回来談時の主訴から残り３例については、社会的スキル行使上の問題なしと判定された。問題のタイプとしては、タイプⅠおよびⅢに分類されたものはなく、タイプⅡ２例、タイプⅣ21例であった。

これらの結果から、いじめによる被害はほぼ５年経過後もいわば後遺症といった形で維持される可能性のあること。その現れ方としては、社会的スキルはある程度習得されているものの、不安・緊張によって適切な対人行動がとれないとされるタイプⅣの不適応状態となりやすいことが示唆された。このことは、被害に遭った時期に、対人場面における不安あるいは緊張反応を消去する手続きが十分に取られていなかったことを示しており、いじめが現象的に終息した後も、引き続き情動的側面に対する治療的介入が必要であることを示唆していると考えられた。

今後は今回の視点に加え、被害時期や、転帰の違いによる症状の相違などについて、さらに症例を蓄積し検討を行っていく必要があると思われる。

産業・職業2－1

コンピュータ教育に対する高校・短大・大学生の態度研究

○三輪　全　　　小野公一

（埼玉県立狭山経済高等学校）　（亜細亜大学経営学部）

1．本研究の目的

近年のＯＡ化、コンピュータ化の進展は著しく、これに伴い、高等学校や大学でもこれらの教育に取り組む機会が多くなってきている。

本調査はこのような現状をふまえ、コンピュータ教育を受けている高校生から大学生までを対象に質問調査を試み、コンピュータ教育の問題点と改善点を探ることを目的としている。

2．本研究の方法

本研究は質問紙法を用いて実施した。質問紙の構成は、取得している資格、どのような授業を受けているか、コンピュータの授業への理解度・満足度、教え方、操作感、マシントラブルの対処などである。

調査期間は１９９４年６月から７月である。

3．研究対象

本研究の対象は、高等学校１年生から大学３年生までの合計 825名である。内訳は男性 263、女性 562、高校生 470、短大１年生80、大学１年生 147、大学３年生 128である。

なお、大学３年生は、１年次においてコンピュータ教育を受けていたが、現在はほとんど受けておらず統制群的な性格が強い。

4．結果と考察

本研究は、通常の授業における生徒・学生の反応などから、コンピュータ教育において、理解度、興味・関心、満足・不満足感が密接に関係するものと仮定し項目をカテゴライズした。

(1) 理解度(問5)の平均値

対象者全体で 1.5以上の結果を得ていることから、生徒・学生がコンピュータの授業は、基本的なレベルまでは理解しているという傾向を示している。

(2) 興味・適性(問10)の平均値

高校２年生は、他の学年と比較して授業時間の多いことや、大学３年生はコンピュータに関する授業がないことから、この両対象は、興味・適性が低い傾向を示している。

(3)コンピュータの操作・制御(問11)の平均値

対象者全体についてみると、この項目群は低い結果を示している。新しい機能を覚えたり、トラブルに対処することは、全体的に困難を感じていることを示している。

(4)親しみや関心の高さ(問11)の平均値

商業系の高校や短大は、専攻が１年次よりはっきりしており、目的意識を持った生徒・学生が入学してくることが多く、また、はじめてコンピュータに触れることの面白さから、高校１年生と短大１年生には、親しみや関心が高い傾向を示している。

(5)マシントラブル等への対処(問12)の平均値

何らかのトラブルに遭遇したとき、自分一人で解決できない場合は、援助を受けている傾向を示している。教員や同級生の値が大きいのに対して、マニュアルや教科書はあまり利用されていないことを示している。

(6)満足度(問9)の平均値

授業に対する満足度は、高校２年生と大学３年生が低く、高校１年生や大学１年生で高い。これは、(7)でみられるように適性や興味との関連が深いと考えられる。

(7)数量化理論Ⅲ類による分析

問10から問12のうち、カテゴライズされた項目と、理解度・満足度を変数とし、数量化理論Ⅲ類で分析をおこなうと、高校生では、理解度に関し、コンピュータそのものに興味・適性や親しみを感じることが関係するのに対し、短大生や大学生では、機器をどれくらい操作できるのかということと、興味・適性を感じることが関係する傾向がみられる。

また、短大生を除き、理解度・満足度ともに、コンピュータ教育の中では重要視される、教員や友人の援助、教科書やマニュアルの利用に関する項目群は、ほとんど関係がない傾向がみられる。

したがって、コンピュータ教育を効果的なものとするために、教員としては、より興味・関心を喚起する授業展開や、生徒ひとりひとり内容の理解度の差を認識し、アフターケアを行うことが課題であり、あわせて、生徒や学生が自学自習を積極的におこなえるような、読みやすく、わかりやすい教科書やマニュアルの整備される環境が望まれる。

産業・職業２－２

セクシャルハラスメント行動への知覚に及ぼす性役割態度と自尊心の影響

角　山　　剛
（東京国際大学人間社会学部）

【目　的】女子大学生を被験者として、職場でのセクシャルハラスメント行動への知覚に及ぼす個人変数（性役割態度と自尊心）および状況変数（当該場面での行為者の地位、行為者と被害者の親しさの程度、身体接触の部位）の影響を検討した。設定された仮説はつぎの２つである（仮説設定の詳細は省略）。

仮説１：性役割態度の観点からみて進歩的な女性は、保守的な女性に比べて、当該の身体接触行為をより不愉快なものと知覚し、その行為に対して、よりはっきりとした対処行動をとるであろう。

仮説２：自尊心の低い女性は、自尊心の高い女性に比べて、当該の身体接触行為をより性的に脅威を与えるものと知覚するであろう。

【方　法】被験者　東京圏にある女子大１年生２５８名。年齢は１８～２１才で平均１８.６才。

場面条件　被験者は職場での男性と女性のやりとりを描いた場面を読み、そこでの出来事に対する知覚と、被害者に期待される対処反応を評定した。場面は、Gutek, Morasch, & Cohen（1983）を参考に、以下の３つの変数（各２条件）から計８場面が構成された。

行為者の地位：行為者が被害者の同僚／上司

行為者と被害者の親しさ：友好的／距離を置いた関係

接触された身体部位：背中を軽く叩く／尻を軽く叩く

各被験者はこの８場面のうちの１つに割り振られた。

基準測度　被験者は、与えられた場面記述を読んだ後、行為者の行動の不適切さ、性的脅威の程度、被害者に期待される対処反応について、用意された質問紙への評定が求められた。さらに、性役割態度、自尊心についての自己評定が求められた。

【結　果】状況変数では身体接触のみが基準測度と有意な相関を示した。すなわち、被験者は、身体接触が性的なものであった（尻に触れる）場合には、その行為をより不適切で性的な脅威をもったものであるとみなし、被害者がはっきりとした対処行動をとることを期待した。性役割態度は当該行為の不適切さの程度、およびその行為に対する対処反応と有意な相関を示した。すなわち、性役割態度の観点から進歩的な女性は、保守的な女性に比べて、当該行為をより不適切であるとみなし、はっきりとした対処反応を期待する傾向が見られた（表１）。これらの結果は仮説１を支持するものである。

８つの場面のそれぞれについての基準測度の平均値パターンからは、身体接触の性度のみが基準測度の評定に影響を与えていることがうかがわれた。当該行為についての知覚および対処反応については、行為者の地位や行為者―被害者間の関係の影響は見られなかった。この点は米国での研究結果とは異なっている。

階層的重回帰分析の結果（表２）は、当該行為の不適切さの評定の予測では、３つの状況変数と自尊心の寄与を除去した後でも性役割態度の有意な寄与が認められた。被害者に期待される対処反応の予測でも、同じく性役割態度の寄与は有意であった。すなわち、進歩的な性役割態度を有する女性の方が、当該行為をより不適切なものとみなし、被害者がはっきりとした対処反応をとることを期待しており、仮説１を支持している。性的脅威の予測における自尊心の寄与を調べるために同様の分析を行った結果は、自尊心の低い女性の方が、高い女性に比べて、当該の行為をより性的脅威とみなすことが明らかにされた。この結果は仮説２を支持するものである。

Table 1　Means, Standard Deviations, and Intercorrelations among Study Variables

Variables	M	SD	1	2	3	4	5	6	7
Contextual Variables									
1. Actor status [a]	NA	NA	-						
2. Actor-target relationship [b]	NA	NA	.03	-					
3. Body touching [c]	NA	NA	-.02	.03	-				
Personality Variables									
4. Sex-role attitudes	3.57	.37	.02	.05	-.01	-			
5. Social self-esteem	2.82	.57	.05	-.04	-.00	.07	-		
Evaluations of Vignettes									
6. Inappropriateness	2.48	1.04	.11	.06	.60	.20	-.04	-	
7. Sexual intimidation	1.83	.83	.08	.04	.47	.07	-.11	.66	-
8. Coping responses [d]	1.63	.92	-.02	.05	.52	.18	.00	.66	.57

N=258. NA=not applicable. *r*=>.12 is *p*<.05 and *r*=>.16 is *p*<.01.
a 1=co-worker, 2=supervisor　*b* 1= friendly, 2=distant
c 1=back, 2= buttocks　*d* The higher the scores, the more assertive the coping responses expected.

Table 2　Incremental Contribution of Sex-Role Attitudes and Social Self-Esteem after Three Contextual Variables and their Two-Way and Three-Way Interactions were Entered Successively into Multiple Regressions Predicting Inappropriateness of Social-Sexual Behavior, Coping Response Expected, and Degree of Sexual Intimidation.

Equations　Added predictor	Final *B*	R^2	ΔR^2	F-value for ΔR^2	*p*
Criterion: Inappropriateness					
1. Actor status (A)		.01	-	-	-
2. Actor-target relationship (B)		.01	.00	0.41	.85
3. Body touching (C)		.42	.41	181.88	.00
4. A x B interaction		.43	.01	4.61	.05
5. A x C interaction		.43	.00	0.00	.90
6. B x C interaction		.43	.00	0.37	.85
7. A x B x C interaction		.43	.00	0.07	.90
8. Social self-esteem		.43	.00	0.00	.90
9. Sex-role attitudes	.13	.48	.05	23.10	.00
Criterion: Coping Response Expected					
1. Actor status (A)		.00	-	-	-
2. Actor-target relationship (B)		.00	.00	0.08	.90
3. Body touching (C)		.27	.27	93.67	.00
4. A x B interaction		.27	.00	0.72	.80
5. A x C interaction		.27	.00	0.06	.90
6. B x C interaction		.28	.01	1.94	.30
7. A x B x C interaction		.28	.00	0.00	.90
8. Social self-esteem		.28	.00	0.50	.80
9. Sex-role attitudes	.02	.32	.04	12.76	.01
Criterion: Degree of Sexual Intimidation					
1. Actor status (A)		.01	-	-	-
2. Actor-target relationship (B)		.01	.00	0.54	.80
3. Body touching (C)		.24	.23	75.21	.00
4. A x B interaction		.24	.00	1.37	.70
5. A x C interaction		.24	.00	0.08	.90
6. B x C interaction		.24	.00	1.03	.70
7. A x B x C interaction		.25	.01	1.03	.70
8. Sex-role attitudes		.25	.00	1.66	.70
9. Social self-esteem	-.05	.26	.01	4.31	.05

N=258. *df*=1,248 for Equation (9). For actor status, 1=co-worker, 2=supervisor; for actor-target relationship, 1=friendly, 2=distant; for body touching, 1=back, 2=buttocks.

産業・職業２－３

立体視を用いた視覚探索

奥行き方向への注意と視覚負担

尾入　正哲
（京都大学文学部）

はじめに

近年，コンピュータグラフィックスの進歩にともない，ヴァーチャルリアリティということばが注目されている．仮想空間の提示において，中心的な役割を果たすのが，観察者に立体視を行わせる表示の技術である．典型的なものとして，メガネ型の装置により，両眼に視差をもった画像を提示する方式がある．しかし立体メガネを装着して立体視を行っている際の視覚系の負担については，あまり知られていない．本研究ではコンピュータ画面上の立体視作業における視覚負担の程度と奥行き方向への注意の範囲について検討する．

方　法

今回用いられた立体視装置の概要を図１に示す．これは各ディスプレイからの光を偏光させ，ハーフミラーを通し，それぞれ対応する偏光フィルターを左右眼に貼ったメガネを用いて観察する仕組みのものである．

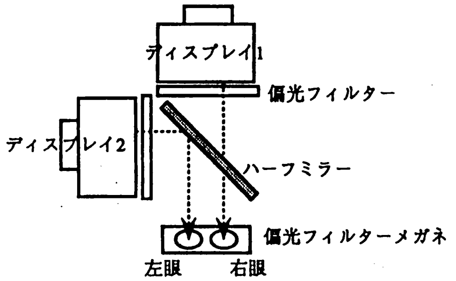


図1　立体視提示装置の概略図

立体視ディスプレイを用いた実作業では，単一の対象ではなく，視野内に様々に異なった奥行きを持つ，多くの物体が表示されることが予想される．そこで複数の小図形を提示し，その中から指定されたターゲットを見つける形式の，いわゆる視覚探索の課題を用いることとした．提示画面の一例を図２に示す．

被験者は図２の画面の中に，円の中の線分が傾いているターゲットが含まれているか（あるいは全部が垂直方向の線分か）を，キー押しによって反応した．実験条件として両眼視差量（視差０条件；視差なし，視差１；±2.4′，視差２；±4.8′，視差３；±9.6′の４段階）およびセットサイズ（１画面中の円の数，4・16・36の３条件）を設けた．両眼視差量の違いにより，図形の進出後退の範囲が変えられた．

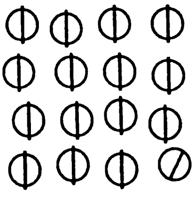


図2　刺激画面の例
セットサイズ16の場合，
右下にターゲット（斜線）がある

視覚負担の指標として，作業成績（視覚探索課題の反応時間・正答率）・フリッカー閾値・近点距離・主観的疲労感などのデータを収集した．

被験者は120試行（約15分間）の作業を１ブロックとして連続して行い，各視差条件について６ブロックを実施した．

結果と考察

セットサイズの違いによる平均反応時間の変化を図３に示す（被験者６名の平均）．視差０条件を別にすれば，視差が増すと反応時間が延長する傾向がみられる．また視差３条件では他の視差条件に比してセットサイズの影響が強く，注意の範囲を超えていることがうかがわれる．他の指標を総合してみると，立体視ディスプレイの長時間使用には十分留意する必要があり，特に両眼融合域限界近くの視差を与える場合には視覚負担が大きいことが示唆された．

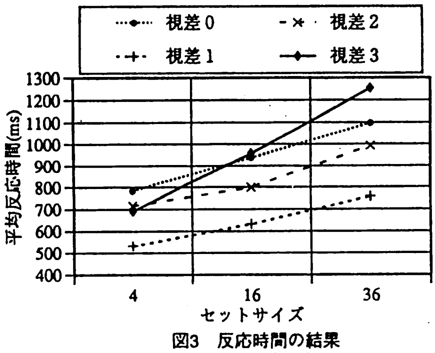


図3　反応時間の結果

本研究の一部は第20回日産学術研究助成金の補助を受けて実施された．実験プログラムの作成には京都大学大学院文学研究科，朝倉暢彦氏の協力をいただいた．

モノの印象語に対する「色彩」の影響

大　沢　光
（富士通株式会社・感性技術推進室）

１．はじめに

筆者は、モノ（生活用品や工業製品）の外観デザインやオフィス空間などに関する「印象」を、言葉の申告を通じて計測し、その“構造”などを調べるための研究を行っている。本報告では、モノの外観デザインに対して申告される「印象語」と、モノの外観デザインの要素の１つである「色彩」との関係について、調査と分析を試みた。

２．モノの外観デザインに対する「印象語」の調査

モノとして、「ビジネスバッグ（カバン）」を選び、それぞれ２００枚の“カラー写真”を用意し、「自由申告法」によって、それぞれの写真に対して、８名の回答者（延べ１６００名）に、感じた印象を、言葉（印象語）で申告してもらった。また、同じモノの“モノクロ写真”を用意し、まったく同じ手続きにしたがって、それぞれの写真に対して感じた印象語を申告してもらった。

印象語は、“カラー写真”については、１枚当たりで平均5.２語、延べで８６８２語が申告され、“モノクロ写真”については、１枚当たりで平均4.０語、延べで６７８７語が申告され、「表記の異なり」→「表現の異なり」→「意味の異なり」の構造にしたがって、同じ意味の言葉を同じコードに解釈した。「ビジネスバッグ」を例にとると、印象語の「意味の異なり」は、全体で１４５語あった（に集約した）。

ちなみに、それぞれの印象語の頻度はそれぞれ異なっており、上位２０語で回答全体の６０％を、３０語で７２％を、４０語で８０％を占めていた。

３．カラー写真とモノクロ写真の「印象語」の違い

“カラー写真”で申告され“モノクロ写真”では申告されなかった、カラー写真に“特有な”印象語は、「色合いがよい」「重要な」「カラフルな」「色合いが悪い」「汚い」「秋冬用」「色がきれい」など２６語（１８％）であった。これらの印象語は、カラー写真に対する印象語の全体の申告数の３％を占めていた。

また、“カラー写真”でも“モノクロ写真”でも申告されたが“モノクロ写真”では申告が大幅に減った、カラー写真に“有意な”印象語は、「センスのよい」「使いやすい」「男性向き」「古い」「地味な」「センスの悪い」「高級な」「シンプルな」など２７語（１９％）であった。これらの印象語は、カラー写真に対する印象語の全体の申告数の４８％を占めていた。

反対に、“カラー写真”でも“モノクロ写真”でも変わりなく申告された、カラーに“無関係な”印象語は、「壊れにくい」「重い」「沢山入る」「軽い」「大きい」「カジュアルな」「若者向き」など９２語（６４％）であった。これらの印象語は、カラー写真に対する印象語の全体の申告数の４８％を占めていた。“モノクロ写真”では申告され“カラー写真”では申告されなかった、モノクロ写真に“特有”な印象語も８語あったが、これらの申告率はごく小さかった。

４．カラー写真の「色彩的特徴」と「印象語」の関係

刺激に利用したモノの“カラー写真”をスキャナーで読み込み、背景を除いたモノの部分の色彩のＲＧＢデータ（→ＸＹＺデータ）から、「マンセル表色値（ＨＶＣ）」「L*u*v*表色値」「L*a*b*表色値」を計算し、その「色彩的特徴値」として、平均値、メディアン（中央値）、モード（最頻値）、最大値、最小値、（最大値と最小値の）幅、標準偏差を算出し、ある印象語が申告されたモノの「色彩的特徴値」と、それが申告されなかったモノの色彩的特徴値の間に、統計的に“有意な”差があるかどうかを検討した。

カラー写真に“特有な”印象語の「色合いがよい」について、この印象語が申告されたモノ（―）と、申告されなかったモノ（…）の色彩的特徴値の間では、〔V〕のメディアン（図１）と最小値、〔L*〕のメディアン（図２）、（最大値と最小の）幅、〔u*〕の最大値、〔v*〕の最小値で、統計的に“有意な”差があった。

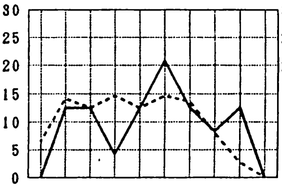


図１〔V〕のメディアン

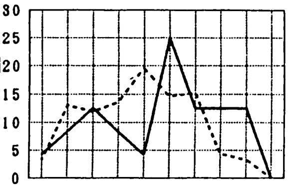


図２〔L*〕のメディアン

同様に、「カラフルな」については、この印象語が申告されたモノと、申告されなかったモノの色彩的特徴値の間では、〔V〕のメディアンと最大値と最小値、〔C〕の平均値、〔L*〕のメディアン、〔u*〕の標準偏差、〔v*〕のメディアンと最大値と最小値と標準偏差で、統計的に“有意な”差があった。また、「秋冬用」については、これらの色彩的特徴値は、いずれも統計的に“有意な”差がなかった。

さらに、このほかの、カラー写真に“特有な”あるいは“有意な”印象語についても検討し、「色がきれい」「センスのよい」「センスの悪い」の３つの印象語では、ほとんどの色彩的特徴値で、“有意な”差が見つかった。また、「色合いが悪い」では、〔C〕の標準偏差で、「地味な」では、〔V〕の平均値と最大値、〔C〕の最大値、〔b*〕の最大値で、「古い」では、〔V〕の平均値、〔C〕のメディアン、最小値、〔u*〕の標準偏差で、「シンプルな」では、〔V〕の平均値、〔L*〕の平均値で、それぞれ“有意な”差が見つかった。

なお、〔H〕の“分布”の特徴値の差について、同様の検討をした。今後、複数の色彩的特徴値の組み合わせとの対応関係についても検討をする計画である。

【文献】　（*は単行本）

*[1]太田登：色彩工学、東京電機大学出版局、１９９３（平成５）年１２月

この研究は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL)を経て、委託を受けて実施した研究によるものである。関係の方々に謝意を表する。

「風景写真」の印象語の分析

大 沢 光　○王 晋 民
（富士通株式会社・感性技術推進室）

1．は じ め に

筆者らは、モノ（生活用品や工業製品）の外観デザインやオフィス空間などに関する「印象」を、言葉の申告を通じて計測し、その"構造"などを調べるための研究を行っている。本報告では、「風景写真」に対して申告される「印象語」を調査し、その"表現形式"を分析して、表現形式と意味・概念の関係について検討を試み、今後の"表現形式"の研究について、いつくかの仮説を見いだした。

2．「風景写真」の印象語の調査

「風景写真」として、全国の観光地の絵はがき８００枚を収集し、考えたり感じたことを"自由な"形式の言葉で回答してもらう「自由申告法」によって、これらの絵はがきに対して感じた印象を、言葉（印象語）で申告してもらった。回答者は、１枚につき成人男女を含む８名、延べ６４００名である。結果は、１枚１名当たり平均で7.90語、延べでは５万０５３３語の回答があった。

3．「印象語」の"表現形式"の違いの分析と検討

（１）回答された"生"の印象語を、それぞれに含まれる「形態素」に分割し[1]、印象語の"表現形式"を分析した。

表現形式のカテゴリーは、①「形容詞」を含んだ表現、②「オノマトペ」を含んだ表現、③「～風」「～調」「～的」「～っぽい」「～くさい」、④「～のよう」「～みたい」「～らしい」、⑤「～そうな」「～かも」、⑥否定辞（～ない、～ず、～ぬ）、⑦"単語"形式、⑧"理由・条件付け"形式（～だから～、～ので、～ならば～）、⑨その他（時相名詞、外来語）とした。ちなみに、これらのカテゴリーは、互いに排他的ではない。

（２）「形容詞」を含んだ印象語は、延べで１万４６０５語（２９％）あり、含まないものは、３万５９２８語（７１％）あった。これは、一般に、印象が、形容詞だけでは表しきれないことを示唆している。また、形容詞のうち、"イ型"形容詞は１万０９２３語（２２％）、"ナ型"形容詞（形容動詞）は３６８２語（８％）であり、"イ型"が多いことが分かる。ちなみに、高頻度の"イ型"形容詞は、「美しい」「古い」「すがすがしい」「明るい」「寒い」「懐かしい」「暗い」「まぶしい」「広い」など、"ナ型"形容詞は、「静かな」「きれいな」「エキゾチックな」「豪華な」「さわやかな」「のどかな」「穏やかな」「雄大な」「人工的な」「立派な」などであった。さらに、印象語が形容詞だけのものは、５３９５語（１１％）、形容詞だけではないものは、９２１０語（１８％）あり、形容詞だけのものよりも、そうではないものの方が多いことが分かる。微妙な印象を表すには、形容詞だけではなく、なにかの付加的な情報を加える必要があるのであろう。

（３）日本語の大きな特徴の１つであり、モノの状態や特性あるいは人の気持ちなどを直接的に表す「オノマトペ（擬態語）」を含んだ表現は、延べで１４９３語（３％）あった。うち、印象語がオノマトペだけのものは、１１４６語（３％）、そうではないものは、３４７語（１％）であった。高頻度のものとして、「ゆったり」「さっぱり」「のびのび」「ゆっくり」「うきうき」「ひんやり」「ほかほか」「しっかり」「しみじみ」「のんびり」「わくわく」「せかせか」「ぬくぬく」「しんみり」「どんどん」などがあり、これらは、モノの状態や特性などではなく、人の気持ちなどを表しているものが多いようである。

（４）形容詞で表しきれない印象の表現としての「～風」「～調」「～的」「～っぽい」「～くさい」は、それぞれ９９語（0.2％）、６８語（0.1％）、８０語（0.2％）、４９５語（１％）、１８６語（0.4％）、合計で９２８語（２％）で、意外に少なかった。また、推定的な印象を表す「～のよう」「～みたい」「～らしい」は、それぞれ６１８語（１％）、２９５語（0.6％）、１１１語（0.2％）、合計で１０２４語（２％）と、これも意外に少なかった。「～そうな」「～かも」も、４６６語（１％）、７８語（0.2％）であった。

（５）「～ない」「～ず」「～ぬ」などの「否定辞」を含んだものは、１７１６語（３％）あり、うち、形容詞を否定する表現は、４６７語（１％）、動詞の否定は、４９７語（１％）、名詞の否定は、７５０語（１％）あった。形容詞の否定は、意外なほど少なかった。また、「～ないでもない」といった「二重否定」の表現形式のものはなかった。

（６）印象語の中に、１つの単語しか含まない「"単語"形式」の印象語は、延べで2万０７１７語（４１％）あり、ほかの2万９８１６語（５９％）は、"単語"形式ではなかった。これは、自由形式の申告では、"単語"形式だけでは処理しきれないことを示唆している。

（７）印象語の構造として、「～なので～」「～だから～」の"理由付け"形式、あるいは、「～ならば～」「～れば～」の"条件付け"形式ののは、それぞれ１２５語（0.2％）、１３６語（0.2％）であった。前者では、説明や推定の理由に対して、状況や印象が申告され、後者では、説明的な条件に対して、希望や願望が申告されるパターンが多いようである。

（８）時相名詞を含むものは、延べで２９０４語（６％）で多く、また、外来語（カタカナ語）を含むのは、延べで４４７４語（９％）と非常に多かった。これらも、"表現形式"の研究のテーマとして重要であることが分かった。

【文献】

[1] 松本裕治・黒橋禎夫・宇津呂武仁・妙木裕・長尾真：日本語形態素解析システムＪＵＭＡＮ使用説明書 version ２.０、１９９４（平成６）年7月

この研究は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL) を経て、委託を受けて実施した研究によるものである。関係の方々に謝意を表する。

「絵画」の印象語の分析

大沢　光　○水口　有
（富士通株式会社・感性技術推進室）

1．はじめに

筆者らは、モノ（生活用品や工業製品）の外観デザインやオフィス空間などに関する「印象」を、言葉の申告を通じて計測し、その"構造"などを調べるための研究を行っている。本報告では、「絵画」に対して申告される「印象語」を調査し、コンテンツや画家の違いによる印象語の特性を分析し、また、印象の"構造"の分析のため、印象語の回答パターンの類似性による「印象語の分類」を試みた。

2．「絵画」の「印象語」の調査

市販の「絵画」の絵はがき４００枚について、「自由申告法」にしたがって、これらに対して感じた印象を、言葉（印象語）で申告してもらった。回答者は、１枚について８名ずつ、延べ３２００名である。印象語は、１枚につき平均で7.２４語、延べで２万３１７５語申告され、これを「表記の異なり」→「表現の異なり」→「意味の異なり」にしたがって、同じ意味の言葉を同じコードに解釈した。印象語の「意味の異なり」は、全体で２８０語あった（に集約した）。

高い頻度で申告された印象語として、「暗い」「静かな」「明るい」「きれいな」「奇妙な」「寒そうな」「あたたかい」「古い」「穏やかな」「寂しい」などがあり、上位の１０語で回答全体の３４％、２０語で５１％、３０語で６２％、４０語で６９％、５０語で７５％を占めていた。

3．コンテンツなどによる「印象語」の違い

（１）「絵画」のコンテンツとして、「静物画（２２枚）」「人物画（２５枚）」「"自然"の風景画（２６枚）」「"街"の風景画（２７枚）」「抽象画（３３枚）」などを選択し、それぞれに対して申告された印象語の特性を分析した。

「静物画」と「人物画」に申告された印象語のうち、前者に特徴的な（つまり、申告率に統計的な有意差があるもの）ものは、「カラフルな」「明るい」など、おもに色や光に関する印象を表すものであり、後者のそれは、「暗い」「うつろな」「色っぽい」「好きでない」「ふくよかな」「のどかな」「いやらしい」「気持ち悪い」など、人に関するものであった。また、両者とも、高頻度の印象語として、「明るい」「きれいな」「あたたかい」「静かな」「暗い」「穏やかな」などがあった。

「"自然"風景画」と「"街"の風景画」では、前者に特徴的な印象語は、「自然な」「静かな」「広い」などであり、後者では、「都会的な」「古い」「豊かでない」「華やかな」「明るい」「賑やかな」「外国風」など、"街"そのものに関したものであった。両者ともに、高頻度の印象語として、「静かな」「寒そうな」「きれいな」「暗い」「明るい」「古い」などがあった。また、「抽象画」については、「奇妙な」「分からない」「不安な」「印象的な」などが特徴的な印象語であった。

（２）「絵画」の画家の"画風"として、「印象派（２８枚）」「後期印象派（２６枚）」「フォービズム（２０枚）」について、同様の分析を行った。

モネ、マネ、ルノワールなどの「印象派」の作品で特徴的な印象語は、「優雅な」「かわいい」「高級な」「きれいな」「楽しい」「まぶしい」「静かな」「優しい」「賑やかな」などであり、これに対して、ゴッホ、ゴーギャンなどの「後期印象派」では、「強い」「気持ち悪い」「豊かでない」「不安な」「暑い」「外国風」「暗い」あるいは「自然な」「のどかな」「穏やかな」「広い」「きれいな」「懐かしい」「暗い」「静かな」などが特徴的であった。これらの特徴的な印象語は、それぞれの派の画家たちの選んだ素材や素材の描き方の特徴ともいえよう。

「後期印象派」と、マチスやセザンヌなどの「フォービズム」の画家の作品を比較すると、前者に特徴的な印象語は、「暗い」「静かな」「暑い」「田舎のような」「古い」などであり、後者では、「近代的な」「派手な」「タッチが強い」「抽象的な」「楽しい」などであった。

4．申告パターンによる「印象語」の分類の試み

（１）印象語の申告パターンの類似度を計算し、互いに類似した印象語は"同じ"グループに、そうではない印象語は"別"のグループに分類する問題を定式化し、「遺伝的アルゴリズム」を利用して、印象語の分類を試みた[1]。ちなみに、このアルゴリズムは、「クラスター分析」などと同じ意図で開発しているもので、言葉で表された「印象の構造」を調べることを目的としている。また、このアルゴリズムは、開発中のものであり、このアルゴリズムで求めた解が、"真"の最適解であるかどうかは、分からない。

（２）６つのグループへの分類の取り合えずの結果は、第一グループが６５語、第二グループが５５語、以下、４５語、４０語、３９語、３６語に分類され、それぞれのグループの"寄与率"は、それぞれ４４％、２８％、１３％、１０％、４％、１％であった。

第１グループの印象語は、「静かな」「穏やかな」「古い」「賑やかな」「騒々しい」「楽しい」「爽やかな」「明るい」など、第２グループは、「寒い」「豊かでない」「寂しい」「暗い」「悲しい」「不安な」「冷たい」「重々しい」など、第３グループは、「都会的な」「お洒落な」「色がよい」「平面的な」「華やかな」「色が明るい」、第４グループは、「色っぽい」「面白くない」「好きな」「面白い」「色が強い」「不自然な」などであった。第５グループは、「古い」「神秘的な」「油絵のような」など、第６グループは、「早朝のような」「豪華な」「色が鮮やかな」などであった。

【文献】

[1] 大沢光：自由申告語ベースの「因子分析」の開発の試み、情報処理学会第５１回（平成７年後期）全国大会論文集、１９９５（平成７）年９月

この研究は、通商産業省・工業技術院の産業科学技術研究プロジェクト「人間感覚計測応用技術」の一環として、新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と社団法人人間生活工学研究センター(HQL)を経て、委託を受けて実施した研究によるものである。関係の方々に謝意を表する。

パーソナリティ５因子モデルの意味づけ

森田義宏
（梅花短期大学）

性格は５つの基本的特性によって構成されるというパーソナリティ５因子モデルは、内外の諸研究によってますます確かなものとなってきた。我々も質問紙法（FFPI)を用いた一連の研究から外向性、協調性、勤勉性、情緒不安定性、遊戯性の５因子を抽出したが（関心1993;日心1994）、信頼性、因子妥当性の立証にとどまらず５因子の機能的、発達的な意味づけを試みた。外向性因子は対人関係の積極性として捉えられがちであるが、支配・刺激希求・活動性等を包含した環境に積極的にかかわろうとする因子で、その本質を「活力」とする。協調性因子は友好や協力・共感・信頼など対人関係での受容-拒否にかかわる因子で、その本質を“愛着-分離”のような人との「関係」とする。勤勉性因子は秩序や持続、自己統制として行動に表出される事物や環境に対する合理性にかかわる因子で、その本質を環境に対する「統制」とする。情緒不安定性因子は心身のストレスに対して過敏にかつ情動的に反応し、緊張・抑鬱・気分変動・自己無価値観として捉えられる因子で、その本質は「実存への危機」とする。遊戯性因子は空想や内的経験、情操への感受性として捉えられ、現実からの離脱、平たく言えば“遊び心”を重視する因子で、その本質を現実からの「超越」とする。

［目的］　上述の仮説をＦＦＰＩ以外のテストバッテリーや行動指標との関連づけを通して検証する。

［方法］　支配・統制・愛着・依存など個人の人や環境とのかかわり方を評価するスケールとして“エゴグラム”を用いた。被検者はＢ短期大学女子２１０名（1995年7月実施）であった。ＦＦＰＩは１５０項目５件法による質問紙性格検査で、２５下位尺度（facet)、５因子（domain)を測定する。ＦＦＰＩ５因子とエゴグラムの相関および２５下位尺度とエゴグラムの因子分析（主因子法・ヴァリマクス回転）をおこなった。

［結果と考察］　表１に示したように、外向性はエゴグラムのＣＦ（FREE CHILD）とr=0.39、ＮＰ（NURTURING PARENT）と0.32の相関を、協調性はＮＰとr=0.47、勤勉性はＣＰ（CRITICAL PARENT）とr=0.41、Ａ（ADULT）とr=0.32、情緒不安定性はＡＣ(ADAPTED CHILD）とr=0.59、遊戯性はＮＰとr=0.33の相関であった。因子分析結果でみると（表２）、第１因子の勤勉性にＣＰが0.54、Ａが0.35負荷し、第２因子の情緒不安定性にＡＣが0.69、第３因子の協調性にＮＰが0.44、第４因子の外向性にＦＣが0.48それぞれ負荷した。

表１　５因子とエゴグラムの相関

	ＣＰ	ＮＰ	Ａ	ＦＣ	ＡＣ
外向性	.19	.32	-.04	.39	-.17
協調性	-.01	.47	.07	.08	-.07
勤勉性	.41	.23	.32	-.09	-.01
情緒不安定性	.13	-.06	-.10	-.07	.59
遊戯性	.07	.33	.11	.21	-.05

［結論及び問題点］エゴグラムをマニュアルどおりに解釈すれば、外向性は率直さや積極性（ＣＦ）すなわち「活力」を、協調性は暖かさや他者への思い遣り（ＮＰ）すなわち「関係」を、勤勉性は自他に秩序や正義の遵守を求め（ＣＰ）、理性で自己を統制する（Ａ）まさに「統制」そのものを、情緒不安定性は自信欠如から生じる存在の不安を他者からの賞賛で低減する（ＣＡ）「実存の危機」を示唆するものである。しかし、今回使用したエゴグラムについて、他サンプル（Ｂ女子大１回生）とともに因子分析したところ４因子抽出でき、ＡＣ・ＮＰ・ＣＰ各尺度については因子妥当性が得られたが、Ａ・ＦＣについては得られなかった。

表２　５因子facetとエゴグラムの因子分析

	尺度;facet	Ｆ１	Ｆ２	Ｆ３	Ｆ４	Ｆ５
勤勉性	計画性	.76	-.00	.12	-.98	-.02
	持続性	.71	-.01	.04	.01	.01
	責任感	.69	-.02	.06	.13	.16
	秩序性	.60	-.07	.02	.07	-.04
	ＣＰ	.54	.17	-.12	.12	.28
	自己統制	.42	-.31	.23	-.32	.06
	Ａ	.35	-.13	.01	-.15	.18
情緒不安定性	心配性	.22	.76	-.04	-.01	.02
	抑鬱気分	-.04	.74	-.29	-.20	.15
	自己無価値感	-.25	.71	-.03	-.09	.03
	ＡＣ	.04	.69	.04	-.06	-.07
	緊張	.03	.60	-.09	-.32	.01
	気分の変動	-.15	.46	-.31	.23	.15
協調性	共感性	.28	.04	.67	.20	.21
	友好性	.26	-.16	.63	-.07	.02
	謙虚一傲慢	.09	-.07	.63	-.05	.20
	協力一競争	-.15	-.05	.62	.02	-.07
	信頼性	-.20	-.24	.60	.05	-.00
	ＮＰ	.22	.05	.44	.03	.28
外向性	興奮追求	.01	-.02	.24	.64	.18
	社交性	.04	-.19	.33	.63	-.23
	注意獲得	.24	-.15	-.00	.60	.03
	活動性	.12	-.01	-.04	.59	.07
	ＦＣ	-.12	-.02	.05	.48	.12
	好奇心	-.05	-.16	.01	.47	.43
	支配性	.24	-.22	-.34	.45	.25
遊戯性	情操	.11	.02	.17	.12	.57
	空想性	.01	.25	.05	-.08	.56
	内的経験感受	.22	.04	.23	.21	.52
	遊び	-.06	-.08	-.18	.26	.41
	固有値	3.20	3.17	2.94	2.89	1.77

人格－2

人間関係の変容（つづき）

可能性としての人格（１１）

長谷川孫一郎
（大正大学人間学部）

研究の目的：現代の青年の交友関係の変容について、まず各年代毎に同性・異性関係の変化を個別にとらえ次いで友情・恋愛・結婚についての態度をみた。今回は、ＹとＴの大学生に実施した調査をまとめた。

調査の方法：ａとｂは回顧式の自由記述文である。

ａ．「私の交友関係、同性と異性」（年代別）
　１９８９～１９９２年，４回，Ｙ．男124，女199.

ｂ．「同上、好きになった人、嫌いになった人」
　１９９２年，２回、Ｙ．男50，女64，

ｃ．「友情・恋愛・結婚について」（自由記述文）
　１９９２年、２回、Ｙ．男28，女63，
　１９９３～１９９５年、４回、Ｔ．男150，女149.

なおａとｂは就学前、小学校時代、中学時代、高校時代、大学入学後に分けて、その変化を分析した。

調査の結果：主な結果は次の通りである。

ａ．年代別にみた交友関係の変化

就学前に多い近所の幼なじみや保育園・幼稚園の友だちは小学校で半減し、少数が高校以後も継続する。小学校時代の同級生は同地域の中学校まで継続すると高校以後も少数は交友を続けるが、新たな中学の同級生となると高校以後に継続するものは少ない。これにたいして高校での同級生は大学入学後に継続するものも多い。クラブ・サークルや部活動の仲間は小学時代から出現するが、中学以後の仲間とはならない。少数ながら出現する親友は中学以後も継続するが、いずれにせよ小学校と中学校の交友には区切りがみられる。

中学では同級生や部活動の仲間などが増え、親友や女子には仲良しグループと異性交友も出現するが、高校以後のそれとは別な場合が多い。高校では、女子の交友関係は多彩になり、大学入学後もつづく場合が多いのに対し男子は同級生と部活動の仲間がつづく程度である。大学入学後は男女とも交友関係は多彩になり授業やサークルなどの仲間のほかアルバイト先、下宿先、予備校からなどの新しい友人が加わる。異性との交友や親友は増加するものは必ずしも多くはない。

各年代を通じて少数ながらいじめられたり孤立したりするものがあるし、無記入者が年々増えている。

ｂ．好きになった人、嫌いになった人

好きになった人では、就学前での近所の遊び仲間や保育園・幼稚園の仲間と先生、小学校では同級生と教師が多く、低学年まではかわいい・楽しい・気の合う異性の友人があり、高学年からは性格・能力など多くの友人が加わる。中学以後は同級生や部活動の仲間が中心になる。嫌いになった人では、就学前からのいじめっ子、小学中学からの気の合わない・悪口を言う・わがままな・いばっているなどの同級生や教師などで大学入学後は減少する。それは女子にめだっている。

無記入のものは、好きになった人について就学前と大学入学後で男女とも半数以上を占め、小学校から高校時代には減少するが、嫌いになった人については、各年代とも半数以上を占めている。

ｃ．友情・恋愛・結婚について

男女とも友情・恋愛・結婚の順に肯定的な者が減少し否定的な者が増加しとくに男子は著しい。１９９２年から１９９５年までの推移をみると、男女とも次第に肯定的なものが減少し、とくに結婚の願望の減少は男女とも著しい。ただし無記入者の率も次第に減る。

考察：以上の結果をまとめて考察を加える。

１）前回報告もあわせて交友関係の推移をみると、前の年代からの交友がつづくことは年々減少し、とくに小学時代と中学時代、高校時代の間の断裂が著しい。保育園や幼稚園から小学校、中学校とそのまま同地域で同じ成員が進学する場合でも、親しい仲間は学級が変わる度に変わってしまうことが多く、ある時期にできた親友でも続かない。これは中学、高校と進むほど著しい。それを受験戦争の激化と人間関係の希薄化ということは容易であろう。しかし少数とはいえ長く続く親友のある者がいることも確かである。

２）好きになった人や嫌いになった人は、就学前から小学校、中学校、高校と増加し多彩になっていくことは、それだけ人間関係に過敏となっていくためかと考えられる。しかし好きな人が遠い過去の就学前の時代や始まったばかりの大学時代で回答の少ないことは当然であるとしても、嫌いになった人は各年代とも半数以上の無回答がある。大学のように出入り自由な人間関係でなら嫌いな人との交友は避けられるが、なお小学校から高校まで嫌いな人のほか好きになる人もいなかった者がかなりいることも確かである。

３）親しい同性の親友から異性との恋愛、結婚という展望が年々現代青年に失われてきたことを確かめた。

自己愛人格尺度（改訂）について

山　本　　都　久
（　富山大学教育学部　）

<u>目的</u>　本邦でも自己愛人格に関した尺度はこれまでにいくつか開発されてきた。佐方(1986)、大石(1987)、大平(1988)、山本(1994)らのものはRaskin,R,N. et al.(1979)と同様に、自己愛人格をDSM-Ⅲの記述特性に基づて概念化し、因子分析による因子構造で概念化された内容を確認することで尺度化したものであった。そのため尺度の性格としては人格障害としての自己愛の程度を評価するといったニュアスのものであった。一方、Garralda,J.(1989)は自己愛には創造性、独創性などの才能や実力を伸ばす活力源となる面があるといっている。山本(1993)はこの考えに基づいて尺度化を試みたが、結果は人格的に好ましくない自己愛特徴を評価する尺度のようでしかなかった。そこで今回の研究は、才能や実力を伸ばす活力源となる自己愛の面を測定する尺度(NPI) を開発する目的で行なったものである。

<u>方法</u>　<u>(1)被験者(Ss)は</u>大学生 101名。Ssに NPI,ＹＧ,達成動機測定尺度(堀野、1991),ユニークネス尺度(山岡・岡見、1986)を実施。<u>(2) NPIの構成</u>　過去の文献から48の NPI尺度の項目を選択し、４件法で自己評定させた。Ssの尺度総点で群分けしてｔ検定による項目分析(G-P分析)を行い、弁別性のない５項目を削除。次に尺度総点と項目得点との相関を求め、有意でない低相関の８項目を削除し、35項目で走査的な因子分析を実施。その結果、因子負荷量が小さくてどの因子とも関連が認められなかった１項目を除き、再度主因子法（共通性はSMC)➡バリマックス回転（固有値1.8以上の5因子）を実施した。そして概念化された自己愛に適った解釈しやすい因子（全能感・有能感、自我理想の肥大化、対人関係での利己性、自己耽溺、自己顕示）を得た。<u>(3) NPIの内的整合性</u>　尺度全体と各因子尺度についてα係数を求めた。全体では .824､因子尺度ごとでは .867、.836､.804､.804､.722 の値を得たので尺度の信頼はあるといえる。また NPIの２ケ月間を隔てた再テストでの信頼係数は .705 (df=32 T=5.62 p<.01)であった。<u>(4) NPIと他の心理尺度との関連</u>　ＹＧの情緒不安定性の因子、社会的不適応性の因子と NPIの自我理想の肥大化因子 が有意に関連していた(.422､.404)。NPIの 全能感 や 自己耽溺 はＹＧの 情緒不安定性の因子 と逆相関的(-.389､-.352)に関連していた。達成動機測定尺度では、尺度 全体 と下位尺度の 自己充実的達成動機 が NPIの全体と有意に関連(.371､.356)し、また NPIの自我理想の肥大化､自己耽溺 や 自己顕示 とも関連(----､.444､.481､.407､.655､.405)していた。ユニークネス尺度では、尺度 全体 と NPIの全体 並びに NPIの各因子 で有意な関連性が認められた。とくにユニークネス尺度の自尊感情に関する下位尺度が NPIの全能感､NPIの自己耽溺､NPIの自己顕示 と有意に関連(.545､.544､.611)し、また、ユニークネス尺度の自立・独立意識の強さに関する下位尺度が NPIの自我理想の肥大化 と有意に関連(.534)していた。このユニークネス尺度は社会的に受容される人のユニークさを測定する目的で開発された尺度であった。従って今回構成された尺度は達成動機やユニークネスの尺度との関連を見る限り、多少初期の目的を叶えたとえよう。

自己愛人格尺度項目の因子分析結果

因子名		自己愛人格尺度項目	因子負荷量	総点との相関	
全能感・有能感		私は人から尊敬されて当然の人間です	.739	.497	**
		私がリーダーになれば、人々はもっと幸せになれる	.738	.527	**
		私は美しい心をもった人間です	.664	.479	**
		私には非凡な才能があります	.627	.356	**
		私はたいていのことでは人に勝つ自信があります	.591	.443	**
		私の成功をねたんで邪魔する人が多くいます	.584	.429	**
		私は特別な人間だから他の人と一緒にされては迷惑です	.480	.495	**
		自分の容姿（顔立ち、スタイル）が気に入っています	.472	.467	**
	★	私は多くの人に好かれています	.448	.528	**
	★	私は人に一目置かす人間です	.415	.653	**
	★	私には気に入ったところ（ステキな点、特徴）が多くあります	.413	.575	**
		私には人をじょうずに使う才能があります	.409	.374	**
自我理想の肥大化		私は人が見ているとすぐよい子ぶってしまいます	-.734	.472	**
		私は人前では努めて道徳的にふるまうようにしています	-.699	.603	**
		私は自分の心の狡さを隠して人とうまくつきあっています	-.997	.291	**
	★	私は見栄っぱりな人間です	-.634	.487	**
		私は人には「よい自分」を見せています	-.625	.255	*
		私は自分のよい子像（理想像）を裏切ることができません	-.472	.560	**
		私は人の評判を気にするたちです	-.456	.288	**
		私はどの人からもよく思われることを密かに願っています	-.427	.494	**
	★	私のプライドを傷つける人には無関心な態度を装います	-.423	.639	**
対人関係での利己性		私は私に逆らう人を無視することにしています	-.664	.446	**
		私にはライバルの成功はねたましいものです	-.634	.544	**
	★	私のプライドを傷つける人には無関心な態度を装います	-.633	.639	**
		私のいうことに賛同しない人はすきになれません	-.579	.454	**
		友だちといるところよりも、私にふさわしい人といるところを世間の人に見られたい	-.542	.472	**
		私は将来偉大な権力と富をもって人々を支配したい	-.507	.643	**
	★	私は鏡を見るのがすきです	-.451	.495	**
		私をあなどる人に私は激しく怒ります	-.450	.313	**
		私はちょっとの失敗で人に頭を下げるのはいやです	-.423	.381	**
自己耽溺		私を友だちにしたがる人は多くいます	.605	.392	**
	★	私は多くの人に好かれています	.591	.528	**
	★	私には気に入ったところ（ステキな点、特徴）が多くあります	.555	.575	**
		私は自分のステキな未来を想像するのがすきです	.533	.459	**
	★	私は人に一目置かす人間です	.488	.653	**
	★	私は鏡を見るのがすきです	.434	.495	**
		私はおしゃれをしてたのしむのがすきです	.428	.624	**
自己顕示		私は目立ちたがり屋です	-.838	.486	**
		私は人に注目されているのがすきです	-.792	.368	**
	★	私は見栄っぱりな人間です	-.393	.487	**
	★	私は人に一目置かす人間です	-.346	.653	**

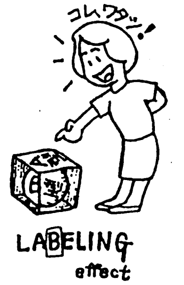
「血液型性格学」は信頼できるか：第１２報　〔Ｉ〕

高校生の血液型性格判断におけるＦＢＩ効果（その１）

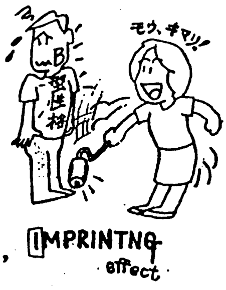
○浮谷秀一　（富士短期大学）
大村政男　（日本大学文理学部）

ＦＢＩ効果とはなにか　ＦＢＩ効果とは，大村が本学会第５６回大会（１９８９年１０月）のおりの講演：「科学と偽科学との対立　血液型性格学の虚構性」で提唱した概念である。それについて解説しておこう。

ＦＢＩのＦはＦＲＥＥＳＩＺＥのＦである。だれにでも少しは当てはまる（気質や性格の）特徴を並べておく。



ＦＢＩのＢはＬＡＢＥＬＩＮＧのＢである。フリーサイズの特徴をいくつか束ね，それにＯ型とか，Ａ型とかいうラベルを付けると，たちまちそれらがＯ型やＡ型の特徴になってしまう。



ＦＢＩのＩはＩＭＰＲＩＮＴＩＮＧのＩである。これがあなたの血液型に相応する特徴だ――といって提示すると，それがいっぺんに刷り込まれてしまう。

このＦＢＩ効果は，大村・浮谷のいう認知的適合感（１９９４）にも通じる概念である。血液型性格判断，あるいは血液型性格学などと呼ばれるものは，このＦＢＩ効果の原理を利用して大衆のこころのなかに浸透していったのである。

方法と被験者　能見正比古がその著書（例えば『血液型エッセンス』など）に掲載した各血液型の特徴中からそれぞれ９項目を抽出し，Ｏ型の特徴にＡ型，Ａ型の特徴にＯ型，Ｂ型の特徴にＡＢ型，ＡＢ型の特徴にＢ型――というふうに記号を付け替えて印刷し被験者に配布する。被験者は全体的に見て自分に合っている特徴（正確にいえば特徴群）の記号を○で囲み，さらに，３６項目（９項目×４）のうちから自分に合った特徴を抽出する。その数は制限しない。被験者はすべてに回答し終えたら，自分が血液型性格判断をどのくらい信じているかを５段階（高校生の場合は＋２～０～－２の５段階），あるいは２段階（大学生の場合は信じているか，いないかの２段階）で表現する。高校生と大学生における段階が異なるのは，高校生には血液型性格判断だけについて質問し，大学生には人相・手相・干支・占星・血液型などについて質問したためである。すなわち，大学生はアイテムが多かったので２段階という簡便法をとったのである。

被験者数は次のTable 1 に示したとおりである。

Table 1　高校生の被験者（その１）（単位：人）

	男子生徒						女子生徒				
	O	A	B	AB	合計		O	A	B	AB	合計
＋２	1	4	9	2	16	＋２	5	7	1	0	13
＋１	12	21	7	5	45	＋１	17	22	21	13	73
０	27	17	21	4	69	０	11	16	14	4	45
－１	4	18	6	2	30	－１	7	12	7	2	28
－２	19	13	8	2	42	－２	3	5	5	0	13
合計	63	73	51	15	202	合計	43	62	48	19	172

これらの被験者のうちから０段階の人数を除外し，＋２・＋１を合体させた〔＋群〕と，－１・－２を合体させた〔－群〕とを当面の被験者とした。今回は大学生のデータに合わせてこのようなグルーピングを採用したのである。Table 2 に示されているのがそれである。

Table 2　高校生の被験者（その２）（単位：人）

	男子生徒		女子生徒
＋	６１	＋	８６
－	７２	－	４１
合計	１３３	合計	１２７

大学生の被験者はTable 3 に示したとおりである。女子学生における血液型分布においてＯ型が２３．２人多く，あまり良いデータではないが，今回はこのままでこれらのデータに基づいてＦＢＩ効果を検討した。（挿絵はＮＨＫ『きょうの健康』’９１年１１月号）

Table 3　大学生の被験者（単位：人）

	男子生徒						女子生徒				
	O	A	B	AB	合計		O	A	B	AB	合計
＋	31	41	19	7	98	＋	34	38	24	12	108
－	21	39	24	11	95	－	54	22	19	8	103
合計	52	80	43	18	193	合計	88	60	43	20	211
＋	９８					＋	１０８				
－	９５					－	１０３				
合計	１９３					合計	２１１				

人格－５

「血液型性格学」は信頼できるか：第１２報　〔Ⅱ〕

大学生の血液型性格判断におけるＦＢＩ効果（その２）

○大村　政男　　　浮谷　秀一
（日本大学文理学部）　（富士短期大学）

前ページに続いて高校生と大学生のデータについて報告する。

データの整理法　われわれが実施したアンケートの仕掛けについてはすでに〔方法と被験者〕のところで記述したとおりであるが，それを図示すればＦigure　1　に示したようになる。

Ｆigure１血液型性格判断についての仕掛け

	Ｏ型 実はＡ	Ａ型 実はＯ	Ｂ型 実はAB	AB型 実はＢ	合計
Ｏ型	FBI	N	W	W	Ｏ型の人数
Ａ型	N	FBI	W	W	Ａ型の人数
Ｂ型	W	W	FBI	N	Ｂ型の人数
AB型	W	W	N	FBI	AB型の人数

Ｆigure１中の記号を説明しておこう。

ＦＢＩ：われわれの仕掛け（Ｏ型というラベルが付いているが実はＡ型）に乗っている人たち。

Ｎ：能見正比古・俊賢たちが決めつけた特徴に合致している人たち。

Ｗ：ＦＢＩにもＮにも属していない人たち。

われわれは，この３つのインデックスについての数値を公開することによって，能見の血液型性格判断がいかにおかしなものであるかを立証しようとするのである。

３６項目の内容　ＡＢＯ式の血液型，それぞれ９項目の特徴で３６項目があげられている。ここではわれわれの仕掛けの一部を掲げておくことにする。

Ｏ型の特徴（実はＡ型の特徴である）

(1) 何かのために生きる生きがいを求める。

(2) 周囲に細かく気を遣い，相手や周囲との間に波風が起こるのを特に嫌う。

(3) 感情や欲求は抑制するほう。ソッとした思いやりや察しあいを大切にする。

(4) ルール，慣習，秩序を重視，極端さをさけ，羽目を外さない。反面やや型にはまる。

(5) 筋を通し，ものごとのケジメ，白黒をハッキリつける。シンは一番ガンコで短気。

(6) 継続的な努力や肉体的な苦痛によく耐える。

(7) ひとつ，ひとつ段階を踏む慎重さ，ちみつさでものごとへのとっつきは遅いが，大器晩成型。

(8) 完全主義。未来へは悲観主義。苦労性。

(9) 心の底には思い切って殻を破りたい，現状脱皮の夢がうずまく。

（これらについては適切な注釈も印刷されている。それでないと現代の若者にはわからないからである。）

結果　ＦＢＩ効果についての統計資料をTable 4に掲げておこう。

Table 4　ＦＢＩ効果等についての統計資料

Ss.	＋－	人数	ＦＢＩ効果	能見に一致	そ　の　他
高	＋	61	35(57.4)	12(19.7)	14(22.9)
校男	－	72	38(52.8)	13(18.1)	21(29.1)
生子	合計	133	73(54.9)	25(18.8)	35(26.3)
高	＋	86	52(60.5)	22(25.6)	12(13.9)
校女	－	41	18(43.9)	9(22.0)	14(34.1)
生子	合計	127	70(55.1)	31(24.4)	26(20.5)
高	＋	147	87(59.2)	34(23.1)	26(17.7)
校男	－	113	56(49.6)	22(19.4)	35(31.0)
生女	合計	260	143(55.0)	56(21.5)	61(23.5)
大	＋	98	61(62.3)	21(21.4)	16(16.3)
学男	－	95	47(49.5)	19(20.0)	29(30.5)
生子	合計	193	108(56.0)	40(20.7)	45(23.3)
大	＋	108	72(66.7)	28(25.9)	8(7.4)
学女	－	103	70(68.0)	15(14.5)	18(17.5)
生子	合計	211	142(67.3)	43(20.4)	26(12.3)
大	＋	206	133(64.6)	49(23.8)	24(11.6)
学男	－	198	117(59.1)	34(17.2)	47(23.7)
生女	合計	404	250(61.9)	83(20.5)	71(17.6)

高校生男女においては，＋群にせよ，－群にせよ，ＦＢＩ効果に有意差がない。すなわち，血液型性格判断を信じている，信じていないにかかわらず，すべてＦＢＩ効果に影響されているのである。大学生男女においてもまったく同じ傾向が見られた。しかし，大学生（女）の＋群２８人と－群１５人の間には有意差が見られた（ＣＲ＝２.０７　Ｐ＜.０５）。－群のうちにはわれわれの仕掛けを見破っていたものが若干名いたのである。（挿絵は『新大阪』'92.11.6から）

人格－6

精神テンポに関する基礎的研究（第７５報告）

三島　二郎・　　寺沢　充夫　　〇望月　稔
（早稲田大学）　（玉川大学）　（日本女子体育大学附属二階堂高校）

目的：学生・生徒の学校生活において、登校・下校の行動の解明を意図した一連の研究の一つである。今回は、わたくしどもが、研究を重ねてきた精神テンポの立場から、歩行速度に関する観察測定を中心として、両者の関連を検討し、始業時に対して、歩行への被影響性を調べようとした。

方法：　本研究においてはＡ～Ｄに沿って、観察測定、実験、内観調査が行われた。すなわち、

Ａ．登下校の歩行の速さを路上において測定。

学生・生徒が始業前３０分～１０分の間において、車のはげしくない、観察しやすい場所を選び、一人の登校中のものの歩行の速さを１０ｍの距離を単位として測定した。

なるべく、測定されているという意識を持たせないように、１０ｍ等の目印は目立たないようにして路上に、淡い線を引く程度にした。

下校においては、その直後を３０分における歩行速度を登校時と同じようにして実施した。

実施期間は６月～８月までで、中学生７１名、高校生３０名、大学生、通信大学生２４４名を対象とした。

さらに、室内実験として、大学生のみを対象にして、次のＢ～Ｅの４つが行われた。

Ｂ．１０ｍの直線距離を丁度よい速さで歩かせ、その速さを測定する。これを１０回行い、その平均値を測定し、精神テンポとした。

Ｃ．つぎに、打叩においては被験者を椅子に座らせ、閉眼させ、きき手の人差し指で、机上を叩かせ、１０秒単位でその数を測定し、５回実施する。さらに、２分の間隔をおき５回実施し、その最大頻数を測定し、精神テンポとした。

Ｄ．クレペリンの加算作業は、丁度よい速さで１分間行わせ、さらに２分間の間隔をおいて、５回実施し、その平均値を測定し、生活テンポとした。

Ｅ．内観調査については登校・下校について

例えば

登校の歩行は

速い	やや速い	丁度よい速さ	やや遅い	遅い

というように２項目（登校、下校の歩く速さ）について行われた。

結果：Ａの登下校についての測定結果は第１表のごとくである。

第１表　登下校の歩行の速さ

		登校			下校			
		男	女	平均 男女	男	女	平均 男女	
中学生	M	6.23	7.68	6.88	7.62	8.01	7.88	**
	SD	1.07	0.68	1.17	0.59	0.95	0.72	
高校生	M	6.88	7.18	7.06	9.06	9.73	9.49	**
	SD	1.31	1.35	1.34	1.59	1.94	1.85	
大学生 通大生	M	6.52	6.54	6.49	7.12	7.32	7.26	*
	SD	0.59	0.43	0.54	0.72	0.74	0.75	

Ｆｉｇ．１　内観報告（大学生）

	速い やや速い	丁度よい	遅い やや遅い
1．登校歩行	５３％ （９）	２９％ （５）	１８％ （３）
2．下校歩行	１２％ （２）	７０％ （１２）	１８％ （３）

第２表　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの相関係数

	登校	下校	M.T歩行	M.T打叩	L.T加算
登校		.4363	.0515	-.4803	.8924
下校			.4976*	.0062	-.1697
M.T歩行				.1005	.2267
M.T打叩					-.2844
L.T加算					

M.T=Mental Tempo，　L.T=Living Tempo

第１表において、中・高・大学生の平均値の差の検定は、中・高校生で $\rho < 0.01$, 大学生では $\rho < 0.05$ で有意差が認められた。また第２表では歩行の精神テンポと下校の歩行が0.4976の相関があり、しかもｔ検定の結果有意性があった。かかる点から、登校時よりも下校時においての歩行が精神テンポに関連しているものと思われる。これは下校時に各自の精神テンポに復帰したと考えられる。

考察　Ｆｉｇ．１の内観報告において、下校時の歩行が「丁度良い速さ」７０％で、登校歩行より多く、ｔ検定で $\rho < 0.05$ で有意差が認められた。登校では、速く歩こうとする始業時への目的意識の強い行動に影響されていると思料された。

サンプル数の諸問題（６）

―サイコロの目の出現率の期待値と実測値―

○川島　大司　　　　　　　　　久米　稔
（東海女子大学　文学部）　　（早稲田大学　文学部）

［目的］

極めて素朴な発想、「心理学の研究で統計的処理の結果が妥当と見なされ得るには、どれだけのサンプル数が必要であろうか」という疑念を抱いて、「サンプル数の諸問題」という表題のもとにいくつかの研究を発表してきた。人格検査を用いた研究ではおよそ４６０名の資料をもとに、３０名、５０名、１００名のサンプルを４６０名の中から無作為に抽出する形で、それぞれ２０グループを作成して、母平均の推定値との近似度の検討を行ったが、かろうじて妥当と思われるサンプル数（サンプルサイズ）は１００名のグループのもので、他の２種類のグループの結果は否定的なものであることが判明した。同様の方法を用いて行った因子分析の結果では、一致度は極めて低く、更に否定的なものであった。

そこで今回は、普通のサイコロとコンピュータ・サイコロの両方を用いて、実際に出現するサイコロの各目の出現率が期待値である１／６になるものであるかどうかを検討した。

［方法］

被験者：女子大学生６名とノート型コンピュータ１台

手続き：６人の被験者には、前回発表した手続き[1)]と同じやり方でサイコロを３００回振ってもらった。コンピュータの場合は、乱数を用いて６名相当分を行った。

［結果と考察］

人間による場合とコンピュータの場合の実測値のうち、３０、６０、９０、・・・３００回目までの各目の累積出現頻度に最小２乗法を用いて直線をあてはめ、それぞれの目の直線の方程式を算出した。（例えば y=0.16x+3.27）図１～４は、人間とコンピュータのサイコロの目の方程式のうち、６つの目の間の散布度が小さいもの（図１～２）と大きいもの（図３～４）を図示したものである。

人間、コンピュータいずれの場合も、散布度小の場合には、６つの目の直線ともかろうじて期待値の直線（y=0.17x）の回りに集中する傾向が認められたが、散布度大の場合には、いくつかの目は益々逸脱していくか、逸脱したままの傾向を示した。「コンピュータの場合には、期待値に近いものになるはずである」というわゆる自明の理的な理論的根拠をも揺るがすような結果を示した。

ここで図示したもの以外の５名の被験者の結果と５名分に相当するコンピュータの結果は、ここにあげた散布度小の結果と散布度大の結果の間に収まってしまう結果であった。

［文献］

1）川島大司他：サンプル数の諸問題（５）、サイコロを使っての期待値と実測値のずれについて，日本応用心理学会第６１回大会発表論文集．１９９４

図1 人間によるサイコロの目の出現の期待値と実測値（散布度小）

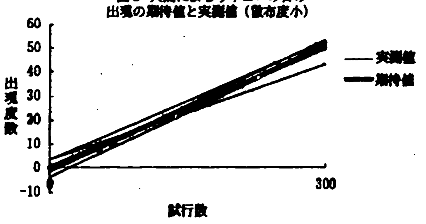


図2 コンピュータ・サイコロの目の出現の期待値と実測値（散布度小）

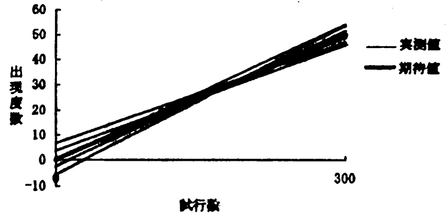


図3 人間によるサイコロの目の出現の期待値と実測値（散布度大）

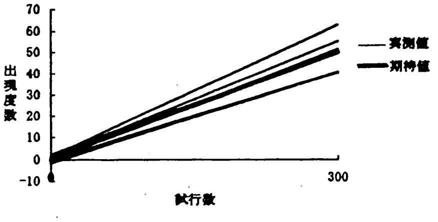
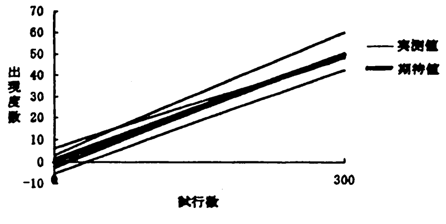


図4 コンピュータ・サイコロの目の出現の期待値と実測値（散布度大）



検査・測定３－２

日本語表記中の漢字の誤用の出現傾向

関　陽子
(科学警察研究所)

【目的】　日本語は、音素の数に比して漢字の種類が多いため、異なる漢字どうしで同じ発音をもつものが多数ある。このため、日本語表記では、誤った字種の漢字を用いて単語が表記されている例が見られる。このような誤りは、同音異義語や同訓の漢字が存在する場合に特に多く見られる。このことから、正しい字種を選択して表記する作業は、単語表記として存在する漢字表記のリストから、漢字の読みと意味の両方を満足させる表記を検索することであると考えられる。

ところで、言語操作に関しては性差が見られるといわれている。実際、知能検査などの結果からは、幼児期や学童期には、女子の成績が男子よりも高いことが知られている。一方、成人では、言語操作における能力差は、性差によるよりもむしろ個人差に依存すると考えられる。

そこで、成人における言語処理能力に影響すると考えられる要因として年齢、書字頻度をとりあげ、言語処理能力との関係を考察することを目的として、漢字の書き取り調査を行った。本調査では、言語処理能力の中の「正しい字種を選択する」という観点から分析した。また、この調査では、性別の比較も行った。

【方法】　調査には３５種類の単語（同音異義語を持つ熟語１４種類、同音異義語を持たない熟語１１種類、訓読み漢字１０種類）を用いた。被験者は、２０歳代から４０歳代までの男女４２０名であった。被験者は、性別で２グループに、年代別に、２０代、３０代、４０代の３グループに、書字頻度で、よく書く（高書字頻度）、ふつう、あまり書かない（低書字頻度）の３グループに分けた。書字頻度は、被験者自身に判断させた。

問題は１つの問題文に単語が１種類出現するように作成し、同じ字種の漢字を当てる問題文を３種類作成した。そこで、被験者は、全部で１０５題の書取を行うことを要求されたことになる。問題の作成に当たっては、同じ漢字を当てる単文が続けて出現しないようにしたが、単文の順序はランダムにした。問題文の作成には、国語審議会の「「異字同訓」の漢字の用法」、国立国語研究所の漢字の使用頻度に関する調査を参考にした。被験者には、辞書を見ないで書くこと、試験ではないのでわからないものは答えなくてよいこと、通常ひらがなで書いている単語はひらがなで答えることを指示した。得られた解答は、正答、誤答、その他（無解答、ひらがな表記されたもの）に分類した。解答の分類にあたっては、漢字の字形の誤りは無視して、筆者が書こうとしたと判断される漢字で判定した。また、熟語の解答の分類では、熟語がすべて正しい字種で書かれているものを正答とし、１文字でも正答と異なった漢字（たとえば、並行を平行と答えているもの）は、誤答に分類した。一部のみ漢字で書かれているもの（一部が漢字で残りがひらがな表記か、無解答のもの）はその他に分類した。

【結果及び考察】

平均正答数は全体で 72.1、男性 73.0、女性 71.2 で、正答数の性別の差は有意ではなかった。

年代と平均正答数の関係を見ると、２０代で 74.4、３０代で 71.9、４０代で 70.1 で、年代による平均正答数の差は有意であった。これを男女別に見ると、男性では年代ごとの平均正答数（それぞれ 72.9、73.6、72.4）の差は有意ではなかったが、女性（それぞれ 75.8、70.2、67.7）では有意であった。また同年代の男女で比較すると、４０代でのみ差が有意であった。

平均正答数を書字頻度ごとに比較すると、高書字頻度群で 75.6、普通は 73.6、低書字頻度群で 68.5 で、低書字頻度群の平均正答数が他のグループに比較して有意に少なかった。またグループ内の正答数の分散は、普通の群で他の群よりやや小さかった。正答数を書字頻度ごとに見ると、高正答数群では書字頻度の高低はあまり関係がなかったが、低正答数群では低書字頻度の者が多く、高書字頻度の者はきわめて少なかった。すなわち、書字頻度の高い者は正答数が普通以上を示し、書字頻度の低い者は、高正答数から低正答数まで分散が大きいが、低正答数を示すのは低書字頻度の者であることがわかった。このことは、成人においては、書字頻度が高い者は字種選択の誤りが少ないことを示している。また、４０代女性では、低書字頻度の者が多かったことから、４０代女性の平均正答数が少なかったのは、被験者に低書字頻度の者が多かったことと関係があると考えられる。

以上より、成人では、「正しい字種を選択する」観点からの言語操作能力には、性差が見られないこと、字種選択では書字頻度が関係していて、書字頻度が高い者では字種選択の誤りが少ないこと、字種選択の誤りが多い場合は書字頻度の少ない筆者であると考えてよいことがわかった。正しい字種選択では書字頻度の他に被験者の語彙も関係があると考えられる。語彙と正答数との関係の分析も行いたい。

書字方向による筆者識別Ｉ

○菅原　博嗣　　川村　司　　三井・利幸　　若原　克文
（愛知県警察本部）　（名古屋大学）　（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）

《はじめに》

筆跡から特定の筆者を識別する方法や、残された筆跡がある特定の筆者によって記載されたものかどうかを判断するには、従来、豊富な経験に基づく方法で行われており、正確な判定ができるまでにはかなりの経験を必要としているのが現状である。

そこで、我々は筆者識別をパーソナルコンピュータを用いて判定する方法の研究・報告を行ってきた。

今回、同一人の記載した筆跡が、記載する方向（書字方向）に影響を受けるかどうか検討した。

《実験・分析方法》

試料とする筆跡は「神家健悟」の文字列中の「神」及び「健」の２文字とし、成人９名が横書き及び縦書きでそれぞれ１０回ずつ記載したもののうち、６回分を抽出し、各筆跡を２次元の座標点に置き換え、多変量解析法を用いて検討した。

筆跡の数値化の方法については、我々が従来から行っている拡大した文字の座標点を読み取り、大きさを標準化するために基線を定め、その基線の長さで各座標点を除した数値を用いて分析を行った。

分析方法は①クラスター分析、②主成分分析からのクラスター分析、③偏差値からのクラスター分析の３方法により行い、同一人内で書字方向の違いによる影響の有無について検討した。

《結果》

(1)「神」字について

クラスター分析を行った結果、９名全員が同一人内において、書字方向の違いに関係なく、混合した。

また、主成分分析及び偏差値によるクラスター分析を行った結果では、９名中１名が分離し、他の８名は書字方向の違いによる分離は認められない。

分離した筆跡は、両分析においても、同一筆者によるものであった。

(2)「健」字について

本検討のいずれの分析においても、９名中８名が書字方向の違いによる分離は認められない。

しかし、分離した筆跡はいずれの分析でも同一の筆者によるものであった。

《考察》

今回検討した「神」及び「健」字では、個人内で書字方向の違い（縦書き、横書き）が筆跡に与える影響は少ないと考えられる。

しかし、今回検討した結果では、字種によって書字方向の違いが影響することが考えられ、他の文字による検討が必要である。

また、今回の検討においては、変動の幅の大きい「神」及び「健」字の最終画の終筆を測定点としたが、相関係数からは分析結果に影響は認められない。

実際の筆跡鑑定では、問題となる筆跡の数が少なく、個々の資料内から傾向を抽出することが困難な場合が多いことから、基本的に書字方向を同一した資料で行う必要がある。

《結果》

資料番号	クラスター分析	主成分分析	偏差値からのクラスター
1	×	×	×
2	×	×	×
3	×	×	×
4	×	×	×
5	×	×	×
6	×	×	×
7	×	○	○
8	×	×	×
9	×	×	×

「神」字の筆者識別結果

資料番号	クラスター分析	主成分分析	偏差値からのクラスター
1	×	×	×
2	×	×	×
3	○	○	○
4	×	×	×
5	×	×	×
6	×	×	×
7	×	×	×
8	×	×	×
9	×	×	×

「健」字の筆者識別結果

○：　分離を示す
×：　混合を示す

書字方向による筆者識別 II

○川　村　　司　　菅　原　博　嗣　　三　井　利　幸　　若　原　克　文
（名大多元数理科学）　（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）

《緒言》

署名筆跡のように対照文字数が少なく、試料がまとまって得られる場合、字傾向からも筆者の異同識別が可能であり、作為文字の検査にたいしてとくに有効であることなどは前回までに報告してきた。今回は縦書き署名と横書き署名とでは配字データからみて筆者の異同識別率に優劣があるか検討した結果を報告する。

《方法》

64㎜長の水平線分を上下の間隔28㎜で５本ひいたものを左右に２列つくって横書き用とし、同じ長さの垂直線分を30㎜の間隔で横に５本並べたものを２段にして縦書き用とした。この線分の方向に「神家健悟」と計20回署名してもらい、文字の一つ一つを線分に平行と垂直な直線で外周を囲ってできる方形の左上の角と右下の角を測定点とした。したがって１つの署名にはｘ座標，ｙ座標それぞれ８個計１６個の数値が対応する。測定の際の基準となる基線には当初の線分をとった。なお筆者の９人は成人で、時間は無制限とした。

《各々の筆者における配字傾向の観察》

９人分の縦書き横書きそれぞれ１０個の署名の配字データの最初の５つをＡグループ、残りをＢグループと考えてクラスタ分析、主成分分析、因子分析、偏差値によるクラスタ分析を行った。結果は縦、横ともに４人が因子分析で発散し、うち横書きの一人が他の３つの分析方法ですべて(1-4),(6-10),(5)の３グループに分かれて判定不能となったほかはすべて混合した。つまり18の署名のうち17について筆者が同一であることが確認された。因子分析で収束した５人のうち縦書きについては３人の第１因子の主な構成要因はｙ座標のみで、のこりの２人のそれはｘ座標のみであった。横書きでは５人とも第１因子、第２因子の主な構成要因はそれぞれｘ座標、ｙ座標であったが他方の要素が１つ混入したものも第１因子で１例、第２因子で１例みられた。主成分については縦書きでは第１主成分がｙ座標を、第２主成分がｘ座標を主たる構成要因とするもの６人、この逆が２人、第１主成分、第２主成分ともにｙ座標を主たる要因とするもの１人、横書きでは９人全員が第１主成分の主たる構成要因はｘ座標であることが観察されたが、うち４人についてはｙ座標が１つずつ混入していた。このように分析に関与すると思われる要素は筆者によって微妙に異なっており、これが配字データに筆者固有の癖が含まれている根拠と考えられた。

《配字データによる筆者の異同識別》

９人の筆者から二人分計２０個の署名を取り出して同じ番号の要素の数値を調べたところ筆者別に大小２つにグループわけされるものが多いことが観察された。それぞれの要素すべてで混合し、まったく分離しなかったのは縦書きで３６通りのうち４通り、横書きで同じく９通りしかなく、これ以外のものは筆者別に分離できると思われたのでこの２０個の署名に対して前述の４つの分析を行い、３つ以上で分離したものを「分離」とみると表１のようになり、縦書きと横書きの間の識別率には有意差がないことが明らかとなった。

表１　署名の配字からの筆者の識別状況

		横書き		
		分離	混合	計
縦書き	分離	15	8	23
	混合	6	7	13
	計	21	15	36

《結論》

縦書き署名と、横書き署名とでは配字傾向からの筆者識別率に差はなかった。また同じ番号の要素の数値の分かれ方を多変量解析による分析結果と比較した結果、今回の手法は筆者識別のための有力な方法であるとの結論に達した。しかし現段階ではまだ実験が不十分なのでこの方法だけで結果をだす場合は次の①②③に留意したい。ところで因子分析においては、因子分析が収束しかつ因子得点にもとずくクラスタ分析でも混合することを「混合」それ以外を「分離」と考える。

①　因子分析で混合せず、かつ他の分析法のうちの２つ以上で分離したときは『別人の筆跡である可能性がたかい』としてよい。

②　因子分析で混合したものは同一人物の筆跡である可能性があるので、他の手法で分離されていても最初のデータに戻って念入りに検討する必要がある。

③　分離不能が３つ以上あるときは『同一人物の筆跡の可能性がある』とするにとどめ、これ以上はっきりした見解は他の識別方法にゆだねるほうが賢明。

検査・測定３－５

多変量解析による筆者識別（Ⅱ）　鑑定手法への導入

○若原克文　菅原博嗣　三井利幸　川村司
（愛知県警察本部）（愛知県警察本部）（愛知県警察本部）（名大・多元数理）

《緒言》

前報において多変量解析法を実務鑑定に導入する分析法などについて検討したが、今回は対照筆跡の分析手順の検討と得られた結果から、対照筆跡の必要文字数などの検討を行なった。

《方法》

検討した資料は、実務鑑定で使用した４文字の氏名筆跡中「谷、琢、磨」の３文字で検査文字と対照資料（それぞれ同一氏名が１回、10回記載のもの）で、氏名筆跡の配字と３文字について検討した。

入力データは、筆者等が従来から行っている拡大文字の座標点を読み取り、標準化のために基線を決め、その基線の長さで除した数値を使った。配字は、４文字それぞれの最外郭部の座標を測定し、１文字目と４文字目の最外郭部の座標距離で除した数値を用いた。

分析方法は、素点からのクラスタ分析、主成分得点からのクラスタ分析、偏差値からのクラスタ分析の順で行い、他に各測定部位（要素）内の変動をみるために数量化第Ⅳ類による分析を行なった。

分析は、１対照筆跡間の配字及び３文字の恒常性の検討、２検査資料と対照資料間の配字及び３文字間の検討を行なった。

《結果及び考察》

対照資料の10回書かれた資料について配字及び３文字それぞれの個人内変動の状況につて検討した。いずれも各分析で２つのクラスタに分離し、同一筆者内においても完全な混合は認められない。また、数量化第Ⅳ類における各要素内の変動の状況をみると、３乃至４の要素において変動が大きい要素が確認された。次に、対照資料数の繰返し回数が何回位で筆者の個人内変動が安定するか検討するために、対照資料の10回書かれた資料から順に３回分、４回分、５回分と10回まで繰返し分析した。配字及び３文字のそれぞれについて、各要素の変動の状況を数量化第Ⅳ類で分析するといずれの場合においても３回分の分析では、要素内の変動が大きい要素が５要素から８要素検出された。また、４回分以降をみると、いずれの場合も３乃至５の同一の要素を含む要素に収束されるのが確認できた。また、各要素内の変動の状況をみると、５回分位までは同一要素内の変動の幅に差が認められるが６回分から10回分までは変動の幅に大きな違いはなく各要素内の収束の状態が一定化する傾向が認められる。次に、配字及び３文字のそれぞれについて10回書かれた対照資料内から、無作為に５回分の資料を抽出して６回繰返し分析して各要素の変動の状況を検討したところ、いずれも同一要素を含む３乃至５の要素が変動の大きい要素として抽出され前記の傾向が確認された。以上対照資料の検討をした結果、10回書かれた同一筆者の筆跡であっても、筆者の運筆傾向が完全に一致するとはいえず複数のクラスタに分離する可能性があり、実務鑑定をする場合、対照資料内の個人内変動の状況を把握する必要があり、必ず対照資料のみの分析が不可欠である。また、測定した各要素の変動の状況から、実務鑑定では最低でも同一文字を４回書いた資料がなければ筆者の個人内変動についての検討はできないと考えられる。逆に同一文字が多くあれば検出精度があがるものではなく、今回の結果からは６回以上同一文字があっても各要素内の変動の状況に変化がないことが認められた。従来から行なわれている筆跡の実務鑑定では、対照資料の資料数は、基本的に同一文字を５回から10回位収集して鑑定を行なっており、今回の分析結果とも一致し、多変量解析法を用いた筆者識別の導入についての問題点はない。

検査文字と対照資料との分析は、(1)検査資料及び対照資料の全資料(2)検査資料と対照資料中５回分の６資料(3)全要素から変動幅の大きい３要素を除いた検査資料と対照資料の全資料(4)３要素を除いた検査資料と対照資料中の５回分６資料で分析した。結果は、各分析とも配字、「谷、磨」字において検査文字と対照資料が混合し、「琢」字においては素点からのクラスタ及び偏差値からのクラスタにおいて分離した。「琢」字については「谷」字と併せて(1)全資料間(2)検査文字と対照５回分の６資料による分析を追試したところ、全てにおいて混合する結果が得られた。この結果から、検査文字が対照資料の個人内変動の範囲内の筆跡と確認でき、実務鑑定の中で記載時期の異なる筆跡間での筆者の同一性の判断が可能で、これに検査文字の測定部位以外の個々の情報を加えることによって、現在行なわれている実務鑑定が客観性を備えた鑑定となるため多変量解析法の導入が必要である。

多変量解析法による筆者識別
―筆跡の最適規格化法―

○三井利幸　菅原博嗣　川村司　若原克文
（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）　（名大・多元数理）　（愛知県警察本部）

《緒言》

筆跡の異同識別をコンピュータでおこなう時、主として筆の導入部、止め部等を二次元の座標点として測定している。そのために、字の大きさが異なると座標点が大きく変動し、筆者識別が困難になる。この問題を解決するためには何等かの方法により字の大きさを揃える必要がある。この方法として、字の特定の２点間を結び、その長さ（基線）を測定し、各座標点を基線の測定値で除し、字の大きさを揃えている。しかしながら、この基線のとり方によっては、同一筆者内での各測定値の変動が大きくなり、場合によっては筆者識別が不可能となる。そこで、今回は同一筆者内において各測定点の変動が最小で異なった筆者間の識別が最も容易にできる基線のとり方の検討を「連」「近」「市」の３文字について行った。

《連》

「連」については図１に示したような４通りの基線と11から14の座標点を用いた。各座標点の測定値間のバラツキが最も大きい筆者５についてのバラツキの程度を図２に示した。これら４通りの方法で字の大きさを揃え、異なった筆者間の異同識別を行ったところ、表に示したような結果が得られた。この結果から明かなように、「連」のように基線を採り、字の大きさを揃えた方法が最も異なった筆者間の筆者識別率が高い(9/10)結果となった。

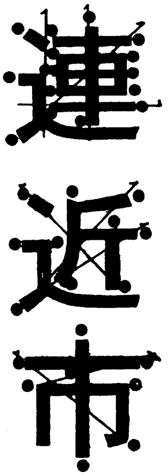


図１　各字の測定点

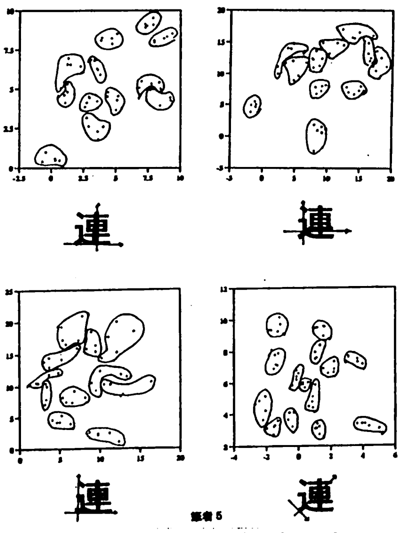


図２　筆者５の測定点のバラツキ

《近》

「近」については、図１に示したように３通りの基線と８座標点を用いた。その結果、表に示したように「近」の方法が最も高い異なった筆者間の識別率(10/10)を示した。この基線のとり方は、部首の面から基本的には「連」と同じ方法である。このことは、同じ部首を持った字は、同一の方法で基線のとり方を決めていくことが十分可能であると推定できる。

《市》

「市」については、図１に示したように３通りの基線と６座標点を用いた。しかし、これらの３方法の基線の採り方では異者筆者間の識別率は悪く、最高でも5/10で、これらの方法では異なった筆者間の識別は困難であった。このように識別率が悪いのは、画数が少ないので、各画の変動が大きくなるためと考えられる。

表　「連」、「近」、「市」における５人の筆者間識別の確率

字	A		B		C		字	A		B		C	
	分離	混合	分離	混合	分離	混合		分離	混合	分離	混合	分離	混合
連	8	2	6	4	6	4	近	9	1	7	3	7	3
連	4	6	2	8	3	7	近	10	0	9	1	9	1
連	6	4	6	4	6	4	市	3	7	4	6	4	6
連	9	1	8	2	8	2	市	5	5	5	5	6	4
近	9	1	8	2	8	2	市	2	8	4	6	6	4

A：クラスター分析　B：主成分分析　C：偏差値からのクラスター分析

事例にみる現代離婚の深層
―― 愛しすぎる女性たちの心理 ――

○大西　由希子
（北海道大学医療技術短期大学部）

１.問題意識及び目的　「愛しすぎる女[1]」とはひとりの男性に執着し、精神的な苦痛を負わされてもなお執着を断ち切れず、苦悩と苦痛の深さによって愛の深度を測ろうとする女性達である。彼女達は常に重要な他者から「自分が必要とされる必要[2]」に突き動かされて強迫的に行動する。それは生育歴の中で習慣化された行動でもある。彼女達は依存的で多くのケアを必要とする男性を無意識にパートナーに選ぶが、その関係は病的な共依存関係へと発展してゆく。このような過程を経て離婚に至った２人の女性に、共通して見られた心理と行動のパターンについて生育歴との関連からの要因を分析し考察した。

２．事例　深層面接法による面接を行い、事例１は２ヶ月間、事例２は半年間カウンセリングを継続した。

［事例１］Ｎさん（27歳）は結婚生活５年で調停離婚し、２人の子どもをかかえて母子家庭となった。

・生育歴：Ｎさんは、田舎で小学校教員の父親から優等生であることを暗黙に役割期待されて育った。中学校時代までクラスの様々な問題のまとめ役を両親から期待され、それに応えていたが、末っ子である彼女は本来、依存心が強く、これらの期待は重荷であった。

・離婚に至ったプロセス：ルックスよく、友人の間ではリーダーシップをとる夫に魅力を感じ恋愛結婚したが、結婚生活の中での夫は依存心が強く生活観念のない人であった。しかし、彼女は夫が外見は素敵な男性に見えるように、夫の給料ではできない生活を内職やサラ金の利用をしてまで維持した。離婚の契機は生活の経済的破綻と夫の両親との同居問題であったが、夫は両親に意見することもできず、彼女から逃げ回ったため、半年間の別居を経て離婚となった。

［事例２］Ａさん（35歳）は、８年間の結婚生活の末、協議離婚。離婚後は親元に身を寄せていた。

・生育歴：Ａさんの父親はアルコール依存症者であり、母親はその父親との共依存関係にあった。彼女は子供の頃から家族の憎しみの感情のはけ口としての役割を引き受けながら、反抗もせず従順に育った。

・離婚に至ったプロセス：「容姿以外には取り柄がない」と言われて育った彼女は、両親の勧める見合いで結婚した。結婚後初めての妊娠が子宮外妊娠であり、その治療の後遺症から不妊となった。夫と姑から子どもができないことを責められ、不妊治療に専念したが、妊娠できず、この治療生活に疲れ果て、母親との密着の強い夫と離婚した。

３.事例の分析と考察　２事例は共通して、子ども時代に過負担な役割を引き受けながらも、従順な良い子として育ってきている。その問題は、親から能力以上の要求をされても「ノー」を言うことができないまま、常に期待される役割に応えてきていることである。事例１の生育家庭では、過剰な役割期待に応える不安な子どもの心が親に理解されていない。事例２は、明らかに親が子を保護しない機能不全の家庭で育っている。このような生育過程における傷つきから、彼女達は情緒発達において重要他者（親）と基本的信頼を育くむことが難しかったと考えられる。それは愛する人との信頼関係を結ぶ際の阻害要因となっている。なぜなら彼女達は親から保護されなかったという不安経験により、役割期待に応えることで愛されると思いこんでいるからである。同様に、夫から必要とされなくなるのではという不安から、夫の問題まで自分の問題と捉えようとする。それは彼女達の習慣化した行動であるため、依存的で自立していない男性のケア役割を担うことに抵抗感はなかった。しかしその役割を取る上で、自己の感情を抑圧する事を自身に強制するため、彼女達は感情の自認に乏しくなる。そして常に自分よりも他者の評価を優先するため、他者志向的となり他者に依存する存在となってゆく。事例の女性達は多くの自己犠牲を払っても自分が必要とされることを願い、相手も自分も疲れるまで、その行動パターンを繰り返す「愛しすぎる女」である。この「愛しすぎる女」は事例にみるように、生育環境を通して造られてくるのであり、その背景には伝統的母性観に基づく教育や躾、及び女性の自立を阻む社会的風潮の影響があると思われる。伝統的母性観に基づく性役割規範は、女性がケア役割をとることを促しているからである[3]。そして、２事例はまさにその影響を受けていた女性であった。現代離婚の深層には事例にみるような女性達の「愛しすぎる」という病理が存在しているように思われる。

文献：１）ロビンノーウッド著，落合恵子訳：愛しすぎる女たち，読売新聞社，1988.
２）斉藤　学：「家族」という名の孤独，講談社，1995.
３）内藤和美：女性学を学ぶ，三一書房，1994.

社会・文化３－２

地域住民の結婚観・育児観に関する考察

佐藤 怜
（秋田大学）

１．目的：秋田県は、若年層を中心とする進学や就職を求めての首都圏等への人口流出による社会減、及び若年層の減少と少子化傾向とによる出生数の減少による自然減とが相乗的に作用し、全国でも数少ない人口減少県となっており、この対応に苦慮しているが、①社会減に対しては、ＵターンやＡターンによる地元就職の勧誘、②自然減に対しては、県内在住の独身男女性の交流や、第三子以降の保育料免除による一応の対応を行なっては来ている。そこで②と関連して、地域住民の結婚・出産・育児等に関する意向を把握し、今後のより効果的な地域社会の自然減への対応策を検討するための、基礎的資料を得ることを目的とした。

２．対象：（１）対象地域は秋田県全域とした。これを多段抽出法により、農村経済地域区分（都市・平地・中間・山村の4地域）と、行政慣例区分（県北・中央・県南の3地域）とをクロスし、理論上の12地域の中から、無作為に2市7町2村を抽出した。（２）対象者は、目的の趣旨に適う対象を、県内在住の満20～39歳の成人男女（N＝270,850名）として、抽出誤差比率（ε）を±2%以内とし、対象者数を2,500名とした。これを各市町村の人口に応じて比例配分し、選挙人名簿から、各市町村の該当対象者を無作為抽出した。

３．方法：結婚意識育児環境調査検討委員会（委員長佐藤怜他5名）を組織し、①結婚に関する事項、②育児に関する事項を盛り込んだ質問紙調査票を作成した。これを留置法（一部郵送法）により、調査員として、研修を行なった上で依頼した各地域担当の民生児童委員が、各戸訪問により配布・回収を行なった。最終有効回収数は2,003（回収率80.1%）である。なお、調査期日は平成6年7月下旬～8月上旬である。

４．結果・考察：今回は、性（男女）差を中心に全体的な検討を行なう。（１）結婚に関する意向では、①結婚観について、一人前として是認、自分の夢の実現、結婚より仕事優先、離婚しない、離婚は負債、子どもを持つで、男性は肯定がより多く、女性は否定・保留がより多く、妥協・諦めで、女性は肯定がより多く、男性に保留、否定が多くなっており、仕事の継続では、性差はなく保留が多い。総じて女性は男性よりも否定・保留が多く、結婚への期待感が比較的低い事が指摘される。②結婚の利点の有無では、男女とも9割が有り（全体:男67%、女71%）としており、全体的に精神的安定、子・家庭、が多い中で、男性は精神的安定、社会的信用、生活利便、性的充足が、女性は子・家庭、愛情生活、経済的余裕が、それぞれより多く、男性には社会的承認・個人的充足傾向が、女性には情緒性尊重・経済性優先傾向が認められる。③独身生活の利点の有無では、女性(96%)が男性(89%)よりもより多く利点有り（全体:男84%、女89%）を指摘しており、全体的には自由な行動・生き方が多い中で、男性は経済的余裕、異性交際自由が、女性は友人関係、職業的自立が、より多く、男性は経済負担や特定異性の拘束が、女性は家庭・育児や経済的自立の拘束が特徴となっている。④結婚後の仕事や子育てでは、全体的に、結婚後子どもを持ち女性は子育て後再就職が多い中で、女性はこれと、結婚し子どもを持ち女性は仕事を一生続けるが、男性は結婚し子どもを持ち女性は家庭に入るが、それぞれより多く、仕事と家事・育児を巡り男性と女性間に差異が見られた。⑤結婚後の生活の意向では、家庭第一主義、夫外・妻内、姑仕え、子ども持つ、離婚不可で、男性はより肯定的で、女性はより否定的な意向が認められ、育児に専念では、女性がより肯定的で、男性は保留が多く、総じて男性は女性よりも伝統的な性役割観に支配されている事が指摘される。（２）育児に関する意向では、①子どもを持ちたい（持ちたくない）理由は、性差は見られず、家庭が楽しい、夫婦結合の強化、自分の生命伝達、自分の人生の証、等が、欲しくない理由として、自分の生活や時間、子への責任重い、育児不安、子ども嫌い、子育て困難な時代・社会等が、主なものとして上げられる。②出生率低下要因では、男性が子育てより自分の生活を楽しむ、若者の出会いの場少ないを、女性が子育てに金掛かる、仕事と育児の両立困難、女性育児負担大きいを、それぞれより多く上げており、女性の方がより切実感がある。③子育ての悩みでは、女性が男性よりも圧倒的に悩みや不安が多く、自由時間無い、仕事との両立困難、子育て不安、行動拘束、付き合い煩雑などが、主なもので、女性に子育て負担が大きい事が指摘される。④施策への要望でも、女性が男性より要望が多く、切実感が強く、子どもの保育の社会的支援、就労条件改善、男性の共生参加意識の啓発等が上げられる。

大学生の生活態度の研究
―性差による比較―

○橋本泰子 (城西女子短期大学部)　佐藤嘉晃 (城西女子短期大学部)

目的：価値観について、白井は、青年を対象に、20年前とを比較し、次のような特徴を指摘している。「自分の感覚を最優先し、イデオロギーの不信感や無関心が生じ、他者との心理的なつながりの喪失、自閉主義と主体性志向の増大」、具体的には、「指示待ち人間」「聞いてない」症候群等と、器機操作は、優れているが、対人関係は稚拙であると指摘している。今回、大学生を対象に、生活態度の性差による比較を試みたので報告する。

対象と方法：対象は、都内・近県の四大制・短大の学生で男子447名（平均年齢＝21.0歳）、女子546名（平均年齢＝21.2歳）。調査用紙は、援助行動、対人関係、生活満足度、結婚、離婚、家庭の役割分担等の領域に関する40の質問に選択肢を付記。調査は、無記名で、H6年11月実施。有意差（X^2検定、P＜0.005）の認められた主な項目を取り上げ比較検討した。

結果と考察：［援助行動］「災害地に物資を送る。少し汚れている」。「そのまま送る」男子44.7%。「汚れてないものを送る」女子50.5%。女子の方が相手への配慮がなされるためと解釈される。
「身障者の友人が暴力団員に殴られている」。「殴られる覚悟で助ける」男子52.6%。「自分も助けに行くが、人にも頼む」女子59.9%。男子は一人で、女子は人にも援助を求める。体力差と他人との協力で悪を防止するためと解釈される。

［対人関係］「乗客の雨に濡れた傘が服についている」。「場所を移る」男子34.5%、女子58.6%。「注意する」男子30.9%、女子19.4%。男女とも、相手に状況を説明し、問題解決するのが苦手で、特に女子にその傾向が強い。社会性が十分発達していない。

［道徳性］「仕事で人に会うときに、お金の入っている封筒が落ちていた」。「もらっておく」男子39.4%。「後日警察に届ける」女子41.6%。男子は道徳観がルーズで、女子は几帳面・状況判断をしている。

［社会性］「公共の利益のために個人の権利は犠牲になってもやむを得ない」。「そうは思わない」男子48.8%、女子43.2%。男女とも社会性の意識は低い。反面、「そう思う」と肯定している男子30.6%、女子20.9%。男子は、公共性を優先する。

［地域性］「近所付き合い」。「挨拶程度」男子41.4%、女子25.1%。「話し合える程度」男子50.8%、女子61.0%。男子に、地域住民との絆の希薄さが窺われる。

［生活満足度］「現在の暮らしに満足」男子60.4%、女子71.7%と男女とも満足度は高い。

［生活目標］「自由に楽しく過ごす」男子37.2%、女子44.0%。なお、「力を合わせて世の中をよくする」男子5.1%、女子2.7%。以上、男女とも、生活目標は個人生活の充実においている。

［子の教育方針］「教養があり心豊かな人間」男子46.3%、女子59.5%。「権利や生活を尊ぶ人間」男子24.2%、女子19.8%。「社会に役立つ知識や技能を身につける」男子7.8%、女子5.7%。社会に役立つよりも精神性を重んじた子育てを描いている。

［結婚］「当事者だけの合意だけでなく、親、生活環境も考える」男子51.9%、女子74.4%と女子の方が家族、経済等条件を慎重に考慮する。

［離婚］「離婚すべきでない」男子54.4%、女子47.1%。「納得できるなら離婚した方がよい」男子41.2%、女子48.2%。女子の方が、離婚に対し柔軟である。

［高齢者］「高齢者家族との同居が好ましい」男子49.2%、「健康なら独居」女子48.9%、「施設に入所すべき」男女とも4.2%。女子は、介護に携わるため、同居に消極的。従って、政策が必要だろう。

結語：大学生を対象に、生活態度に対する性差による比較、検討を試みた。男女とも、対人交渉による問題解決は苦手で、社会性も低い。しかし、生活満足度は高く、特に女子が高出現率を示している。生活目標は、男女とも拘束されない個人生活の充実においている。子の教育方針は「教養のある心豊かな人間」と精神性を重んじている。結婚・離婚に対して、女子は、現実的・柔軟的である。高齢者政策の必要性がみられる。

以上のことは、白井の提唱する「自閉主義と主体性志向の増大」と一致するものと考えられる。

若者の伝統芸能に対する印象 その1

○ 大久保 康彦 (國學院大学栃木短期大学)
玉井 寛 (日精研リサーチ)

問題

伝統芸能は，もともとそれを保有する民族（国家）によって後世に継承していかなければならない使命と義務を負うものである。

わが国の伝統芸能には，雅楽，能楽，文楽（人形浄瑠璃），歌舞伎，日本舞踊，邦楽などがある。この中，今日もっともポピュラーで比較的接しやすいものが歌舞伎である。歌舞伎は，古典芸能であるとはいえ，ひとびとによくその内容を知られており，さほどむずかしくも，縁遠いものでもない。江戸時代以来，つい先頃までは庶民の楽しみのひとつとして，盛んにもてはやされてきたものである。

しかるに，近頃あれほど親しまれてきた歌舞伎も，かつてのように人気と評判を獲得することが容易ではなくなってきた。そして，特に若い層のひとびとの間に，その傾向が明瞭に認められるようになった。

本邦演劇学の泰斗である河竹登志夫氏は，その著書で「観客は，いうまでもなく演劇成立にとって俳優，作者，劇場とともに基盤をなす本質的要素である。」と述べている。観客のありようが，かく重要であるという意味からいえば，伝統芸能・歌舞伎の存亡もまたこの点に重大な関心を寄せざるを得ない。

このような事態を踏まえて国立劇場も生まれ，その劇場活動の一端として，若者向けの企画が登場してきたのも当然のことといえよう。歌舞伎鑑賞教室とはそれである。主として東京およびその近辺の高校生に向けて歌舞伎をわかりやすく，親しめるものにしようと毎年６，７月に歌舞伎とその解説を約３時間の番組で催すのである。この試みが，いくらか功を奏して，実際に若者の歌舞伎愛好者が微増しつつあるのもまた事実である。

更に，先般，マスコミ主導による「歌舞伎ブーム」なる流行が一部の若い女性たちの間に出現した。若手の人気役者が活躍して，アイドルなみに扱われるようになった結果，いっときのブームをひきおこしたのである。しかし，この喧噪もおさまりかけてきた今，若年層の歌舞伎という伝統芸能に対する関心や興味は，どのようになっているのであろうか。

このような流れの中で，今日の若者たちが一体，歌舞伎をどのように捉え，歌舞伎にいかなる評価を与えているかは，伝統芸能の保存継承の面からいって極めて重要な問題である。

経過

大久保は，昭和５８年以降，若者の歌舞伎についての調査に着手し，今日までこれを連綿と実施してきた。短大女子学生および高校男子生徒を対象として，毎年国立劇場歌舞伎鑑賞教室を観劇した直後に，アンケートまたは作文によって，一般的な歌舞伎についての印象，知識，興味，イメージ，未来などの様相を探り，その都度これらの傾向をとらえてきた。そして，共同研究者である玉井も加わって，調査データの分析を行い，それら若者の歌舞伎観の構造分析などを行いその内容を掘り下げてみた。

これらを概観してみると，若者は歌舞伎に対して，一般に積極的とはいえないが，肯定的，受容的態度を示しており，違和感のようなものを抱く者は少ない。しかし，いつも約半数近くの者は，興味を抱くことが出来ず，無関心さをあらわしている。この興味をもてないとする理由には，「とっつきにくい」，「せりふがわからない」，「ことばがききづらい」，「内容がよく理解できない」，「自分には合わない」などが毎回のように挙げられている。

たしかに，今日，われわれをとりまく遊びや楽しみは多様化しており，その選択に迷う程である。このような状況下で，古典芸能・歌舞伎の位置付けも，その魅力の度合からいって若者に目を向けさせる要素がどれほどあるかは疑問である。伝統芸能保存の面からも，再度これを検証してみなければならないところである。

目的

今回は，上述の経過にそって，平成７年度６月に観劇した歌舞伎「天衣紛上野初花」（河内山）について短大女子学生に，その鑑賞直前と鑑賞直後との２回にわたり，同一項目でアンケートを実施し，その前後の比較から，両者の間に変化が生ずるか否か，また変化があるとすればどんな内容であるのか，などを全体的に，そして個別に検索してみたいと考えた。狙いとしては，個々にその直接の変化の傾向をとらえ，これにより，歌舞伎観劇の影響がどのようであるかを知ろうとするものである。

社会・文化３－５

若者の伝統芸能に対する印象　その２

○ 玉井　寛　（日精研リサーチ）

大久保　康彦　（國學院大学栃木短期大学）

方法

女子短大生１学年６５１名を対象に，１９９５年６月歌舞伎鑑賞の前後にアンケート調査を実施した。前後２回のアンケート調査項目は，同じ内容を使用した。調査内容は，「催し物や娯楽に関する興味や関心の度合」，「歌舞伎への興味や親しみについて」，「歌舞伎の印象について」などから成っている。実施時期は第１回が鑑賞１週間前，第２回が鑑賞後１週間から２週にかけてであった。

結果

歌舞伎に対する興味や親しみについては，表１の通りである。

表　1　　　　(%)

	ある	ない	どちらでもない
第１回	30.1	18.7	50.7
第２回	42.2	12.4	44.5

「ある」の主な理由として挙げられるのは，「伝統的，ひきつけられる，独特の話し方（セリフ），おもしろそう」等である。「ない」の主な理由としては，「内容が難しそう，言葉が理解できない，独特の話し方」等である。

催し物や娯楽に関する興味や関心の度合，については表２の通りである。

表　2　　　　(%)

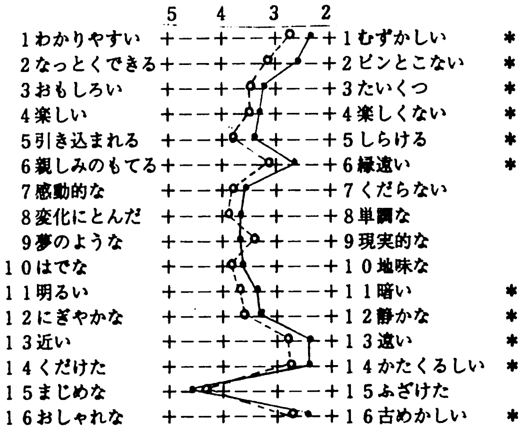
	最も好きなもの		最も興味関心をひかない	
	第１回	第２回	第１回	第２回
1 スポーツ観戦	15.4	14.9	7.4	7.8
2 映画	14.1	14.0	1.8	1.4
3 ショッピング	30.4	33.3	0.5	0.2
4 旅行	10.8	9.7	0.6	1.1
5 歌舞伎	0.5	0.5	30.4	24.7
6 コンサート	8.3	8.0	2.9	2.0
7 読書	6.8	7.5	6.8	7.2
8 大相撲	0.8	0.9	37.0	38.6
9 カラオケ	10.4	9.5	3.5	3.4
10ドライブ	4.0	3.7	6.2	5.8

好きなものに挙げられるのは，ショッピング，スポーツ観戦，映画等であり，興味や関心をひかないものとして，大相撲，歌舞伎が圧倒的である。ただ，歌舞伎に関しては，鑑賞前に比して鑑賞後は６％弱少なくなっている。

歌舞伎に関してもつ印象については，図１の通りである。

図　1　　（評定平均値）

第1回・　第2回　○



以上の結果から，表１にもあるように，歌舞伎への興味や関心は，鑑賞の前後で「はい」と答えた人が12％増加している。ただ，催し物や娯楽に関する中では，上述のように伝統的なものへの興味関心は低い。

また，歌舞伎に関してもつ印象については，図１でわかるように，鑑賞後は全体的に肯定的な方へ変わっている。中でも「5 引き込まれる，7 感動的な，8 変化にとんだ，10 はでな，11 明るい，12 にぎやか」等でその傾向がはっきりでている。

考察

現代のように多種多様な余暇の選択ができる時代においては，歌舞伎をはじめとする伝統芸能に接する機会はより少なくなっている。その時代に即応した娯楽に人気が出るのは当然の結果ともいえる。ただ，それにも増して伝統芸能との接点が有るか無いかで，興味や関心の度合，印象の濃淡などの隔たりが大きくなるといえる。

今回の集団では，歌舞伎鑑賞したことで興味や関心は僅かながら，肯定的な方へ変化している。ただ，意識の上で変化はしたものの実際の行動ではどうか不明といえよう。今後の課題として，伝統芸能における印象の変化がどんな側面から生まれるかをより追究していくことである。

妊産婦における妊娠・出産経過と不安との関係

和田佳子
（日本大学大学院）

【目的】

妊産婦の不安に関する研究は、比較的多くなされてきている。妊娠の各時期による不安は、妊娠初期と後期に比べ、妊娠中期では不安水準が低下する（e．g．九嶋・村井・佐藤・大山　1966）という報告がある。一方、妊婦の顕現性不安は、初産婦、経産婦ともに妊娠時期による変動は見られないが、妊娠・出産・育児などに関する不安（母性不安）は、初産婦、経産婦ともに妊娠初期に高く、その後は低下し安定するという結果もある（花沢　1977）。また、妊娠期による不安と妊娠・出産経過との関連性がいくつか指摘されている。花沢（1977）は、つわり症状の重い妊婦が顕現性不安、ならびに母性不安ともに高い傾向であることを認めている。村井・村井（1979）は、妊産婦の泣きと出産異常の有無や産後経過の良否との関係を調べ、出産異常群は正常群と比べて、入院中に泣いた者が多かったとしている。本研究は、不安をＳpielbergerの状態不安・特性不安でとらえ、妊産婦の妊娠・出産経過と、これらの不安との関係について縦断的に検討することを目的とするものである。

【方法】

調査対象：都立Ａ産院にて、妊婦検診から出産、１か月検診まで継続して受診した者50名（初産婦31名、経産婦19名、平均年齢29．04±4．08歳）。

調査期間：平成６年５月から平成６年11月。

質問紙：妊産婦の不安を測定するために、状態・特性不安検査（ＳＥＱ－ＳＴＡＩ――Ｓ tate－ Ｔ rait Ａnxiety　Ｉ nventory――日大版Ⅱ）を用いた。

調査の実施：妊娠中期である妊婦の外来受診時、出産後、および褥婦の１か月検診時に、「ＳＴＡＩ」を留置法で施行した。また、合わせて出産後に面接を行った。

結果の整理：50名を、医師・看護記録の妊娠・出産経過内容と面接とにより、全経過を通じて比較的順調に経過した群を順調群、順調に経過しなかった群を不順群とし２群に分類した。「ＳＴＡＩ」の結果から、状態不安得点、および特性不安得点を求めた。各得点について、両群間の平均、および標準偏差を算出し、群（順調群、不順群）×時期（妊娠期、出産後、産後１か月）の分散分析を行った。

【結果と考察】

順調群、および不順群における状態・特性不安得点を比較したものが、表１および表２である。

表１　状態不安得点における平均と標準偏差

	順調群			不順群		
	妊娠期	出産後	産後1か月	妊娠期	出産後	産後1か月
N	22	22	22	20	20	20
M	36.73	30.82	34.41	39.10	37.55	41.15
SD	6.02	5.73	8.60	8.19	10.57	8.54

表２　特性不安得点における平均と標準偏差

	順調群			不順群		
	妊娠期	出産後	産後1か月	妊娠期	出産後	産後1か月
N	21	21	21	22	22	22
M	37.67	38.19	34.62	39.14	39.73	39.68
SD	5.89	5.95	6.59	9.20	10.55	9.60

状態不安について分散分析の結果、群の主効果が有意であり（$F(1, 40) = 6.64, p < .05$），順調群と不順群との間に有意な差が認められ、不順群より順調群で低下するという関係が示された。また、時期の主効果が有意であった（$F(2, 80) = 5.18, p < .01$）。そのためＴukey法による多重比較をおこなったところ、妊娠期と出産後、および出産後と産後１か月との間に有意な差が認められ（５％水準）、出産後より妊娠期、および産後１か月で、状態不安得点が高くなるという関係が示された。交互作用（$F(2, 80) = 1.84$）は認められなかった。次に特性不安について分散分析の結果、群の主効果（$F(1, 41) = 1.37$）、時期の主効果（$F(2, 82) = 1.76$）、および交互作用（$F(2, 82) = 2.17$）はいずれも有意ではなかった。

以上のことから、特性不安は妊娠・出産の経過の良否や時期により変動しないが、状態不安は変動するということが明らかになった。妊産婦が、妊娠・出産・産褥の各期を順調に過ごすことができるようなケアが大切であり、特にリスクをかかえた者には、十分なサポートが重要であると考える。

社会・文化３－７

周産期不安の臨床心理学的研究

－母子体験及びサポートシステムとの関連の検討－

○鉄村　和恵　　乾原　正
（関　西　学　院　大　学）

キーワード：周産期不安　母子体験　サポートシステム

【問題】周産期領域において心理的要因が原因と考えられる妊産婦のトラブルの増加が報告されており、親となる過程を含めての対処が急務とされている（花沢・大日向，1994）。とりわけ妊産婦が感じる不安は中心課題であり、その後の母性行動にまで影響を及ぼすことが危惧される。逆に母性意識による不安への影響も考えられる。したがって周産期のあり方については妊娠・出産過程に局限することなく、母性の発達という観点から捉えることが重要である。しかし今日、家族規模の縮小をはじめ、出産に臨む過程における母性の発達・顕在化を困難にしている社会的要因は多い。このような状況にあって妊婦が妊娠を自身の問題と認識し、また妊婦の母親との調和のとれた同一視をすることにより母親役割を受容することは重要であり、それらをサポートする体制の確立が要請される。

以上のような立場から、本研究では周産期不安を妊婦の過去・現在の母子体験及び周囲の身近な者によるサポートシステムとの関連性のもとに明らかにすることを目的とする。

【方法】１９９３年８月から１１月にかけて兵庫県内のＮ健康開発センターの両親学級・母親学級に来所した妊婦１０５名を対象とした。回答者の属性をTable１に示す。「母子関係に関する調査票」と題した質問紙を配布、集団説明を行い、記入を依頼した。両親学級に参加した妊婦については即日回収し、母親学級に参加した妊婦については翌週に回収した。「母子関係に関する調査票」は①妊婦の個別的特性について尋ねるフェイスシート②母子体験及びサポートシステムを中心とした母性意識、４６項目の質問紙は３件法による回答を求めた。③ＭＡＳ、以上３つの調査から構成されている。②については因子分析（バリマックス回転）を行い因子負荷量・因子の解釈可能性を考慮して７項目を削除し、母性意識の発達に関与する４因子を抽出した（累積寄与率は、50.3%）。

Table１．回答者の属性

妊婦の年齢	平均２７．５才（ＳＤ＝３．３）
妊娠時期	中期（１６≦ｗ＜２８）後期（ｗ≧２８）
ｗ（週）	８３．８％　　　１６．２％
	平均２３．７週　（ＳＤ＝３．５）
出産経験	初産婦：１０３名　経産婦：２名
結婚期間	平均２０．４ヵ月（ＳＤ＝１６．５）
妊婦の就労	主婦９０．５％　　有職９．５％
夫の年齢	平均２９．９才（ＳＤ＝４．５）
家族形態	核家族９２．１％　複合家族２．０％

それぞれ、第一因子「夫の支援」、回想された母親への愛着と現在の妊娠への協力で負荷量が高い第二因子「母親との良好な関係」、第三因子「子への愛着」、夫方の家族や友人、相談できる近所の人達による支援で負荷量が高い第四因子「周囲の支援」と命名した。各因子で肯定的に回答した項目につき１点を与え、因子得点とし、４因子の合計得点を「母性意識得点」とした。それぞれ、中央値により低得点群と高得点群に分類した。③は不安得点の合計点数の範囲により、通常はⅠ～Ⅴ段階に分類され、Ⅰ・Ⅱ段階を高度の不安を示すと判定するが本研究ではサンプルの93%（N=98）がⅢ～Ⅴの正常範囲に属するため（M=10.6, SD=6.7）四分位点の１４点以上を高不安群、未満を低不安群に分類して解析した。

【結果】母性意識について低不安・高不安の２群間で比較すると、低不安群は高不安群より有意に高得点であり、各因子については第二因子・第四因子で有意であったが、第一因子は回答がpositiveに偏っており、差は見られなかった（Table２）。また、第二因子と第三因子の間には、.21 の相関が（<.05）見られた。年齢・妊娠時期・結婚期間など属性と不安との間では有意差は認められなかった。一方、母性意識と妊娠時期との間に.27 の相関（<.01）が、第三因子と妊娠時期との間には、.25 の相関が（<.05）見られた。

【考察】妊婦の母親との過去・現在にまで及ぶ良好な関係が妊婦の不安に関与しており、さらにこれから生まれてくる子に対する愛着との間に弱いながらも相関が見られたことは母子愛着の重要性・持続性を示唆していると思われる。一方、現在の妊婦を取りまく要因であるサポートシステムについては、対人関係が周産期の不安の軽減に有効なアプローチであることを示しており、臨床場面でどう生かしていくかが今後の課題となる。尚、本研究の被験者は積極的に両親・母親学級に参加する姿勢が反映されてか、あるいは妊娠時期が比較的安定した時期にあるためか、不安の程度が低く、妊娠期間を経るにつれて順調に母性意識を顕在化している一面が窺えた。

Table２：ＭＡＳによる母性意識得点のｔ検定結果

	t 値	p<
母性意識総得点	2.12	*
夫の支援	0.38	n.s.
母親との良好な関係	2.16	*
子への愛着	0.72	n.s.
周囲の支援	2.85	**

* p<.05　** p<.01

（てつむら　かずえ・いぬいはら　ただし）

看護婦の食に関する研究　－食事の実態と食事に対する意識構造－

〇關戸　啓子　　　　内海　滉
（川崎医療福祉大学）　　（千葉大学）

＜目的＞

看護婦にとって食に関する援助の重要性は，言うまでもないことである。尾岸ら[1)]は，看護婦の食を営む力と食生活への援助能力との関係において，看護婦自身の食を営む力が低い者は，患者に対する食生活の援助への認識が低いことを報告している。そこで，看護婦の食習慣の実態と食に対する意識構造を明らかにすることを目的に調査を実施した。

＜方法＞

看護婦42名に，食習慣と食に対する認識についてアンケートを実施した。比較検討するため，同様のアンケートを看護学生73名と栄養科学生39名にも実施した。

各群ともに，回収率・有効回答率は100%であった。

＜結果＞

1.「普段，朝食を食べますか」という質問の回答では，看護婦が最も朝食を食べる習慣の者が少なく(38.1%)，食べない習慣の者が多かった(35.7%)。他の２群と比べて，それぞれ有意差が認められた。

2.「朝食を抜く理由」をみると，各群とも時間がないためが最も多く，群間に有意差は認められなかった。

3.「朝出かける前に，食事・化粧・排便の内でどれか一つしかする時間がない場合にはどれをしますか」という質問に対して，看護婦は食事と回答した者が最も少なく(19.0%)，化粧と回答した者が最も多かった(54.8%)。他の２群と比べて，ともに有意差が認められた。

4.「今までに，何も食べないでいた最長時間」に対する回答を群別に平均した結果，看護婦が11.9時間と最も長く，他の２群と比べて有意差が認められた。

5.「最長時間何も食べないでいた理由」をみると，看護婦の場合，95.2%が仕事が多忙で食事時間がとれなかったためと回答していた。

6.食習慣に関して行った14項目のアンケート調査結果を，３段階評価によって数量化し，バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，２因子が抽出され「空腹によるいらいら感にかかわる因子」と「食事に対する欲求にかかわる因子」と命名した（表１）。

7.各因子に関する項目の得点平均値を群別にみると，看護婦は空腹によるいらいら感を最も持ちにくく，食事に対する欲求も最も弱かった（図１，２）。どちらも，栄養科学生と比べて有意差が認められた。

表１　食習慣についての各質問の因子負荷量

因子名	Q－NO.　質問内容	I	II
第I因子：空腹によるいらいら感にかかわる因子	⑫空腹だと何も考える気がしない。	0.783	-0.204
	⑪空腹だと何もする気がしない。	0.776	-0.277
	⑬空腹だと腹がたつ。	0.553	-0.043
	⑩予定どおりに食事が食べられないといらいらする。	0.428	-0.301
	⑭空腹だとあばれたくなる。	0.399	-0.059
第II因子：食事に対する欲求にかかわる因子	⑦少し食べれば，十分である。	-0.036	0.697
	⑥お腹一杯食べないと，食べた気がしない。	0.091	-0.677
	②一食位抜いても気にしない。	-0.220	0.534
	①毎日３食必ず食べるように気をつけている。	0.287	-0.489

※累積寄与率 40.96%

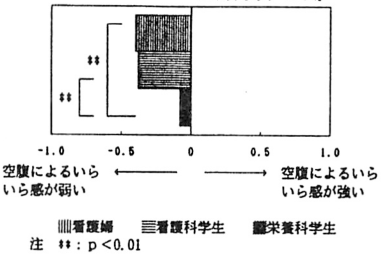


図１　第I因子に関する項目平均値
（－１←０→＋１）

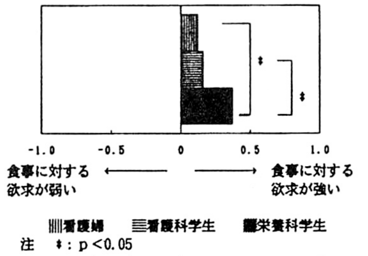


図２　第II因子に関する項目平均値
（－１←０→＋１）

＜考察＞

吉川ら[2)]は，看護婦の欠食率は国民栄養調査の約３倍であり，栄養所要量の充足率も著しく低いと報告している。今回の調査でも，看護婦は朝食を抜く者が多く，食事をとらないでいる時間も長いという結果を得ており，看護婦の不規則な食生活が認められた。

また，看護婦は生活習慣の中で食事を優先に考えてはおらず，食に対する認識が薄いと思われた。因子分析の結果から，空腹によるいらいら感を持ちにくく，食事に対する欲求が弱いという特性を持っていることがわかった。このことから，看護婦は，食事に淡白であり，こだわりが少ない傾向にあるのではないかと考えられた。

＜文献＞

1)尾岸恵三子ほか：患者の食生活援助への看護婦の意識と看護婦の食生活との関係，日本看護科学学会誌，10(1),8-23,1990.

2)吉川千鶴子ほか：三交替勤務する看護婦の食生活について，日本看護研究学会雑誌，13(3),66,1990.

看護３－２

痛み刺激の間隔による身体の影響について

── 刺激間隔の操作が皮膚血流に与える影響 ──

○宮島　直子　　　　　内海　滉　　　　　大井　睦美
（北海道大学医療技術短期大学部）　（千葉大学看護学部）　（北海道大学医学部付属病院）

はじめに

痛みは、特定の刺激によって生じる単一の感覚ではなく、複雑な知覚体験であると考えられる。痛みの知覚には刺激の種類、強さ、持続時間、心理的要因などが関与している。痛み刺激が反復される場合に、その刺激間隔が痛みの知覚に影響を及ぼすのではないかと考えられる。そこで、痛み刺激負荷を等間隔に与えた場合とそうでない場合、更に等間隔ではあるが時間間隔を変えた場合に、痛みの反応に相違があるのか否かについて調べた。痛みの反応の指標として今回は、痛みの表出や伝達における個人差の影響を受けず、より客観的に生体の反応を把握できる方法の一つである、皮膚血流を測定した。

研究方法

期　間　平成５年１１月１４日～１２月１５日
対　象　健康な女性６名（年齢２５才～３６才）

被験者は防音設備のある部屋で臥床安静とし、アイマスクと耳栓を装着した。痛み刺激は下記の条件とし、左手首に４回負荷した。刺激負荷の間隔は等間隔刺激として①60秒間隔（実験１）②30秒間隔（実験２）を、不等間隔刺激として③60秒－30秒－15秒間隔（実験３）を設定した。皮膚血流は測定部位を右前腕とし、SHINCODER-CTE301により測定した。

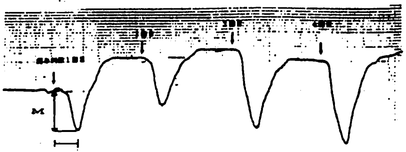
痛み刺激出力機器：ｵﾑﾛﾝ低周波治療器ｴﾙﾊﾟﾙｽHV-F05
速さ：3.25Hrz
強さ：出力電圧55.5V　電気抵抗１ＫΩ
１回の刺激負荷時間：5秒

実験終了後質問紙法により、①刺激間隔の均等さ②刺激の強さの均等さ③最も痛みを感じた刺激④刺激への慣れの有無について調査した。

結　果

４回の痛み刺激負荷による皮膚血流の変化は、増加減少・平坦が混在しており形式による分類はできなかった。刺激開始後、最大変化を示す皮膚血流値の絶対値をＭとし、Ｍに至る時間をＴと定め（図１）、皮膚血流の変化をみる時の基準とした。

図１　皮膚血流の最大値ＭとＭに至る時間Ｔ



１．刺激負荷間隔の操作とＭについて
平均化すれば、３実験とも負荷１回目の皮膚血流変動が、大きい傾向にある。実験１と実験２においては、負荷１回目のＭ値が、２回目・３回目・４回目のＭ値とそれぞれ危険率５％以下で有意差を認めた。

２．刺激負荷間隔の操作とＴについて
実験３において、３回目Ｔ値は、１回目・２回目Ｔ値と危険率５％以下で有意差を認めた。すなわち負荷の間隔が60秒から30秒に短縮された時点で、痛み刺激に対する皮膚血流の反応時間は速くなった。
３回目の負荷に対するＴ値は、実験２と実験３において危険率５％以下で有意差を認めた。負荷が同じ30秒後であっても、30秒の等間隔の場合と60秒－30秒－15秒の場合と異なることが確認された。

３．痛み刺激に対する対象の意識とＭ値・Ｔ値との相関関係は、①実験１では、１回目の皮膚血流量の変動が大きい程、刺激の強さが均等であると回答する傾向がみられた。②実験３では、４回目の皮膚血流量の変動が小さい程、４回目の刺激が最も痛いと回答する傾向がみられた。

結　論

１．痛み刺激に対して皮膚血流は、増加・減少・平坦が混在し、一様に減少するとはいえない。
２．刺激負荷１回目の皮膚血流の変動が比較的大きいのに対し、「最も痛い」という回答は刺激負荷３回目・４回目に多い。皮膚血流の回復を待たずに、短い周期で間歇的に痛み刺激が加われば、皮膚血流の変動は小さくなり、負荷回数が増すにつれ、痛みは強まっていくと推測された。
３．痛み刺激の間隔が短縮された時点で皮膚血流の反応時間が速くなったのは、時間間隔の短縮を生体が知覚した反応と推測された。

看護3－3

母性看護学実習における学生の学び

―― 実習感想文を分析して ――

○大森　智美　　　　　　　　　　内海　滉
（東京女子医科大学看護短期大学）　　（千葉大学看護学部）

＜はじめに＞

母性看護学における実習の目的は、対象となる妊産褥婦や新生児への援助を考え、実施することができるということだと言える。しかし、それだけではなく臨床の場で陣痛に耐え、出産に取り組んでいる産婦や出産の場面で母親と新生児の交流を眼の当りにすることで、普段の生活の中では味わうことのできない生命に対する畏敬や愛情を感じてほしい、というのが母性看護学を担当する多くの教員の願いだと思う。学生の実習の評価は、学生の日々の行動はもちろんのこと、看護計画等の記録類から行われているのが主である。しかし、前述した教員の学んでほしい、感じてほしいと考えていることは、学生の行動や記録類だけからでは読み取りにくいと言える。本学では実習の終了時に実習中の課題の1つとして感想文を書かせている。この感想文の中に、実習終了時の学生の思いが表現されているのではないかと考え、今回は、この感想文を分析することで学生が実習で何を学んだか、何が残ったか、何を学びたいのかを知るとともに、今後の実習を考える上での指針を得たいと考え、この研究を行った。

＜結果と考察＞

被検者84名の感想文の内容を、新生児、褥婦、産褥、産婦、分娩、自分の看護、その他の7つの項目にわけた。そしてその内容を、3段階にわけ、数量化し、その相関係数より6因子を抽出した。（表1参照）

学生の感想文に影響を与えていると思われる実習成績、実習病院、実習担当教員、学生の出身地、学生の年令、進学の有無、母性看護学試験の成績の7項目と6因子との相関は実習病院と第2因子に相関係数0.29で相関が危険率5％以下で認められた。

6因子とそれに影響を与えていると思われる7項目とに関連があるか調べた。大きな影響があったのは実習病院で、第1因子と第2因子にそれぞれの病院間の分散が病院内の分散に比べ危険率5％以下で大きかった。（表2，3参照）

表2　分散分析

第1因子の実習病院4施設間の比較

	変動	自由度	不偏分散	分散比F
群間	9.58	3	3.19	3.43 *
群内	74.41	80	0.93	
総	84.00	83		

表3

第2因子の実習病院4施設間の比較

	変動	自由度	不偏分散	分散比F
群間	8.98	3	2.99	3.19*
群内	75.01	80	0.93	
総	84.00	83		

表1　因子分析の結果（因子負荷量表）

項目＼計	f_1	f_2	f_3	f_4	f_5	f_6	因子名
15その他の考察	0.72	-0.01	-0.05	0.11	0.07	0.04	考察因子
9分娩の考察	0.63	0.13	-0.08	0.09	0.06	-0.13	
12自分の看護の考察	0.60	-0.17	0.11	-0.16	0.01	0.21	
17その他一般論	-0.44	-0.42	-0.34	0.04	-0.14	-0.19	
1新生児例のみ	0.08	-0.79	0.07	0.13	0.11	0.06	新生児体験因子
16その他例のみ	0.15	0.43	0.17	0.18	0.38	0.20	
4褥婦例のみ	-0.20	0.13	0.64	0.13	0.16	-0.26	褥婦・分娩体験因子
14自分の看護一般論	-0.33	0.06	-0.64	-0.07	0.24	-0.05	
10分娩例のみ	-0.17	-0.41	0.50	-0.32	0.27	0.12	
2新生児一般論	-0.03	0.02	0.23	-0.78	-0.31	0.11	新生児・産褥一般論因子
7産褥一般論	-0.10	0.10	-0.26	-0.72	0.27	-0.04	
5褥婦の一般論	-0.09	0.13	-0.03	0.04	-0.77	0.08	褥婦・産婦一般論因子
8産婦の一般論	-0.07	-0.05	0.03	-0.10	-0.53	-0.15	
6産婦例のみ	-0.07	0.01	0.29	-0.10	0.32	0.04	
3褥婦の考察	0.02	0.07	0.11	0.06	0.07	-0.74	褥婦の考察・分娩一般論因子
11分娩一般論	-0.15	-0.09	-0.04	-0.02	-0.21	-0.72	
13自分の看護例のみ	-0.26	0.26	0.22	0.36	0.18	0.37	

＜結論＞

1.被検者84名の感想文の分析を行った。

2.感想文の内容は6つの因子にわけられた。

3.属性群別に因子得点の平均値を比較したところでは、実習病院、実習担当教員、実習成績、進学の意図などに差が認められた。

4.特に実習病院によっては一般論が重視され、また年令では考察と体験との記載に差が認められた。

看護3－4

精神科実習における看護学生の意識構造と健康度との関係

○川本利恵子（産業医科大学医療技術短期大学）　金山正子（山口大学医療技術短期大学部）
内海滉（千葉大学）

Ⅰ．研究目的

看護学生は精神疾患および精神疾患患者に対して様々な意識をもっている。また、看護学生は青年期にあり、子供から大人への移行期であるため、生活している社会に強く影響される。そのような時期の看護学生が、精神科実習で、患者とコミュニケーションをとり、患者の不健康な部分に接していかなければならない。そのため看護学生の健康度を把握することは重要である。今回、精神科実習における看護学生の意識構造と健康度との関連について検討した。

Ⅱ．研究方法

1．対象：1994年度のS短期大学部看護学科3年次学生54名。

2．方法：精神科実習前後に精神病に対する意識の23項目（以下意識の項目と略）と健康度診断検査を用いて調査した。分析に際しては、意識の項目の回答を数量化し、因子分析（バリマックス回転）を行い、実習前後の意識の項目得点および因子得点を比較した。また、実習前の意識の項目得点と健康度得点との相関関係、および実習前の因子得点と健康度得点との相関関係を検討した。さらに、実習前後の項目別得点差と健康度得点との相関関係を検討した。なお、健康度診断検査は松本らにより開発された身体的・精神的・社会的健康を示す50項目の質問紙である。身体的健康は、身体的愁訴、身体的疲労度、体力、体調などの項目、精神的健康は、いきがい、対人適応度、生活意欲度などの項目で構成される。社会的健康は、社会奉仕活動、友人との交際度、趣味活動などの項目で構成される。

Ⅲ．結果および考察

1．実習前後の意識構造の比較：実習前後の項目得点の比較では、「患者は近づきにくい、自分の世界に閉じ籠る、気味が悪い、人間関係が困難、何をするかわからない、精神病院は暗い、患者は支えることが必要、身近な病気、社会や家庭の問題により発病する、精神疾患は遺伝する、患者は純粋である」などの項目に有意差を認めた。また、因子分析により累積寄与率52.04％で5因子を抽出し、因子得点を比較した結果第一因子（恐怖・嫌悪）、第二因子（理解・受諾）に変化を認めた。すなわち、看護学生は、実習前には精神疾患や精神疾患患者に対して、恐怖・嫌悪の態度をとる傾向があったが、実習後には、理解・受諾の態度をとる傾向がある。

2．健康度：全体的に、平均的な健康度であった。健康度パターンでは、友人との交際度や体調、生きがいの項目の得点が突出し、身体的疲労度、体力、対人的適応度、生活意欲度、社会的奉仕活動などの項目がやや窪む楕円形を示した。

3．意識構造と健康度との関係：実習前の意識の項目得点と健康度得点との関係では、社会奉仕活動をする学生は、患者を肯定的にみる傾向があり、また、社会的健康度の高い学生は、病気を身近にとらえる傾向があった。実習前後の項目別得点差と健康度得点とに相関関係を認めた項目をみると、愁訴と「怖い」と思う傾向に、疲労度と「治療や看護が難しい、病院は暗い」と思う傾向に関連がみられた。また、社会奉仕活動と「身近な疾患、不安な疾患、結婚の障害になる」などの項目に関連を認めた。以上より精神科実習における看護学生の意識構造には、健康度が影響することが示された。

（文献）松本壽吉：健康度診断検査についての研究，健康科学，9:159-180，1987.

表1　実習前の項目別得点と健康度得点とに相関関係を認めた項目

項目＼健康度	疲労度	生きがい	社会奉仕	友人との交際	趣味	社会的健康
自分の世界に閉じ籠る			－0.30*	－0.30*	－0.31*	－0.41**
気味が悪い		－0.30*				
患者を支えることが必要			0.28*			
身近な			0.42**			0.28*
人間関係が困難			－0.36*			－0.29*
家庭や社会の問題により発病					－0.37**	－0.32*
怖い	－0.29*					
純粋な	－0.30*		0.28*			

*P<0.05, **P<0.01

表2　実習前後の項目別得点差と健康度得点とに相関関係を認めた項目

	愁訴	疲労度	体力	体調	生きがい	対人適応度	生活意欲度	社会奉仕	身体的健康	精神的健康	社会的健康	総合的健康
治療や看護が難しい		－0.34*							－0.28*			
身近な疾患				0.28*				0.33*				
病院は暗い		－0.29*										
不安な疾患								－0.28*				
怖い	－0.32*											
結婚の障害になる			－0.31*		－0.41**	－0.28*	－0.37**	－0.28*		－0.41**	－0.35**	－0.39**

*P<0.05, **P<0.01

基礎看護学実習における‘不安’の変化

○山本勝則　　宇佐美覚　　内海　滉
（秋田大学医療技術短期大学部）　（市立秋田総合病院）　（千葉大学看護学部）

はじめに

不安は正確には「漠然とした未分化な恐れの感情」などと定義されるが、ここでの‘不安’は心配、脅威、恐れ、ストレスの一部を含む広い概念、すなわち我々が日常使うところの不安を指すものとする。看護学生の臨床実習に関する研究において、十分に調べられていないこととして、‘不安’の経時的変化の把握および‘不安’の原因がある。最近では一週間ごとの調査も行われているが、実習指導との関連で考えると、より短い期間での変動に注目する必要がある。また、原因別の‘不安’の変動は調べられていない。

そこで、これまでの研究の不十分な点を補う目的で調査を計画した。そして、予備調査を行ったところ、これまでの知見と一致する傾向があり、本調査に入ることが可能であると考えた。また、新たな仮説が得られたので、予備調査の時点であるが報告する。

方法

①期間：1994年 2月の基礎看護学実習（１週間）。②対象：看護短大の一年次学生14名。③調査内容：‘不安’の原因を連日記載。初日は学生が患者についての情報の入手段階に対応して記載。自由記載で、１～３項目。原因がよくわからない場合は記載不要。この‘不安’の原因について、学生が上げたものを分類し項目化。この各項目内容と項目数の推移を検討する。

結果

学生が上げた‘不安’の原因を分類した結果、主なものは①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配②患者に必要な援助がわからない③自分の看護技術および知識に自信がない④（患者に会う前の）患者の情報がないことまたは不足、であった。なお、記載内容が信頼できない者１名を除外した。

実習初日の患者の情報を入手していない時点では、最も多い‘不安’の原因は③自分の看護技術および知識に自信がないで 9名、次に多いのは④患者の情報がないまたは不足で 6名、その次に多いのは①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配であり 2名であった。実習初日の患者に関する簡単な情報を得た時点では、最も多いのが①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配で 8名、次に多いのが③自分の看護技術および知識に自信がないで 5名、その次に多いのが④患者の情報がないまたは不足で 3名であった。この時点では、学生はまだ患者と会っていない。実習初日の実習終了時点では、最も多いのが③自分の看護技術および知識に自信がないで 5名、次に多いのが①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配で 4名、その次に多いのが②患者に必要な援助がわからないで 3名であった。実習２日目の実習終了時点では、最も多いのが③自分の看護技術および知識に自信がないで 6名、次に多いのが②患者に必要な援助がわからないで 5名、その次に多いのが①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配で 2名であった。実習３日目の実習終了時点では、最も多いのが③自分の看護技術および知識に自信がないで 5名、次に多いのが②患者に必要な援助がわからないで 4名、その次に多いのが①患者とのコミュニケーションがうまく行くかどうかの心配で 2名であった。臨床での実習が全て終了した実習４日目の実習終了時点では、③自分の看護技術および知識に自信がないが 2名あり、 8名が不安なしと記載した。

考察

これまで述べた結果を整理すると次のようになる。記載された項目数だけで見ると、実習初日の患者に関する情報がない時点が、最も‘不安’の原因の項目数が多い。そして、臨床での実習が終われぱその数はかなり減少する。看護技術や知識に関する不安が最も多い。以上のことは、これまでの知見とほぼ一致する。

また、‘不安’の原因別に増減を見ると、次のような傾向がある。患者に会う前は患者の情報がないことが相当‘不安’の原因となっている。患者とのコミュニケーションの‘不安’は患者に会う前が最も高い。患者への援助がわからないという‘不安’は実践を要求される日に集中している。これらは何れも、‘不安’の各原因が実習の時期により変動していることを示している。したがって、実習において学生にどのような介入するかという視点からは、原因に応じた‘不安’の変動を調査することが必要であると思われる。以上より、仮説として、実習の時期により学生の不安を惹起する原因は様々であり、それぞれの原因は実習時期によりその強さが大きく変動している、ということを提案する。

看護3－6

看護短大生の死に関する意識調査（その2）

－入学年度生の比較－

○松　尾　典　子　　　　　内　海　　滉
秋田大学医療技術短期大学部　　　千葉大学看護学部

研究目的：昨年当学会において看護短大生の死に関するイメージや，意識を明らかにして発表した。

今回は入学年度，回生毎の因子構造を明らかにして比較検討を行う。

研究対象：A大学医療技術短期大学部看護学科学生1年次学生233名（1回生72名，2回生80名，3回生81名）

研究方法：年度前期後半（平成2年，3年，4年度）に質問紙法にて実施。その結果を因子分析（バリマックス法）し，8因子の因子構造及び因子得点にて比較検討する。

結果と考察

1．死から連想する言葉や色のイメージについて

死から連想する言葉は1回生で恐怖，霊魂，現実的な出来事，2回生で霊魂，恐怖，人生の終り，3回生で恐怖，悲しみ，現実的な出来事の順に回答が多かった。

色については各回生ともに黒が多く，次に白であった。

2．表1は死に対する意識調査25項目における看護短大生の回生別平均値である。

「15．遠い先のことで現実の問題としてとらえがたい」は2回生より3回生の方に得点が高く優位差があった。「18．死ぬことなど考えたくない」は2回生より1回生に高く優位差があった。

3．表2は入学回生毎の因子構造である。因子負荷量の高い項目の集まりによる解釈に類似性があった。

4．看護短大生（233名全回生）の因子分析による8因子は第1因子人生を重要視，第2因子死に対する悟り，第3因子死に対する近接感，第4因子現実直面，第5因子偶然的思考，第6因子死に対する抵抗，第7因子死に対する意義，第8因子死に対する無関心と解釈できた。この8因子における回生の因子得点で差を比較する。第1因子人生を重要視において3回生の方が2回生より得点差が高く優位差がある。(P<0.05)

表1　死に対する意識調査25項目における看護短大生（1回生，2回生，3回生）の平均値

項　　目	1回生 N=72	2回生 N=80	3回生 N=81
	M	M	M
1．肉親，友人というような身近な者の死に直面した時	0. 69	0. 76	0. 63
2．自分自身が死に直面した経験がある	0. 04	／	0. 04
3．患者の死に出会った時	0. 03	0. 01	0. 01
4．自己にゆきづまりを感じ，悩み，挫折感をもったとき	0. 32	0. 24	0. 22
5．死に関連したことが書いてある本を読んだとき	0. 26	0. 28	0. 36
6．夜など一人ぼんやりしているとき	0. 21	0. 24	0. 22
7．自分が幸福であると感じたとき	0. 01	0. 08	0. 09
8．死というものを身近に感じるようになり生命とははかないものだと実感した	0. 46	0. 49	0. 47
9．生命の尊さを改めて感じ自分の人生を大事にしたいと思うようになった	0. 40	0. 33	0. 43
10．死の恐さを再認識した	0. 08	0. 14	0. 17
11．死に対する恐怖が減ってきた	0. 03	0. 06	0. 02
12．永久に死にたくないと思うようになった	0. 04	0. 04	0. 05
13．死は永遠の命であり，天国への歩みだと考えるようになった	0. 08	0. 06	0. 04
14．充実した人生は死によって証明される	0. 10	0. 09	0. 10
15．遠い先のことで現実の問題としてとらえがたい	0. 28	0. 18 ┐*	0. 31 ┘*
16．死に対する不安，恐怖を感じる	0. 18	0. 18	0. 23
17．死はいつか必ず訪れるもの，運命であり仕方がない	0. 47	0. 46	0. 41
18．死ぬことなど考えたくない	0. 15 ┐*	0. 05 ┘* ┐*	0. 22 ┘*
19．死ぬことに対する恐怖はない	0. 07	0. 06	0. 06
20．死んでしまえば全てが終わりである	0. 13	0. 09	0. 12
21．なにかをなしとげてから死にたい	0. 42	0. 35	0. 46
22．悔いを残さないよう精一杯生きる	0. 64	0. 54	0. 62
23．楽に死にたい	0. 54	0. 50	0. 47
24．死ぬことより新しく生まれ変わることに希望がある	0. 07	0. 03	0. 05
25．何も感じない	0. 01	／	0. 01

*P<0. 05

表2　入学回生毎の因子構造

	1回生	2回生	3回生
F1	偶然的思考	人生を重要視	人生を重要視
F2	死に対する近接感	死に対する悟り	偶然的思考
F3	人生を重要視	現実直面	死に対する意義
F4	死に対する悟り	死に対する抵抗	死に対する近接感
F5	死に対する抵抗	死に対する関心	死に対する悟り
F6	現実直面	死に対する近接感	死に対する抵抗
F7	死に対する関心	死に対する恐怖	死に対する関心
F8	死に対する恐怖	死に対する意義	現実直面

索　　　　引

人名索引

数字はページ数で，明朝体は口頭発表者，ゴシック体は連名発表者を示す。講演，公開シンポ，シンポは，それぞれ公開講演，公開シンポジウム，シンポジウムの担当者を示す。

【ア】

青池　慎一　3
青木　玲子　86
青山真奈美　47
足立　浩平　65
綾部　恒雄　14
有賀　千世　80、81
安藤　詳子　40
石川　正人　91
糸井志津乃　44
稲毛　教子　34
稲松　信雄　26
乾原　　正　118
井上　美香　50
今留　　忍　81
浮谷　秀一　103、104
宇佐美　覚　123
内田　誠也　69
内海　　滉　38、39、40、41、42、43、119、120、121、122、123、124 77、78
尾入　正哲　96
王　　晋民　98
大井　睦美　120
大久保康彦　115
大沢　　光　97、98、99
大瀧　法子　92
大西由希子　112
大村　政男　103、104
大森　智美　121
岡村　千鶴　38
岡村　美奈　71
岡本　善之　84
沖　　寿子　78
荻野　七重　73
越智　啓太　67
小野　浩一　70
小野　公一　94
小原　伸子　86
恩田　　彰　15

【カ】

角山　　剛　95
加藤　孝義　29
加藤　達雄　9
加藤　博己　21
金井　悦子　44
金山　正子　122
金子　尚一　18
金村美千子　35
川島　大司　106
川島　　真　30、31
川村　　司　108、109、110、111
川本利恵子　122
菊地　藤吉　85
岸田　　博　49
岸本　英男　24
北川　公路　70
木村　拓郎　5
草薙　和美　26
草野美根子　77
久東　光代　30、31
久米　　稔　71、106
蔵本　逸雄　69
黒田　淑子　46
谷　　　峪　19
越河　六郎　79
小嶋　正敏　74
小林　　東　54、55
小林　茂雄　8
小森田哲哉　54、55
後藤嘉余子　48

【サ】

斉藤　　勇　73
斎藤幸一郎　22
櫻井由美乃　79
佐藤　啓子　86
佐藤みつ子　41
佐藤　嘉晃　114
佐藤　　怜　113
佐野　　毅　54、55
佐野　　道　88

沢宮　容子　76
雫石　礼子　58
白岩　紘子　16
菅野　久信　69
菅原　博嗣　108、109、110、111
關戸　啓子　119
関　　陽子　107
曽根原純子　80
園田　雅代　87

【タ】
高嶋　正士　7、72
高橋　　敷　33
高橋　哲也　57
高橋　真理　51
田中熊次郎　90
田中潜次郎　25
田中富士夫　27
田之内厚三　61
玉井　　寛　56、115、116
塚本　尚子　60
土屋　隆裕　56
辻　　　昭　54、55
都築　道子　63、64
鉄村　和恵　118
寺沢　充夫　105
東條　光彦　93
豊村　和真　47、63、64

【ナ】
中　　淑子　77、78
中川　作一　76
中島　彩花　62
中野　東禅　13
中村　昭之　12、21
長澤　秀利　23
新田　　茂　52、53

【ハ】
橋本　泰子　114
長谷川孫一郎　101
畠山　彰文　32
林　　　潔　89
馬場　房子　11
樋口日出子　28
樋口　康彦　83
姫野　恭博　4
深田　高一　77
福井　嗣泰　91
福田　　廣　68
福本　純一　68
富家　　孝　37
藤井　博英　28
藤枝　悳子　10
藤田　主一　72
藤田　　勉　30
藤森　立男　2
布施　淳子　80
細江　達郎　23

【マ】
松尾　典子　124
松崎　　巖　17
松下由美子　59
松田　浩平　54、55
松永　保子　39
間宮　　武　6
三上　れつ　80、81
三島　二郎　105
水口　　有　99
三井　利幸　108、109、110、111
三宅　洋一　36
宮島　直子　120
三輪　　全　94
村井　健祐　1
村本　淳子　43
望月　　稔　105
森下　高治　75
森田　義宏　100
森　　千鶴　82

【ヤ】
矢吹芙美子　45
山口　桂子　42
山本　勝則　123
山本　都久　102
吉田　秀子　52、53
依田　　明　20

【ワ】
若原　克文　108、109、110、111
渡辺　昭一　65、66
渡辺　憲子　40
和田　佳子　117

日本応用心理学会第62回大会賛助団体御芳名

旭印刷工業　株式会社
株式会社　医学出版社
学苑社
学文社
家政教育社
川島書店
株式会社　紀伊國屋書店
九段会館
株式会社　芸林書房
三京房
株式会社　駿河台出版社
竹井機器工業　株式会社
株式会社　ナカニシヤ出版
財団法人　発達科学研究教育センター
福村出版　株式会社
ブレーン出版
八千代出版　株式会社
学校法人　共立女子学園

（五十音順）

本大会の開催にあたり，上記の諸団体より多大なご支援をいただきました。ここに，その御芳名を記して，感謝の意を表します。

1995年11月20日

日本応用心理学会第62回大会

準備委員長　　高嶋　正士

日本応用心理学会第62回大会準備委員会

準備委員長	高嶋正士	（共立女子大学家政学部教授）
副委員長	高橋勝彦	（共立女子学園事務局長）
準備委員	池原敏夫	（共立女子学園庶務課長）
	大貫敬一	（共立女子大学文芸学部助教授）
	金内きみ	（共立女子学園図書課長）
	須野原　貞男	（共立女子学園施設課長）
	俵木敏光	（共立女子大学学生課長）
	藤田主一	（城西大学女子短期大学部助教授）
	松本一夫	（共立女子大学学務・教務課長）
	宮島敬久	（共立女子学園用度課長）
	横尾静明	（共立女子学園財務課長）
事務局幹事	松崎　巖	（共立女子大学家政学部教授）
	林　幹夫	（共立女子大学文芸学部助教授）
	西塚　知恵子	（共立女子大学家政学部教育助手）

（五十音順）

日本応用心理学会第62回大会プログラム

発行日　1995年11月20日
発行者　日本応用心理学会第62回大会準備委員会
準備委員長　髙　嶋　正　士
〒101 東京都千代田区一ツ橋２－２－１
共立女子大学　教職課程研究室内
TEL 03-3237-2649 FAX 03-3237-2648